

余市町

登町 4 遺跡
登町 13 遺跡

(2014年度)

北海道横断自動車道黒松内釧路線(余市～小樽間)建設工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書

2015.2

余市町教育委員会



登町 4 遺跡調査前風景（南から）



登町13遺跡調査前風景（東から）

口絵 2



登町 4 遺跡 土層断面 a - b



登町 4 遺跡 土層断面 c - d



登町 4 遺跡 土層断面 e - f



登町13遺跡 土層断面 a - b



登町13遺跡 土層断面 c - d



登町13遺跡 土層断面 e - f

口絵 4



登町13遺跡 炭化物



登町4遺跡 HP-2遺物出土状況



登町4遺跡 HP-2出土遺物



登町 4 遺跡出土 線刻礫 (表側)



登町 4 遺跡出土 線刻礫 (裏側)



登町 4 遺跡 接合土器

口絵 6



I 群 a 類土器



I 群 b 類土器



II群b類土器



III群・III群b類・V群c類土器

口絵 8



剥片石器



剥片石器

序

余市町は、比較的温暖な気候である北海道南西部、積丹半島の基部に位置し、北は日本海に面し、緩やかに弧を描く余市湾は豊かな海の幸に恵まれ、三方を囲む緩やかな丘陵からは山の幸がもたらされてきました。

これらの豊かな自然を背景に、江戸時代よりニシンの千石場所として栄え、明治時代以降からはリンゴ・ブドウなどの果樹栽培が盛んになり、これらの第一次産業が町の基盤を支えてきました。

太古の昔にこの地に住んでいた人たちもまた、この豊かな自然の恩恵を受けて暮らしていたことでしょう。それを物語る国指定史跡「大谷地貝塚」、同「フゴッベ洞窟」、北海道指定史跡「西崎山環状列石」、「フゴッベ貝塚」などの著名な遺跡と連なるように登町4遺跡と登町13遺跡は位置しております。

登町4遺跡は平成24年度に調査が開始され、3年目を迎え、ようやく少しずつ当時の生活の様子が見えてきました。また登町13遺跡については、余市町内で64番目の最も新しく登録された遺跡です。これまでの町内各遺跡での調査結果に両遺跡からの新たな発見を加え、今後はこれらの成果を広く地域の方々に紹介し、自分たちが住む土地の豊かさを知ってもらい、文化財保護活動の一助とする所存です。

今回の調査にあたりましては、範囲確認調査から本発掘調査に至るまで北海道教育庁より種々のご指導を、また、東日本高速道路株式会社には多大なご支援を頂きました他、関係者のご努力や地域の皆様のご理解を賜りました。これら多数の方々のご協力によって無事調査を終えることができました。ここに衷心より厚く御礼申し上げます、登町4遺跡・登町13遺跡発掘調査報告書刊行のご挨拶といたします。

平成27年2月

余市町教育委員会
教育長 中村 寿仁

例 言

1. 本書は東日本高速道路株式会社北海道支社小樽工事事務所による北海道横断自動車道黒松内釧路線（余市～小樽間）建設工事に伴う埋蔵文化財発掘調査（登町4遺跡 登載番号D-19-27、登町13遺跡 登載番号D-19-64）の報告書である。
2. 本書の作成は余市町教育委員会社会教育課にて行い、編集は小川が担当し、各章の執筆は小川、花田、遠藤、岩谷、飯浜が分担して行い、各文末に担当者を表記した。

3. 発掘調査および整理作業体制

- ・受託期間 平成26年4月1日～平成27年3月31日
- ・調査期間 登町4遺跡 平成26年5月7日～平成26年10月31日
登町13遺跡 平成26年5月7日～平成26年7月31日
- ・整理期間 平成26年11月1日～平成27年2月28日
- ・調査区所在地 登町4遺跡 余市郡余市町登町202番地2・同307番地1・同310番地
登町13遺跡 余市郡余市町登町312番地2
- ・調査面積 登町4遺跡 3,410㎡
登町13遺跡 1,600㎡
- ・事業主体 東日本高速道路株式会社北海道支社小樽工事事務所
- ・調査主体 余市町教育委員会 教 育 長 中村寿仁
社会教育課長 松井正光
同 主 幹 乾 芳宏
同 主 幹 浅野敏昭
同社会教育係長 桜井 仁
同博物館学芸員 小川康和
- ・調査担当者 小川康和 乾 芳宏
- ・調査員 花田直彦
- ・調査補助員 遠藤むつみ 岩谷維千歌 飯浜幹広
- ・事務補助員 藤原 郁 齊藤明奈
- ・発掘作業員 阿部栄子 荒関 修 石井智翼 伊藤 孝 内山一志 氏家洋子
遠藤満子 小笠原純二 小川智博 奥寺武男 小倉 理 小黑明久
柏谷雄介 菊地純子 北川千登世 北山 貢 小林 博 今野芳弘
笹木信之 佐藤文明 佐藤 裕 篠原伊津 鈴木千秋 鈴木雅文
鈴木由香 関 浩 谷口 涼 玉山義信 辻 翔太 中岡喜寛
中川賢次 中村弘子 中谷 潔 西田 肇 芳賀博美 平譚多加子
福井浩克 松岡隆治 三上直樹 水田るり子 光成正彦 安本幹雄
山下 徹 湯谷浄治 横山由紀子 吉田圭祐 領毛靖彦 脇田雅博
- ・整理作業員 阿部栄子 石井智翼 小川智博 小黑明久 柏谷雄介 北川千登世
玉山義信 三上直樹 水田るり子 吉田圭祐
- ・整理作業分担 (遺物拓本・トレース) 石井智翼 柏谷雄介 水田るり子 吉田圭祐
(遺物実測・トレース) 阿部栄子 北川千登世 水田るり子

(地形図・分布図等作成) シン技術コンサル

(図版作成) 阿部栄子 石井智翼 小川智博 小黒明久 柏谷雄介
北川千登世 玉山義信 三上直樹 水田るり子
吉田圭祐

(写真撮影) 遠藤むつみ 柏谷雄介 吉田圭祐
市川靖雄 (市川写真場)

(データ整理・各表作成) 小川智博 小黒明久 玉山義信 三上直樹

4. 本遺跡から出土した遺物については、余市町教育委員会が保管する。
5. 発掘調査および整理作業に下記の方々に指導、助言、協力を頂いた(順不同、敬称略)。
北海道教育委員会 長沼 孝・田才雅彦・工藤研治・西脇対名夫・中田裕香・宗像公司・
高橋和樹、北海道開拓記念館 右代啓視・鈴木琢也、(公財)北海道埋蔵文化財センター
阿部明義・菊池慈人・山中文雄・千葉英一・三浦正人・田口 尚・熊谷仁志・笠原 興・鈴木宏行・
坂本尚史・立田 理・直江康雄・芝田直人・酒井秀治・柳瀬由佳・鎌田 望・藤本晶子、
平取町教育委員会 森岡健治、小樽市教育委員会 石川直章・石神 敏、小樽市総合博物館
佐藤卓志、石狩市教育委員会 工藤義衛、江別市教育委員会 佐藤一志、仁木町教育委員会
嶋井康夫、恵庭市教育委員会 鈴木将太、上屋真一、伊達市噴火湾文化研究所 大島直行・
青野友哉、札幌国際大学 越田賢一郎・坂梨夏代、 野村 崇、遠藤香澄、佐藤美智雄

凡 例

1. 本書で使用した遺構の略称は以下の通りである。

H P (House Pit) 竪穴状建物跡 T P (Trap Pit) Tピット

L P (Low Pit) 竪穴状建物跡に付属する床面検出のピット

S P (Small Pit) 柱穴様の小ピット F C (Flake Chip) 剥片集中

2. 本書に掲載されている図の縮尺については、基本的に以下の通りである。

調査区土層断面 1/50 H P 1/40 T P 1/20 L P 1/20 S P 1/20

礫集中 1/20 一括土器 1/10 F C 1/100

土器 (実測図) 1/3 (拓本図) 1/2 (ミニチュア土器) 1/2

剥片石器 1/2 礫石器 1/3

なお、例外についてはスケールを参照して頂きたい。

3. 写真図版の縮尺については、任意である。

本文目次

序 i	
例言 ii	
凡例 iii	
第 I 章 調査の概要	
1. 調査に至る経緯	1
2. 調査範囲	3
3. 調査の方法	3
4. 遺物の分類	3
5. 遺跡の環境	6
第 II 章 登町 4 遺跡	
1. 概要	7
2. 基本層序	10
3. 遺構	
HP-1	17
HP-2	17
HP-3	19
TP-1	24
礫集中 1	24
礫集中 2	24
一括土器 1	24
FC-3	29
FC-4	29
FC-5	29
4. 出土遺物	
土器	32
石器	54
第 III 章 登町 13 遺跡	
1. 概要	81
2. 基本層序	82
3. 炭化物範囲	87
4. 出土遺物	
土器	88
石器	88
その他	88
第 IV 章 まとめ	92
第 V 章 附編	
1. 余市町登町 4・13 遺跡出土黒曜石の産地同定	94~97
2. 余市町 13 遺跡出土炭化物の放射性炭素年代測定	98~101

図版目次

第 1 図 遺跡位置図	1
第 2 図 登町 4 遺跡・登町 13 遺跡発掘調査区	2
第 3 図 遺跡周辺図	6
第 4 図 グリッド配置図	7
第 5 図 調査前・最終面地形図	9
第 6 図 基本土層模式図	10
第 7~11 図 土層断面図(1)~(5)	11~15
第 12 図 遺構配置図	16
第 13 図 HP-1 (平面図・断面図)	18
第 14 図 HP-1 出土遺物	19
第 15 図 HP-2 (平面図・断面図)	20
第 16 図 HP-2 出土遺物	21
第 17 図 HP-3 (平面図・断面図)	22
第 18 図 HP-3 出土遺物	23
第 19 図 TP-1 (平面図・断面図)	25
第 20 図 礫集中 1・2 (平面図・断面図)	26
第 21 図 礫集中 1・2 出土遺物	27
第 22 図 一括土器 1 (平面図・接合土器)	28
第 23 図 FC-3 (範囲・分布図)	29
第 24 図 FC-3・4 出土遺物及び接合資料	30
第 25~34 図 土器(1)~(10)	35~44

第 35~38 図 土器分布図(1)~(4)	50~53
第 39~48 図 石器(1)~(10)	58~67
第 49~56 図 剥片石器・礫石器分布図(1)~(8)	71~78
第 57 図 接合相関図	79
第 58 図 グリッド配置図	81
第 59 図 調査前地形図	82
第 60~63 図 土層断面図(1)~(4)	83~86
第 64 図 炭化物範囲	87
第 65 図 出土遺物	89
第 66 図 全出土遺物分布図	90
第 67 図 暗渠配置図	90

表目次

第 II 章 登町 4 遺跡	
3. 遺構	
表 II-1 遺構掲載遺物一覧表	31
4. 出土遺物	
表 II-2 掲載土器一覧表(1)~(5)	45~49
表 II-3 掲載石器一覧表(1)~(3)	68~70
表 II-4 出土遺物一覧表	80
表 II-5 出土土器比率	80
表 II-6 出土石器比率	80
第 III 章 登町 13 遺跡	
4. 出土遺物	
表 III-1 掲載遺物一覧表	91
表 III-2 出土遺物一覧表	91
表 III-3 出土土器比率	91
表 III-4 出土石器比率	91

写真目次

口絵 1 登町 4 遺跡調査前風景 (南から)	
登町 13 遺跡調査前風景 (東から)	
口絵 2 登町 4 遺跡 土層断面 a-b	
登町 4 遺跡 土層断面 c-d	
登町 4 遺跡 土層断面 e-f	
口絵 3 登町 13 遺跡 土層断面 a-b	
登町 13 遺跡 土層断面 c-d	
登町 13 遺跡 土層断面 e-f	
口絵 4 登町 13 遺跡 炭化物	
登町 4 遺跡 HP-2 遺物出土状況	
登町 4 遺跡 HP-2 出土遺物	
口絵 5 登町 4 遺跡出土 線刻礫 (表側)	
登町 4 遺跡出土 線刻礫 (裏側)	
登町 4 遺跡 接合土器	
口絵 6 I 群 a 類土器	
I 群 b 類土器	
口絵 7 II 群 b 類土器	
III 群・III 群 b 類・V 群 c 類土器	
口絵 8 剥片石器	
写真 1 発掘調査区風景	
写真 2 発掘調査区及び作業風景	
写真 3 発掘作業風景	
写真 4 発掘作業風景	
写真 5 遺構調査	
写真 6 遺構調査及び遺物検出状況	
写真 7 出土土器(1)	
写真 8 出土土器(2)	
写真 9 出土石器(1)	
写真 10 出土石器(2)	
写真 11 出土石器(3)	
写真 12 登町 4 遺跡・登町 13 遺跡出土遺物	

第I章 調査の概要

1. 調査に至る経緯

余市町は北海道南西部、小樽市の西側約25kmに位置し（第1図）、春から秋にかけては、余市町や仁木町には旬の果実等を求め、積丹方面には釣りや海水浴のほか海産物を求め、ニセコ方面にはアウトドアや温泉等を目的に、冬期には道内はもとより、本州や海外からの多数のスキー客が千歳や札幌方面から訪れる。しかし、公共交通機関を利用する往來は運行本数の少なさもあってやや不便であるため、年間を通じて大型バスや一般車両が頻繁に行き交う地域であり、幹線道である国道5号線は度々渋滞が発生し、その対策は以前からの課題となっていた。

北海道横断自動車道黒松内釧路線余市～小樽間は延長約23kmの国土開発幹線自動車道建設法に基づく道路である。建設計画は平成3年に基本計画決定、平成11年に整備計画決定、平成18年に独立行政法人日本高速道路保有・債務返済機構と東日本高速道路株式会社（以下、NEXCO東日本）による協定締結、同年に国土交通大臣からNEXCO東日本への高速道路事業としての事業許可が出された。

余市～小樽工事区間における埋蔵文化財については、平成13年2月に日本道路公団北海道支社（当時）から北海道教育委員会へ提出された事前協議書に対する同年3月の北海道教育委員会からの回答、それまでの協議を引継いだNEXCO東日本北海道支社小樽工事事務所から平成21年4月に提出された事前協議書を受け、同月に北海道教育委員会は余市町教育委員会・NEXCO東日本北海道支社担当者立会いの下、道路建設予定地内の所在調査（踏査）を実施、同年6月に北海道教育委員会より試掘調査が必要との回答がなされた。これに基づき平成22年11月に北海道教育委員会は

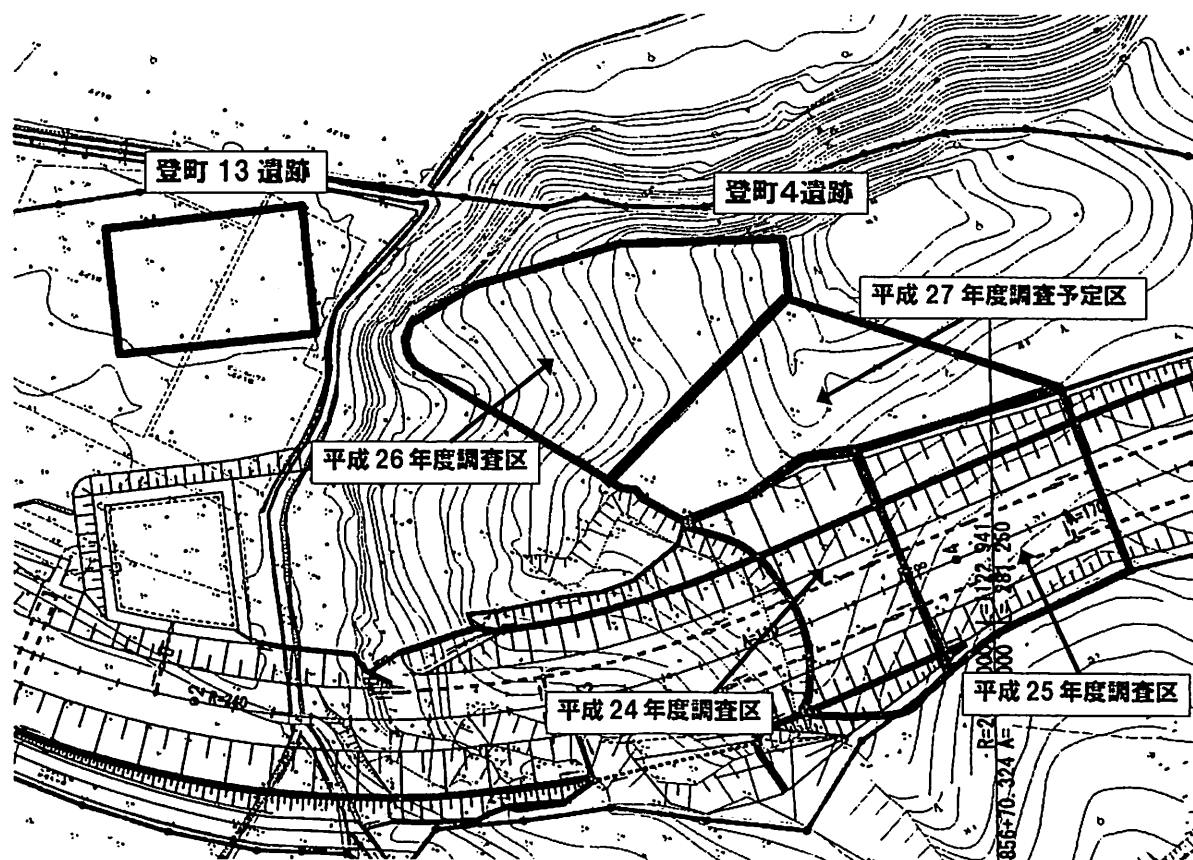


第1図 遺跡位置図 (S=1/80000)

NEXCO東日本北海道支社・余市町教育委員会各担当者が立ち会いの下、試掘調査を実施した。この試掘調査により当該地は周知の埋蔵文化財包蔵地「登町4遺跡」の範囲に当たり、工事に先立ち発掘調査を行い記録保存が必要である旨の回答が平成22年11月に北海道教育委員会からなされた。その後北海道教育庁生涯学習推進局文化・スポーツ課とNEXCO東日本北海道支社と余市町教育委員会の三者により協議を重ね、余市町教育委員会を主体として平成24・25年度の2ヶ年に亘り発掘調査を実施した。

今年度の発掘調査区については、平成24・25年度調査区に隣接する箇所であり、北海道横断自動車道黒松内釧路線の余市以南への延伸に係るものである。平成25年7月にNEXCO東日本北海道支社小樽工事事務所から追加提出され余市町教育委員会より北海道教育委員会へ進達した事前協議書を受け、同年10月2日～4日に北海道教育委員会より生涯学習推進局文化財・博物館課文化財調査グループ西脇対名夫主査が派遣され、NEXCO東日本北海道支社・余市町教育委員会各担当者が立ち会いの下、試掘調査を実施した。この試掘調査により当該地のうち丘陵地上は各所において遺物の出土が確認されたことから、周知の埋蔵文化財包蔵地「登町4遺跡」の範囲に当たり、その突端の断崖下縁辺に広がる低地についても、少量ながら遺物が出土し新たに「登町13遺跡」として埋蔵文化財包蔵地として登録、両遺跡ともに工事に先立ち発掘調査を行い記録保存が必要である旨の回答が平成25年11月に北海道教育委員会からなされた。その後の平成26年3月24日付NEXCO東日本北海道支社より、周知の埋蔵文化財包蔵地における土木工事等の通知が提出され、NEXCO東日本北海道支社小樽工事事務所と余市町教育委員会との間で、平成26～27年度に亘る発掘調査に係る協定および平成26年度委託契約を同年4月1日に締結した。これに基づき平成26年度は5月7日より発掘調査を開始し、10月31日に終了、翌年2月末まで整理作業を行った。

(小川)



第2図 登町4遺跡・登町13遺跡発掘調査区 (S=1/2000)

2. 調査範囲

登町4遺跡および登町13遺跡は、余市町北東部の海岸線より直線距離にして約1.3 km内陸に入った登川右岸に位置する。両遺跡が所在する登地区は、明治末期から現在に至るまで、余市町を代表する果樹栽培の盛んな地域であり、発掘調査区周辺の丘陵地帯にはリンゴやナシ・ブドウ等の果樹畑の広がりが望める。また登町から栄町にかけての余市町東側は、国指定史跡「大谷地貝塚」や「フゴッペ洞窟」、道指定史跡「西崎山環状列石」、「フゴッペ貝塚」等の重要遺跡が密集しており、埋蔵文化財が多数所在する余市町の中でも、際立った地域である。

両遺跡の調査範囲については、各章にて詳述する。(小川)

3. 調査の方法

登町4遺跡と登町13遺跡は位置的に近接しているとはいえ、状況は大きく異なるため、調査の方法は異なる。両遺跡における共通項は以下の通りである。なお、これら以外の詳細については各章にて詳述する。

- 1) 遺跡の状態を確認するために25%調査を実施し、包含層の残存状態や遺物の出土傾向等の把握に努めた。
- 2) 25%調査の結果に基づき、人員配置や時間配分等を検討し、調査を行った。
- 3) 主要遺物(土器片、各種石器)や遺物がまとまって出土した場合は出土状況を記録し、Noを付して取り上げを行い、その他の遺物は5×5mのグリッドを四分割した小グリッドでの各層位毎に取り上げとした。
- 4) 遺物の出土状況や土層断面等の図化については、シン技術コンサルへ委託しトータルステーションを使用して行い、画像処理ソフトIllustratorにてデジタル処理しデータ化を図った。
- 5) 写真撮影については、55mm一眼デジタルカメラ(最大1220万画素)を使用し、現場作業の中では遺物の出土状況や作業風景等を対象とし、整理作業の中でも遺物の撮影等に用いた。
- 6) 11月以降の整理作業場所については、担当部署である社会教育課施設との往復等を考え、発掘現場の仮設ハウスを撤去し、町内入舟町に所在する余市水産博物館横に仮設ハウスを新たに設置して冬期間の整理事務所とすることとし、遺物整理と報告書の作成を行った。
- 7) 遺物の洗浄や注記作業については、可能な限り発掘作業と並行しながら進め、特に雨天時に発掘作業を中止せざるを得ない場合に集中的に行い、発掘作業終了後も引き続き行った。
- 8) 土器片の接合作業については、同一グリッド内での接合関係を確認後、隣接するグリッドやさらに離れた別グリッド間の確認も行った。しかし接合された資料は一部であり、口縁部や胴部の特徴的なものを抽出し拓本を主体とした。なお土器片の殆どは表面が劣化し、脆弱な状態のものが多いため、慎重に洗浄した後、(有)新成田総合社のナチュラルコートを使用し、表面の強化を図った。また剥片や礫についても、可能な限り接合作業を行った。(小川)

4. 遺物の分類

登町4遺跡の出土遺物は、層位別ではI層1,002点、II層46,300点、III層1,184点が出土している。竪穴状建物跡出土1,988点、Tピット出土4点、剥片集中出土2,960点、礫集中47点、一括土器として221点、表面採集遺物1,250点、その他(トレンチ・攪乱等)出土27点を合わせ、総合計としては54,983点を数える。その内訳は土器10,775点、剥片石器および剥片43,049点、礫石器および礫1,159点である。なお、これらの遺物についての説明は、第II章にて詳述する。

登町13遺跡の出土遺物は試掘結果から想定していた通り僅かで、層位別ではI層5点、II a層1点、II b層6点、II c層6点、II f層16点が出土している。表面採集遺物5点、その他(トレンチ・

攪乱等) 出土13点を合わせ、総合計52点を数える。その内訳は土器18点、剥片石器および剥片26点、砥石3点、陶磁器4点、金属製品1点である。なお、これらの遺物についての説明は、第Ⅲ章にて詳述する。

土器の分類については、今回の調査の中では出土していないものも含めて以下の通りとした。なお、今調査中で出土していないものについては※印を付した。(花田)

I 群土器 縄文時代早期に属する土器群

- a 類：貝殻沈線文系、貝殻条痕文系、貝殻圧痕文系の尖底、平底土器群
- b 類：縄文、撚糸文、絡条体圧痕文、組紐圧痕文等が施された東釧路式系の土器群

II 群土器 縄文時代前期に属する土器群

- a 類：胎土に繊維を含み、縄文で尖底、丸底及び平底の土器群
- b 類：円筒土器下層式に相当する土器群

III 群土器 縄文時代中期に属する土器群

- a 類：円筒土器上層式に相当する土器群
- b 類：萩ヶ岡3式、4式及び北筒式に相当する土器群

IV 群土器 縄文時代後期に属する土器群 (※)

V 群土器 縄文時代晩期に属する土器群

- a 類：大洞B・BC式に相当するもの (※)
- b 類：大洞C1・C2式に相当するもの (※)
- c 類：大洞A・A'式、タンネトウL式に相当するもの

VI 群土器 続縄文時代に属する土器群

- a 類：恵山式に相当するもの
- b 類：後北式に相当するもの
- c 類：北大I・II式に相当するもの (※)

VII 群土器 擦文時代に属する土器群 (※)

石器は器種別に大まかに分類をし、剥片石器には石鏃、石槍又はナイフ、石錐、つまみ付ナイフ、スクレイパー、両面調整石器、石核等が見られる。これら以外の不定形剥片を素材として一部に二次剥離のみられるものをRフレイク、その他を剥片として分類を行った。礫石器には石斧・石のみ・たたき石・すり石・石錘・石鋸・石皿等がある。なお出土遺物点数については黒曜石等の原石・剥片・フレイクチップなども石器に含めてカウントしている。

また登町4遺跡においては、剥片集中範囲として確認された部分が3ヶ所で見られ、それぞれF C-3・4・5とし第Ⅱ章で詳述した。

石器の分類については、以下の通りとした。(岩谷・遠藤)

<剥片石器>

石鏃

周縁ないし両面が調整加工され、尖頭形を呈する5cm未満のもの。

石槍またはナイフ

周縁ないし両面が調整加工され、尖頭形を呈する5cm以上のもの。

石錐

不定形剥片を素材として、特に先端部に集中的に調整加工が施され、断面が三角形もしくは四角形状の錐状の突出部を作出したもの。

つまみ付ナイフ

主に縦長剥片を素材として、長軸の一端に調整加工により抉りを施しつまみ部を作出し、縁辺に二次加工し刃部を作出したもの。片面加工のものが多く、両面加工したのもも入念な加工は片面のみである。

スクレイパー

不定形剥片を素材として、縁辺を二次加工された刃部の角度がやや厚みをもつもの。又は刃部に連続的に4 cm以上の剥離が施されたもの。

両面調整石器

厚みのある剥片素材の周縁あるいは両面に形状を整えるための調整加工が施されたもの。

Rフレイク

不定形剥片を素材として、周縁の一部に簡易な二次加工が見られるが、上記の分類基準には当てはまらないもの。

石核

素材に厚みがあり、2点以上の剥片を同方向に剥離した痕跡のあるもの。

原石

剥片素材を得るための剥離が行われていないもの、あるいはその痕跡が不明瞭なもの。

<礫石器>

石斧・石のみ

打欠き、敲打、研磨により整形、長軸端部に刃部を作出したもの。小型のものは石のみとした。

石錘

円形あるいは楕円形を呈する扁平礫の端部の2ヶ所ないし4ヶ所が対になるよう打ち欠き、抉りを設けたもの。

砥石

不定形の礫を素材として、使用による窪んだ砥面をもつもの。主に砂岩製と泥岩製。

たたき石

主に長楕円形を呈する自然礫を使用し、端部に敲打痕が見られ、持ち運び可能なもの。

くぼみ石

主に長楕円形を呈する自然礫を使用し、腹部に使用による窪みが見られるもの。

すり石

主に丸みを帯びた自然礫を使用し、側面に平坦な擦り痕が見られ、持ち運び可能なもの。

石鋸

石器製作過程の擦切り技法に用いられた断面V字状の擦り面をもつもの。

台石・石皿

大型の自然礫を使用し腹部に擦り痕が見られるものを石皿、敲打痕が見られるものを台石とし、持ち運び困難なもの。

擦切り残片

石斧・石のみの製作過程の擦切り技法によって発生した、原石から石斧本体を分断した際に不要になったもの。

石製品

加工が施された石製遺物のうち、狩猟・採集などの実用具ではないもの。

5. 遺跡の環境

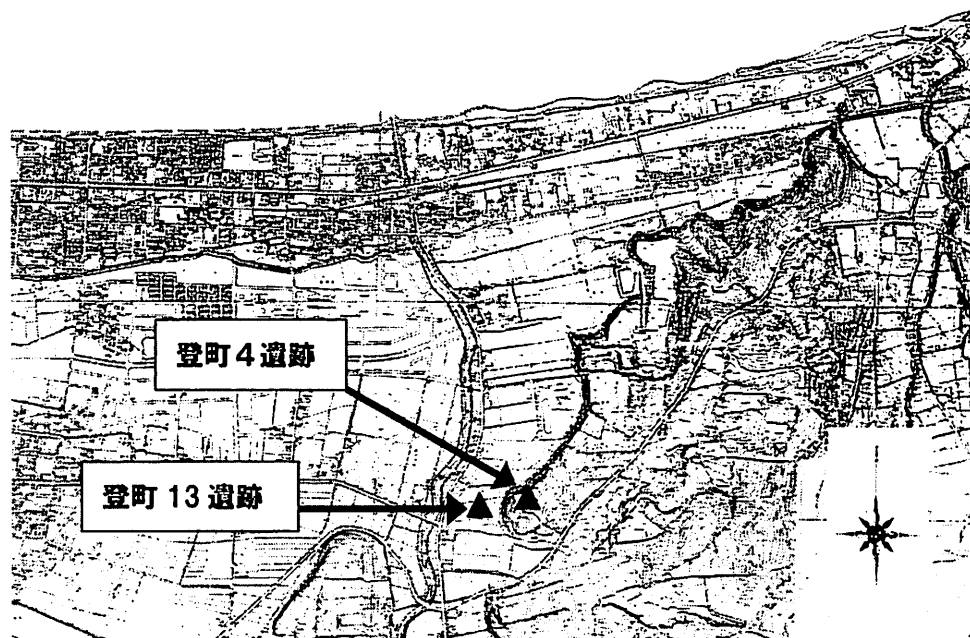
登町4遺跡と登町13遺跡は、汀線に直交するように流れ込む現登川と畚部川ふこっべの間に位置し、直線距離にして1.3km程北東へ進むと余市湾が広がっている。両遺跡周辺は丘陵、砂丘、沖積低地から成り、最も広い分布を見せるのが丘陵で、丘頂の標高は40～120mを測る。主に凝灰質砂岩と安山岩質角礫岩で形成されている。沖積低地は登川流域にその川幅に比して広く発達し、丘陵の裾野にまで広がりを見せる。調査区南西側には「大谷地」の地域名が残る。

登町4遺跡は標高約20～50mの丘陵地に立地し、遺跡全体は西向きの緩斜面となっており、調査区の東側約30mに丘頂を持つ。今年度調査区は調査前測量では、北東側の最頂部の標高が約40m、最も低い南西側との高低差は約26mで、全体的には斜度15°程の斜面である。調査区南東寄りの北東から南西にかけてやや急傾斜の沢状を呈する。登町13遺跡はこの丘陵地の西側崖下に広がる標高6m前後の沖積低地から成る平坦面に位置する。

余市湾は内陸部に連なる山地から余市川や登川等が流れ込み、その海岸沿いは余市川河口から大浜中海岸を経て畚部岬付近までの緩やかな弧を描く砂浜地帯である。これらの河川は、元々ひと続きであった梅川、豊丘、美園や登、栄等の丘陵地が赤井川火山や海底火山の影響を受け、ほぼ南北に走る幾つかの断層が生じた結果、それに沿って南部に位置する山地から余市湾に向かって概ね並行して流れるようになった。

余市平野周辺は、第四紀完新世に入り温暖化の影響で海水面が上がり、縄文時代前期頃まで海水が仁木町に至る奥深くまで浸入して古余市湾を形成していた。縄文時代中期頃になると気温が下降し、海水面が下がり古余市湾が徐々に退き現汀線に平行する2本の砂丘が発達、それにより古余市湾は潟湖へと変貌、次第に淡水化し泥炭が堆積して現在の姿になっていったと考えられている。砂丘は畚部川の河口周辺より西に向かって汀線に平行に余市川河口周辺までの大川砂丘と、登川河口より1.6kmほど上った辺りから余市駅周辺までの黒川砂丘とが認められる。

余市町内においては、縄文時代早期から近代まで各時代の遺跡（遺物包蔵地）が64ヶ所確認されており、これらの余市町内の長きに亘る地形の変遷がその分布に大きく関連している。これまでの発掘調査から、縄文時代前期以前の遺跡は古余市湾を囲む丘陵地帯に、2本の砂丘のうち内陸に位置する黒川砂丘上には縄文時代中期以降の遺跡が、その外側に発達した大川砂丘上には縄文時代晩期以降の遺跡が形成されていることが明らかになっている。
(小川)



第3図 遺跡周辺図 (S=1/25000)

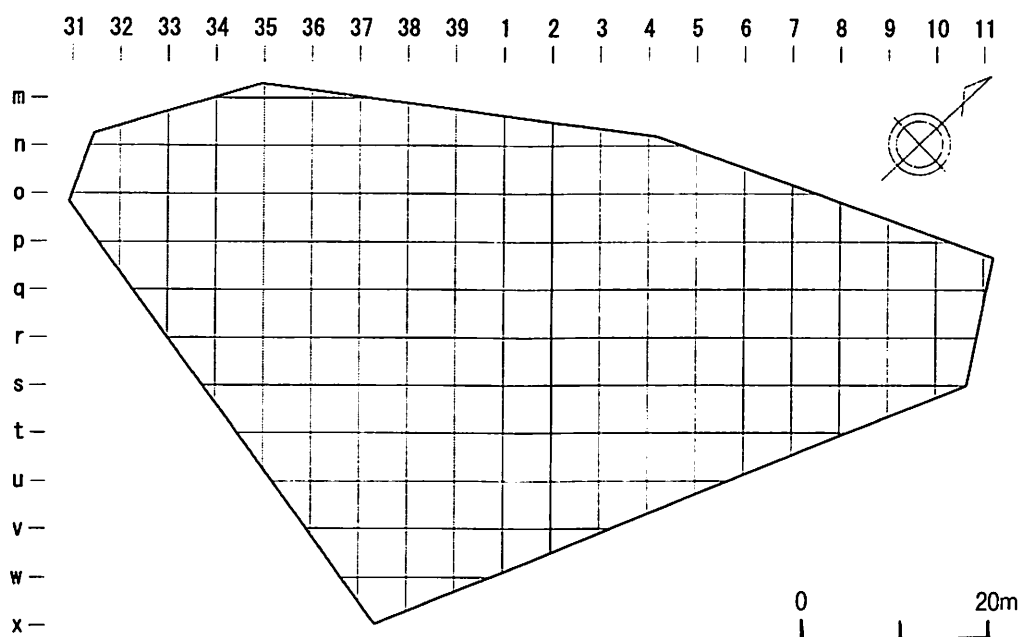
第Ⅱ章 登町 4 遺跡

1. 概要

登町 4 遺跡は標高約20～40mを測る丘陵平坦面～緩斜面上に所在する。NEXCO東日本北海道支社小樽工事事務所と余市町教育委員会との協議の中で、平成24・25年度調査区の北西側に隣接する調査対象区6,167㎡のうち、工事の工程上平成26年度に海側（北側）3,410㎡、平成27年度に平成24・25年度調査区に接する2,757㎡を調査することとなった。今年度の調査区は、標高約46mの丘陵北東側のピークから南西側へ下がり沢地形を成す緩斜面上に位置し、ピーク部と最も低い南西端の標高差は約26mを測る。今年度調査区の北東～南西側は急峻な断崖になっているが、南西側の一部について平成24年度調査区と同様に、かつて土取り場として土砂を採取され町内各所の埋め立てに利用された経緯があり、その掘削によって生じた人工的な地形で、本来の丘陵の突端はさらに南西方向の余市町市街地側へ最大で100m程伸びていたといわれる。

調査区周辺はかつてブドウ畑として使用され、その痕跡として所々に棚を支えるアンカーや廃棄された番線や棚木等が地面から顔を覗かせる。現在は休耕地となっており、ササなどの雑草が繁茂している。地元では通称「栗の木台」と呼ばれるように、かつてクリ林であったようであるが、現在はナラ・カラマツを中心に、クルミ・シラカバ・クリ・イタヤカエデ・ナナカマドなどの樹木が周辺に密集し、中でもナラは樹齢50～60年ほどと思われる大木が見られる。調査区内にはこれらの大木が数多く見られ、一部ではほぼ等間隔に直線状の並びが確認され、植林を行った痕跡が看取される。立木については、調査を開始する際にNEXCO東日本北海道支社によりあらかじめ伐採を行い、僅かな遺物包含層を破壊しないよう抜根せず、残った木根の周辺を可能な限り手作業で切断しながら掘り進め、入り込んだ遺物についても層位毎に取り上げることとした。

登町 4 遺跡のグリッド設定については、平成24年度の調査開始時より使用しているグリッドライ



第 4 図 グリッド配置図

ンを延長し、遺物の点取り等を行う際の基準杭は木杭を、それ以外のグリッドライン交点については簡易測量によりパイル杭を設置し、掘削や遺物の取り上げ等を行う際の基準とした。

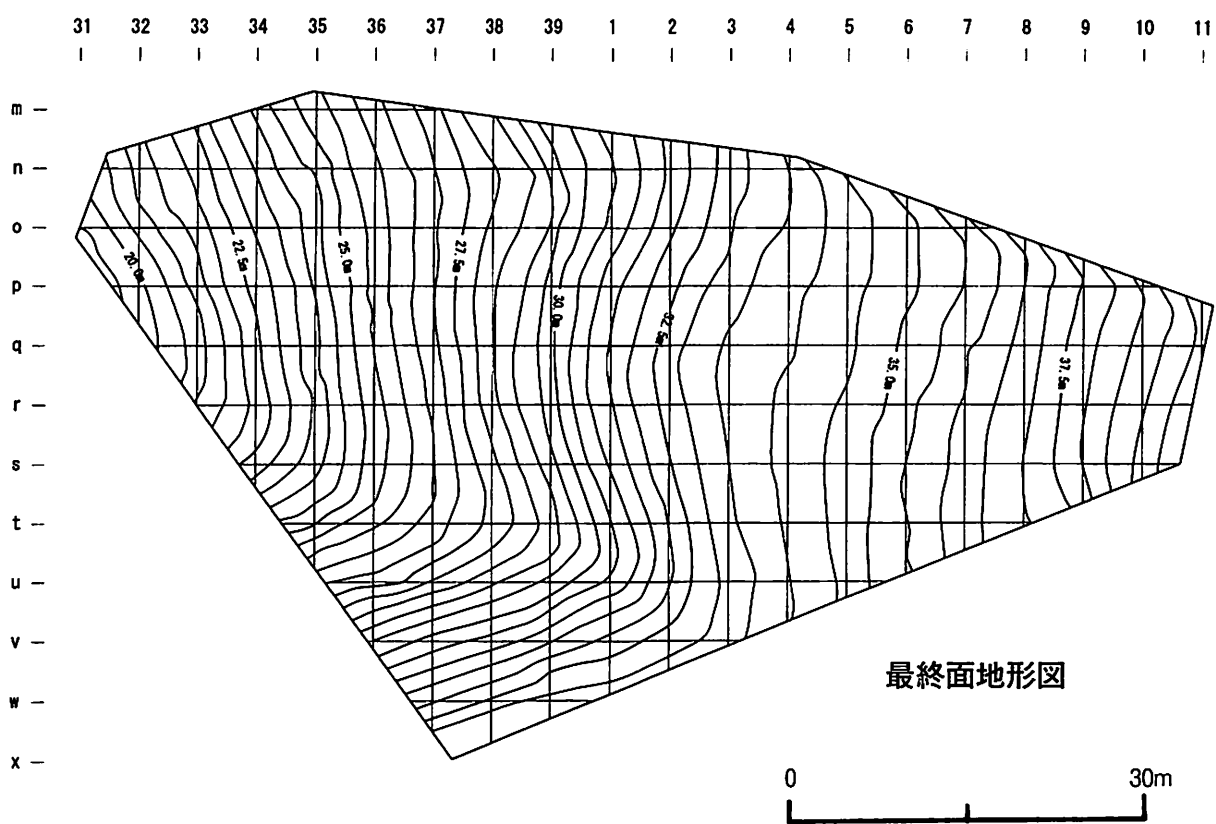
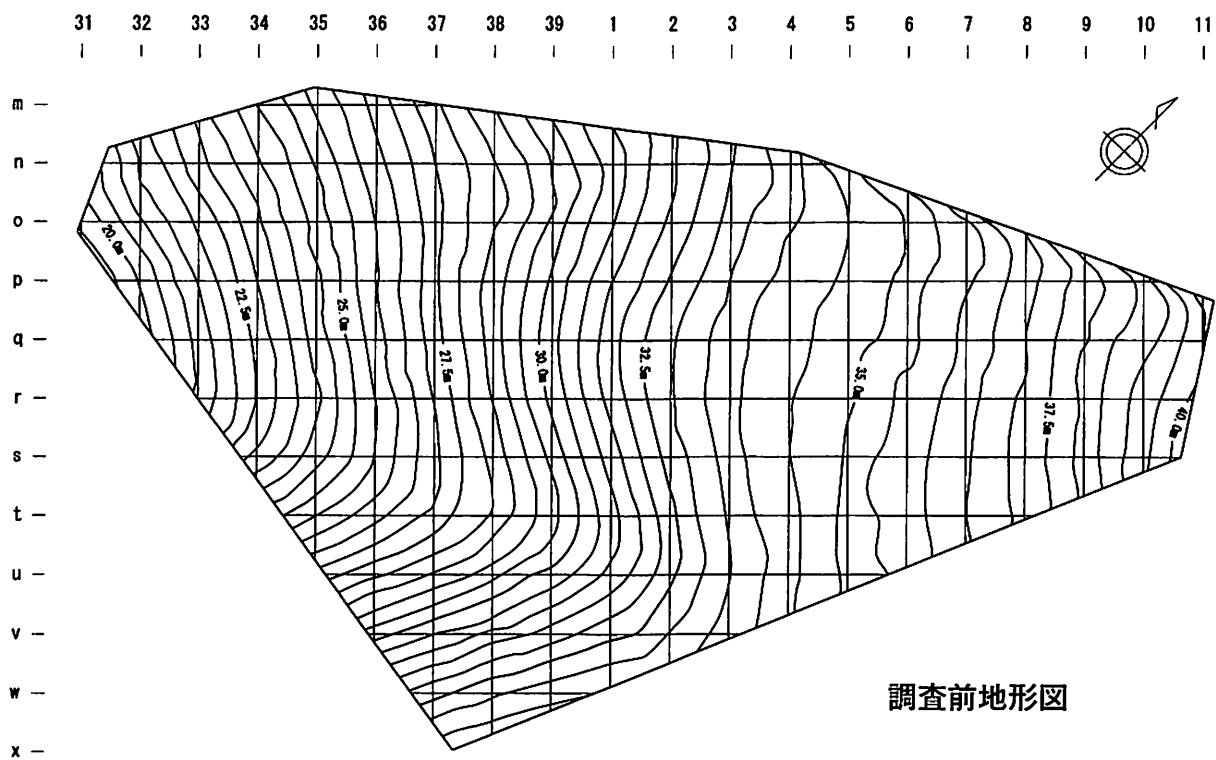
グリッドの設定基準の詳細については、高速自動車国道のセンターライン上の基準点 STA3 + 60 (X座標 - 90745.050 Y座標 46784.247) と点 STA3 + 80 (X座標 - 90731.297 Y座標 46798.767) の2点を結んだ直線(北東-南西方向)を基準として、その2点がラインの交点となるように直交するグリッドライン(北西-南東方向)を設定した。当初調査は翌年度までの予定であり、それを見越して平成24年度調査区西隅がA1グリッドとなるようにグリッドラインには北西-南東方向にアルファベット、北東-南西方向のグリッドラインに算用数字を付したため、今年度の調査区については南東-北西に向かいアルファベット小文字の x ~ m、北東-南西に向かい1ラインより南西側は39~31の算用数字を付した。各グリッドの規格は5×5mとし、呼称は西隅のライン交点で表示した(第4図)。

遺物包含層上の表土・耕作土層の除去については、表土の雑草、細かな枝葉等の堆積を手作業で除去した際、遺物が確認された事から、昨年度に引き続き重機を使用せず、スコップや移植ゴテ・手鋏等を使用し人力にて掘削した。また、前年度までの調査区と状況が異なるため、包含層の状態や遺物の出土傾向を把握するため、調査の初段階として25%調査を実施し、その結果に基づき全体の作業の調整を行った。

掘削により発生した廃土については、前年度までの調査に比して傾斜がきつく、廃土置場が限られているため、運搬は複数のモーターベルトコンベアを連結し一輪車と併用し行った。南西側調査区分の廃土については調査区外南側へ運び段状に積み、降雨時の土砂流出に備えブルーシートと土嚢により覆い、南西側の崖淵には土嚢を積み上げ、コンパネと木杭で土留めを施した。北東側調査区分の廃土については、調査区外東側へ主にモーターベルトコンベアを使用し運び出した。モーターベルトコンベアの使用に際しては大型の発電機を使用し、安全管理のために常に両端に交替で人員を配置し、緊急時用にホイッスルを常備し、注意喚起を行った。また、熱中症対策のため調査区内に、農業用の日除けネットを使用し仮設の休憩場所を設け、適宜水分を補給しながら休憩をとった。

事務所・物置・休憩所として使用する仮設ハウスについては、北後志東部地区広域営農団地農道より仮設道路で300mほど緩斜面を登った調査区北東側に設置した。また当該地は市街地や幹線道路から離れており、電気については農道沿いに設置された電柱から工事用仮設道路沿いに新たに設けた仮設電柱へと電線を敷き確保したが、水道を新たに引くことは難しく、ワゴン車に農業用等のウォータータンクを積み必要量を運搬し、仮設ハウスにてポリタンクへ移し替え、飲料・手洗い・作業用などに使用することとした。作業従事者の通勤については、駐車場の確保等が難しく町内2経路を回る送迎バスを運行し対応した。

遺物の出土状況としては、調査区南東寄りの北東から南西にかけてやや急傾斜の沢状を呈する部分から多く出土しているが、ある程度形を成すものは見られない。破片の多くは調査区北東側高台部分のより平坦な部分より、地滑り等により長い時間を経て土砂が移動し堆積したものと思われる。主体となるのは縄文時代早期後半で、早期前半、前期前半~中期後半、晩期後葉、続縄文時代後半のものが見られるが、縄文晩期後葉以降のものは僅少である。(小川)



第5図 調査前・最終面地形図

2. 基本層序

土層の堆積状態については、南西－北東方向（第7～9図、a-b）と北西－南東方向（第10～11図、c-d、e-f）の3ヶ所で観察した。土層は4つに分けられ、これらの各層を上から順にⅠ～Ⅳ層とした。遺物包含層はⅡ層及びⅢ層であり、昨年度、一昨年度の調査区と近接しており同様の層序となっている。なお、Ⅱ層の一部で分層の可能な部分（Ⅱa層・Ⅱb層）が見られた（第10・11図）。

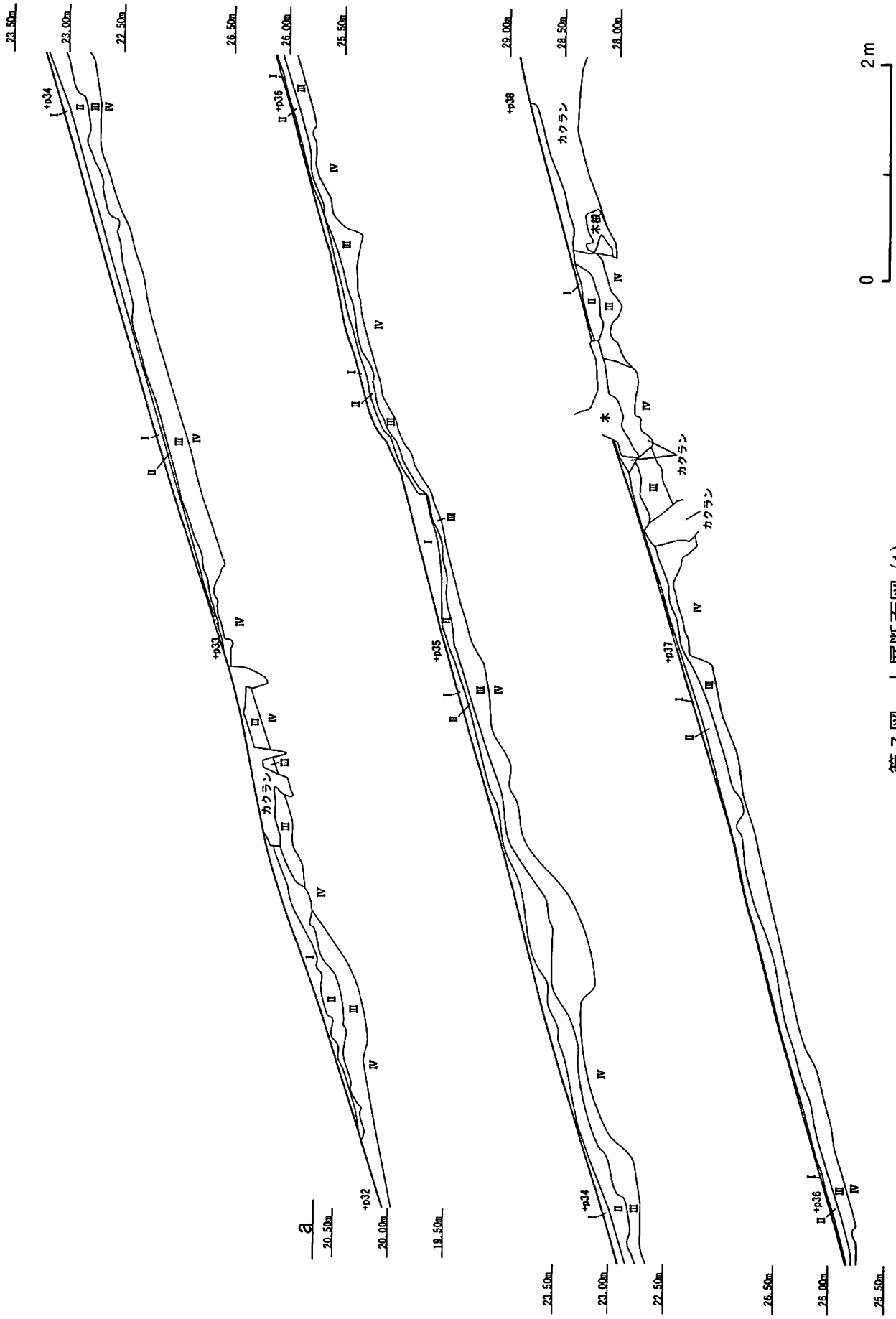
今年度の調査区は、以前に畑として利用された痕跡が認められ、ぶどう栽培に使用された金属製のアンカーや腐食した木杭が出土し、雑木の伐採時に重機によって攪乱されたと思われる場所も多く見られた。また調査区全域にツタウルシが群生しており、ササやイタドリも多く自生していたため、手作業による掘り下げの障害となった。

Ⅰ層については表土層、または耕作土層である。ウルシ対策により優先的に全面掘削したため断面図上では見られない部分もある。Ⅱ層については遺物包含層である。一部削平、攪乱されている場所がみられ、Ⅳ層まで黒色土が入り込んでいる部分もあった。Ⅱa層についてはⅡ層中央に明瞭な色の境目がみられたため細分した。Ⅱb層は遺物が多く出土するが沢状の落ち込み部分であり流れ込みである可能性が高い。Ⅲ層についてはⅡ層からⅣ層への漸移層であり、Ⅱ層との違いは色調と少量の小礫（1～5cm）が部分的に含まれていることである。Ⅲ層・Ⅳ層では沢状地形となっている南西から、平坦面である北東にかけて色調がやや明るくなる傾向が見られた。Ⅳ層は倶知安層（塩谷層）の上層部で部分的に大礫（10～20cm）がまとまって認められる。多くの角礫状ないし亜角礫状のいわゆるクサレ礫を含んでいることから、土壌の一部は古赤色土の可能性があると、一昨年度地質調査を依頼した松田氏より、ご教示頂いた。これら地質の詳細については『登町4遺跡（2012年度）』報告書、第Ⅴ章付編2をご参照いただきたい。

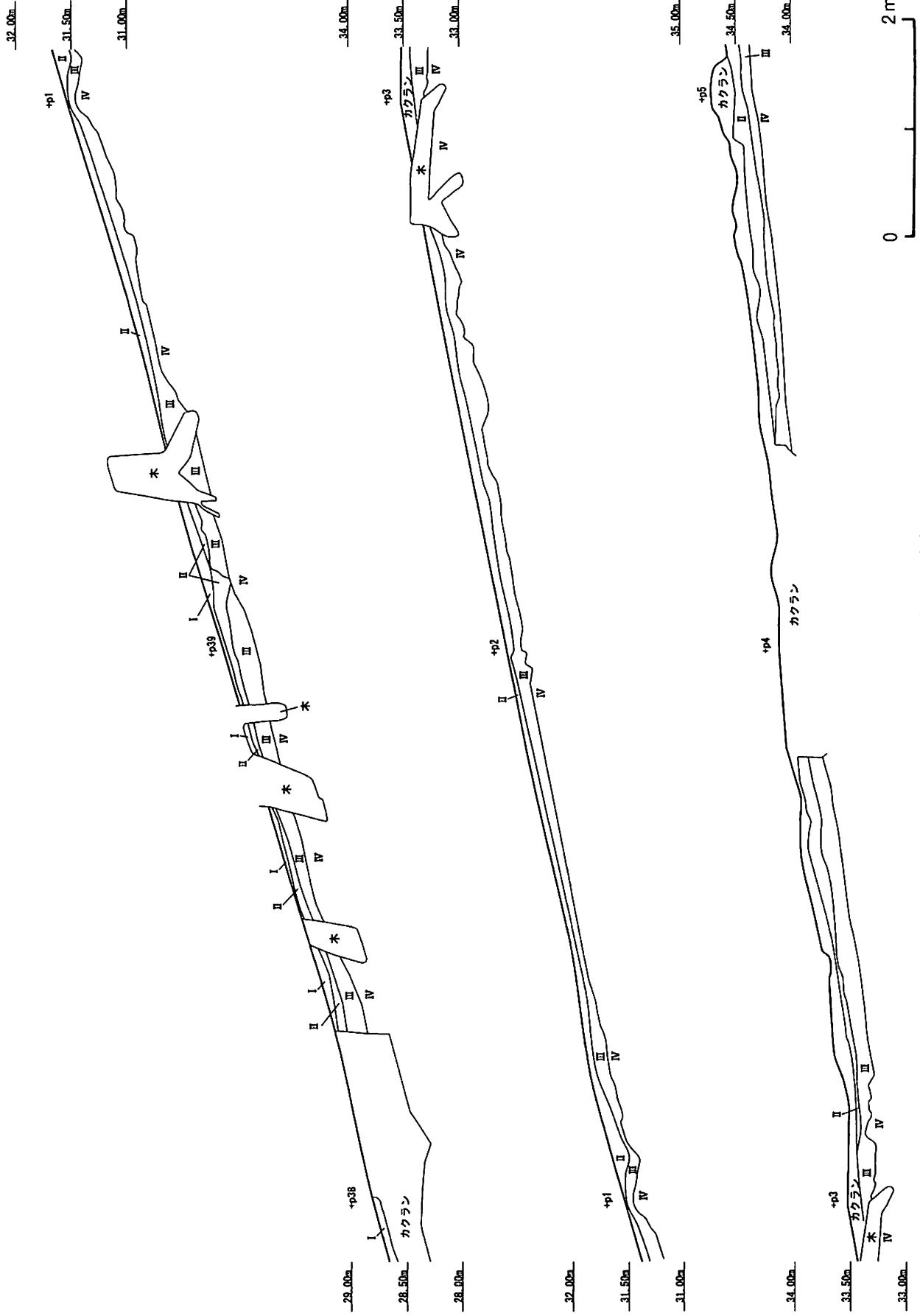
なお、土層の観察は、『土壌調査ハンドブック改訂版』（日本ペドロロジー学会編）および色調は『新版標準土色帖』（小山・竹原 1967）に基づいている。 （花田）



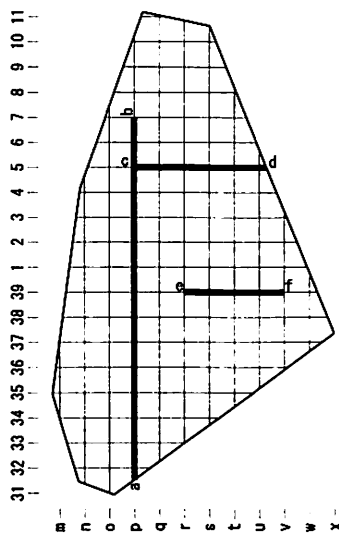
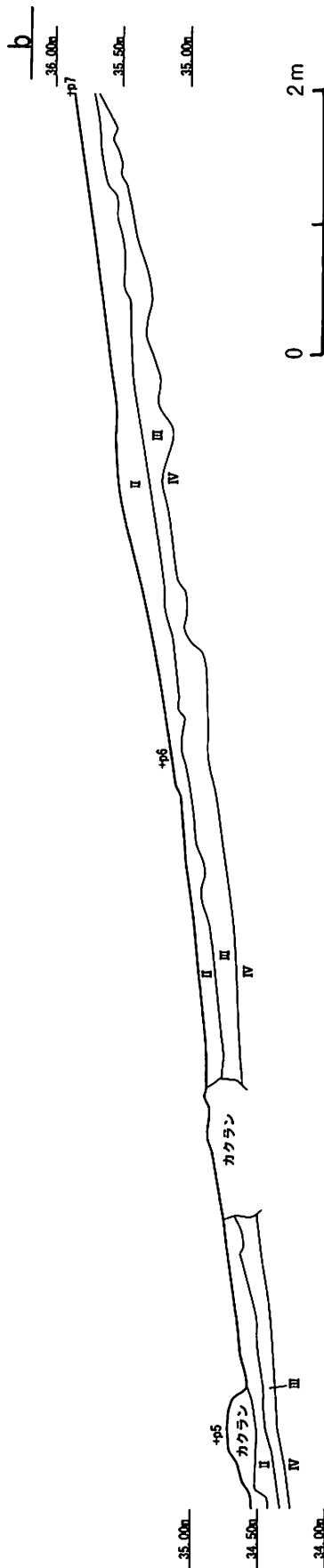
第6図 基本土層模式図



第7図 土層断面図(1)



第8図 土層断面図(2)

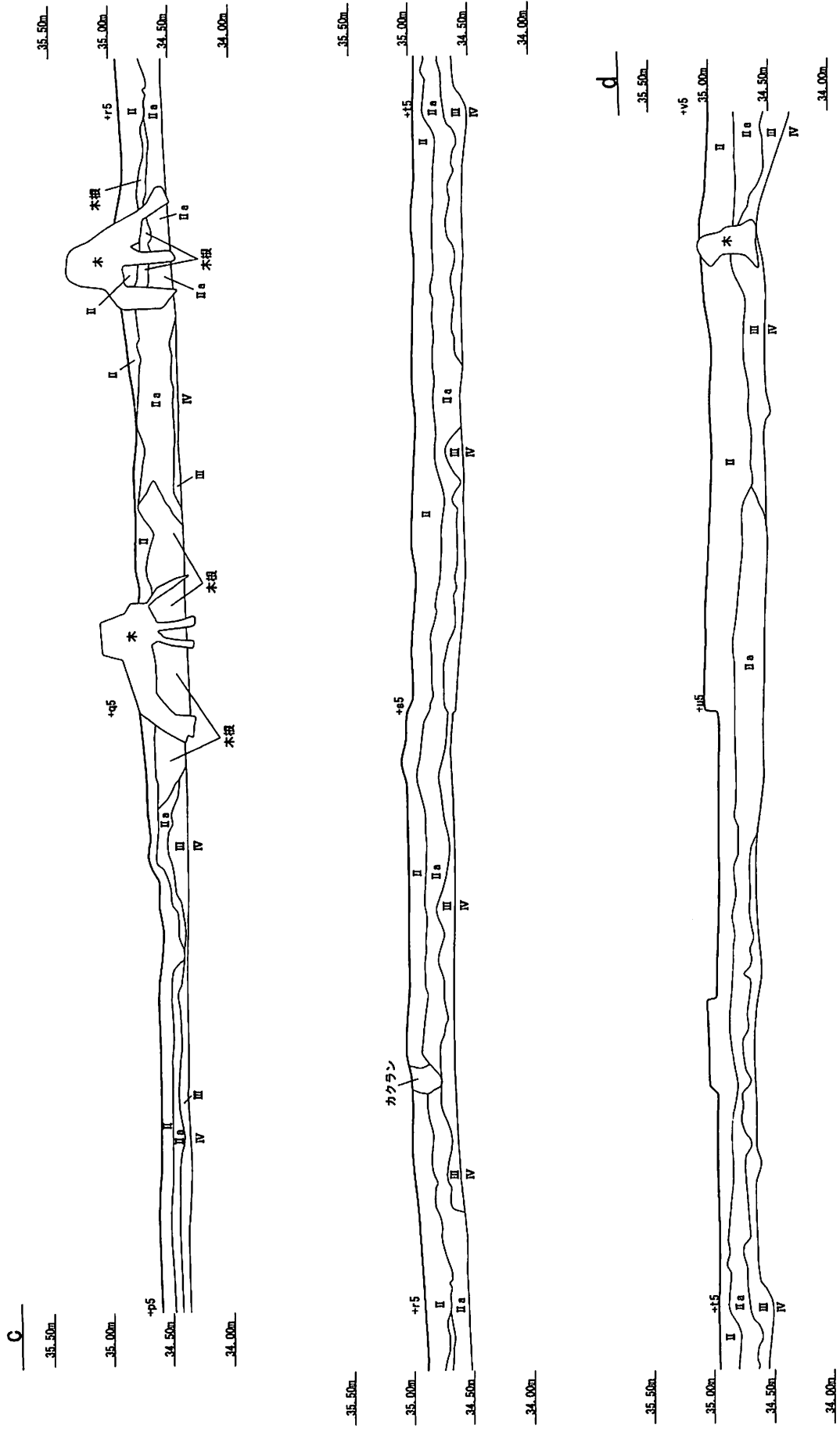


土層断面図 a-b
 II層：黒褐色土(10YR2/3)
 遺物包含層
 粘着性 弱 堅密度 堅
 スコリアが混じる
 III層：暗褐色土～褐色土(10YR3/4～10YR4/4)
 遺物包含層 漸移層
 粘着性 弱 堅密度 堅
 1mm～5mmのスコリアが混じる
 IV層：褐色土～濃い黄褐色土(10YR4/4～10YR5/4)
 粘着性 弱 堅密度 堅
 5mm～2cm 程の礫が混じる

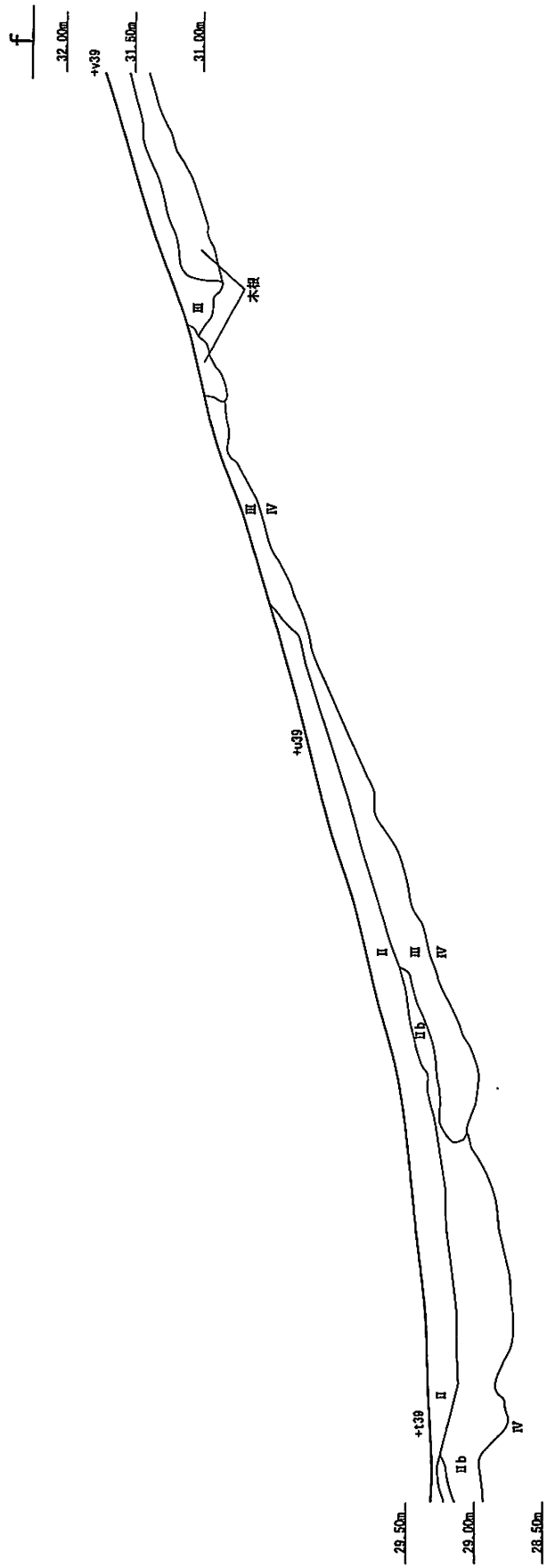
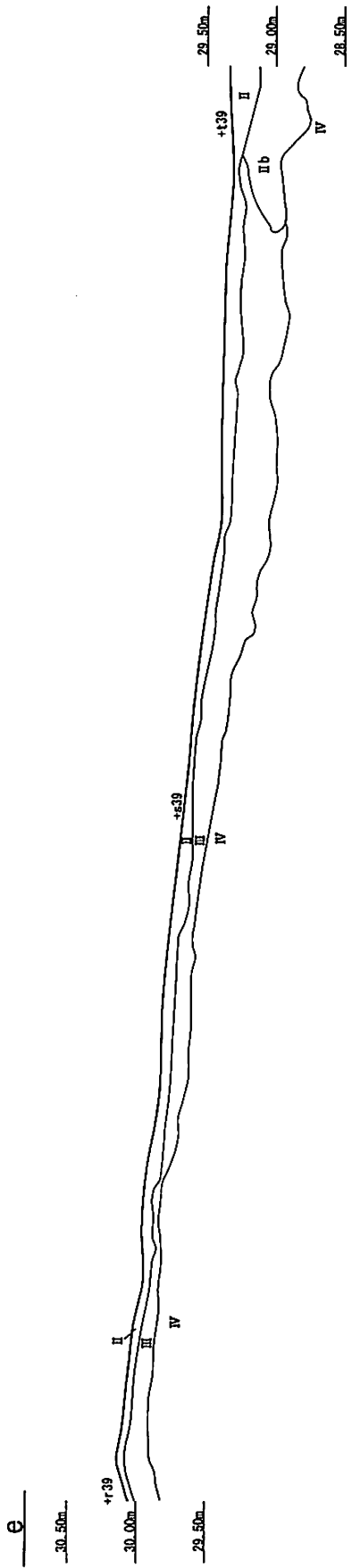
土層断面図 c-d
 II層：黒褐色～にぶい黄褐色土(10YR2/3～10YR5/4)
 遺物包含層
 粘着性 弱 堅密度 堅
 2mm程の炭が混じる
 IIa層：暗褐色土(10YR3/4)
 遺物包含層
 粘着性 無 堅密度 軟
 2cm 程のスコリアや炭化物が少量混じる
 III層：褐色土(10YR4/4)
 遺物包含層 漸移層
 粘着性 弱 堅密度 堅
 礫が混じる
 IV層：明黄褐色(10YR6/6)
 粘着性 無 堅密度 堅
 礫が混じる

土層断面図 e-f
 II層：暗褐色土(10YR3/4)
 遺物包含層
 粘着性 弱 堅密度 堅
 炭化物が少量混じる
 IIb層：黒褐色土(10YR2/3)
 遺物包含層
 粘着性 弱 堅密度 堅
 III層：暗褐色土(10YR3/4)
 遺物包含層 漸移層
 粘着性 弱 堅密度 堅
 スコリアが混じる
 IV層：暗褐色土(10YR3/4)
 粘着性 弱 堅密度 堅
 5cm 程のスコリアが混じる

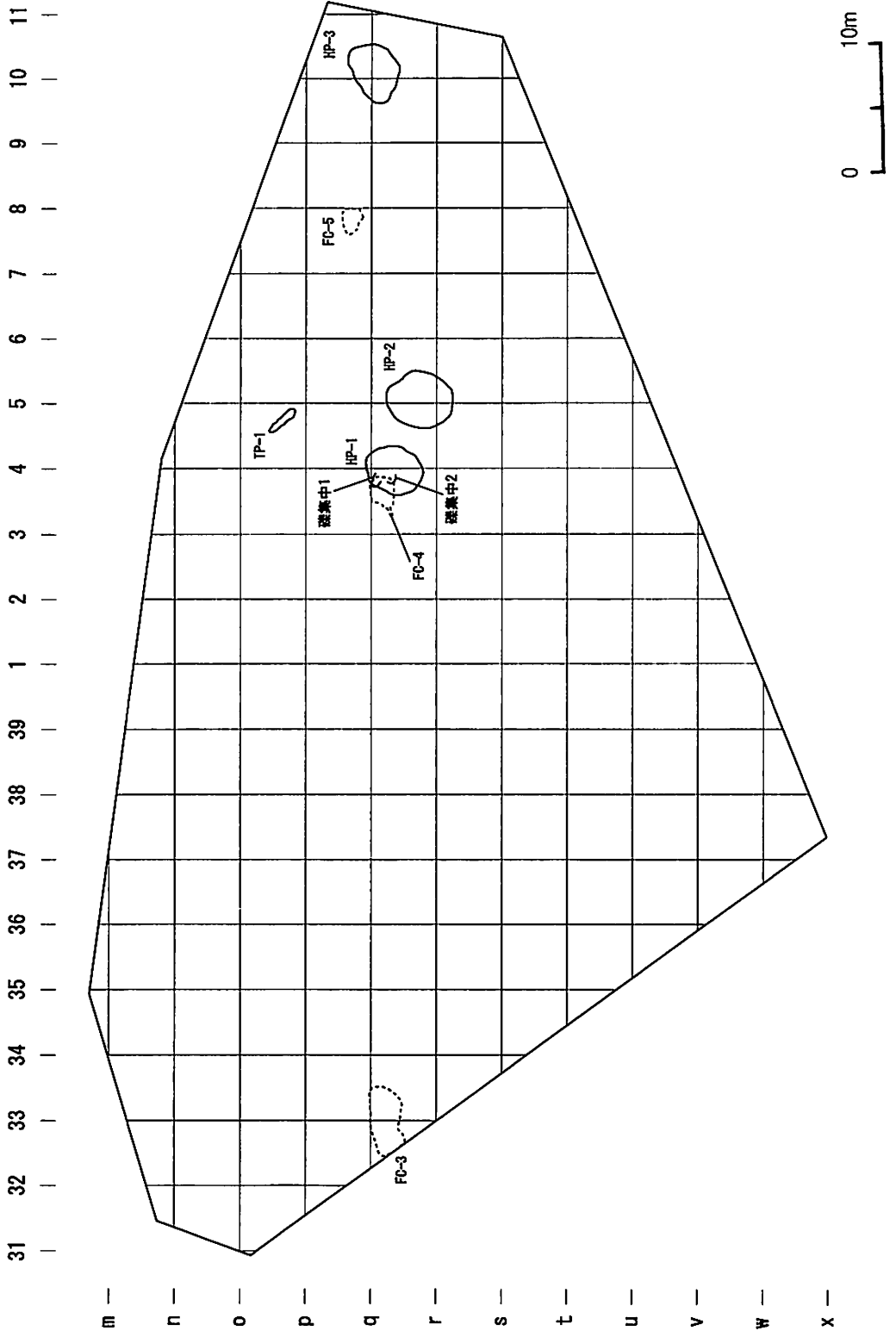
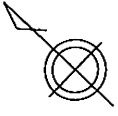
第9図 土層断面図(3)



第10図 土層断面図 (4)



第11図 土層断面図 (5)



第12図 遺構配置図

3. 遺構

HP-1

形状：楕円形

長軸：4.3m 短軸：3.52m 深さ：43cm

長軸方向：北西-南東

土層注記

覆土1層：10YR4/4 褐色 シルト質土層 しまりやや強い 粘性やや弱い 1mm～2mmの砂含む

Ⅲ層：10YR5/6 黄褐色 砂質シルト層 しまり強い 粘性弱い

Ⅳ層：7.5YR6/6 橙色 シルト層 しまりやや弱い 粘性やや強い 礫を含む

q3・q4グリッドにまたがって検出。坑底面からI群a類の土器片が確認されており、縄文時代早期前半の構築と思われる。

1は石鏃で、小形の三角形平基。背面中央部がやや膨らみ、腹面は周縁のみ加工で一次剥離面が残る。2は石鏃片で、基部のみが残存する。材質の透明度が高い。3はつまみ付ナイフで、片側縁に急角度な刃部を作り出し、背面のほぼ全周に加工している。腹面の加工はほぼない。4はスクレイパーで一部が欠損している。片側縁に連続した細かい剥離とその反対片側縁下部にやや厚みのある刃部を加工している。腹面の加工はほぼない。5はRフレイクで上部と片側縁が欠損し、その反対片側縁は両面から加工がされている。石鏃等の未製品の可能性がある。1・3は頁岩製、2・5は黒曜石製、4は流紋岩製である。1～5は全点覆土からの出土である。

LP-1

形状：円形

直径：0.73m 深さ：28cm

土層注記

覆土1層：10YR4/4 褐色 シルト質土層 しまりやや弱い 粘性やや強い

HP-1の付属遺構で、坑底面から検出した。HP-1構築時期と同時期と思われる。また覆土と坑底面からはHP-1と同じくI群a類の土器片が確認された。

HP-2

形状：楕円形

長軸：4.73m 短軸：4.1m 深さ：61cm

長軸方向：北西-南東

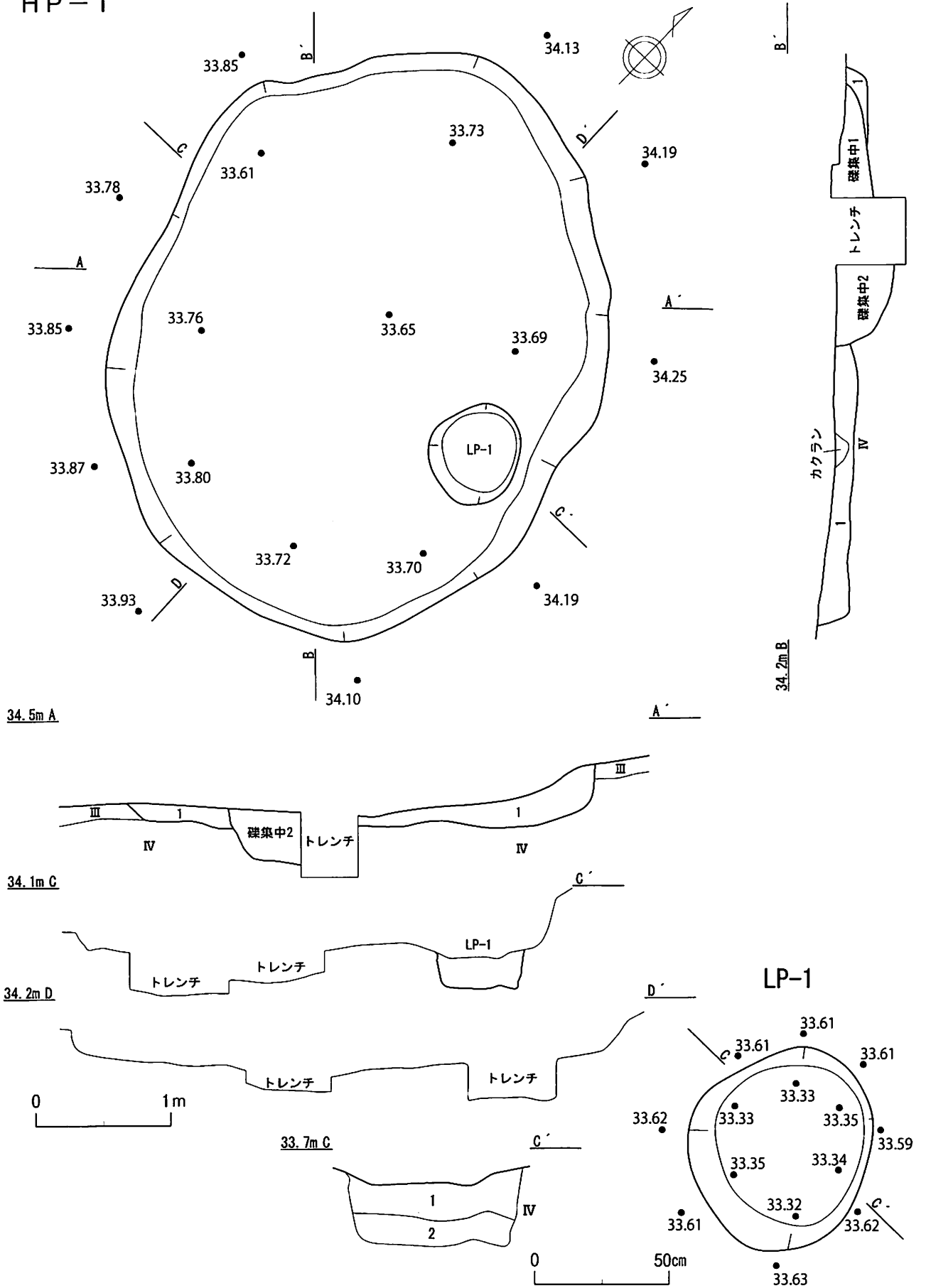
q4・q5グリッドにまたがって検出。覆土からはⅡ群b類の土器片とたたき石が出土している。坑底面から柱穴(SP-1～4)4ヶ所が確認された。またSP-2開口部付近のHP-2底面から褐鉄鉱が密集した状態で検出した。またSP-2の覆土と一括土器1のそれぞれから出土したたたき石片が接合した。検出状況から縄文時代前期末と考えられるが判然としない。

1～5は長軸両端部に、6～9は長軸片端部にたたき痕が確認できる。たたき石は全て一様に、短軸側面の一部がくびれもしくは膨らみがあり持ちやすい。包含層や他の遺構から出土したたたき石と比較して、たたき痕がやや大きく、頻繁に使用していたと思われる。10は挟りが見られないが形状は北海道式石冠と似ている。1～10はすべてチャート製である。SP-2出土の4以外は全点覆土からの出土である。

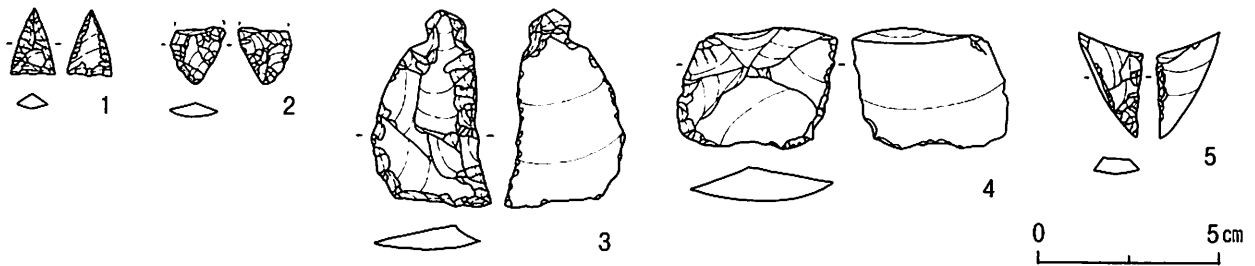
SP-1

形状：楕円形

HP-1



第13図 HP-1 (平面図・断面図)



第14図 HP-1 出土遺物

長軸：0.30m 短軸：0.21m 深さ：49cm

土層注記

覆土：10YR4/6 褐色 シルト層 しまり強い 粘性弱い 10YR5/6 黄褐色土混じる

坑底面は平坦で、開口部まで垂直に伸びている。また底面付近に扁平な礫が出土し、扁平な部分を上にして、底に張りついた状態であった。

SP-2

形状：円形

直径：0.30m 深さ：52cm

土層注記

覆土：10YR4/6 褐色 シルト層 しまり強い 粘性弱い 10YR5/6 黄褐色土混じる

坑底面は平坦で、立ち上がりは開口部まで垂直に伸びている。底面付近から扁平な面を上にしたたたき石片が出土している。本資料は一括土器1から出土のものと接合している。

SP-3

形状：円形

直径：0.36m 深さ：50cm

土層注記

覆土：10YR4/6 褐色 シルト層 しまり強い 粘性弱い 10YR5/6 黄褐色土混じる

坑底面はやや丸みがあり、立ち上がりは開口部まで垂直に伸びている。

SP-4

形状：楕円形

長軸：0.18m 短軸：0.13m 深さ：22cm

土層注記

覆土：10YR4/6 褐色 シルト層 しまり強い 粘性弱い 10YR5/6 黄褐色土混じる

底面は8の字状のくぼみとなり、断面から見ると中心が突き出ている。立ち上がりは開口部に向けて垂直に伸びる。

(飯浜)

HP-3

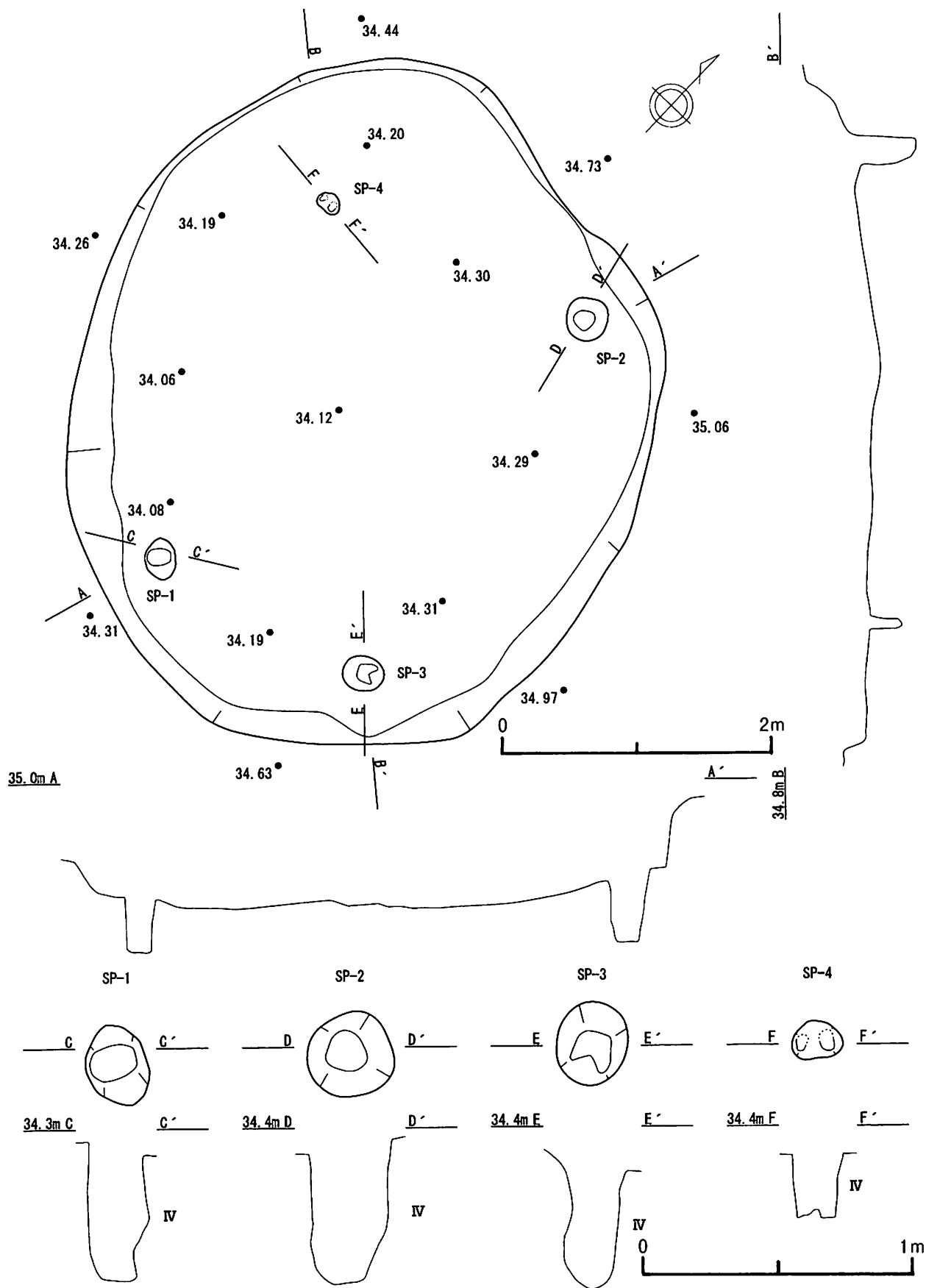
形状：不整楕円形

長軸：4.8m 短軸：3.5m 深さ：105cm

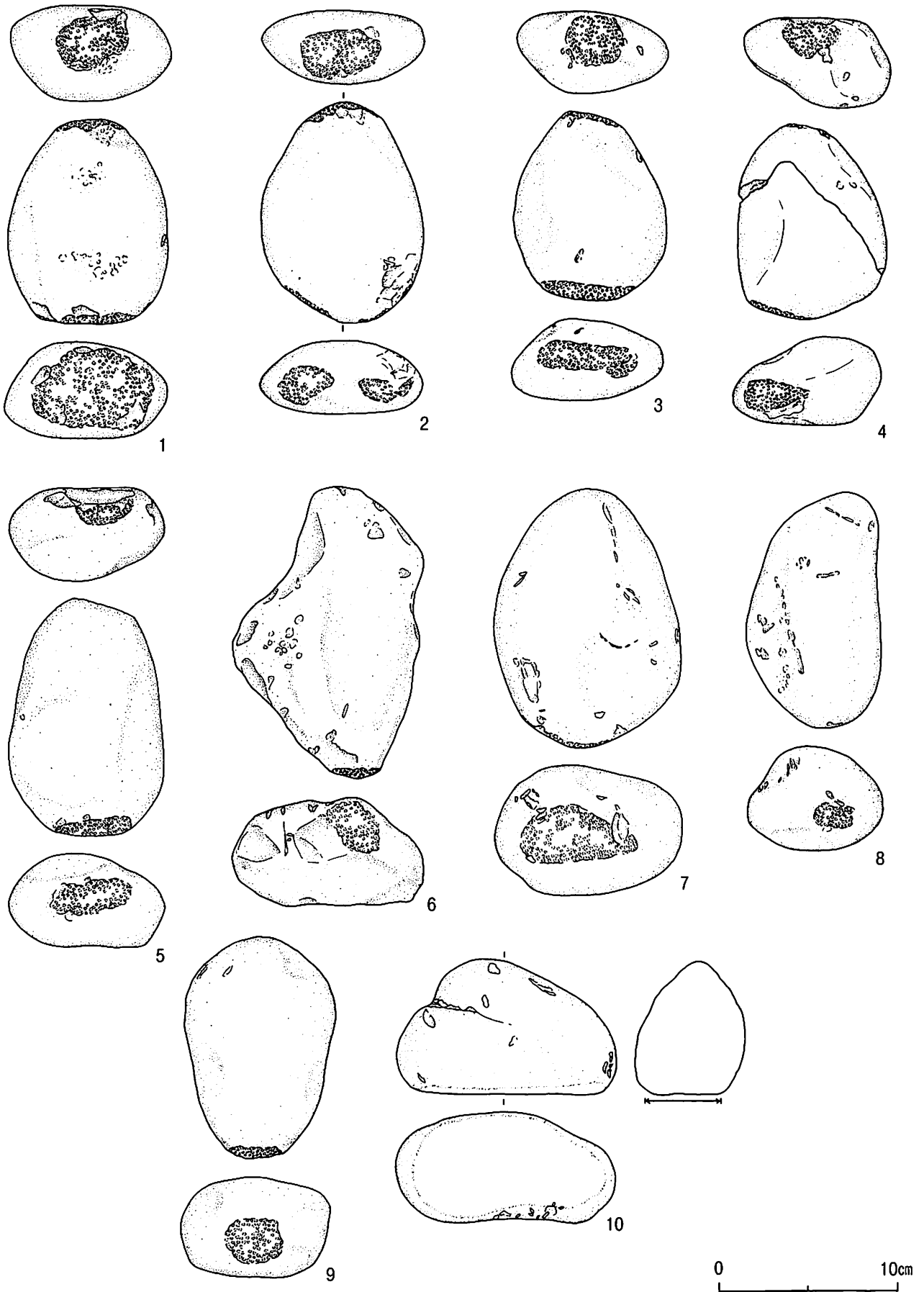
長軸方向：北-南

p9・p10・q9・q10グリッドにまたがって位置する。北から南に向かい斜度6°程の斜面に構築され、坑底面も斜面に沿っている。坑底面直上まで木根が入り込む。坑底面南側にある落ち込みは西側が

HP-2

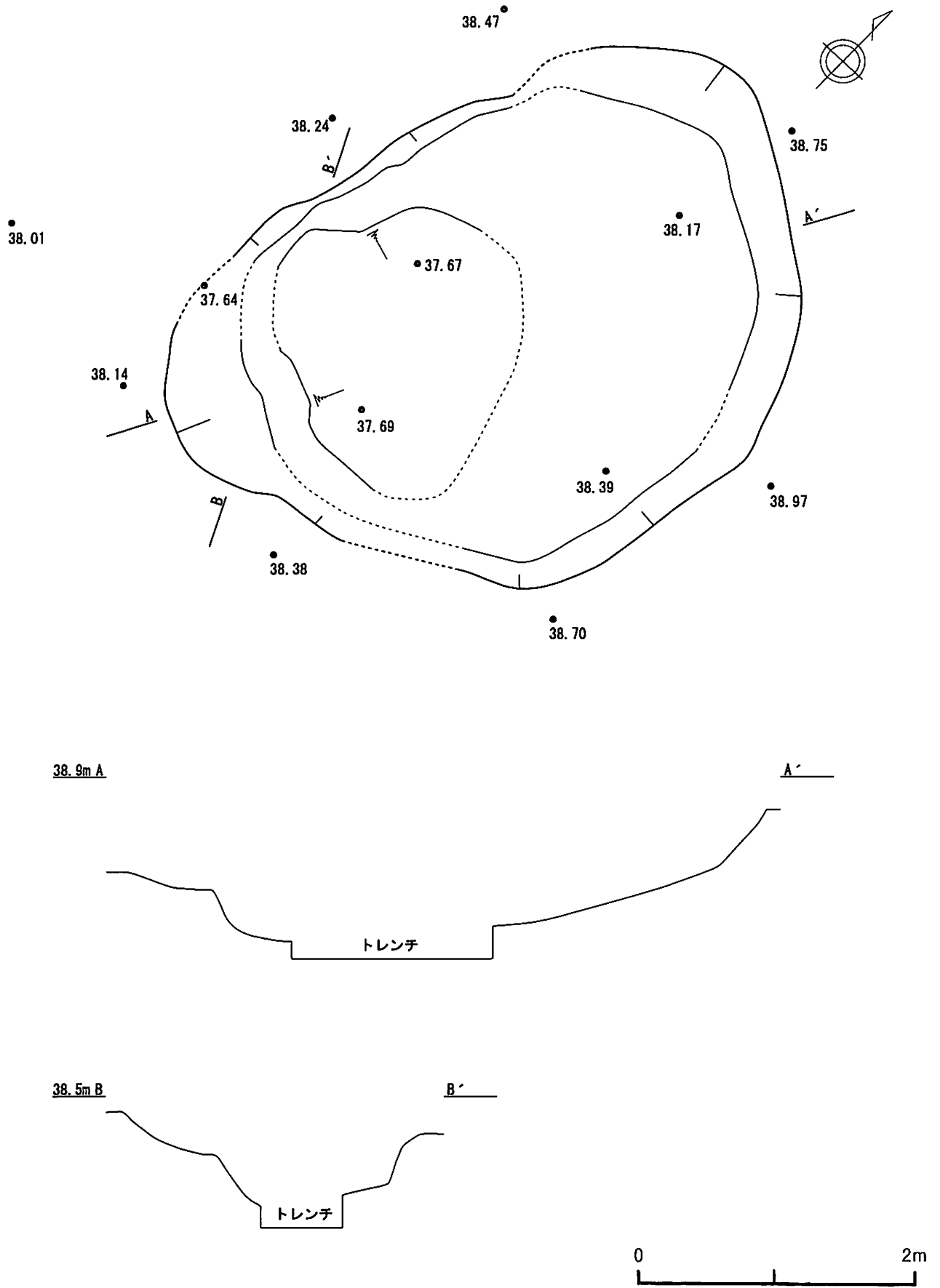


第15図 HP-2 (平面図・断面図)

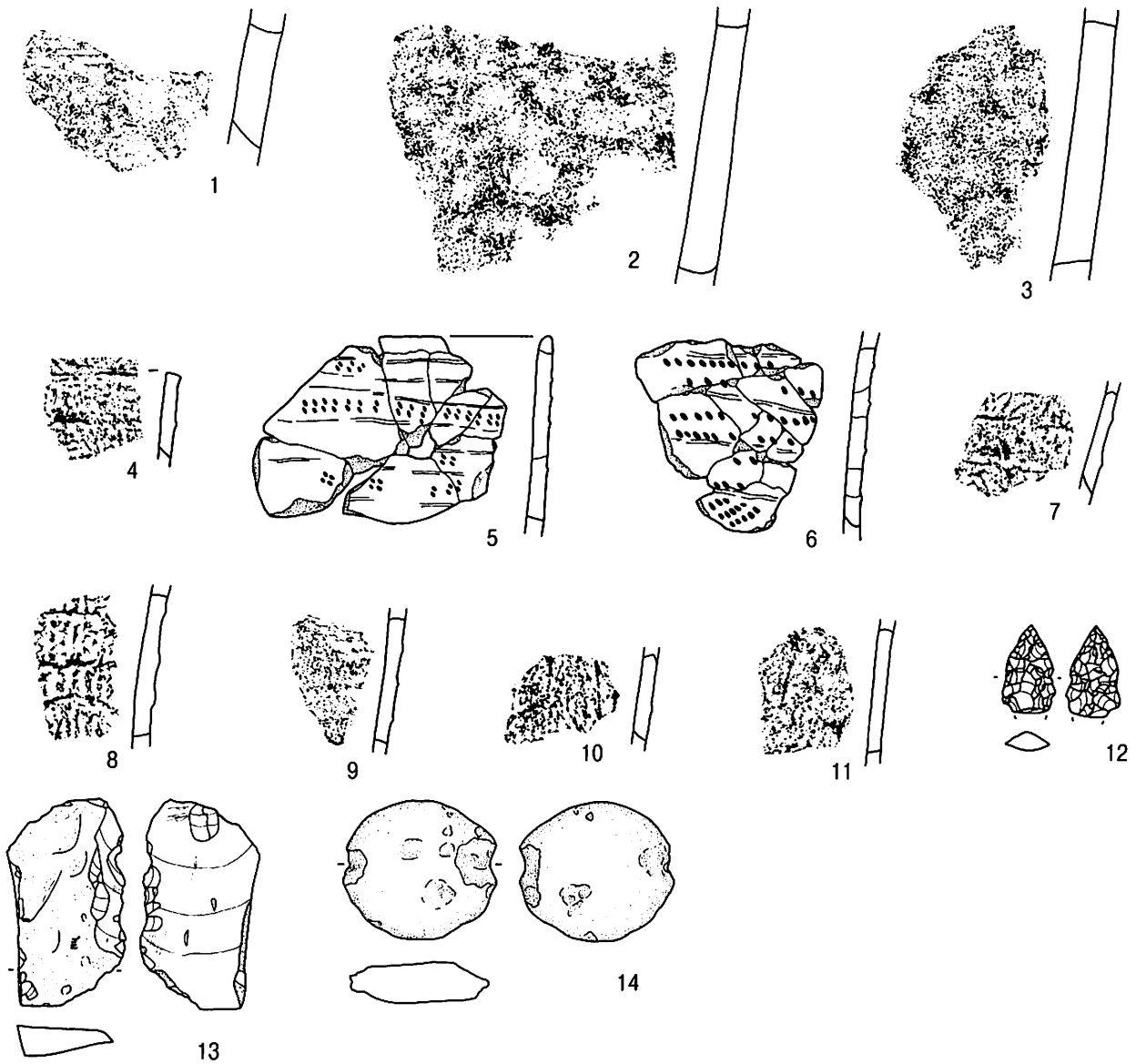


第16圖 HP-2出土遺物

HP-3



第17図 HP-3 (平面図・断面図)



第18図 HP-3出土遺物

急に立ち上がり、土器片・石錘等の遺物が出土したが、北～南東側は木根により不明瞭。

覆土よりI群a類とI群b類土器が出土したが、坑底面直上からはI群b類土器が出土しており、時期は縄文早期後半と思われる。灰や焼土、柱穴は検出されず性格は不明。

1～3はI群a類の胴部で、いずれも厚みがあり前面に条痕文が横走している。4～11はI群b類で4・5は口縁部、他は全て胴部である。4の口唇部断面形は角形で、口唇上は縄の圧痕により刻まれ、器面には微隆起線と短縄文が施されている。5の口唇部断面形は丸形で、器面には狭い間隔で微隆起線が巡り短縄文も施される。6～11の器面にも微隆起線と短縄文が施されている。12は基部の欠損した石鏃。基部側に返し部分が残っているため有茎と思われる。やや厚みがある。材質は黒曜石製。13はRフレイク。原石面が大きく残る。片側縁両面の一部に加工痕がある。材質は大きめの球顆が入る黒曜石製。14は石錘。楕円形の扁平磔を使用し、長軸側端部2ヶ所を打ち欠いている。流紋岩製。

(遠藤)

TP-1

形状：幅広溝状

長軸：2.76m 短軸：0.80 m 深さ：92cm

長軸方向 西—東

土層注記

1層 10YR3/2 黒褐色 壤土層

2層 10YR4/4 褐色 シルト砂層 粘性はやや弱い しまりやや強い

3層 10YR5/6 黄褐色 シルト層 粘性弱い しまり強い

4層 7.5YR6/6 橙色 シルト層 しまりやや弱い 粘性やや強い 礫を含む

o4 グリッドに位置する。上半部はすり鉢状に開き、下半部に行くにつれて垂直に落ちて窄まる漏斗状となる。坑底面に逆茂木等の仕掛けは無く、細長い溝状である。時期は不明。

礫集中1

形状：楕円形？

長軸：1.06 m（現状） 短軸：1.00 m（現状） 深さ：21.5cm

土層注記

覆土：10YR2/3 黒褐色 シルト層 しまりやや強い 粘性やや弱い

q3 グリッドで検出。HP-1が廃絶されて埋まった後に再度掘り上げて構築したと思われる。覆土からは礫・礫石器合わせて23点が出土し、全点がチャート製、そのうち20点は礫石器で全てたたき石である。礫および礫石器は概ね長さ10～15cm、幅6.5～9cmのものである。これらは大きさ・形状・石質を選択し持ち込んだと思われる。トレンチにより確認を試みたが、礫集中2との重複関係は不明。時期は不明。1は長軸片端部に、2～3は長軸両端部にやや小さなたたき痕がある。

礫集中2

形状：円形？

直径：約0.69 m（現状） 深さ：50cm

土層注記

覆土：10YR2/3 黒褐色 シルト層 しまりやや強い 粘性やや弱い

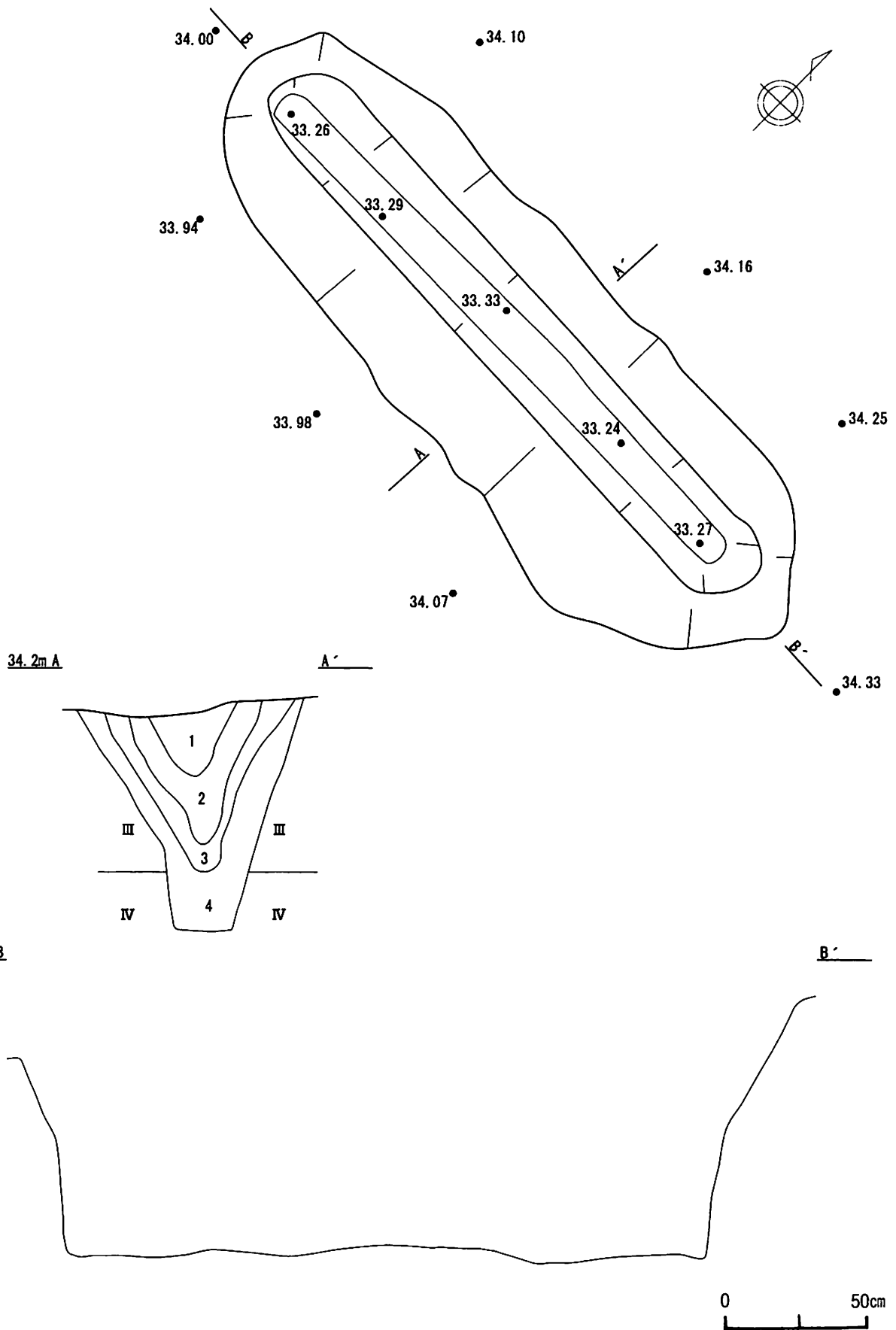
q3 グリッドで検出。HP-1が廃絶されて埋まった後に再度掘り上げて構築したと思われる。覆土からは礫・礫石器合わせて17点、そのうち礫石器はたたき石11点と石皿1点が出土している。トレンチにより確認を試みたが、礫集中1との重複関係は不明。時期は不明。

1は長軸片端部に、2～3は長軸両端部にたたき痕がある。4は石皿で片面ほぼ全体を使用した痕跡があり、特に中央部を集中的に使用していたと思われる3つの凹みがある。隣接する礫集中1のたたき石に比して概ねサイズは共通するがやや重い傾向がある。礫石器の多くはチャート製だが、1点は安山岩製である。1～3はチャート製で、4は泥岩製である。

一括土器1

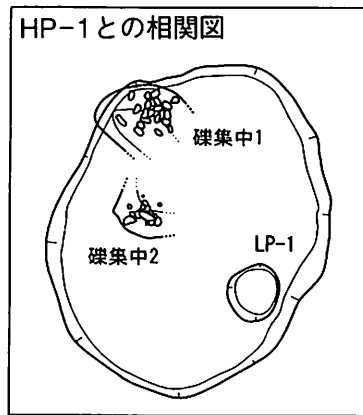
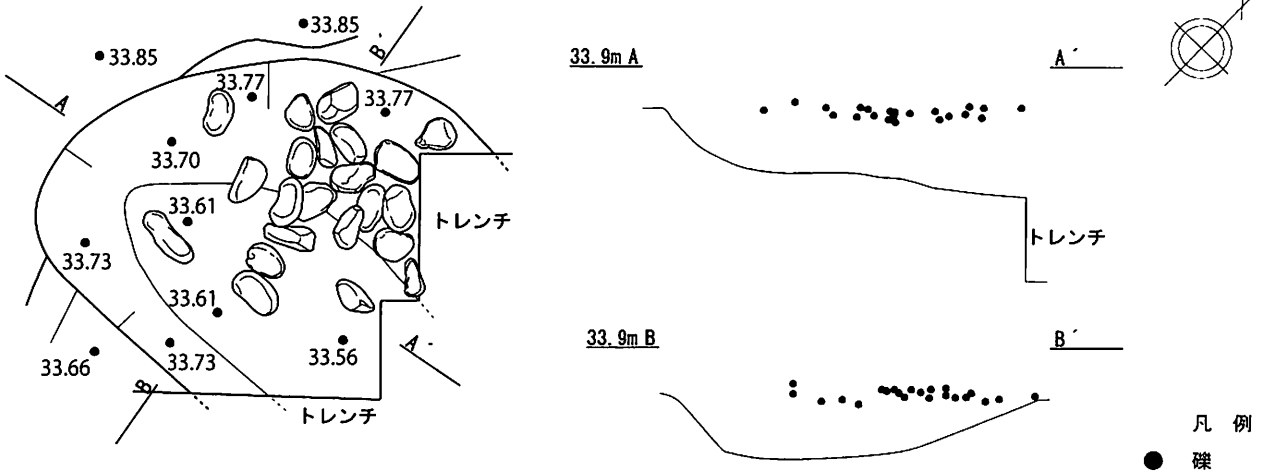
q3とq4グリッドにまたがってⅡ層より出土。Ⅱ群b類のものである。たたき石片が共伴しており、HP-2出土のものと同接し第16図-4に掲載した。1は口径が推定で28cm、器高が現状で12.3cmである。口唇部断面形は丸形で、口縁はやや外傾し、ゆるい波状を呈すると思われる。口縁部にはR撚糸文が横走及び斜走し、菱形の文様を描いている。口縁部と胴部を分ける張出部には綾絡文が巡る。胴部にはR撚糸文が縦走する。器表面には小石粒の混入が目立ち、内面は丁寧に磨かれている。
(飯浜)

TP-1

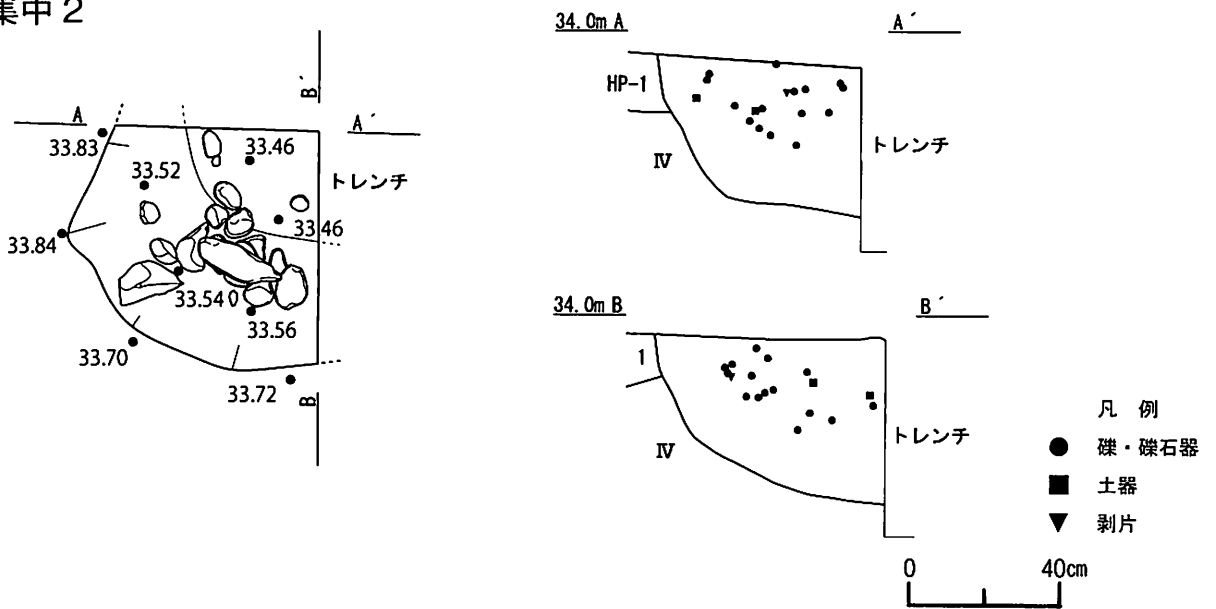


第19图 TP-1 (平面图·断面图)

礫集中1

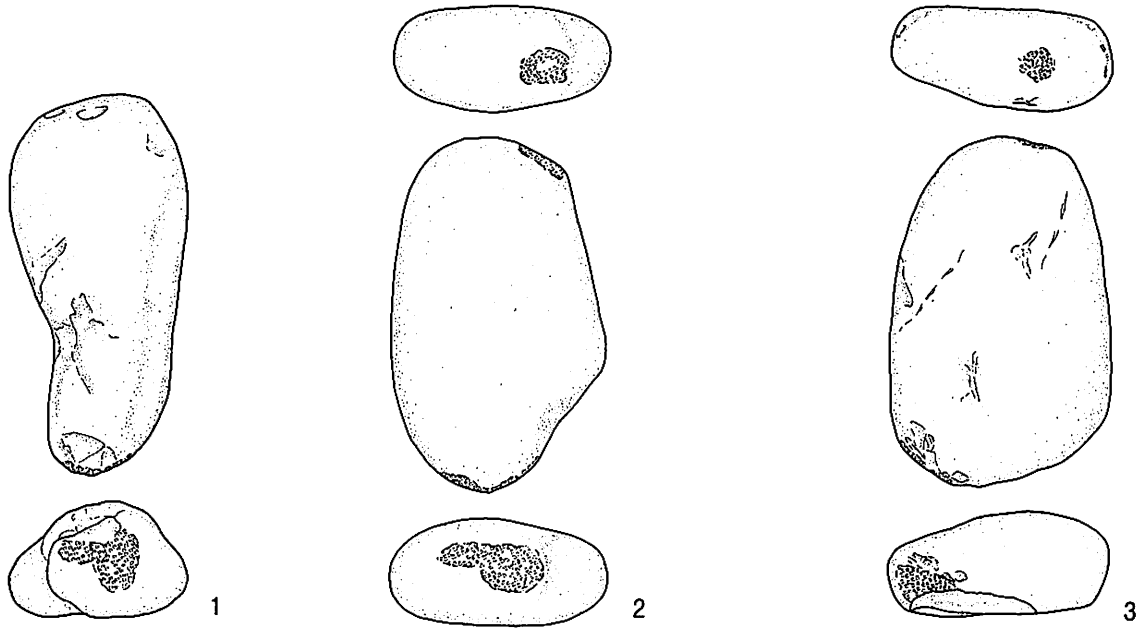


礫集中2

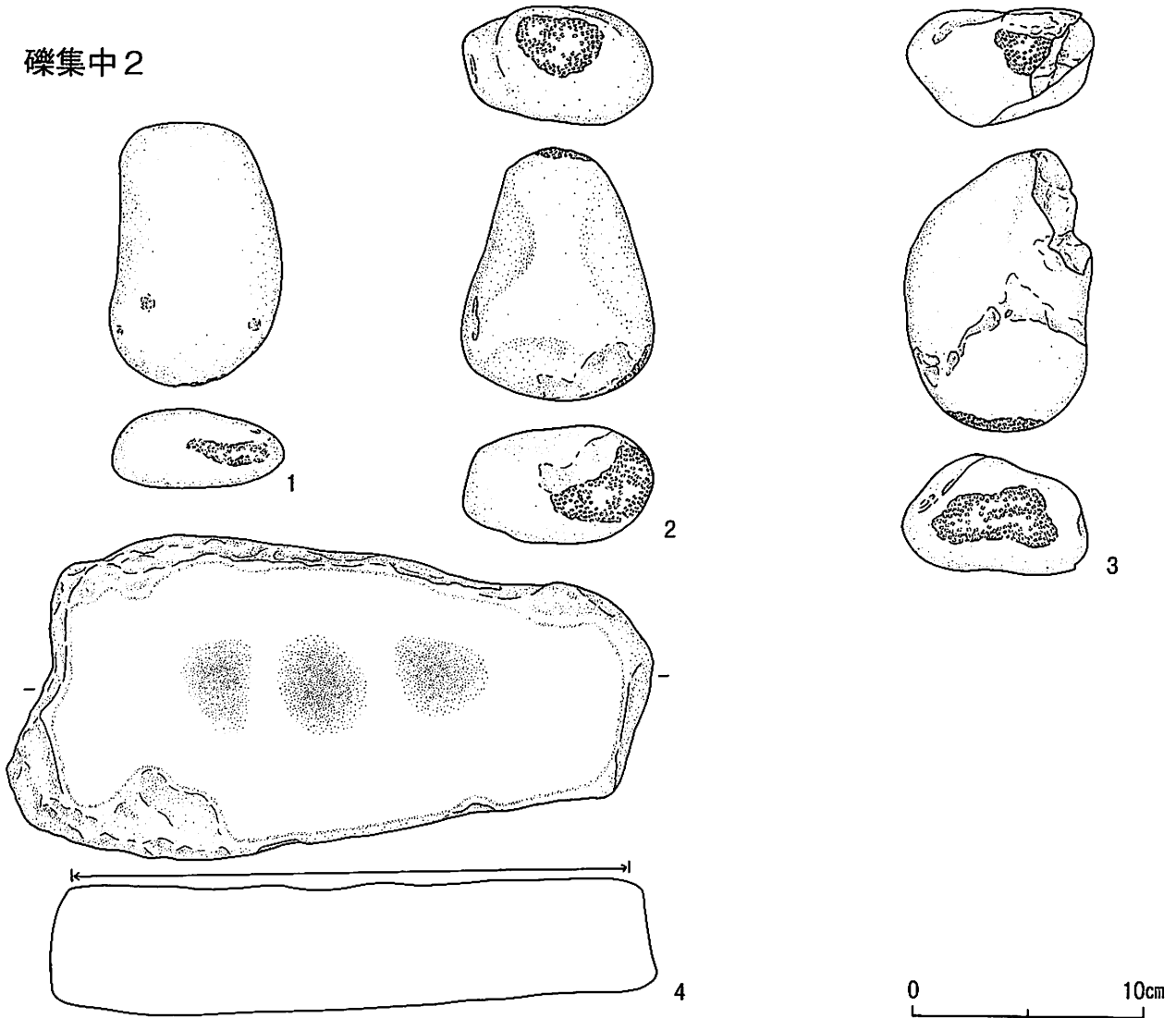


第20図 礫集中1・2 (平面図・断面図)

礫集中1

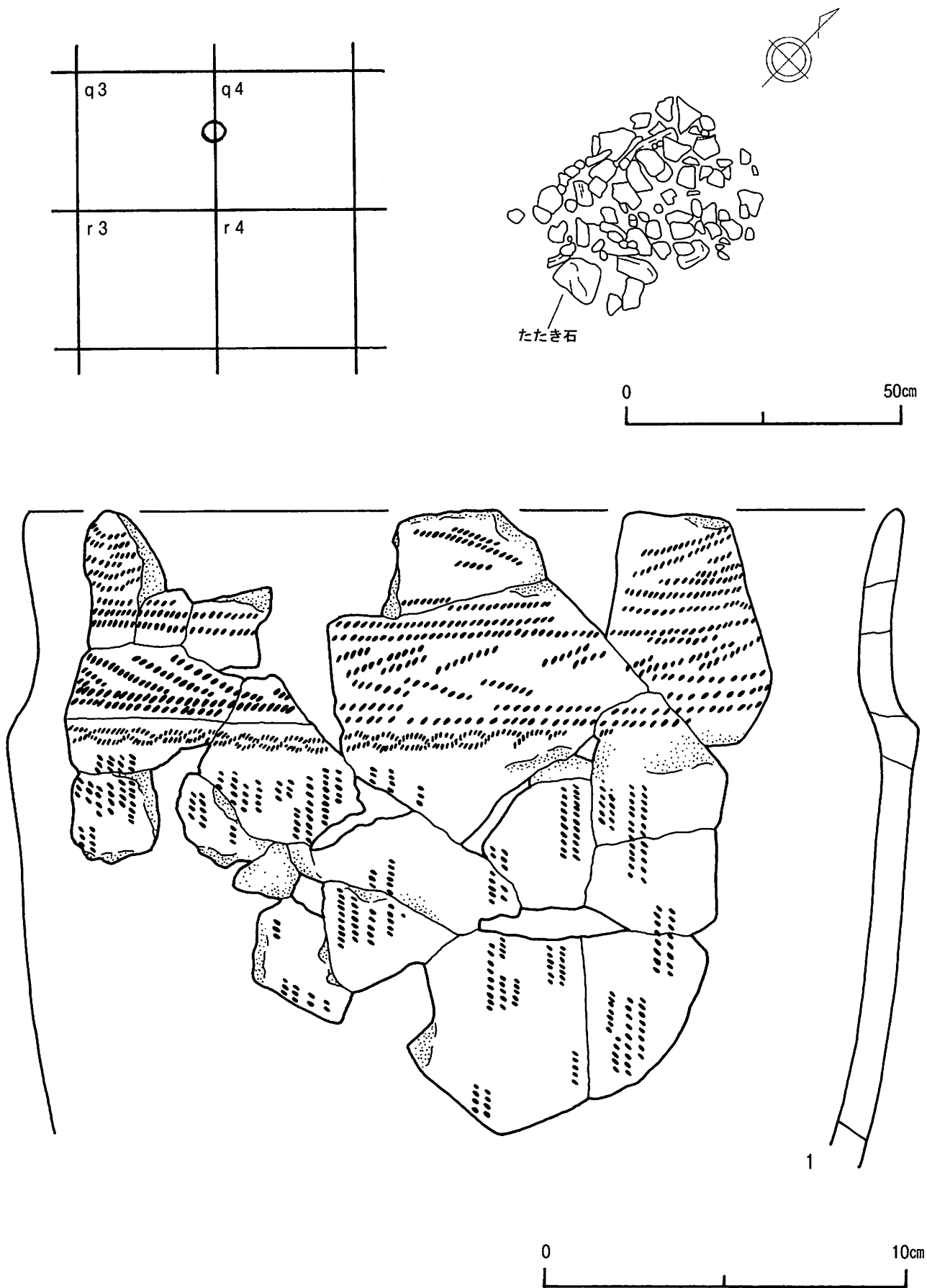


礫集中2



第21図 礫集中1・2 出土遺物

一括土器 1



第22図 一括土器 1 (平面図・接合土器)

FC-3

q32・q33グリッドのⅡ層～Ⅲ層にかけて頁岩製の剥片が集中して出土する範囲が認められた。出土した758点のうち、黒曜石は数点で、ほぼ頁岩製で占められ石器の出土も見られる。また、周囲に土器片の出土もまばらで、スクレイパーや両面調整石器が出土していることから、直近のより高所において石器製作を行った場所が存在した可能性が考えられ、そこで発生した剥片が流れて、一定の範囲に広がって残されたものと思われる。なお、接合を試みたが、何らかの手がかりとなる接合資料は得られなかった。
(花田)

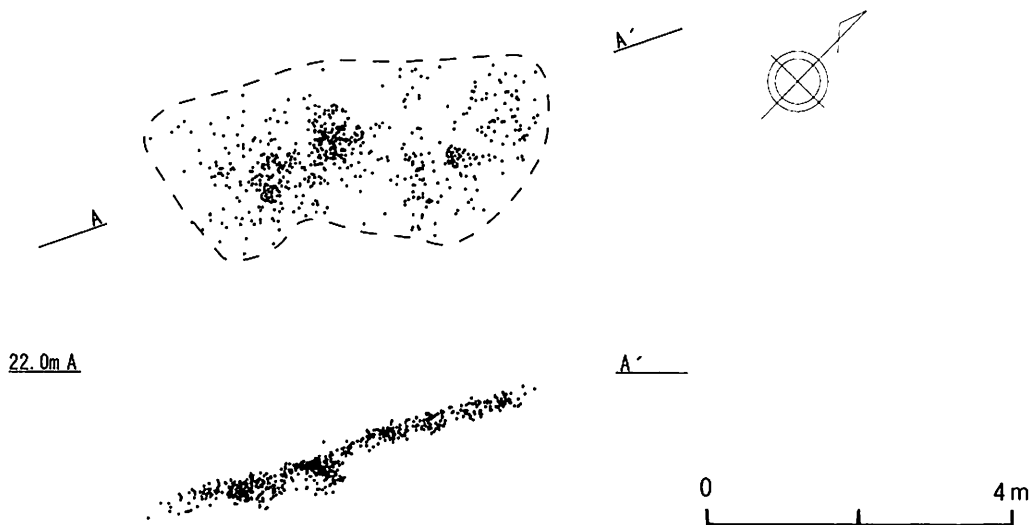
FC-4

q3グリッドのⅡ層～Ⅲ層にかけて剥片が集中して出土する範囲が認められた。出土した1093点のうち黒曜石で球顆の見られる5mm～8cm程の剥片が大多数を占める。8点接合した資料(第24図-8)では原石面を大きく剥がしていたことが分かるものがあり、一方では非常に小さな剥片も多い。また、石鏃片が1点出土していることから、石器製作を行った場所と思われる。

周辺には礫集中1と礫集中2が検出されており、標高がほぼ同じ高さであることや、周辺からその他の礫石器も多く出土することから、何らかの関連が考えられる。なお、出土状態が密集したものではないことから、出土範囲のみを記録し、個別の図面は掲載していない。

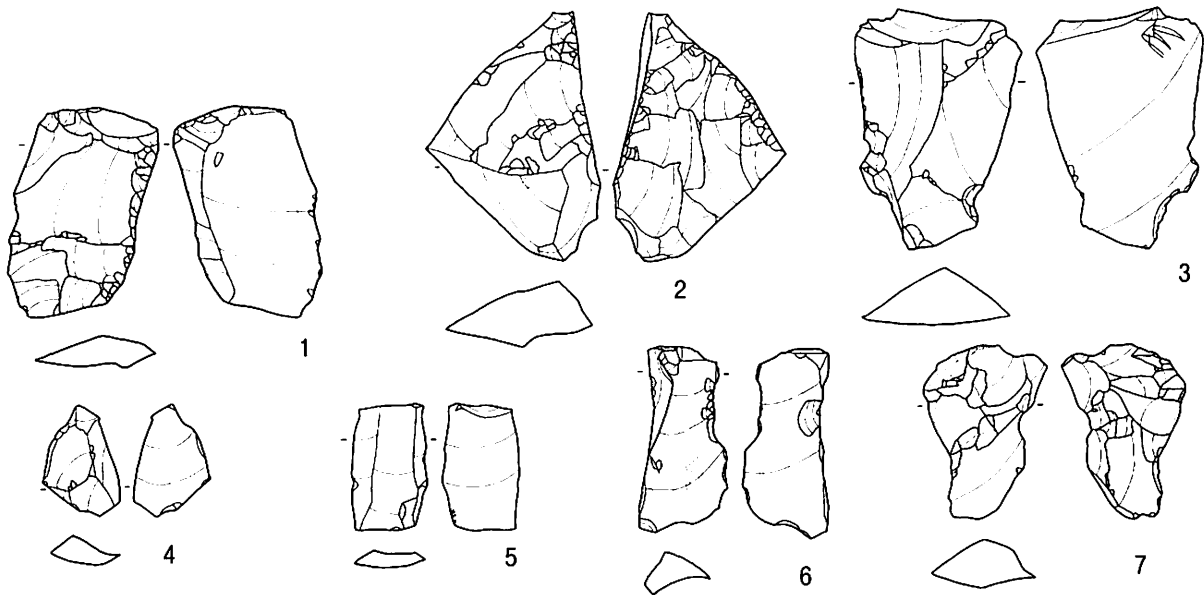
FC-5

p7グリッドを中心にⅡ層～Ⅲ層にかけて剥片が集中して出土する範囲が認められた。1109点出土し黒曜石製の5mm～3cmの小剥片のみである。Ⅲ層の固い土からの出土が続いていたため、旧石器時代の可能性も疑って調査を行った。しかしⅢ層とⅣ層の境目近くまでは碎片状のものが集中して出土していたが、Ⅳ層上面になると見られなくなった。周辺からの流れ込みにより溜まっていた可能性が高い。なお、出土状態が密集したものではないことから、出土範囲のみを記録し、個別の図面は掲載していない。
(岩谷)

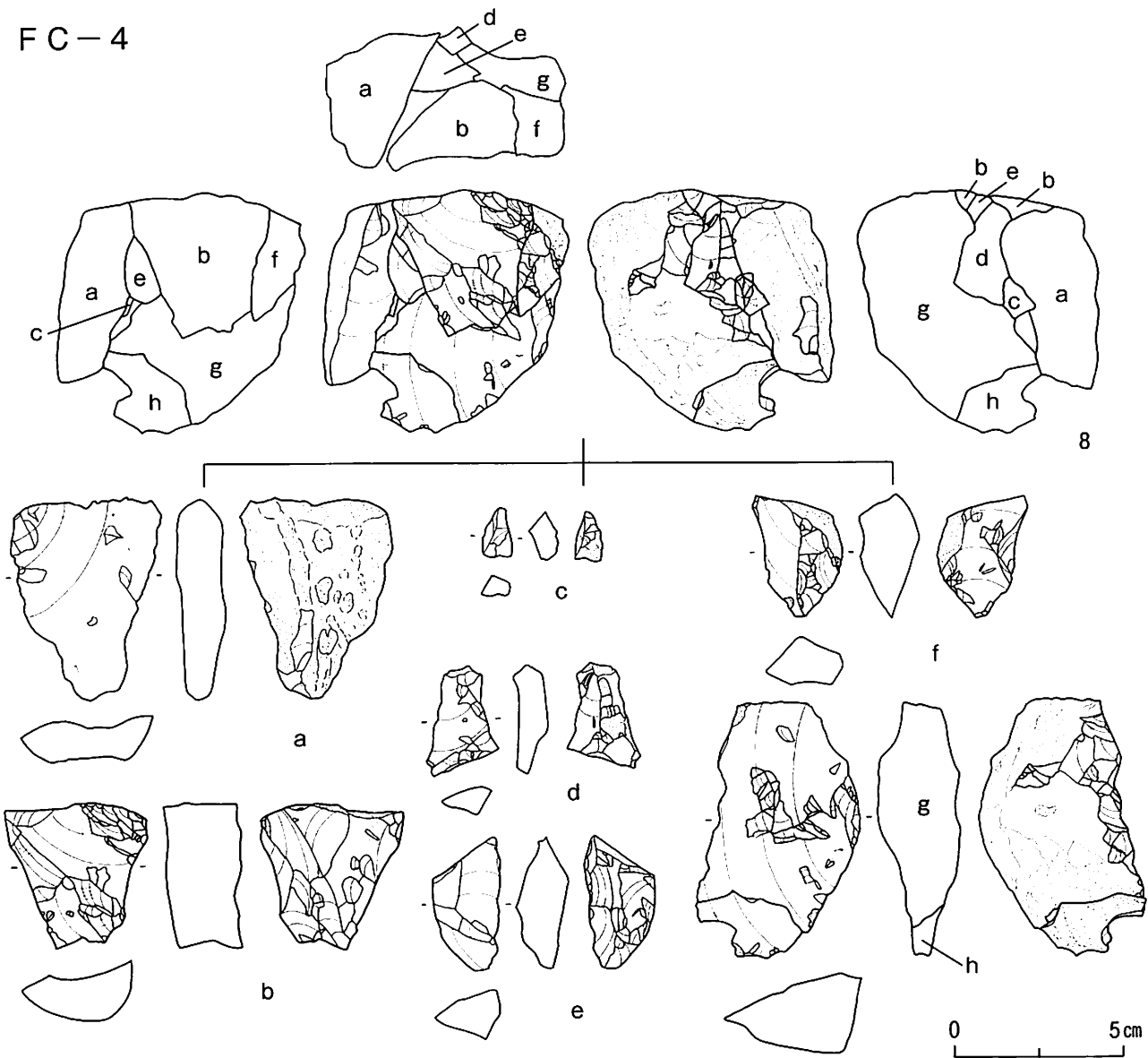


第23図 FC-3 (範囲・分布図)

FC-3



FC-4



第24図 FC-3・4 出土遺物及び接合資料

表Ⅱ-1 遺構掲載遺物一覧表

図版	出土地点	層位	遺物No.	分類	計測値				材質	備考
					長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重さ(g)		
第14図-1	HP-1	覆土	337	石 鏃	1.9	1.3	0.4	0.5	頁岩	
第14図-2	HP-1	覆土	337	石鏃片	(1.6)	1.5	0.4	(0.6)	黒曜石	
第14図-3	HP-1	覆土	385	つまみ付ナイフ	5.5	3.2	0.7	10.4	頁岩	
第14図-4	HP-1	覆土		スクレイパー	3.4	4.4	1.0	10.2	流紋岩	
第14図-5	HP-1	覆土		Rフレイク	(30)	(1.8)	(0.5)	(1.4)	黒曜石	
第16図-1	HP-2	覆土		たたき石	11.5	9.0	5.4	786.0	チャート	
第16図-2	HP-2	覆土	93	たたき石	12.4	9.1	4.1	602.0	チャート	
第16図-3	HP-2	覆土		たたき石	10.6	8.5	4.6	540.0	チャート	
第16図-4	HP-2	SP-2		たたき石	10.9	8.3	5.0	590	チャート	一括土器1出土遺物と接合
第16図-5	HP-2	覆土		たたき石	13.2	8.2	5.1	748.0	チャート	
第16図-6	HP-2	覆土	91	たたき石	16.3	10.7	6.1	952.0	チャート	
第16図-7	HP-2	覆土		たたき石	14.4	10.4	7.3	1360.0	チャート	
第16図-8	HP-2	覆土		たたき石	13.1	7.5	5.9	695.0	チャート	
第16図-9	HP-2	覆土		たたき石	12.3	8.4	5.6	780.0	チャート	
第16図-10	HP-2	覆土	92	すり石	12.2	7.6	6.2	722.0	チャート	
第18図-1	HP-3	覆土	18	Ia						アルトリ式
第18図-2	HP-3	覆土		Ia						アルトリ式
第18図-3	HP-3	覆土		Ia						アルトリ式
第18図-4	HP-3	覆土		Ib						中茶路式
第18図-5	HP-3	覆土	9	Ib						中茶路式9点接合
第18図-6	HP-3	覆土	13	Ib						中茶路式11点接合
第18図-7	HP-3	底面	4	Ib						中茶路式
第18図-8	HP-3	覆土		Ib						中茶路式
第18図-9	HP-3	覆土		Ib						中茶路式
第18図-10	HP-3	覆土	14	Ib						中茶路式
第18図-11	HP-3	覆土		Ib						中茶路式
第18図-12	HP-3	覆土		石 鏃	2.6	1.6	0.6	1.6	黒曜石	
第18図-13	HP-3	覆土	11	Rフレイク	6.0	3.5	0.9	16.2	黒曜石	
第18図-14	HP-3	覆土	7	石 鏃	6.7	6.1	2.1	88	流紋岩	
第21図-1	磔集中1	II	7	たたき石	15.3	7.1	4.6	607	チャート	
第21図-2	磔集中1	II	20	たたき石	14.2	8.6	4.3	730	チャート	
第21図-3	磔集中1	II	21	たたき石	14.1	8.8	4.1	725	チャート	
—	磔集中1	II	1	たたき石	17.4	8.9	5.5	1200.0	チャート	
—	磔集中1	II	2	たたき石	12.2	6.6	4.6	520.0	チャート	
—	磔集中1	II	3	たたき石	12.5	7.4	6.3	695.0	チャート	
—	磔集中1	II	4	たたき石	13.4	8.2	3.7	575.0	チャート	
—	磔集中1	II	5	たたき石	11.0	8.3	4.3	470.0	チャート	
—	磔集中1	II	6	たたき石	13.1	7.4	5.7	740.0	チャート	
—	磔集中1	II	8	たたき石	13.2	9.1	4.6	635.0	チャート	
—	磔集中1	II	9	たたき石	11.2	7.2	4.6	560.0	チャート	
—	磔集中1	II	10	たたき石	11.8	7.7	4.7	438.0	チャート	
—	磔集中1	II	11	たたき石	10.4	7.4	4.8	468.0	チャート	
—	磔集中1	II	12	たたき石	12.7	8.9	4.7	653.0	チャート	
—	磔集中1	II	13	たたき石	11.7	6.6	5.7	580.0	チャート	
—	磔集中1	II	14	たたき石	13.2	8.4	6.0	648.0	チャート	
—	磔集中1	II	15	たたき石	11.4	6.6	6.0	593.0	チャート	
—	磔集中1	II	16	たたき石	12.5	6.5	5.2	457.0	チャート	
—	磔集中1	II	17	たたき石	10.4	7.0	4.2	370.0	チャート	
—	磔集中1	II	18	たたき石	11.4	8.8	6.7	761.0	チャート	
—	磔集中1	II	19	たたき石	13.5	8.4	4.1	675.0	チャート	
—	磔集中1	II	22	たたき石	11.5	8.3	4.9	590.0	チャート	
—	磔集中1	II		磔	3.3	2.4	0.8	5.3	チャート	
第21図-1	磔集中2	II	13	たたき石	11.3	7.5	3.4	452	チャート	
第21図-2	磔集中2	II	7	たたき石	11.0	8.3	5.1	572	チャート	
第21図-3	磔集中2	II	14	たたき石	12.2	8.1	5.1	648	チャート	
第21図-4	磔集中2	II	23	石皿	14.0	28.0	5.6	3165	泥岩	
—	磔集中2	II	1	たたき石	20.0	8.8	7.2	1650.0	チャート	
—	磔集中2	II	2	たたき石	(21.1)	(10.9)	(7.9)	(2133.0)	安山岩	
—	磔集中2	II	3	磔	10.6	8.3	3.7	490.0	チャート	
—	磔集中2	II	6	磔	15.8	4.6	3.6	380.0	安山岩	
—	磔集中2	II	8	たたき石	14.2	9.0	5.2	925.0	チャート	
—	磔集中2	II	9	たたき石	13.0	9.4	4.4	710.0	チャート	
—	磔集中2	II	10	たたき石	10.6	8.3	3.5	500.0	チャート	
—	磔集中2	II	11	たたき石	11.5	7.6	5.5	580.0	チャート	
—	磔集中2	II	12	たたき石	12.0	7.9	4.4	550.0	安山岩	
—	磔集中2	II	15	磔	(5.0)	(4.0)	(2.1)	(60.5)	安山岩	
—	磔集中2	II	16	たたき石	11.9	7.2	5.8	555.0	チャート	
—	磔集中2	II	17	磔	12.8	5.4	2.9	315.0	安山岩	
—	磔集中2	II	24	磔	14.6	11.0	8.9	1890.0	安山岩	
第22図-1	一括土器1	II		IIb						円筒土器下群d式20点接合
第24図-1	FC-3	II		スクレイパー	5.6	4.0	0.9	15.2	頁岩	
第24図-2	FC-3	II		両面調整石器	6.6	4.7	1.8	38.2	頁岩	
第24図-3	FC-3	II		剥 片	6.4	4.5	1.6	34.6	頁岩	
第24図-4	FC-3	II		剥 片	3.0	2.0	0.8	3.3	頁岩	
第24図-5	FC-3	II		剥 片	3.4	2.0	0.5	2.6	頁岩	
第24図-6	FC-3	II		剥 片	5.0	2.3	1.2	7.1	頁岩	
第24図-7	FC-3	II		剥 片	4.7	3.3	1.3	11.0	頁岩	
第24図-8	FC-4	II		剥 片	7.2	7.4	4.3	133.3	黒曜石	7点.q4dII剥片1点と接合

4. 出土遺物

以下に各遺物の分類について述べるが、個々の遺物の出土地点・層位や計測値については一覧表を参照して頂きたい。なお、土器については接合を試みたところ、ある程度復原できた個体はあったが、口縁部から底部まで復原できた個体は無かった。また摩耗の激しい破片が多く、良好な拓影図を掲載できたものは少ない。なお続縄文時代中葉のものはいずれも小破片のため掲載していない。各遺物に於いて分布の濃淡が概ね地形の等高線に沿っていることから、より高い地点から流れ込んできたものがたまったものと考えられる。

土器

縄文時代早期（Ⅰ群）、前期（Ⅱ群）、中期（Ⅲ群）、晩期（Ⅴ群）、続縄文時代（Ⅵ群）に属するものがある。出土総数は10,775点である。主体をなすのは早期後半（Ⅰ群b類）の中茶路式で、その他早期前半（Ⅰ群a類）のアルトリ式などを含めⅠ群に属するものは全体の約68%を占める。他には前期後半（Ⅱ群b類）円筒土器下層式や中期（Ⅲ群）に属するものが多く、前期前半（Ⅱ群a類）静内中野式も少量ある。晩期後葉（Ⅴ群c類）、続縄文中葉（Ⅵ群b類）に属するものはわずかである。

Ⅰ群a類（第25～26図－1～51）

1～3は復原個体である。1は口縁部から底部付近までの約4分の1が復原できた個体で、口径は推定で約20cm、器高は現状で約25cmである。口唇部断面形は角形、口縁部は平縁で小突起が2ヶ所ある。キザミがある隆帯をはさみ上側に2条、下側に3条沈線が横走り、胴部には条痕文が施される。2は口径が推定で約20cm、器高は現状で約10cm、口縁部のみ2/3以上復原できた個体である。口唇部断面形は角形、口縁部は平縁で小突起は6ヶ所あると思われる。キザミのある隆帯があり、胴部には条痕文が施される。補修孔が2ヶ所ある。3は口径が推定で約16cm、器高が現状で約14cmで、口唇部断面形は丸形、口縁部は平縁で小突起は1ヶ所ある。隆帯はなく、胴部には条痕文が施される。4～23は口縁部の破片である。4～10は隆帯を持つもので、いずれもキザミが施され、口唇部断面形は丸形であるが、7・10のみ角形である。8は隆帯が直角に曲がる。5は2対1組と思われる小突起それぞれから垂下する貼付文にキザミがあり、その間は無文であるが、左側には貝殻腹縁圧痕文が3条施されている。6・7・10・23は沈線文が施されている。9には補修孔がある。11～23は隆帯のないものである。11～20は口唇直下に貝殻腹縁圧痕文のあるもの。17・18には小突起がある。これら全てには器表面に条痕文が施され、21・22は内面にも条痕文が施されている。

24～44は胴部の破片である。40を除く全てのものには器表面に条痕文が施され、25～28には縦・横・斜めに沈線文も施されている。40は浅く細い沈線文のみが横走している。器壁も薄く、他のⅠ群a類のものとは少し違った印象を受けるが、とりあえずここに分類しておく。45～51は底部の破片である。51はやや上げ底で他は全て平底である。45はほぼ筒型の形状を呈し、他はやや開いて真っ直ぐ立ち上がる。Ⅰ群a類土器は全て胎土が密であり、作りが堅緻なものである。40を除く1～45は全てアルトリ式である。

Ⅰ群b類（第27～30図－52～196）

52は復原個体である。口径約28cm、器高約12cmである。口唇部断面形は丸形、口縁部は緩い波状を呈す。器面には微隆起線が8条横走り、その間に短縄文や斜縄文が施されている。53～74は口縁部の破片である。72と74を除く全てには微隆起線が施されている。口唇部断面形は61・67がやや尖り気味の他は全て丸形である。55～64・66・73には短縄文、65・67・74には斜縄文、53・54・

72には絡条体圧痕文、68～71には交互に向きを変えた羽状縄文がそれぞれ施されている。53・57・65・73は微隆起線が縦方向にも施されている。

75～152は胴部の破片である。134・136～143・146～152を除く全てのものには微隆起線が施されている。75～86・88～113・144・145は短縄文が施されているもので、75・76は短縄文と斜縄文の組み合わせ、77・79～82・134は短縄文と絡条体圧痕文の組み合わせ、78は短縄文と羽状縄文の組み合わせの文様が施されている。114～121・136は斜縄文が施されていて136は細めと極細2種類の原体を使用している。87・124・125・128・130・132は結束第1種羽状縄文、123・126・129・131・133は交互に向きを変えた羽状縄文が施されている。122・137～142・146・147は絡条体圧痕文、139・143・148～152は撚糸文、75・83は綾絡文が施されている。75は微隆起線間に短縄文と斜縄文が交互に段を持つものであるが、綾絡文は斜縄文の段のみに施されている。151は縄端圧痕文が施されている。90・93・108・135は縦方向にも、144・145は同心円状にも微隆起線が施されている。146は丸底の底部付近と思われる。

153～196は底部の破片である。153～176は微隆起線があるもので、153～155は短縄文と斜縄文の組み合わせ、156～161は短縄文、162～167・169～173は斜縄文、168は交互に向きを変えた羽状縄文が施されている。177～192は微隆起線がないもので、178・179は短縄文、177・180・181・184～186は斜縄文、182は絡条体圧痕文が施されている。183・187・188・192は摩耗が激しく文様は不明である。189・190は内面に放射状の縄圧痕が施されている。191・193～196はミニチュア土器で195はほぼ完形を成すもの、191は口縁部から底部まで現存するものである。52～138・140～142・144・145・147・153～196は中茶路式、139・143・146・148～152は東釧路IV式である。

II 群 a 類 (第31図—197～208)

197は口縁部の破片である。口唇部断面形は角形で、指で平らに整形されたと思われる。口縁部は平縁である。198～208は胴部の破片である。199は節が小さく細いうえ器壁も薄い。197～208はいずれも繊維を含み0段多条の斜縄文で、207・208がR L斜縄文、他は全てL R斜縄文である。197～208は静内中野式である。

II 群 b 類 (第31～33 図—209～262)

209～223は口縁部の破片である。209は口唇部断面形が丸形で、口縁部は剥離欠損しているため形状は不明である。口縁部に指頭圧痕のある貼付帯が巡り、胴部にはL R斜縄文が施されている。217の口唇部断面形は、指で平らに整形されたと思われ角形で、222はやや尖り気味であるが、他は全て丸形である。口縁部は210が緩い波状を呈し、他は平縁である。210・211は口縁部が大きく外傾し、他のものも全て外傾している。210～215・220・223は撚糸文が横走及び斜走し、菱形の文様を構成するものがある。216・218・221・222は撚糸文が横走し、217は撚糸文が斜走している。219も撚糸文と思われる。

224～258は胴部の破片である。224～226はいわゆるスダレ状文と呼ばれるもので、結束第1種羽状縄文とR撚糸文で文様が構成されている。228は縄線文と沈線文が横走し、247は斜縄文の向きを変え羽状縄文にしている。229は撚糸文と多軸絡条体を施している。227・230～233・239・240・242～246・248～251・253は撚糸文、234～238・241・252は多軸絡条体が施されている。

254～258は押型文で、菱形文を鋸歯状文がはさむような文様構成になっている。胎土は密で、作りが堅緻なもので、登町4遺跡では押型文の資料は初の出土である。259～262は底部の破片である。いずれも平底で張り出さず、多軸絡条体が施されている。209は円筒土器下層b式、210～253・259～262は円筒土器下層d式、254～258は押型文土器である。

Ⅲ群（第33～34図—263～287）

263～280は胴部の破片である。263は十字の貼付文にキザミがあり、器面にはR L斜縄文が施されている。265・267・271～273は結束第2種羽状縄文、268～270・274は結束第1種羽状縄文、266は結束第2種斜縄文が施され、内面には結束第2種羽状縄文も施されている。264は結束第2種であるが羽状縄文か斜縄文かは不明である。275・276はL R斜縄文、277～279はR L斜縄文が施され、278の内面にはL R斜縄文も施されている。280は複節R L R斜縄文が施されている。281～287は底部の破片である。281・285・287はやや上げ底で少し張り出す。285は結束第2種の縄文が施されているが、羽状縄文か斜縄文かは不明である。282・283・286は平底で張り出さない。284は上げ底で大きく開いて立ち上がり、R L斜縄文が施されている。

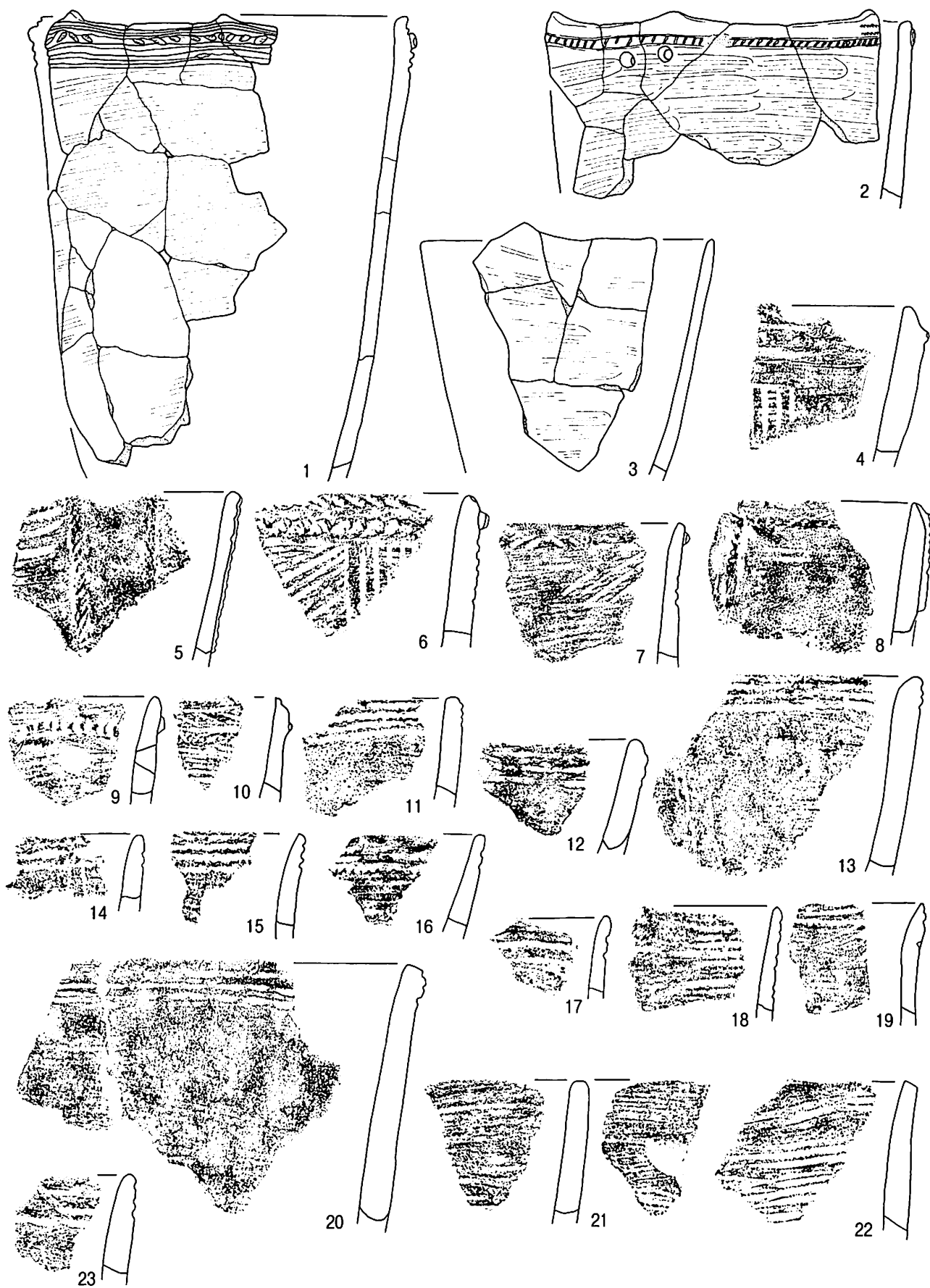
Ⅲ群b類（第34図—288～298）

288～297は口縁部の破片である。口唇部断面形は288・292・294・296が角形、他は全て丸形である。口縁部は291・292が平縁、289・293～295が緩い波状で、他は全て山形突起を持つ。289の口唇部には1ヶ所真上からの刺突がある。293の口唇部には縄の圧痕によるキザミがある。297はかなり大きな山形突起で頂部が丸い。296・297を除く全てのものには刺突文が巡る。288～293は口唇部直下にヘラ状工具による押引文を横遺している。288はV字状の貼付文を持ち、その上にヘラ状工具による押引文を施している。結束第2種羽状縄文で、内面には縦方向の結束第2種羽状縄文が施されている。289は結束第1種羽状縄文で、内面にはR L斜縄文、290は内外面に結束第1種羽状縄文が施されている。292は器面の摩耗が激しく、内面のみL R斜縄文が確認できる。294は内外面共にR L斜縄文、296はR L斜縄文が施されている。291・293・295・297は摩耗が激しく文様は不明である。298は底部の破片である。やや上げ底でわずかに張り出す。288～298は北筒式である。

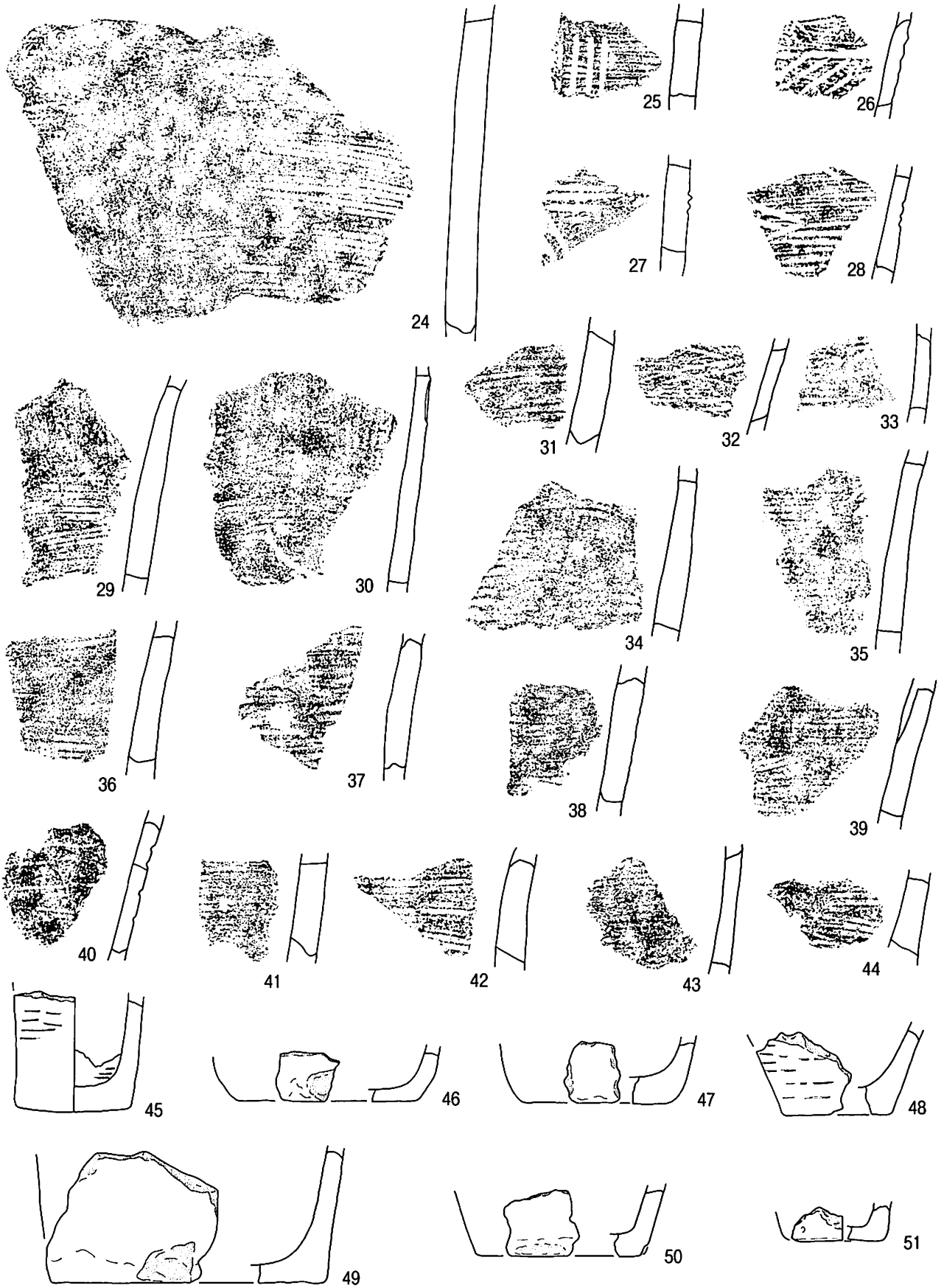
V群c類（第34図—299～307）

299～301は口縁部の破片である。口唇部断面形は299が丸形、300・301が角形で、口縁部は平縁である。いずれも平行沈線文が巡る。302～306は胴部の破片である。305を除きいずれも平行沈線文が巡る。302・304には縦方向にも沈線文がある。305は指頭による横引きで浅い窪みを横遺させていると思われ、その後に不整な細い沈線が2本引かれている。307は底部の破片である。平底で少し張り出してから開いて立ち上がる。R L斜縄文が施されている。299～307はタンネトウL式相当である。

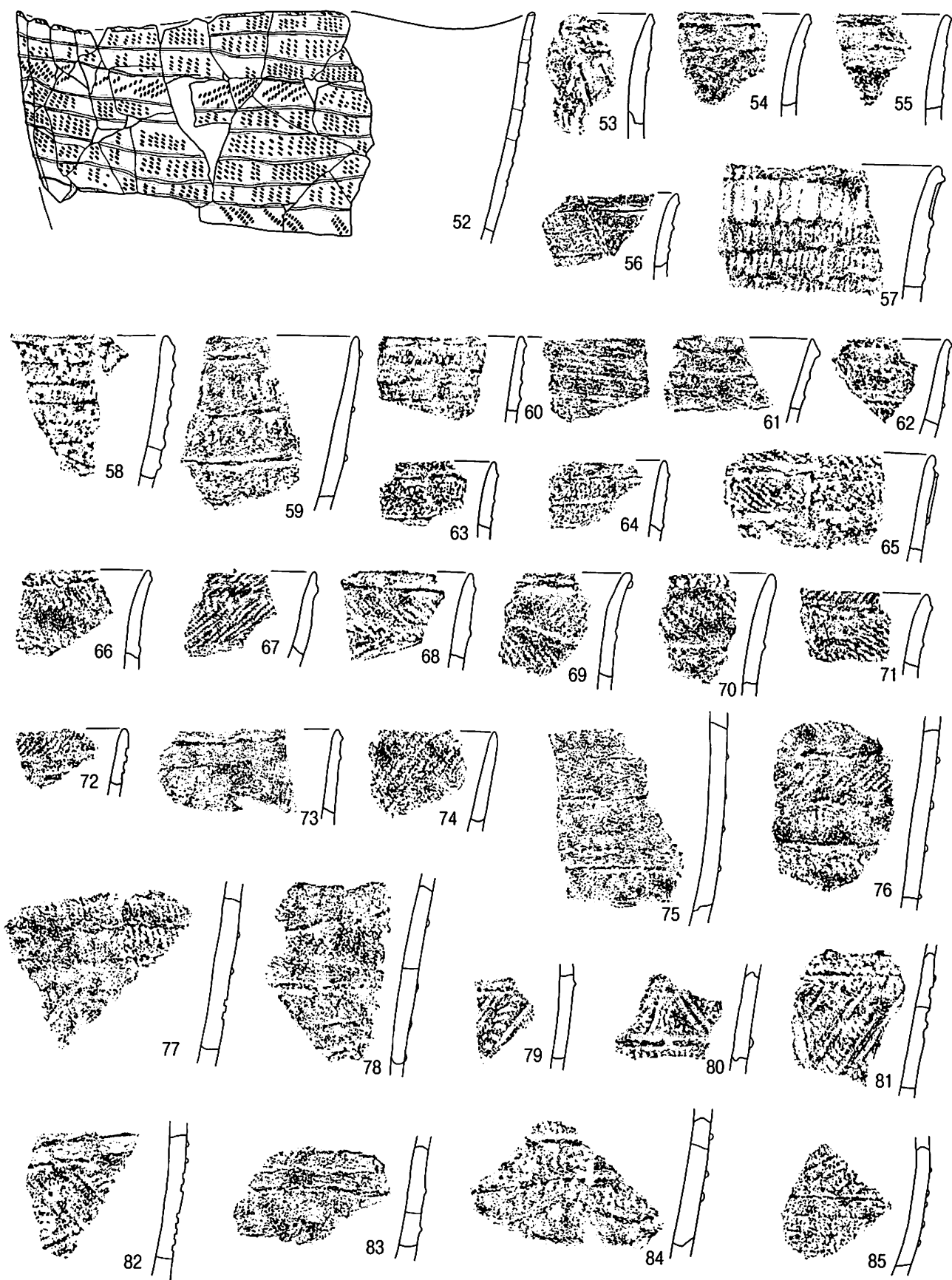
(花田)



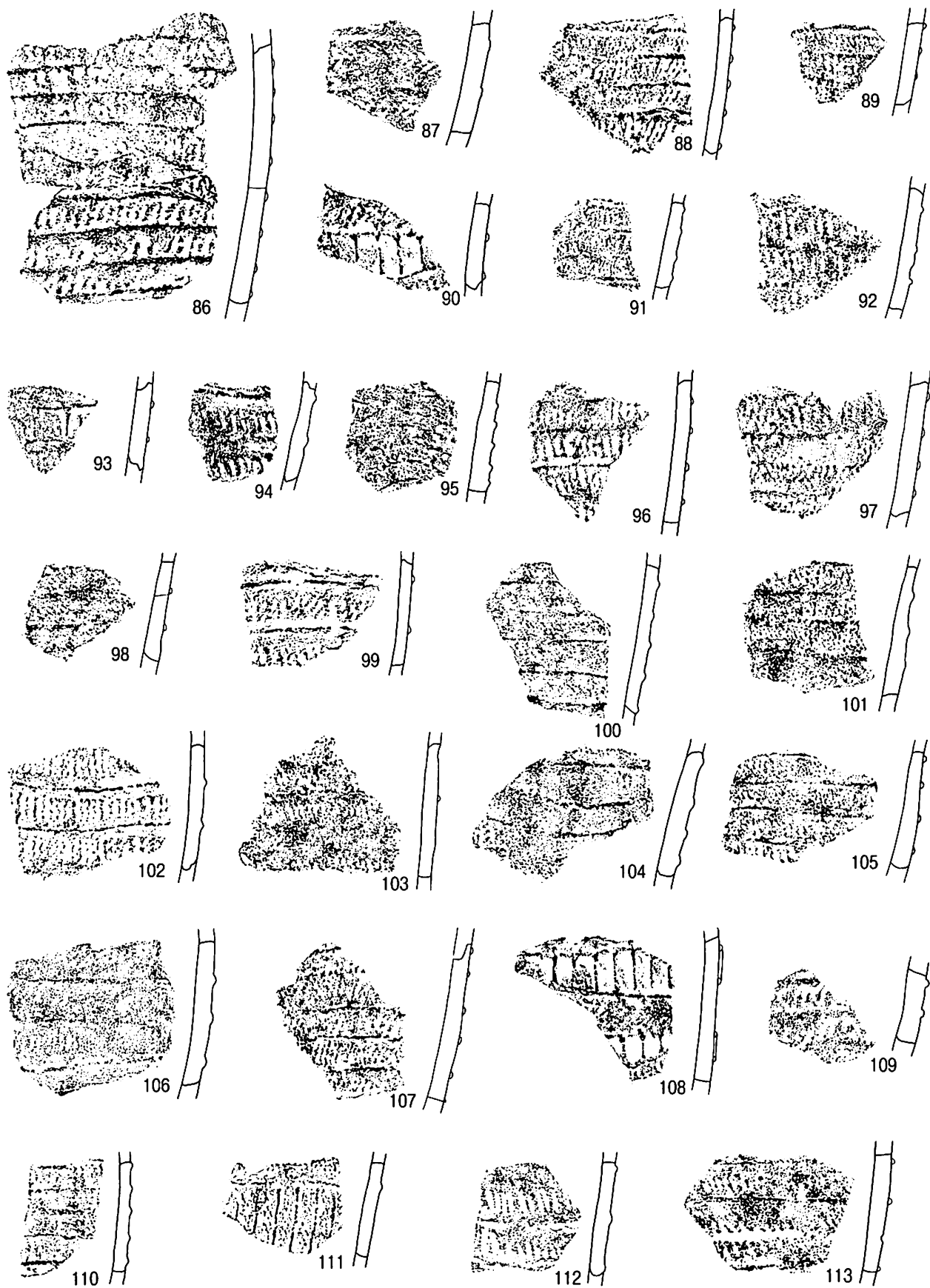
第25图 土器 (1)



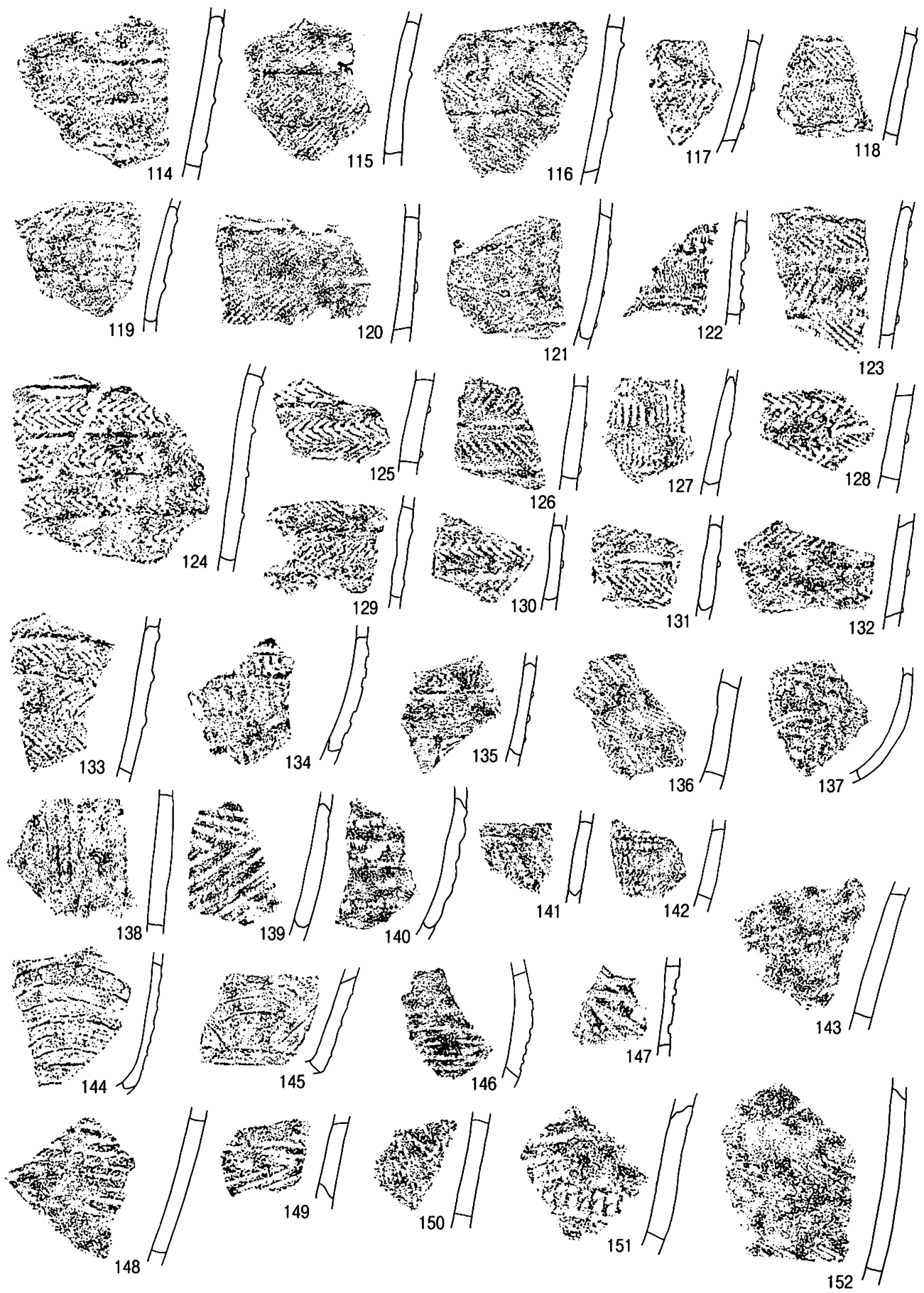
第26图 土器 (2)



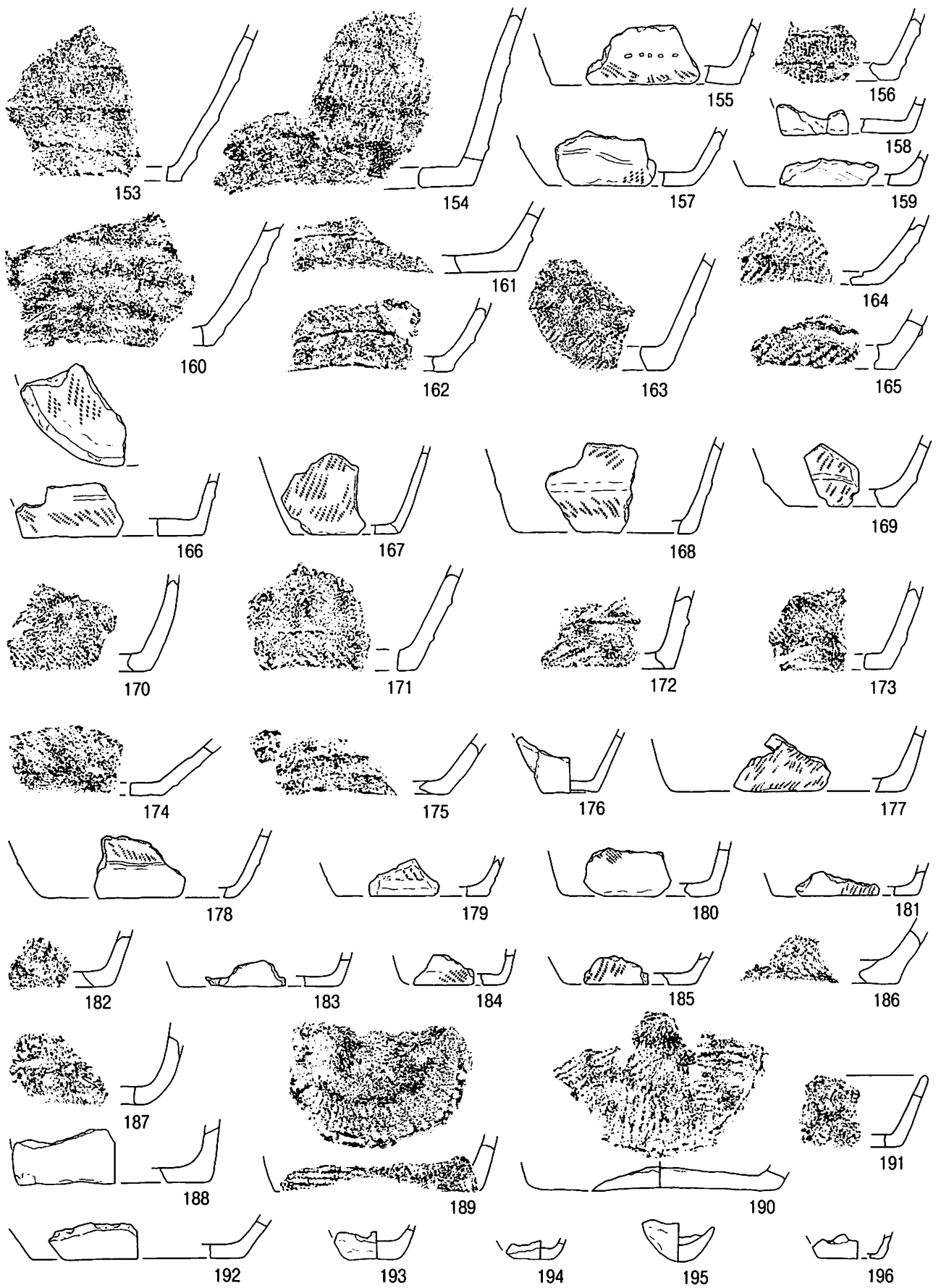
第27图 土器 (3)



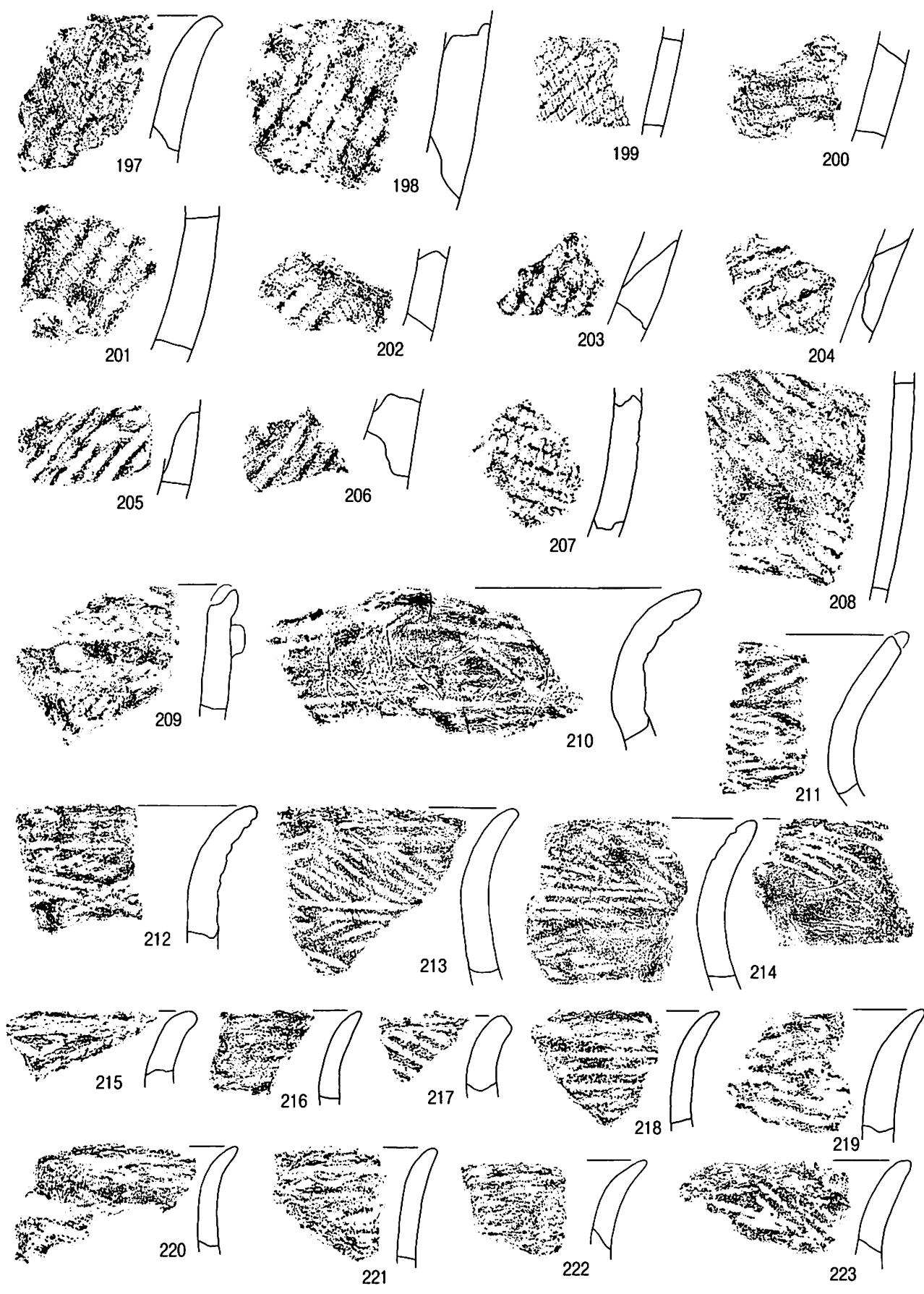
第28图 土器(4)



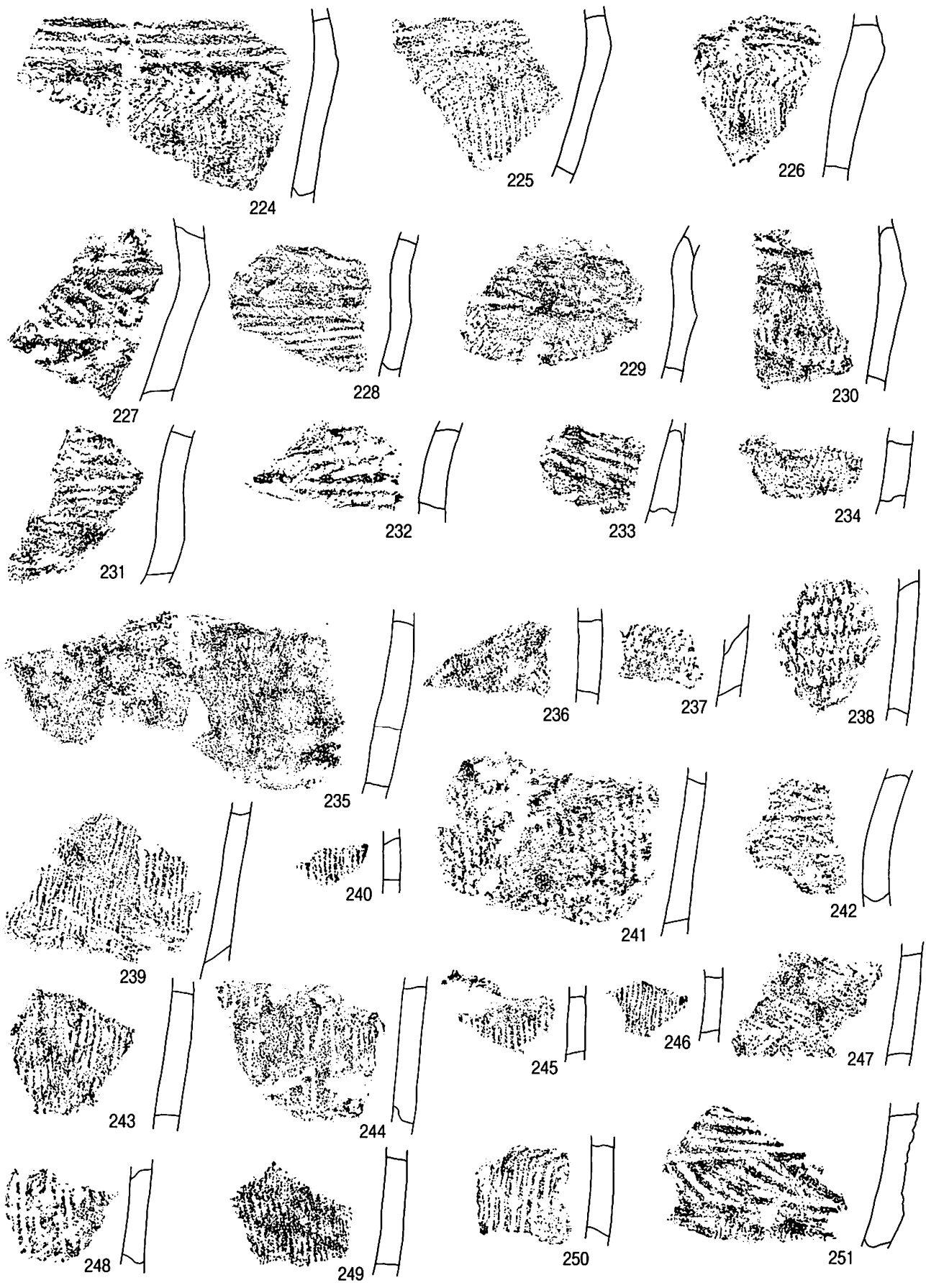
第29圖 土器 (5)



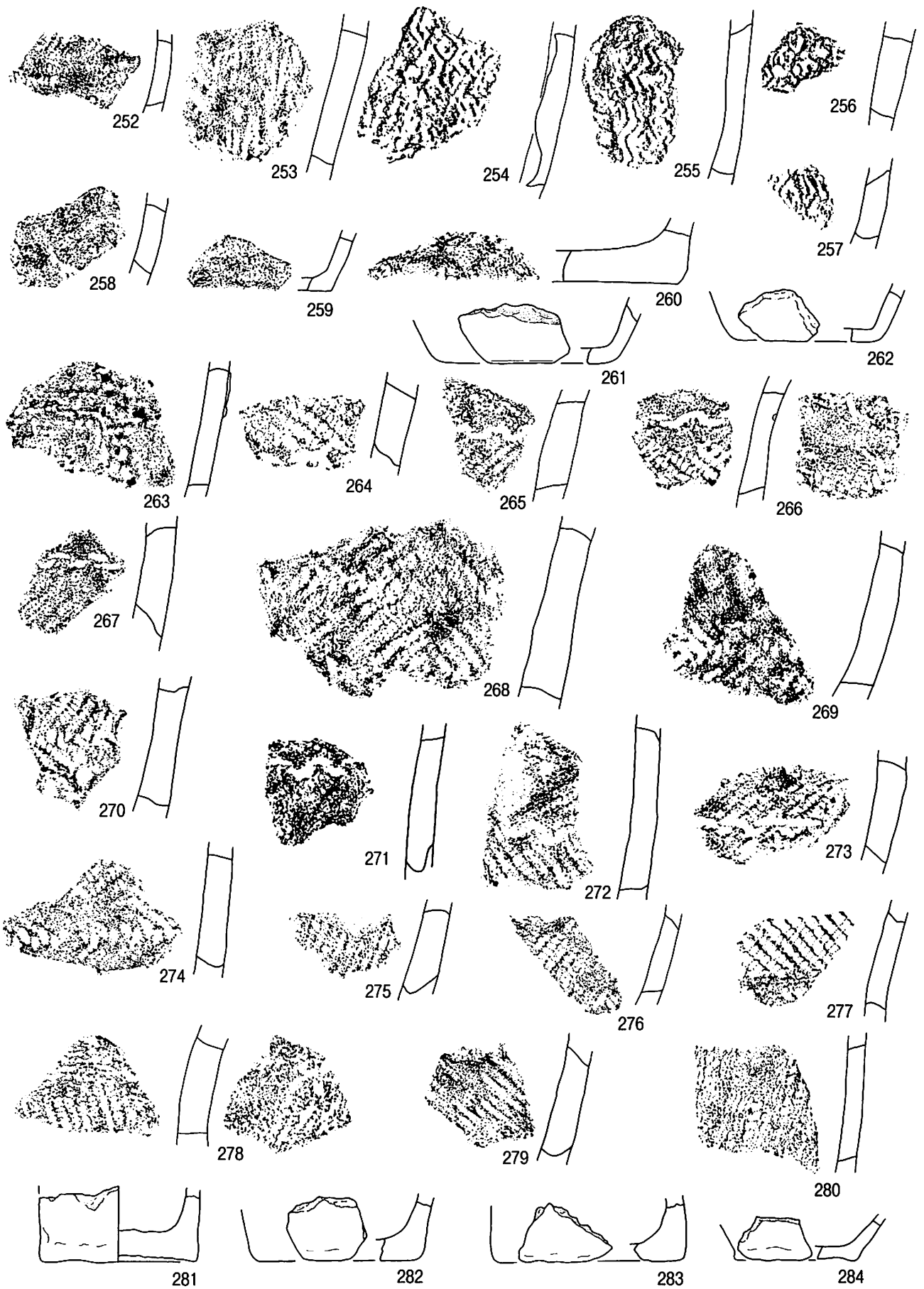
第30图 土器(6)



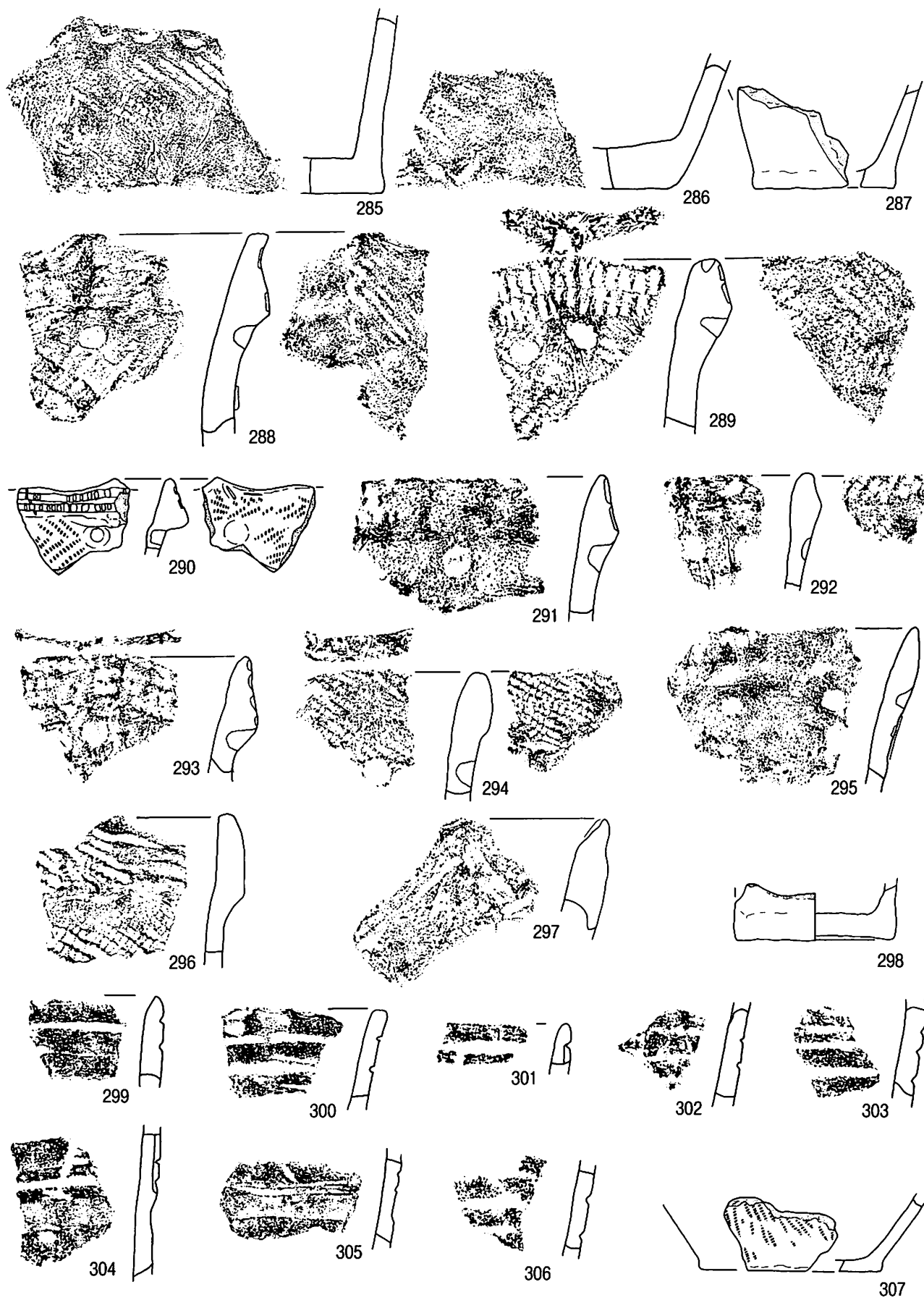
第31图 土器 (7)



第32図 土器 (8)



第33图 土器 (9)



第34图 土器 (10)

表Ⅱ-2 掲載土器一覧表(1)

図版No.	出土地点	層位	遺物No.	分類	部位	備考
第25図-1	t37a	Ⅱ	1 他	I a		復原土器、アルトリ式、隆帯、条痕文、土器接合1
第25図-2	t38a	Ⅱ	271 他	I a		復原土器、アルトリ式、隆帯、条痕文、土器接合2
第25図-3	t38a	Ⅱ	242 他	I a		復原土器、アルトリ式、隆帯、条痕文、土器接合3
第25図-4	t38d	Ⅱ	254	I a	口縁部	アルトリ式、隆帯、腹縁圧痕文、条痕文
第25図-5	r35a	Ⅱ	54	I a	口縁部	アルトリ式、隆帯、腹縁圧痕文、条痕文
第25図-6	s35d	Ⅱ	482	I a	口縁部	アルトリ式、隆帯、条痕文、沈線文
第25図-7	p4c	Ⅱ	26	I a	口縁部	アルトリ式、隆帯、条痕文、沈線文
第25図-8	s37c	Ⅱ	126	I a	口縁部	アルトリ式、隆帯、条痕文
第25図-9	r34d	Ⅱ	162	I a	口縁部	アルトリ式、隆帯、条痕文
第25図-10	r33c	Ⅱ	232	I a	口縁部	アルトリ式、隆帯、条痕文、沈線文
第25図-11	q4a	Ⅱ	384	I a	口縁部	アルトリ式、腹縁圧痕文、条痕文
第25図-12	r34c	Ⅱ	218	I a	口縁部	アルトリ式、腹縁圧痕文、条痕文
第25図-13	q4a	Ⅱ	382	I a	口縁部	アルトリ式、腹縁圧痕文、条痕文
第25図-14	q4a	Ⅱ	378	I a	口縁部	アルトリ式、腹縁圧痕文、条痕文
第25図-15	q4b	Ⅱ	211	I a	口縁部	アルトリ式、腹縁圧痕文、条痕文
第25図-16	q34c	Ⅱ	139	I a	口縁部	アルトリ式、腹縁圧痕文、条痕文
第25図-17	n37a	Ⅱ	36	I a	口縁部	アルトリ式、腹縁圧痕文、条痕文
第25図-18	s34d	Ⅱ	297	I a	口縁部	アルトリ式、腹縁圧痕文、条痕文
第25図-19	t37a	Ⅱ	189	I a	口縁部	アルトリ式、腹縁圧痕文、条痕文
第25図-20	q4d	Ⅱ	80・81	I a	口縁部	アルトリ式、腹縁圧痕文、条痕文
第25図-21	t37c	Ⅱ	86	I a	口縁部	アルトリ式、条痕文
第25図-22	t35d	Ⅱ	17	I a	口縁部	アルトリ式、条痕文
第25図-23	q4a	Ⅱ	204	I a	口縁部	アルトリ式、条痕文、沈線文
第26図-24	s35a	Ⅱ	225	I a	胴部	アルトリ式、条痕文
第26図-25	n34b	Ⅱ	37	I a	胴部	アルトリ式、条痕文、沈線文
第26図-26	s35d	Ⅱ	569	I a	胴部	アルトリ式、条痕文、沈線文
第26図-27	s35d	Ⅱ	487	I a	胴部	アルトリ式、条痕文、沈線文
第26図-28	n37c	Ⅱ	39	I a	胴部	アルトリ式、条痕文、沈線文
第26図-29	p4a	Ⅱ	29	I a	胴部	アルトリ式、条痕文
第26図-30	o37c	Ⅱ	11	I a	胴部	アルトリ式、条痕文
第26図-31	q4d	Ⅱ	114	I a	胴部	アルトリ式、条痕文
第26図-32	t37c	Ⅱ	161	I a	胴部	アルトリ式、条痕文
第26図-33	s34d	Ⅱ	579	I a	胴部	アルトリ式、条痕文
第26図-34	q4b	Ⅱ	259	I a	胴部	アルトリ式、条痕文
第26図-35	t39b	Ⅱ	318	I a	胴部	アルトリ式、条痕文
第26図-36	r6d	Ⅱ	5	I a	胴部	アルトリ式、条痕文
第26図-37	r33c	Ⅱ	153	I a	胴部	アルトリ式、条痕文
第26図-38	s37b	Ⅱ	187	I a	胴部	アルトリ式、条痕文
第26図-39	r35c	Ⅱ	443	I a	胴部	アルトリ式、条痕文
第26図-40	n37c	Ⅲ	98	I a	胴部	沈線文
第26図-41	s37b	Ⅱ	147	I a	胴部	アルトリ式、条痕文
第26図-42	s35a	Ⅱ	149	I a	胴部	アルトリ式、条痕文
第26図-43	s35d	Ⅱ	157	I a	胴部	アルトリ式、条痕文
第26図-44	r33a	Ⅱ	150	I a	胴部	アルトリ式、条痕文
第26図-45	t39a	Ⅱ	343	I a	底部	アルトリ式、平底
第26図-46	s35c	Ⅱ	1079	I a	底部	アルトリ式、平底
第26図-47	u37a	Ⅱ	28	I a	底部	アルトリ式、平底
第26図-48	t1b	Ⅱ	135	I a	底部	アルトリ式、平底
第26図-49	s35a	Ⅱ	234	I a	底部	アルトリ式、平底
第26図-50	p6d	Ⅱ	22	I a	底部	アルトリ式、平底
第26図-51	s36a	Ⅱ	141	I a	底部	アルトリ式、やや上げ底
第27図-52	s34d	Ⅱ	1 他	I b		復原土器、中茶路式、微隆起線、L R 短縄文、斜縄文、土器接合4
第27図-53	s35a	Ⅱ	241	I b	口縁部	中茶路式、微隆起線、絡条体圧痕文
第27図-54	s35a	Ⅱ	543	I b	口縁部	中茶路式、微隆起線、絡条体圧痕文
第27図-55	r35d	Ⅱ	464	I b	口縁部	中茶路式、微隆起線、L R 短縄文
第27図-56	n37c	Ⅱ	15	I b	口縁部	中茶路式、微隆起線、L R 短縄文
第27図-57	r33c	Ⅱ	249	I b	口縁部	中茶路式、微隆起線、L R 短縄文
第27図-58	r33d	Ⅱ	214	I b	口縁部	中茶路式、微隆起線、L R 短縄文
第27図-59	r33c	Ⅱ	285	I b	口縁部	中茶路式、微隆起線、L R 短縄文
第27図-60	r36b	Ⅱ	126	I b	口縁部	中茶路式、微隆起線、L R 短縄文
第27図-61	r35b	Ⅱ	224	I b	口縁部	中茶路式、微隆起線、L R 短縄文
第27図-62	s36b	Ⅱ	375	I b	口縁部	中茶路式、微隆起線、L R 短縄文
第27図-63	n37c	Ⅱ	13	I b	口縁部	中茶路式、微隆起線、R L 短縄文
第27図-64	r37c	Ⅲ	88	I b	口縁部	中茶路式、微隆起線、L R 短縄文
第27図-65	s35d	Ⅱ	330	I b	口縁部	中茶路式、微隆起線、R L 斜縄文

表 II - 2 掲載土器一覽表 (2)

図版 No	出土地点	層位	遺物No	分類	部位	備考
第27図-66	r34b	II	510	I b	口縁部	中茶路式、微隆起線、LR短縄文
第27図-67	ula	II	233	I b	口縁部	中茶路式、微隆起線、LR斜縄文
第27図-68	n37d	II	19	I b	口縁部	中茶路式、微隆起線、LR・RL羽状縄文
第27図-69	s34a	II	116	I b	口縁部	中茶路式、微隆起線、LR・RL羽状縄文
第27図-70	r35c	II	244	I b	口縁部	中茶路式、微隆起線、LR・RL羽状縄文
第27図-71	s36b	II	279	I b	口縁部	中茶路式、微隆起線、LR・RL羽状縄文
第27図-72	s35d	II	71	I b	口縁部	中茶路式、絡条体圧痕文
第27図-73	r36a	II	155	I b	口縁部	中茶路式、微隆起線、LR短縄文
第27図-74	s34d	II	855	I b	口縁部	中茶路式、LR斜縄文
第27図-75	r34c	II	37	I b	胴部	中茶路式、微隆起線、RL短縄文、LR斜縄文、綾絡文
第27図-76	q34b	II	50	I b	胴部	中茶路式、微隆起線、LR短縄文、LR斜縄文
第27図-77	r34b	II	625	I b	胴部	中茶路式、微隆起線、LR短縄文、絡条体圧痕文
第27図-78	r34b	II	395	I b	胴部	中茶路式、微隆起線、LR短縄文、LR・RL羽状縄文
第27図-79	s34d	II	880	I b	胴部	中茶路式、微隆起線、LR短縄文、絡条体圧痕文
第27図-80	s35c	II	1018	I b	胴部	中茶路式、微隆起線、LR短縄文、絡条体圧痕文
第27図-81	s34a	II	25	I b	胴部	中茶路式、微隆起線、LR短縄文、絡条体圧痕文
第27図-82	s34a	II	133	I b	胴部	中茶路式、微隆起線、LR短縄文、絡条体圧痕文
第27図-83	s36d	II	47	I b	胴部	中茶路式、微隆起線、RL短縄文、綾絡文
第27図-84	r34c	II	252	I b	胴部	中茶路式、微隆起線、LR短縄文
第27図-85	n38c	II	5	I b	胴部	中茶路式、微隆起線、LR短縄文
第28図-86	s35d	II	888	I b	胴部	中茶路式、微隆起線、LR短縄文
第28図-87	r34d	II	137	I b	胴部	中茶路式、微隆起線、結束第1種LR・RL羽状縄文
第28図-88	r36d	II	99	I b	胴部	中茶路式、微隆起線、LR短縄文
第28図-89	r34b	II	374	I b	胴部	中茶路式、微隆起線、LR短縄文
第28図-90	s38b	II	111	I b	胴部	中茶路式、微隆起線、LR短縄文
第28図-91	s34b	II	303	I b	胴部	中茶路式、微隆起線、LR短縄文
第28図-92	r33c	II	250	I b	胴部	中茶路式、微隆起線、LR短縄文
第28図-93	r35b	II	198	I b	胴部	中茶路式、微隆起線、RL短縄文
第28図-94	s36a	II	68	I b	胴部	中茶路式、微隆起線、LR短縄文
第28図-95	s37c	II	193	I b	胴部	中茶路式、微隆起線、LR短縄文
第28図-96	r34b	II	563	I b	胴部	中茶路式、微隆起線、RL短縄文
第28図-97	s36b	II	235	I b	胴部	中茶路式、微隆起線、LR短縄文
第28図-98	s36b	II	291	I b	胴部	中茶路式、微隆起線、LR短縄文
第28図-99	s35c	II	1019	I b	胴部	中茶路式、微隆起線、RL短縄文
第28図-100	n31b	II	12	I b	胴部	中茶路式、微隆起線、LR短縄文
第28図-101	r34c	II	214	I b	胴部	中茶路式、微隆起線、LR短縄文
第28図-102	s35c	II	987	I b	胴部	中茶路式、微隆起線、LR短縄文
第28図-103	s35a	II	272	I b	胴部	中茶路式、微隆起線、RL短縄文
第28図-104	p10b	II	4	I b	胴部	中茶路式、微隆起線、LR短縄文
第28図-105	p35d	III	5	I b	胴部	中茶路式、微隆起線、LR短縄文
第28図-106	s35b	II	957	I b	胴部	中茶路式、微隆起線、RL短縄文
第28図-107	s34a	II	63	I b	胴部	中茶路式、微隆起線、LR短縄文
第28図-108	s38b	II	105	I b	胴部	中茶路式、微隆起線、LR短縄文
第28図-109	t36b	II	66	I b	胴部	中茶路式、微隆起線、LR短縄文
第28図-110	s35c	II	976	I b	胴部	中茶路式、微隆起線、LR短縄文
第28図-111	s35b	II	1051	I b	胴部	中茶路式、微隆起線、LR短縄文
第28図-112	s36a	II	67	I b	胴部	中茶路式、微隆起線、LR短縄文
第28図-113	n37d	III		I b	胴部	中茶路式、微隆起線、LR短縄文
第29図-114	s35b	II	989	I b	胴部	中茶路式、微隆起線、LR斜縄文
第29図-115	s37b	II	194	I b	胴部	中茶路式、微隆起線、LR斜縄文
第29図-116	s36b	II	406	I b	胴部	中茶路式、微隆起線、RL斜縄文
第29図-117	t37a	II	236	I b	胴部	中茶路式、微隆起線、LR斜縄文
第29図-118	s36b	II	452	I b	胴部	中茶路式、微隆起線、RL斜縄文
第29図-119	s35a	II	793	I b	胴部	中茶路式、微隆起線、LR斜縄文
第29図-120	r36d	II	200	I b	胴部	中茶路式、微隆起線、LR短縄文
第29図-121	r35b	II	178	I b	胴部	中茶路式、微隆起線、LR斜縄文
第29図-122	s37c	II	209	I b	胴部	中茶路式、微隆起線、絡条体圧痕文
第29図-123	s36b	II	329	I b	胴部	中茶路式、微隆起線、LR・RL羽状縄文
第29図-124	r33c	II	254	I b	胴部	中茶路式、微隆起線、結束第1種LR・RL羽状縄文
第29図-125	r33c	II	236	I b	胴部	中茶路式、微隆起線、結束第1種LR・RL羽状縄文
第29図-126	r34b	II	375	I b	胴部	中茶路式、微隆起線、LR・RL羽状縄文
第29図-127	s34c	II	608	I b	胴部	中茶路式、微隆起線、LR羽状縄文
第29図-128	r33d	II	134	I b	胴部	中茶路式、微隆起線、結束第1種LR・RL羽状縄文
第29図-129	r35a	II	125	I b	胴部	中茶路式、微隆起線、LR・RL羽状縄文
第29図-130	s36b	II	451	I b	胴部	中茶路式、微隆起線、結束第1種LR・RL羽状縄文

表Ⅱ-2 掲載土器一覧表(3)

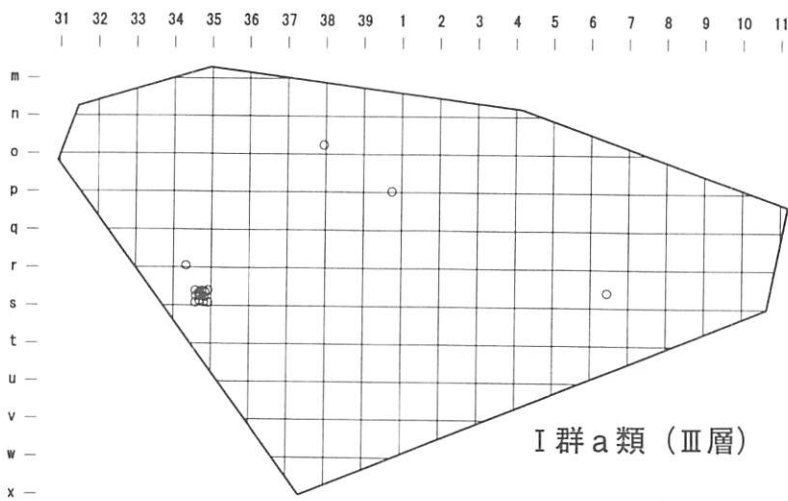
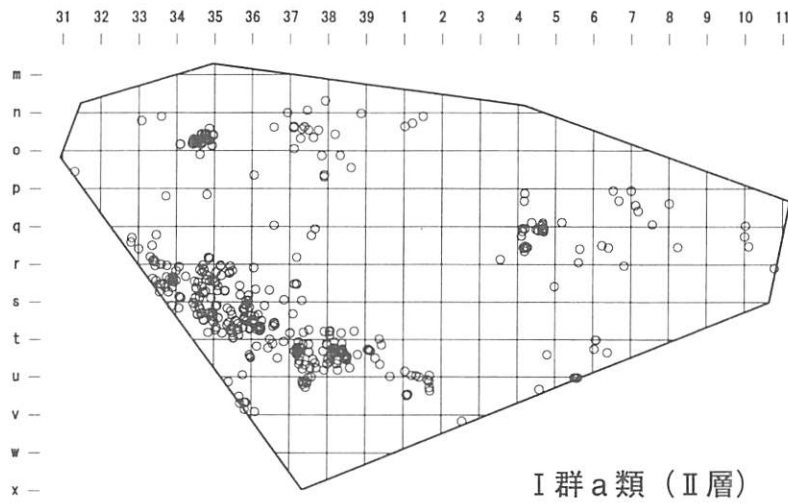
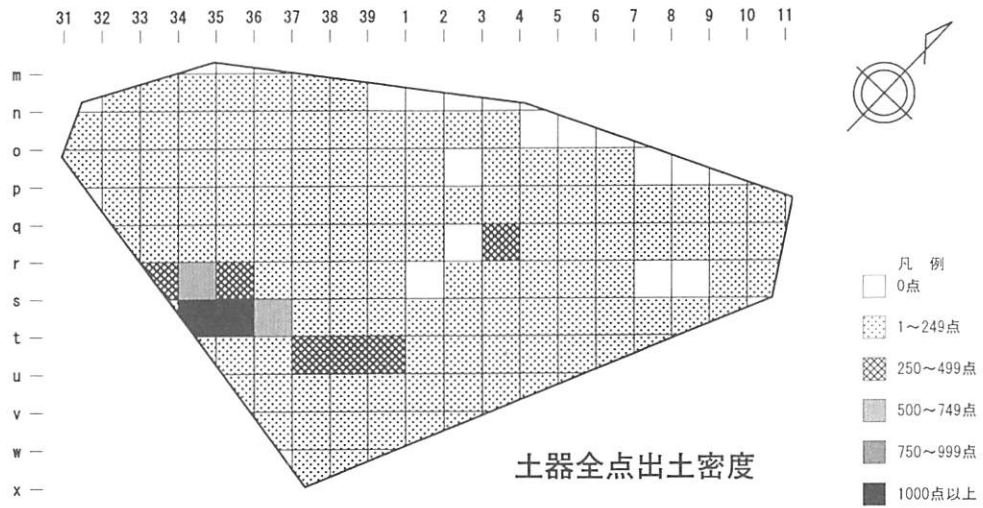
図版No.	出土地点	層位	遺物No.	分類	部位	備考
第29図-131	u36d	Ⅱ	37	I b	胴部	中茶路式、微隆起線、LR・RL羽状縄文
第29図-132	t36a	Ⅱ	51	I b	胴部	中茶路式、微隆起線、結束第1種LR・RL羽状縄文
第29図-133	s36b	Ⅱ	349	I b	胴部	中茶路式、微隆起線、LR・RL羽状縄文
第29図-134	s35d	Ⅱ	70	I b	胴部	中茶路式、LR短縄文、絡条体圧痕文
第29図-135	s35c	Ⅱ	798	I b	胴部	中茶路式、微隆起線
第29図-136	r34d	Ⅱ	5	I b	胴部	中茶路式、LR斜縄文
第29図-137	s35d	Ⅱ	889	I b	胴部	中茶路式、絡条体圧痕文
第29図-138	r34d	Ⅱ	316	I b	胴部	中茶路式、絡条体圧痕文
第29図-139	r36a	Ⅱ	6	I b	胴部	東釧路Ⅳ式、L燃糸文、絡条体圧痕文
第29図-140	s34c	Ⅱ	323	I b	胴部	中茶路式、絡条体圧痕文
第29図-141	n38b	Ⅱ	4	I b	胴部	中茶路式、絡条体圧痕文
第29図-142	s35c	Ⅱ	929	I b	胴部	中茶路式、絡条体圧痕文
第29図-143	u37a	Ⅱ	38	I b	胴部	東釧路Ⅳ式、R燃糸文
第29図-144	t39a	Ⅱ	291	I b	胴部	中茶路式、微隆起線、LR短縄文
第29図-145	s37b	Ⅱ	145	I b	胴部	中茶路式、微隆起線、LR短縄文
第29図-146	s34b	Ⅱ	242	I b	胴部	東釧路Ⅳ式、絡条体圧痕文
第29図-147	r36b	Ⅱ	72	I b	胴部	中茶路式、絡条体圧痕文
第29図-148	n39c	Ⅱ	1	I b	胴部	東釧路Ⅳ式、R燃糸文
第29図-149	r36d	Ⅱ	90	I b	胴部	東釧路Ⅳ式、L燃糸文
第29図-150	u1d	Ⅱ	206	I b	胴部	東釧路Ⅳ式、L燃糸文
第29図-151	s37c	Ⅱ	211	I b	胴部	東釧路Ⅳ式、L燃糸文、縄端圧痕文
第29図-152	t38a	Ⅱ	149	I b	胴部	東釧路Ⅳ式、L燃糸文
第30図-153	r35c	Ⅱ	427	I b	底部	中茶路式、微隆起線、LR短縄文、RL斜縄文
第30図-154	r34c	Ⅱ	100	I b	底部	中茶路式、微隆起線、LR短縄文、RL斜縄文
第30図-155	r35c	Ⅱ	446	I b	底部	中茶路式、微隆起線、LR短縄文、RL斜縄文
第30図-156	n37c	Ⅱ	75	I b	底部	中茶路式、微隆起線、LR短縄文
第30図-157	s34d	Ⅱ	636	I b	底部	中茶路式、微隆起線、LR短縄文
第30図-158	n37c	Ⅱ	54	I b	底部	中茶路式、微隆起線、LR短縄文
第30図-159	r34d	Ⅱ	6	I b	底部	中茶路式、微隆起線、RL短縄文
第30図-160	s35d	Ⅱ	662	I b	底部	中茶路式、微隆起線、LR短縄文
第30図-161	s36b	Ⅱ	464	I b	底部	中茶路式、微隆起線、RL短縄文
第30図-162	r34d	Ⅱ	305	I b	底部	中茶路式、微隆起線、RL斜縄文
第30図-163	r33d	Ⅱ	205	I b	底部	中茶路式、微隆起線、LR斜縄文
第30図-164	s35a	Ⅱ	56	I b	底部	中茶路式、微隆起線、LR斜縄文
第30図-165	s34d	Ⅱ	435	I b	底部	中茶路式、微隆起線、LR斜縄文
第30図-166	s34a	Ⅱ	128	I b	底部	中茶路式、微隆起線、RL斜縄文
第30図-167	s34d	Ⅱ	1011	I b	底部	中茶路式、微隆起線、LR斜縄文
第30図-168	r35a	Ⅱ	70	I b	底部	中茶路式、微隆起線、LR・RL羽状縄文
第30図-169	s35c	Ⅱ	979	I b	底部	中茶路式、微隆起線、LR斜縄文
第30図-170	s35d	Ⅱ	594	I b	底部	中茶路式、微隆起線、RL斜縄文
第30図-171	r35c	Ⅱ	296	I b	底部	中茶路式、微隆起線、RL斜縄文
第30図-172	r35c	Ⅱ	314	I b	底部	中茶路式、微隆起線、LR斜縄文
第30図-173	r33c	Ⅱ	300	I b	底部	中茶路式、微隆起線、RL斜縄文
第30図-174	s37c	Ⅱ	192	I b	底部	中茶路式、微隆起線
第30図-175	r34c	Ⅱ	280	I b	底部	中茶路式、微隆起線
第30図-176	s35a	Ⅱ	866	I b	底部	中茶路式、微隆起線
第30図-177	r33c	Ⅱ	297	I b	底部	中茶路式、LR斜縄文
第30図-178	r35b	Ⅱ	417	I b	底部	中茶路式、RL短縄文
第30図-179	r35b	Ⅱ	228	I b	底部	中茶路式、RL短縄文
第30図-180	q33b	Ⅱ	186	I b	底部	中茶路式、RL斜縄文
第30図-181	s36c	Ⅱ	244	I b	底部	中茶路式、LR斜縄文
第30図-182	s37c	Ⅱ	222	I b	底部	中茶路式、絡条体圧痕文
第30図-183	s34d	Ⅱ	858	I b	底部	中茶路式
第30図-184	s35d	Ⅱ	67	I b	底部	中茶路式、RL斜縄文
第30図-185	s34d	Ⅱ	902	I b	底部	中茶路式、LR斜縄文
第30図-186	r34c	Ⅱ	258	I b	底部	中茶路式、RL斜縄文
第30図-187	r35a	Ⅱ	158	I b	底部	中茶路式
第30図-188	t38a	Ⅱ	205	I b	底部	中茶路式
第30図-189	s35d	Ⅱ	703	I b	底部	中茶路式、内面に放射状に縄圧痕
第30図-190	s35a	Ⅱ	29	I b	底部	中茶路式、内面に放射状に縄圧痕
第30図-191	n1a	Ⅱ	36	I b	底部	中茶路式、ミニチュア土器
第30図-192	r33d	Ⅱ	219	I b	底部	中茶路式
第30図-193	r35c	Ⅱ	451	I b	底部	中茶路式、ミニチュア土器
第30図-194	n1a	Ⅱ	15	I b	底部	中茶路式、ミニチュア土器
第30図-195	r34d	Ⅱ	168	I b	底部	中茶路式、ミニチュア土器

表Ⅱ-2 掲載土器一覽表(4)

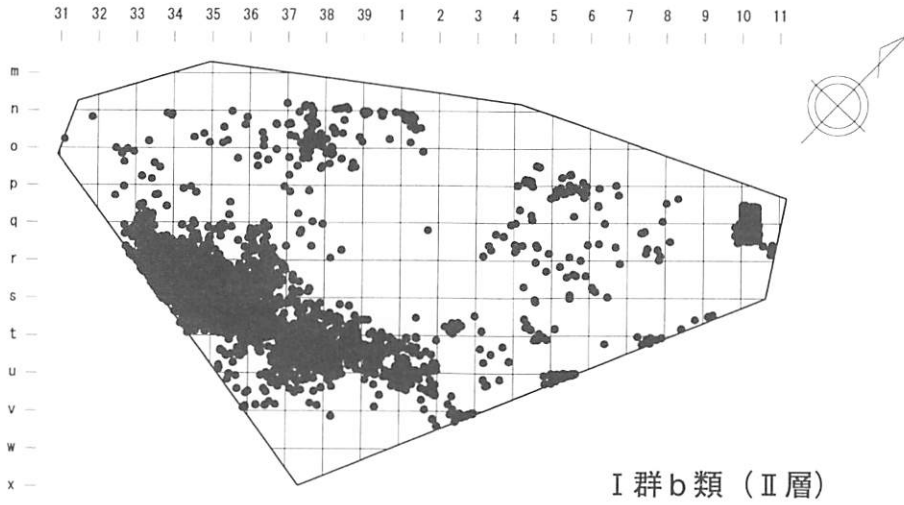
図版 No.	出土地点	層位	遺物No.	分類	部位	備考
第30図-196	r36b	Ⅱ	29	I b	底部	中茶路式、ミニチュア土器
第31図-197	s8c	Ⅱ	5	Ⅱa	口縁部	静内中野式、L R斜縄文
第31図-198	q5a	Ⅱ	41	Ⅱa	胴部	静内中野式、L R斜縄文
第31図-199	u2c	Ⅱ	133	Ⅱa	胴部	静内中野式、L R斜縄文
第31図-200	u2c	Ⅱ	113	Ⅱa	胴部	静内中野式、L R斜縄文
第31図-201	s4b	Ⅱ	33	Ⅱa	胴部	静内中野式、L R斜縄文
第31図-202	u2b	Ⅱ	140	Ⅱa	胴部	静内中野式、L R斜縄文
第31図-203	r37c	Ⅱ	11	Ⅱa	胴部	静内中野式、L R斜縄文
第31図-204	t1b	Ⅱ	80	Ⅱa	胴部	静内中野式、L R斜縄文
第31図-205	s37d	Ⅱ	79	Ⅱa	胴部	静内中野式、L R斜縄文
第31図-206	s37c	Ⅱ	140	Ⅱa	胴部	静内中野式、L R斜縄文
第31図-207	s38b	Ⅱ	71	Ⅱa	胴部	静内中野式、R L斜縄文
第31図-208	n34b	Ⅱ	13	Ⅱa	胴部	静内中野式、R L斜縄文
第31図-209	u1a	Ⅱ	115	Ⅱb	口縁部	円筒土器下層d式、L R斜縄文、貼付帯
第31図-210	r5a	Ⅱ	64	Ⅱb	口縁部	円筒土器下層d式、L撚糸文
第31図-211	q4d	Ⅱ	162	Ⅱb	口縁部	円筒土器下層d式、撚糸文
第31図-212	s38b	Ⅱ	79	Ⅱb	口縁部	円筒土器下層d式、L撚糸文
第31図-213	q3c	Ⅱ	134	Ⅱb	口縁部	円筒土器下層d式、L撚糸文
第31図-214	q3c	Ⅱ	135	Ⅱb	口縁部	円筒土器下層d式、L撚糸文
第31図-215	q3d	Ⅱ	120	Ⅱb	口縁部	円筒土器下層d式、R撚糸文
第31図-216	u1a	Ⅱ	194	Ⅱb	口縁部	円筒土器下層d式、R撚糸文
第31図-217	q3d	Ⅱ	124	Ⅱb	口縁部	円筒土器下層d式、R撚糸文
第31図-218	u1a	Ⅱ	222	Ⅱb	口縁部	円筒土器下層d式、R撚糸文
第31図-219	u36c	Ⅱ	51	Ⅱb	口縁部	円筒土器下層d式、撚糸文
第31図-220	u1a	Ⅱ	153	Ⅱb	口縁部	円筒土器下層d式、L撚糸文
第31図-221	u2c	Ⅱ	149	Ⅱb	口縁部	円筒土器下層d式、撚糸文
第31図-222	r37d	Ⅱ	7	Ⅱb	口縁部	円筒土器下層d式、R撚糸文
第31図-223	q3c	Ⅱ	56	Ⅱb	口縁部	円筒土器下層d式、L撚糸文
第32図-224	u1a	Ⅱ	225	Ⅱb	胴部	円筒土器下層d式、R撚糸文、結束第1種羽状縄文
第32図-225	u1a	Ⅱ	125	Ⅱb	胴部	円筒土器下層d式、R撚糸文、結束第1種羽状縄文
第32図-226	u2c	Ⅱ	144	Ⅱb	胴部	円筒土器下層d式、R撚糸文、結束第1種L R羽状縄文
第32図-227	s37c	Ⅱ	107	Ⅱb	胴部	円筒土器下層d式、R撚糸文
第32図-228	s37c	Ⅱ	149	Ⅱb	胴部	円筒土器下層d式、L R縄線文、沈線文
第32図-229	t39b	Ⅱ	203	Ⅱb	胴部	円筒土器下層d式、L撚糸文、多軸絡条体
第32図-230	t39c	Ⅱ	73	Ⅱb	胴部	円筒土器下層d式、R撚糸文
第32図-231	r4c	Ⅱ	25	Ⅱb	胴部	円筒土器下層d式、R撚糸文
第32図-232	u36d	Ⅱ	30	Ⅱb	胴部	円筒土器下層d式、R撚糸文
第32図-233	t39b	Ⅱ	140	Ⅱb	胴部	円筒土器下層d式、L撚糸文
第32図-234	r37a	Ⅱ	28	Ⅱb	胴部	円筒土器下層d式、多軸絡条体
第32図-235	q3c	Ⅱ	138	Ⅱb	胴部	円筒土器下層d式、多軸絡条体
第32図-236	s37c	Ⅱ	70	Ⅱb	胴部	円筒土器下層d式、多軸絡条体
第32図-237	q5b	Ⅱ	20	Ⅱb	胴部	円筒土器下層d式、多軸絡条体
第32図-238	q3d	Ⅱ	125	Ⅱb	胴部	円筒土器下層d式、多軸絡条体
第32図-239	t37c	Ⅱ	40	Ⅱb	胴部	円筒土器下層d式、R撚糸文
第32図-240	v37d	Ⅱ	9	Ⅱb	胴部	円筒土器下層d式、R撚糸文
第32図-241	q5b	Ⅱ	42	Ⅱb	胴部	円筒土器下層d式、多軸絡条体
第32図-242	s38a	Ⅱ	102	Ⅱb	胴部	円筒土器下層d式、L撚糸文
第32図-243	r5a	Ⅱ	69	Ⅱb	胴部	円筒土器下層d式、R撚糸文
第32図-244	q5a	Ⅱ	51	Ⅱb	胴部	円筒土器下層d式、R撚糸文
第32図-245	v37d	Ⅱ	8	Ⅱb	胴部	円筒土器下層d式、R撚糸文
第32図-246	u37a	Ⅱ	15	Ⅱb	胴部	円筒土器下層d式、R撚糸文
第32図-247	q5b	Ⅱ	28	Ⅱb	胴部	円筒土器下層d式、L R羽状縄文
第32図-248	t39b	Ⅱ	320	Ⅱb	胴部	円筒土器下層d式、R撚糸文
第32図-249	r34a	Ⅱ	446	Ⅱb	胴部	円筒土器下層d式、R撚糸文
第32図-250	s36b	Ⅱ	276	Ⅱb	胴部	円筒土器下層d式、R撚糸文
第32図-251	q3c	Ⅱ	51	Ⅱb	胴部	円筒土器下層d式、L撚糸文
第33図-252	t39d	Ⅱ	243	Ⅱb	胴部	円筒土器下層d式、多軸絡条体
第33図-253	q5b	Ⅱ	32	Ⅱb	胴部	円筒土器下層d式、R撚糸文
第33図-254	表採			Ⅱb	胴部	押型文土器
第33図-255	t39c	Ⅱ	72	Ⅱb	胴部	押型文土器
第33図-256	t39c	Ⅱ	103	Ⅱb	胴部	押型文土器
第33図-257	q4b	Ⅱ	258	Ⅱb	胴部	押型文土器
第33図-258	q4b	Ⅱ	238	Ⅱb	胴部	押型文土器
第33図-259	t39c	Ⅱ	239	Ⅱb	底部	円筒土器下層d式、平底、多軸絡条体
第33図-260	u37a	Ⅱ	14	Ⅱb	底部	円筒土器下層d式、平底、多軸絡条体

表Ⅱ-2 掲載土器一覧表(5)

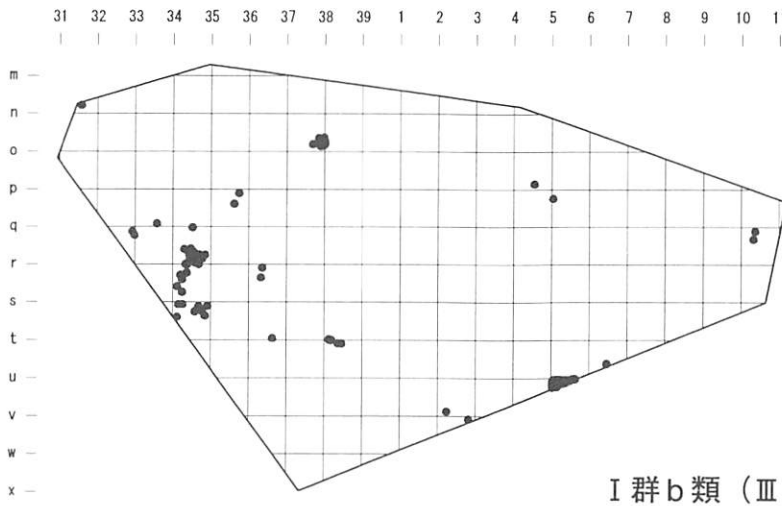
図版 No	出土地点	層位	遺物No	分類	部位	備考
第33図-261	q3c	Ⅱ	87	Ⅱb	底部	凹筒土器下層d式、平底、多軸絡条体
第33図-262	q3c	Ⅱ	86	Ⅱb	底部	凹筒土器下層d式、平底、多軸絡条体
第33図-263	u39b	Ⅱ	30	Ⅲ	胴部	R L斜縄文、貼付文
第33図-264	u37d	Ⅱ	31	Ⅲ	胴部	結束第2種R L縄文
第33図-265	u1a	Ⅱ	150	Ⅲ	胴部	結束第2種L R・R L羽状縄文
第33図-266	t39d	Ⅱ	36	Ⅲ	胴部	結束第2種R L斜縄文
第33図-267	u1a	Ⅱ	191	Ⅲ	胴部	結束第2種L R・R L羽状縄文
第33図-268	q4c	Ⅱ	165	Ⅲ	胴部	結束第1種L R・R L羽状縄文
第33図-269	t1b	Ⅱ	90	Ⅲ	胴部	結束第1種L R・R L羽状縄文
第33図-270	s39c	Ⅱ	28	Ⅲ	胴部	結束第1種L R・R L羽状縄文
第33図-271	t38d	Ⅱ	104	Ⅲ	胴部	結束第2種L R・R L羽状縄文
第33図-272	u1d	Ⅱ	171	Ⅲ	胴部	結束第2種L R・R L羽状縄文
第33図-273	t3c	Ⅱ	34	Ⅲ	胴部	結束第2種L R・R L羽状縄文
第33図-274	u5a	Ⅱ	37	Ⅲ	胴部	結束第1種L R・R L羽状縄文
第33図-275	r34b	Ⅱ	24	Ⅲ	胴部	L R斜縄文
第33図-276	n34d	Ⅱ	49	Ⅲ	胴部	L R斜縄文
第33図-277	m37b	Ⅱ	11	Ⅲ	胴部	R L斜縄文
第33図-278	s37d	Ⅱ	78	Ⅲ	胴部	R L斜縄文
第33図-279	t39a	Ⅱ	179	Ⅲ	胴部	R L斜縄文
第33図-280	n34a	Ⅱ	27	Ⅲ	胴部	複節R L R斜縄文
第33図-281	u2c	Ⅱ	177	Ⅲ	底部	やや上げ底
第33図-282	q3d	Ⅱ	148	Ⅲ	底部	平底
第33図-283	w38a	Ⅱ	26	Ⅲ	底部	平底
第33図-284	t39a	Ⅱ	30	Ⅲ	底部	上げ底、R L斜縄文
第34図-285	n1d	Ⅱ	37	Ⅲ	底部	やや上げ底、結束第2種縄文
第34図-286	r5d	Ⅱ	78	Ⅲ	底部	平底
第34図-287	u4b	Ⅱ	18	Ⅲ	底部	やや上げ底
第34図-288	u3d	Ⅱ	43	Ⅲb	口縁部	北筒式、刺突文、押引文、結束第2種L R・R L羽状縄文
第34図-289	r5a	Ⅱ	63	Ⅲb	口縁部	北筒式、刺突文、押引文、結束第1種R L羽状縄文
第34図-290	u5a	Ⅱ	47	Ⅲb	口縁部	北筒式、刺突文、押引文、結束第1種L R羽状縄文
第34図-291	r38c	Ⅱ	2	Ⅲb	口縁部	北筒式、刺突文、押引文
第34図-292	r36c	Ⅱ	30	Ⅲb	口縁部	北筒式、刺突文、押引文
第34図-293	w38d	Ⅱ	13	Ⅲb	口縁部	北筒式、刺突文、押引文
第34図-294	s37d	Ⅱ	45	Ⅲb	口縁部	北筒式、刺突文、R L斜縄文
第34図-295	r38c	I	1	Ⅲb	口縁部	北筒式、刺突文
第34図-296	m37b	Ⅱ	17	Ⅲb	口縁部	北筒式、R L斜縄文
第34図-297	t39a	Ⅱ	214	Ⅲb	口縁部	北筒式
第34図-298	t39b	Ⅱ	139	Ⅲb	底部	北筒式、やや上げ底
第34図-299	s2b	Ⅱ	58	Vc	口縁部	タンネットウL式相当、沈線文
第34図-300	s2b	Ⅱ	13	Vc	口縁部	タンネットウL式相当、沈線文
第34図-301	s2b	Ⅱ	48	Vc	口縁部	タンネットウL式相当、沈線文
第34図-302	s2b	Ⅱ	14	Vc	胴部	タンネットウL式相当、沈線文
第34図-303	s2b	Ⅱ	38	Vc	胴部	タンネットウL式相当、沈線文
第34図-304	s2b	Ⅱ	11	Vc	胴部	タンネットウL式相当、沈線文
第34図-305	s2b	Ⅱ	43	Vc	胴部	タンネットウL式相当、沈線文
第34図-306	s2b	Ⅱ	15	Vc	胴部	タンネットウL式相当、沈線文
第34図-307	s2c	Ⅱ	28	Vc	底部	タンネットウL式相当、平底、R L斜縄文



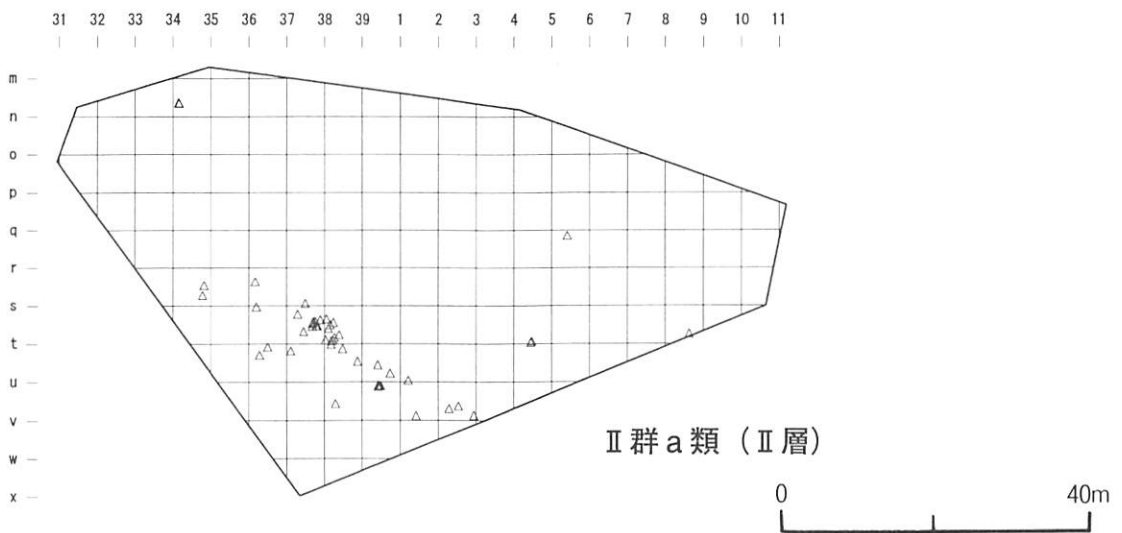
第35図 土器分布図 (1)



I 群b類 (II層)

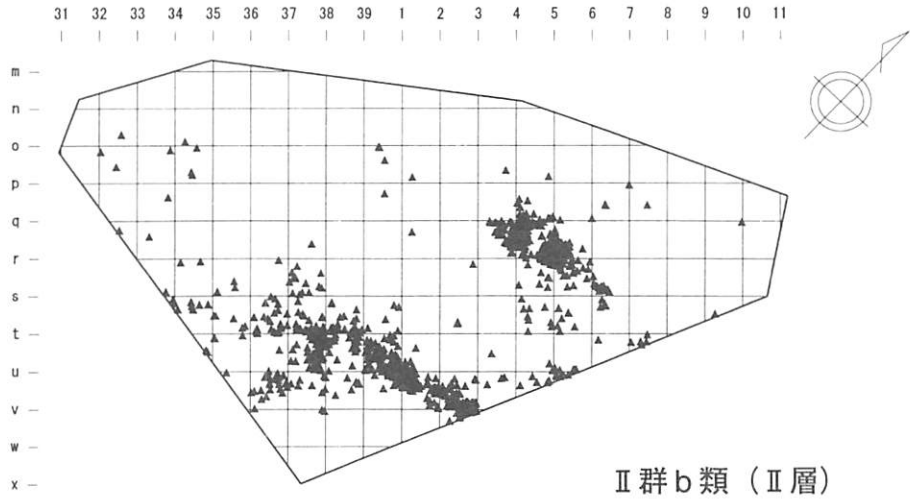


I 群b類 (III層)

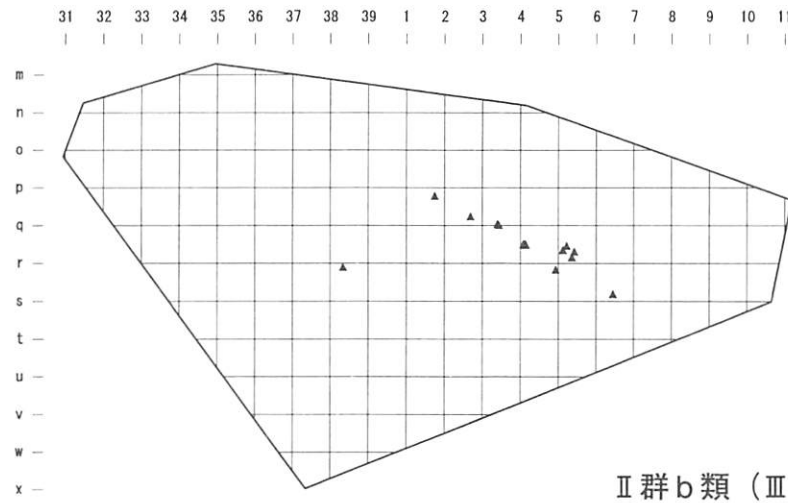


II 群a類 (II層)

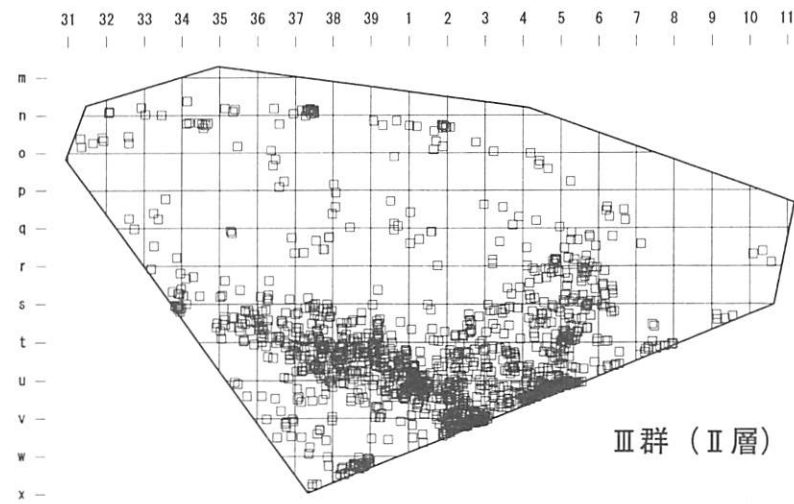
第36図 土器分布図 (2)



II群b類 (II層)



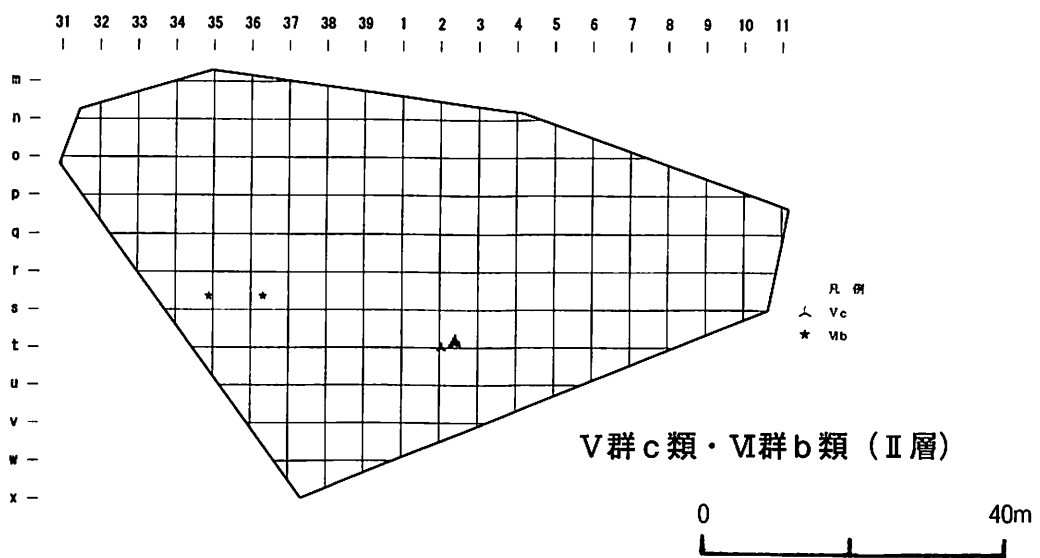
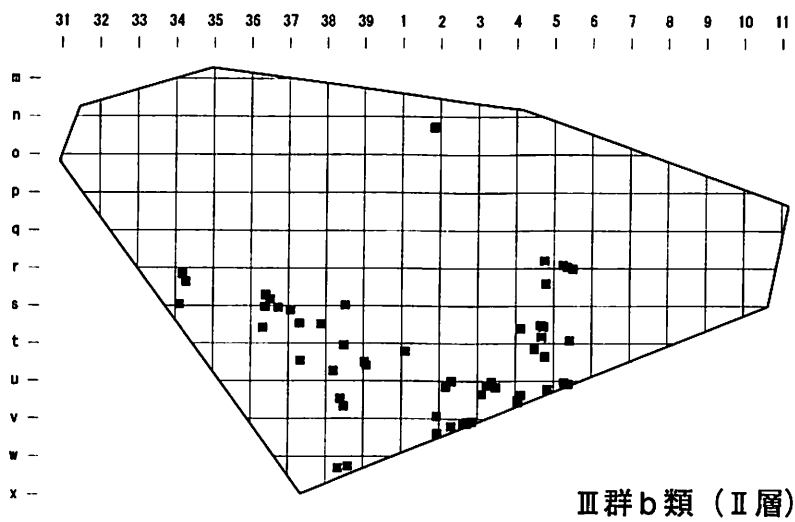
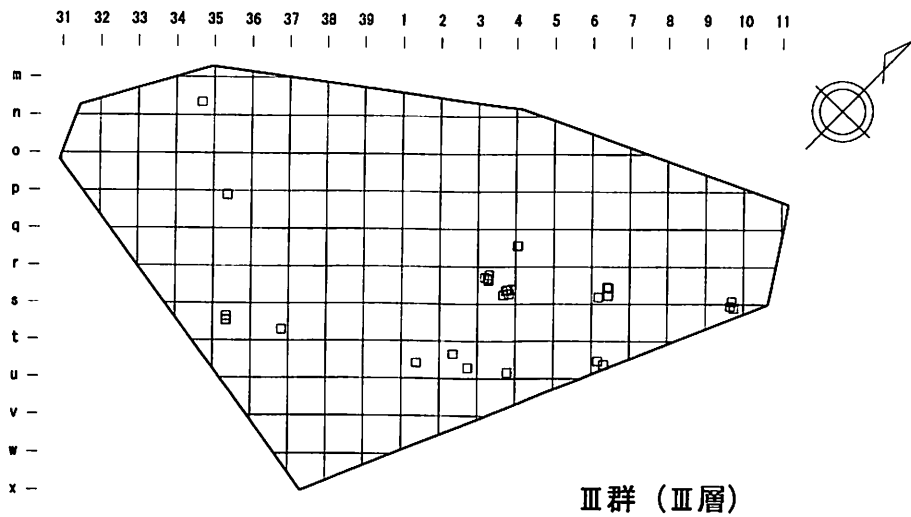
II群b類 (III層)



III群 (II層)



第37図 土器分布図 (3)



第38図 土器分布図(4)

石器

剥片石器の中では石鏃が402点と多く、Rフレイクが200点ある。またスクレイパーが154点、つまみ付ナイフが79点と多く出土している。剥片の石質は黒曜石が最も多く、他に頁岩、珪化岩、流紋岩、チャート等がある。

礫石器ではたたき石が81点と最も多く、次いで石斧76点、すり石21点、石皿14点等が出土している。石材は安山岩、チャート、流紋岩、緑色泥岩、片岩等が見られる。

石鏃（第39図－1～50）

形状で大まかに7つに分けられ、多い順から、三角形平基、三角形凹基、次いで柳葉形、有茎鏃、円基、菱形、五角形、その他形状不明になる。先端や基部がやや欠損しているものや石鏃片や未製品と思われるものも多くみられた。

1～9は三角形平基。腹面は周縁のみ加工のものがみられる（1～3）。1は細身で小形である。2は正三角形に近く小形である。4は二等辺三角形に近く、丁寧な作りで透明度が高い。3～5は先端がやや欠損している。5は片側縁がやや外湾する。茶色が混じる。6・7は二等辺三角形に近く6は基部がやや欠損している。8・9はやや荒い加工。3・8は頁岩製、その他は全て黒曜石製。

10～31は三角形凹基。腹面に一次剥離面の残るものが多くみられる（10～13、18・21・24・29・31）。10は先端と基部が欠損。縞状に模様が入る。11は茶色が混じる。12～14、24～26は基部の形状が左右非対称になる。15は先端が他のものと比べて鋭角。16は厚みがある。17はやや透明度が高い。27は球顆が多く入る。29～31は基部の抉りが深い。31はロケットのような形状。26は頁岩製、24は流紋岩製、その他は全て黒曜石製。

32～35は円基。34は先端側へ細くなる。35は周縁にのみ加工。先端が欠損している。石錐の可能性はあるが突出部がないため石鏃にした。材質は凝灰岩と思われる。32は頁岩製、33・34は黒曜石製。

36～38は柳葉形。36・37は基部が平基になる。38は基部と先端が欠損している。全て黒曜石製。

39は菱形。左右非対称で片側縁の加工が細かい。40・41は五角形。40は原石面がやや残る。41は周縁のみの簡易的な加工。39・40は黒曜石製、41は安山岩製。

42～50は有茎鏃。茎が丸くなるもの（44・48）と尖るもの（42・43・45～47）がある。42・46は茎が短く、片側の返し部分が不明瞭である。43・44・49は左右非対称。47・49は茎が長い。47は周縁にのみ加工。48・50は先端がやや欠損。50は厚みがあり被熱している。全て黒曜石製。

石槍又はナイフ（第40図－51～61）

完形の物は少なく、基部や先端が欠損した石槍片が多くみられた。

51は円基。両面とも一次剥離面が残り周縁のみの加工。薄いため石槍よりナイフとして使われていた可能性がある。52は菱形。53は有茎と思われるが左右非対称で片側の返しが不明瞭である。54は有茎。茎がやや内湾した形状になる。腹面に一次剥離面が大きく残る。55は基部に抉り加工がある。56は厚みがある。片側縁の両面にのみ連続的な剥離がみられるためナイフとして使われた可能性がある。57は柳葉形。片側縁下部の欠損は新しいものと思われる。58は厚みがある。59・60は茎が長く59は円基、60は平基になる。61は先端側が欠損している。55・57・60が頁岩製、56が安山岩製、その他は黒曜石製。

石錐（第40図－62～67）

全体で9点と数は少ない。

62～64は縦長剥片の端部に突出部を加工したもの。62は突出部の周縁と側縁のみ加工したもの。63は背面のみ加工したもの。スクレイパーの可能性もあるが厚みがあること、尖頭を呈し材質が固いことから石錐に分類した。64は三角錐状のもの。65～67は棒状。いずれも上部が欠損している。63は流紋岩製、64は玉髓製、その他は頁岩製。

つまみ付ナイフ (第40～41図-68～90)

形状は大まかに7つに分けられ、多い順から、バナナ形(71・78・81)、直線形(75～77、82・83)、四角形(68～70、80・89)、半月形(72・73・79・84・85)、丸形(87)、菱形(74・86・88)、横形(90)となる。つまみ部のみ残存しているものもいくつかみられた。

68～77は右側縁に急角度な刃部を持ち背面全面に加工がみられるもの。68・70・72・73・75・76は稜線が右に偏る。69・71・74は稜線がほぼ中央にある。腹面に加工があるもの(68～71、73・75～78)とないものがある。69は端部が欠損している。腹面には広めの連続的な剥離がされている。71は右側縁がやや内湾する。72の腹面下部の凹みは不純物が抜けた痕と思われる。73・78はつまみに対して斜めに刃部がつくられている。74は腹面に原石面が残る。75～77はつまみの幅と刃部の幅がほぼ同じである。78は2側縁に急角度な刃部を加工。79は両面に一次剥離面が残る。

80～86は周縁に加工があるもの。80・85・86はほぼ全周に刃部を加工。87は背面に原石面が残る。88はつまみ部のみ加工で背面に原石面が残る。89はつまみ部が小さい。90は横形。端部に加工がある。今回横形のはこれだけである。69・70は珪化岩製、82はチャート製、84・87・88は黒曜石製、80・89は流紋岩製、他は全て頁岩製。

スクレイパー (第41～42図-91～116)

形状は大まかに3つに分けられ、未掲載分も含め多い順から尖頭部を持ち両側に刃部があるもの(105～108)、周縁に刃部があるもの(109～116)、一側縁に刃部があるもの(91～104)となる。

93・95は両面が調整されている。99は被熱している。100・103・104は原石面が残る。108は背面中央にくぼみがある。109～116は原石面が残る側に刃部が加工されている。92・97・98・102・106・107は頁岩製、95は安山岩製、96は流紋岩製、99は珪化岩製、105・108はチャート製、他は黒曜石製。

両面調整石器 (第42～43図-117～123)

原石面が両面に残るものが多く7cm未満の小さなものが多い。原石素材を用いており、いずれも石鏃か石槍など石器に加工しようとした未製品の可能性がある。

118は大きめの剥片。下部の厚みが薄い。尖頭部があるように見えるが加工が荒いため石槍には分類せず両面調整石器とした。118は安山岩製、他は全て黒曜石製。

Rフレイク (第43図-124～143)

いずれも剥片素材の一部に簡易的な加工があるもの。140は周縁のみの加工で挟りが裏表互い違いに入る。平成25年度掲載の異形石器と形状が似ているが、異形石器としたものは両面調整がされており、今回は周縁のみの加工であるためRフレイクとした。141は周縁が磨滅しており、上部と下部にくもりがみられる。ドリルが使用によって摩耗した可能性がある。142は挟り加工があり周縁に磨滅がみられる。143は両面調整で端部に二次加工がある。124・127・132は頁岩製、129は流紋岩製、他は全て黒曜石製。

石核 (第43図-144・145)

144は平坦面から小さめの剥片を連続して取っている。145は打点を変えながら小さめの剥片を4連続して取っている。144は頁岩製、145は黒曜石製。(岩谷)

石斧 (第44図-146~151)

全て擦切り技法による磨製石斧。完形のもの出土していない。146は擦切り技法の分断作業の際に失敗したのか、片側面が内側に抉られ整形は施されていない。基部端は丸みを持ち、刃部は欠損している。147は両刃で平面形は円刃であるが、基部側は大きく欠損している。148・149・151はいずれも刃部側を欠損、基部端は丸みを持つ。149は刃部片面が剥落しているが完形に近い。150は刃部側が破損した面にたたき痕が見られ、転用の可能性もある。146は緑色片岩製。150は片岩製。他は緑色泥岩製。

石のみ (第44図-152)

152は磨製石のみで擦切り残片を再加工したものと思われる。基部側を大きく欠損している。刃部は両刃で平面形は平刃である。変蛇紋岩製。

擦切り残片 (第44図-153~155)

石斧を製作する際に側縁を切断した残片である。153は両側面にすり痕があり、長さ約9cmの石斧の原形が取られている。残片を観察すると、原石をある程度加工し形を整えた後擦切ったと考える。何度か擦切り直した痕も見える。154は切断した後に再利用しようとしたのか、切断前に加工し整形した痕かは不明だが、多面的に磨いている。155は擦切った大きさから石のみ程度のものを取ったと思われる。153・155は蛇紋岩製。154はロジン岩製。3点とも、縄文前期に多く利用される石材のようである。

石錘 (第44図-156~158 第48図-194)

156・157は扁平楕円礫の長軸側両端2ヶ所を打ち欠いている。156は破片2点が接合した。158は扁平礫の長軸側・短軸側両端計4ヶ所を打ち欠いている。194は短軸となる周囲を敲打整形し抉りを作成している。長さ22.5cm、幅17.5cm、厚さ9.0cmと大型で、類例としてはフゴッペ貝塚で出土した北海道式石冠の製作途中とされているものに類似している。157は流紋岩製、他は安山岩製。

砥石 (第44図-159~162)

159・161は使い込まれ凹んでいるすり面が見られ、肉眼で観察出来るほどのすり痕も確認出来る。159は厚みのある角礫を両面使用している。すり痕は一定方向あるいは放射線状に多く付いており、中央にはたたき痕が見えるが片面を台石として利用した際に反対の面が欠けたものと思われる。

160は四角柱状を呈し5面使用している。他と異なり、手に持って使用していたと思われる。161はかなり薄い扁平礫だが、使用前に整形した可能性が高い。両面使用ですり痕は多方向から見られる。破片2点が接合したものである。162は厚みのある礫を使用し、大きく欠損している。161は粘板岩製。他は砂岩製。

たたき石 (第45図-163~173)

163~167・169~170は厚みのある楕円~長楕円形を呈し、長軸側両端にたたき痕があるもの。168は台形状の扁平礫の短軸側両端にたたき痕がある。手に持つとたたき痕が丁度持ち手直前のところに来る。171~173は楕円形を呈し長軸片側端部にたたき痕がある。168・170は流紋岩製。173は安山岩製。他はチャート製。172は端部の中央を挟み両側縁にたたき痕が見られる。未掲載資料にも同様のものはいくつか見られる。その多くがチャート製で、礫集中1・2もチャート製のたたき石が多く出土している。

くぼみ石 (第45図-174~175)

両方とも長楕円形の扁平礫を素材としている。174は両面にたたき痕があり、片面に2ヶ所、反対の面には1ヶ所の窪みが見られる。長軸両側端部が少し欠損している。175も同様に両面にたた

き痕があり、片面に広い面積で1ヶ所、反対の面には2ヶ所の窪みが見られる。長軸片側端部にもたたき痕が少し見られる。2点が接合したものである。どちらも流紋岩製。

石鋸 (第46図-176)

薄い楕円形の扁平礫を使用し、短軸片側側縁と両面にV字状のすり面が見られる。特に片面の使用痕が大きく残る。流紋岩製。

すり石 (第46図-177~185)

177~180は厚みのある長楕円形。断面三角形の稜をすり面として使用している。181~183は楕円形の扁平礫で、181・183は短軸側片側面を使用しているが、182は長軸側端部の両側を使用しており特徴的である。184は形状とすり面の広い幅から推察し、北海道式石冠が破損したものと思われるが、大きく欠損し敲打による抉りなどの加工も確認できなかった為、断定はできない。185は断面三角形だが、例外的に幅の広い面を使用している。181・185は流紋岩製。他は安山岩製。

台石 (第47図-186)

厚みのあるやや歪な楕円形の円礫を素材とし、片面中央やや下にたたき痕による窪みがあり、反対の片面中央にはすり面として使用した窪みが見られる。安山岩製。

石皿 (第47図-187~190 第48図 195~197)

187~190・195~196は楕円形の扁平礫を使用し、片面中央部に窪みが見られる。197は楕円形の円礫を使用し、三面にすり面が見られる。187・188は流紋岩製。他は安山岩製。 (遠藤)

石製品・自然礫 (第47図-191~193)

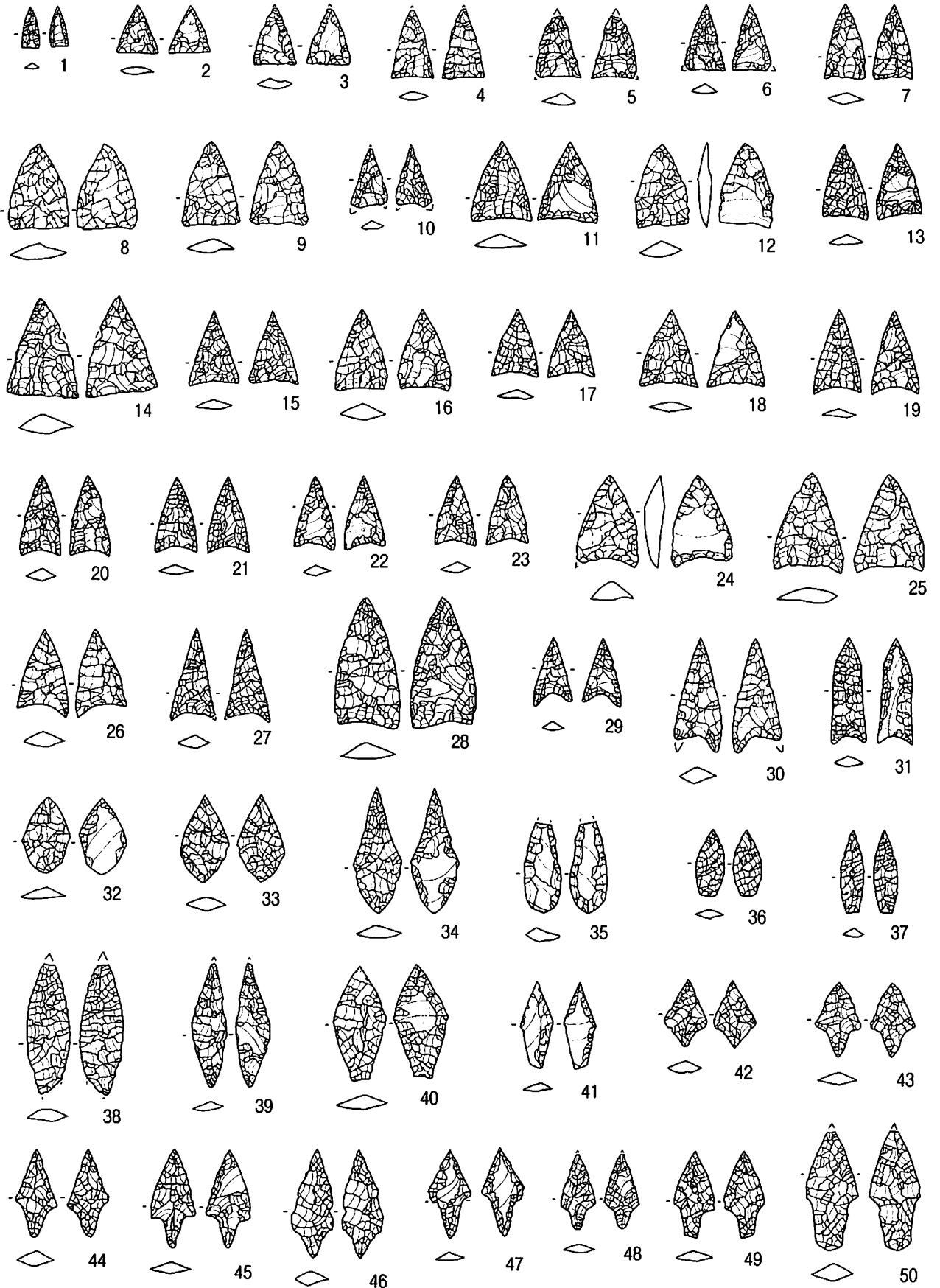
線刻礫 (第47図-191)

細長い二等辺三角形のような安山岩製扁平礫の片面には、×字状のような線が中央から縦に2つ並んでいる。中央よりもやや先端の方には、2~4cmの横線が5本並んで刻まれている。反対の面には、中央上部に1~2.5cmの横線が4本並び、線の先端に交わるように約2cmの縦線が1本刻まれている。中央右側には、2.5~3cmの3本の斜線が並び、中央下部にはやや湾曲した3~3.5cmの2本の斜線が並んで刻まれている。中央には約6.5cmのヘアピンのような縦に走る刻線と、T字状の刻線が重なっている。他にも先端部の近くに丸く炭のようなものが、線を刻んだ後に付着している。

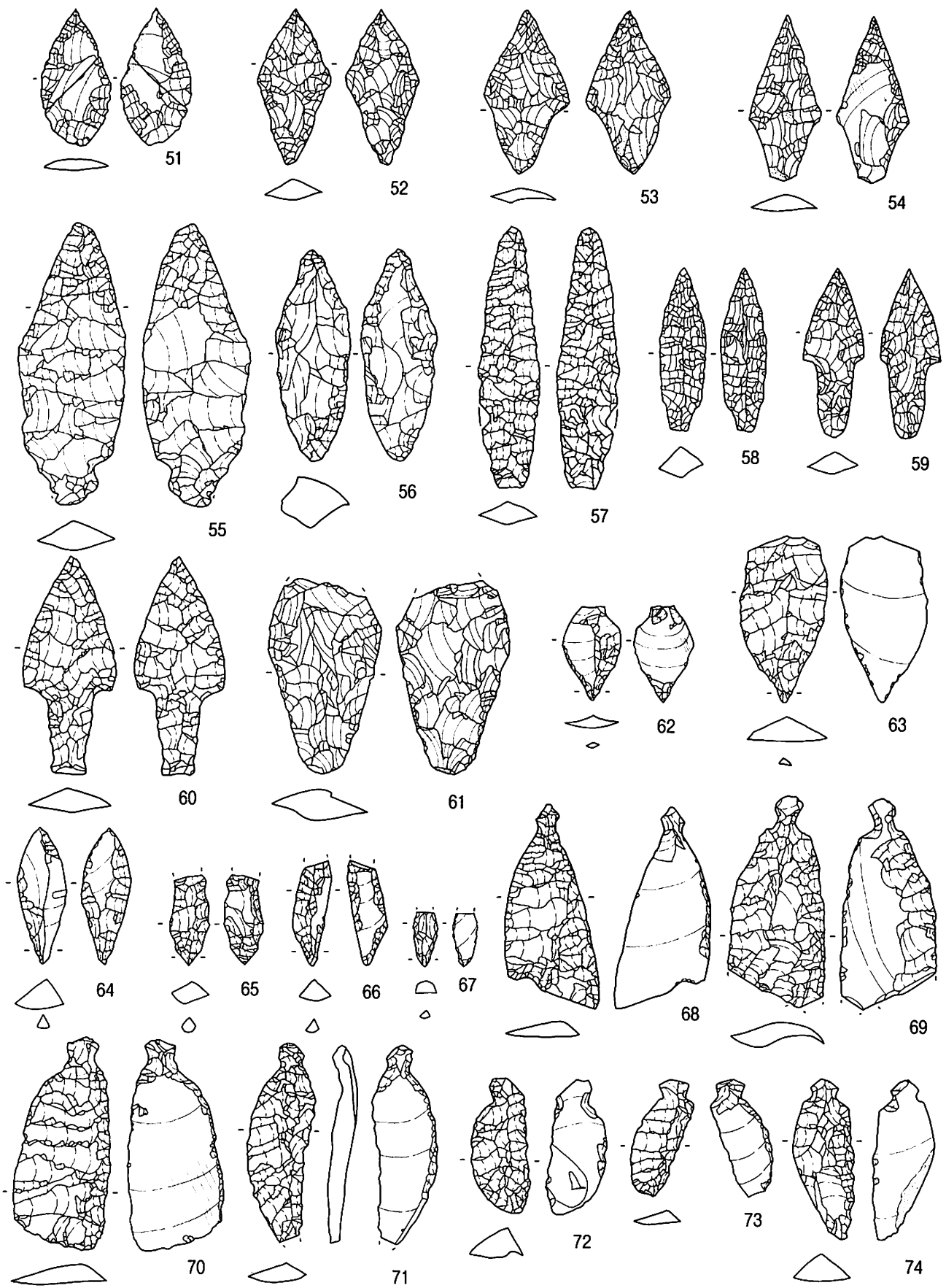
安山岩程度の固さであれば、例えばメノウや頁岩などの石質の剥片石器で線を刻むのは可能であると思われる。使用目的などの詳細は不明。

自然礫 (第47図-192~193)

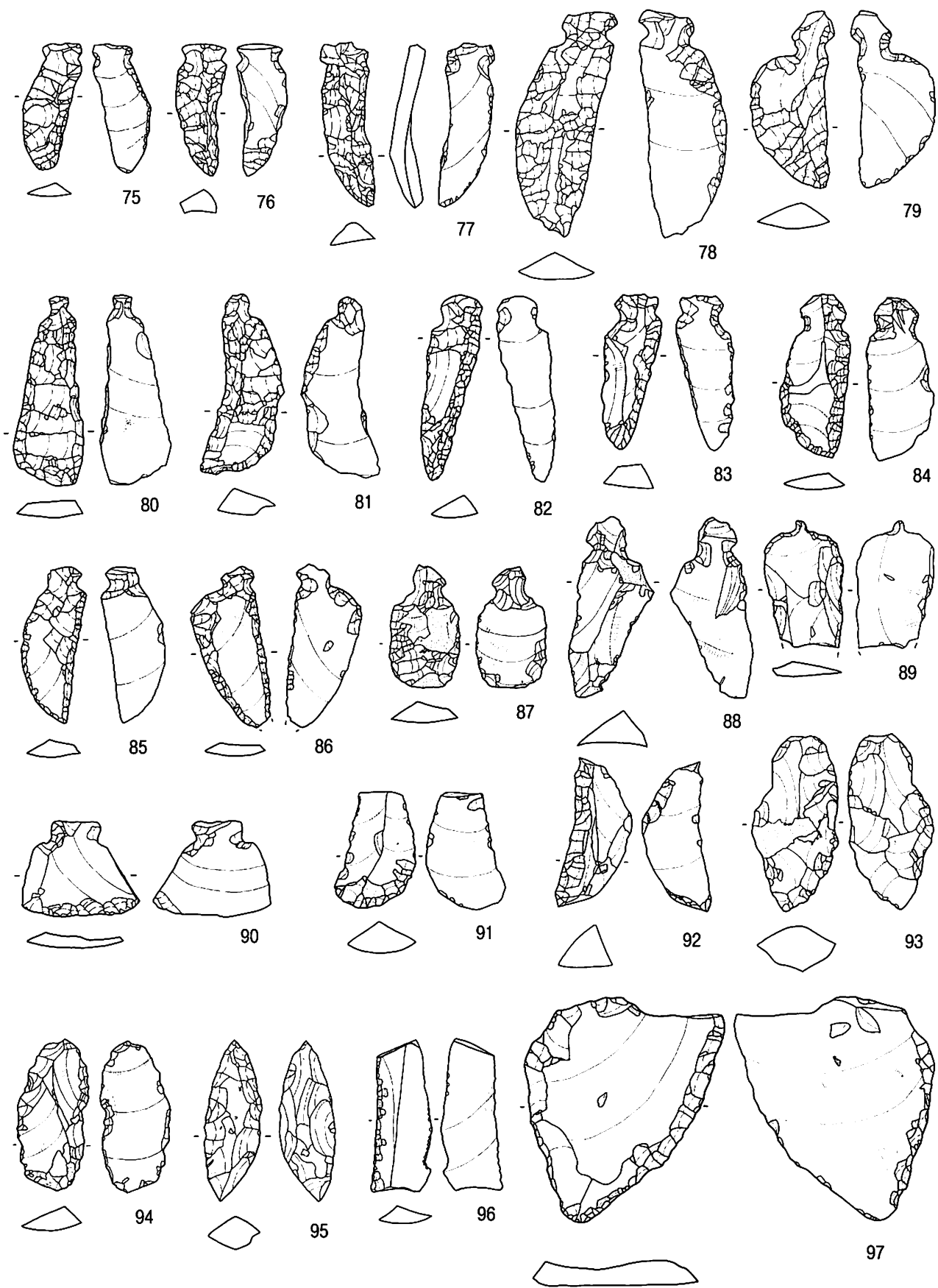
両方とも薄い扁平礫が素材で、同一グリッドにて隣り合って出土した。人為的に加工されたものではないが、中央上部に自然にできた窪みが観察出来る。出土状況から見て意図的に搬入されてきたものと推測する。192は直径7mm、深さ6mmの窪みが、193は直径1cm、深さ5mmの窪みが見られる。192は流紋岩製。193は蛇紋岩製。 (遠藤)



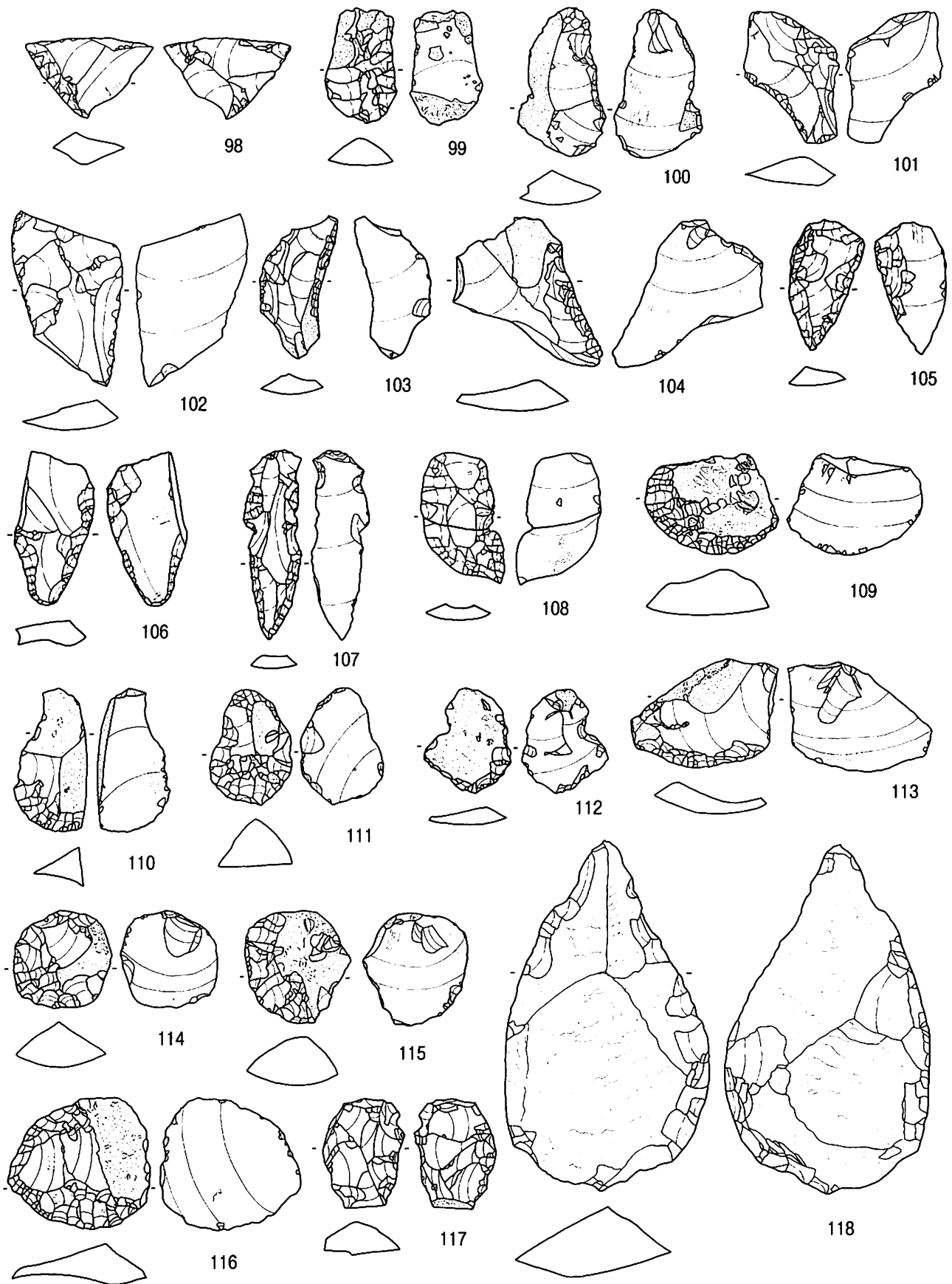
第39图 石器 (1)



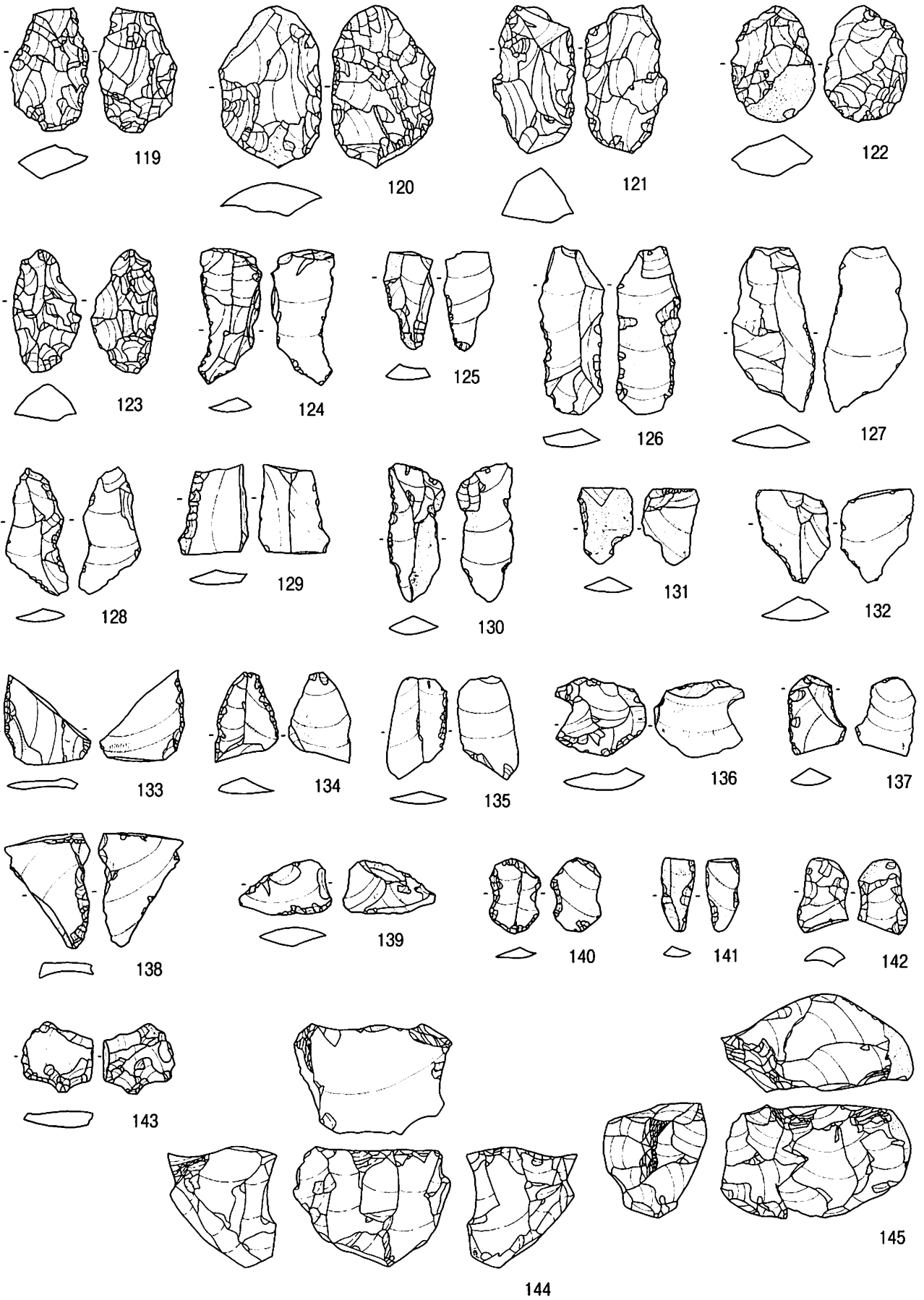
第40图 石器 (2)



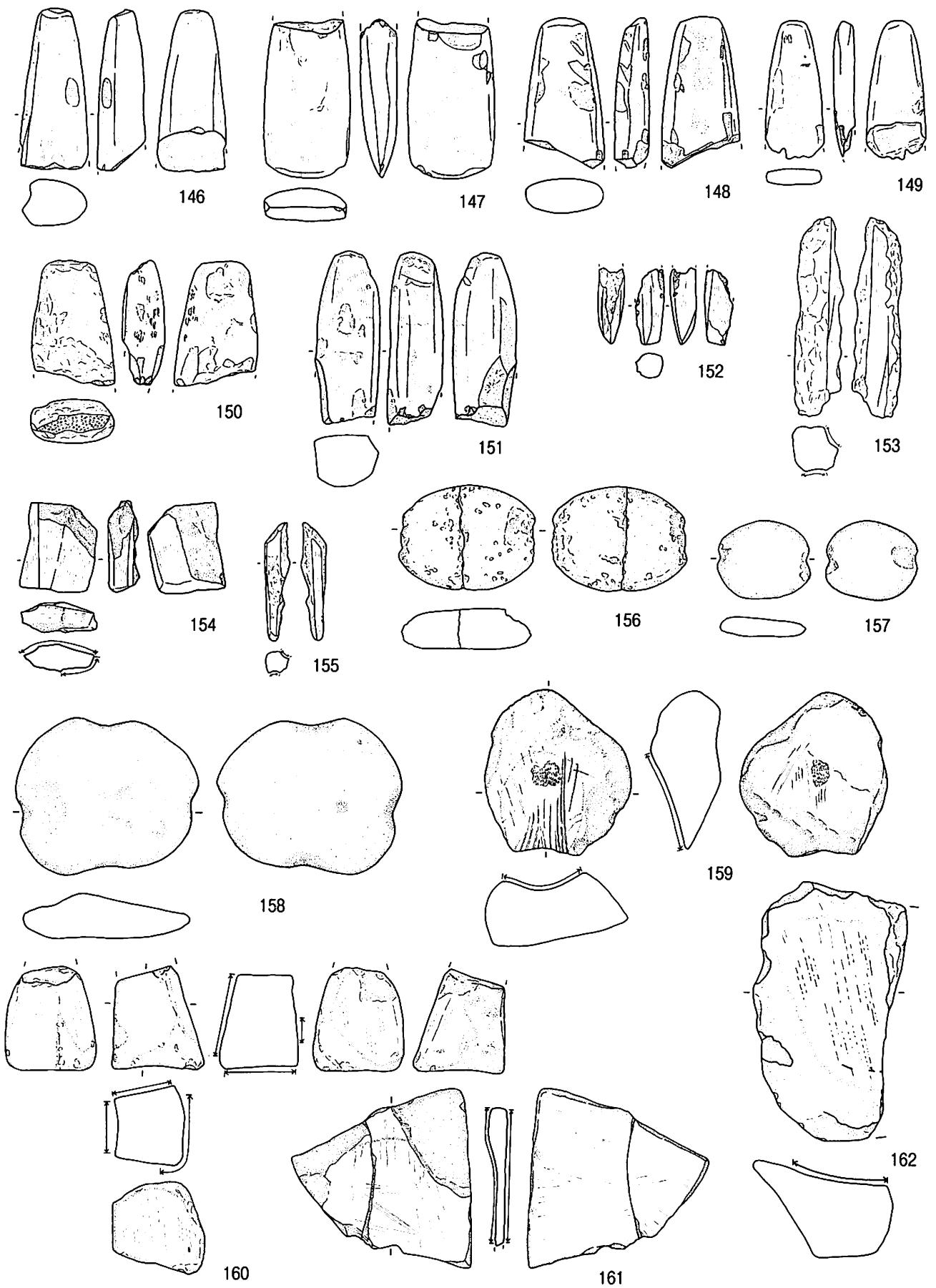
第41圖 石器(3)



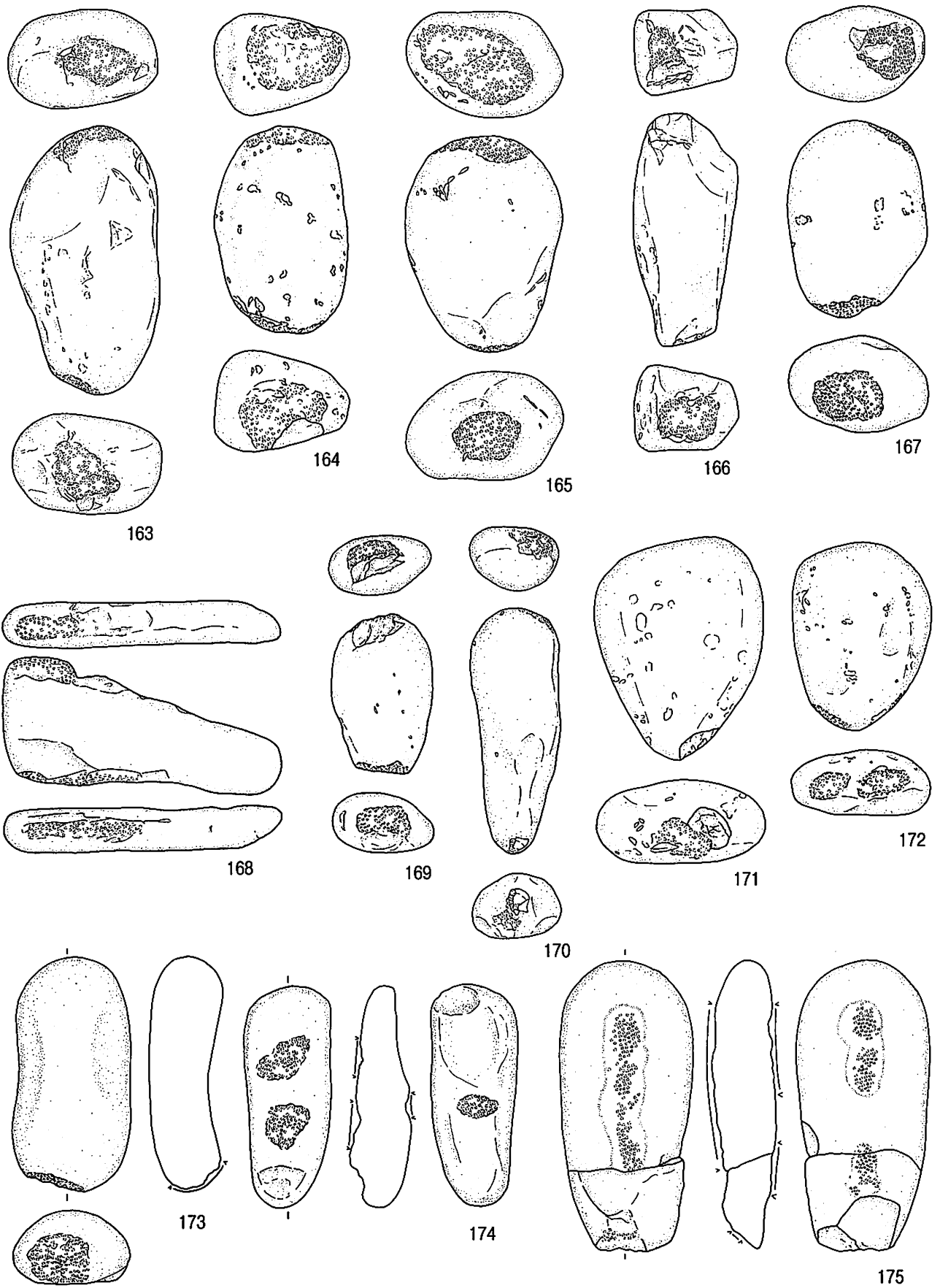
第42图 石器(4)



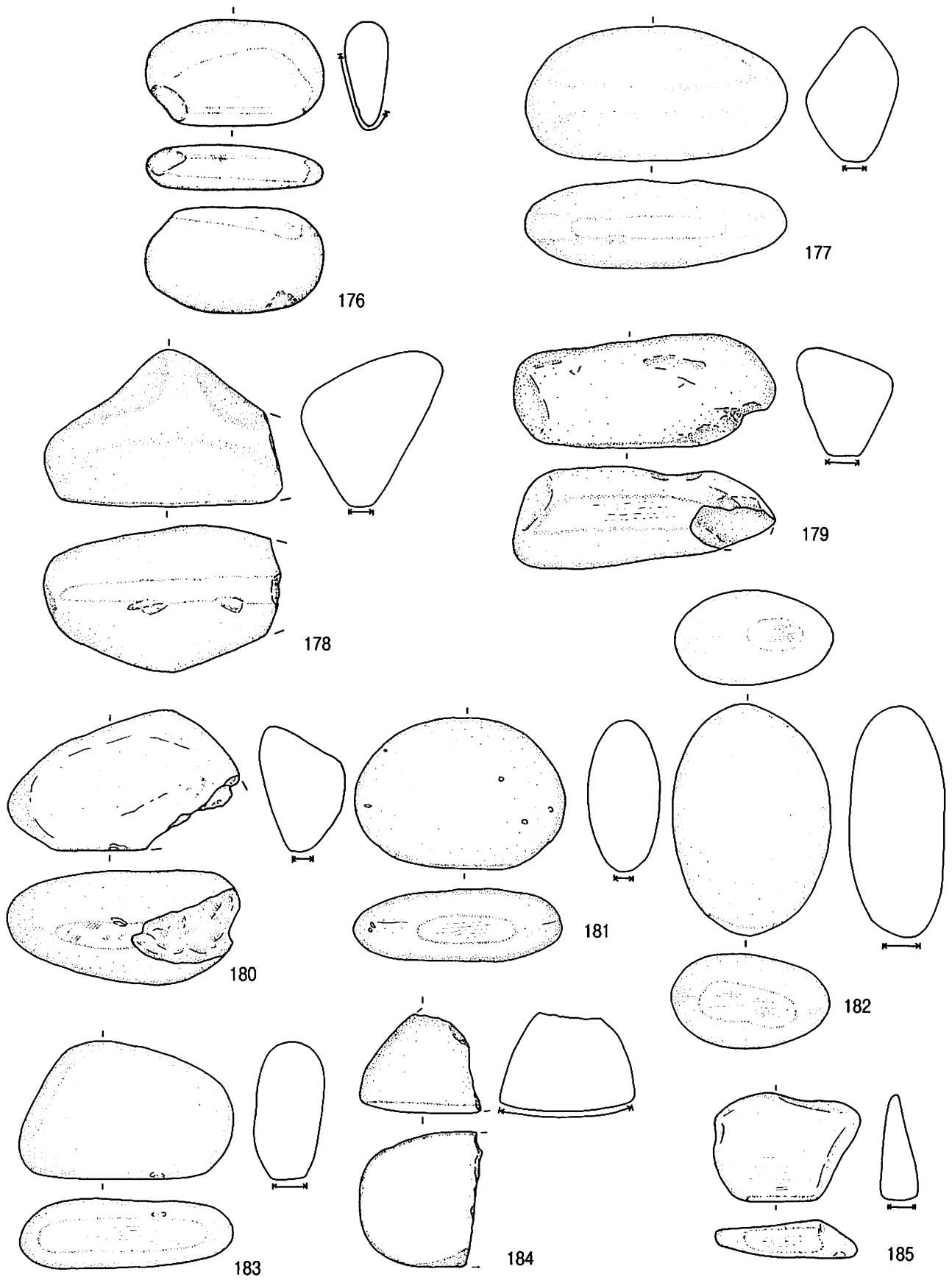
第43图 石器 (5)



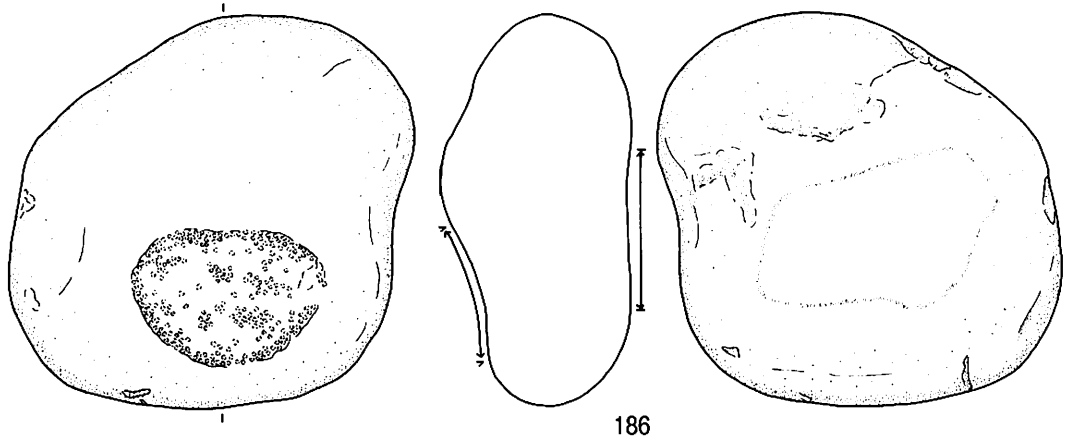
第44图 石器 (6)



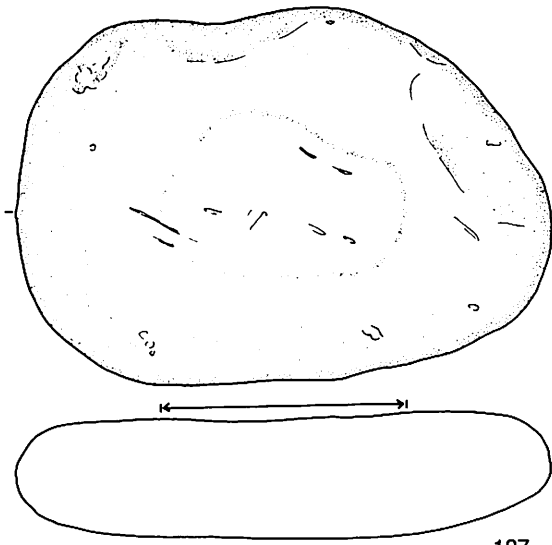
第45图 石器(7)



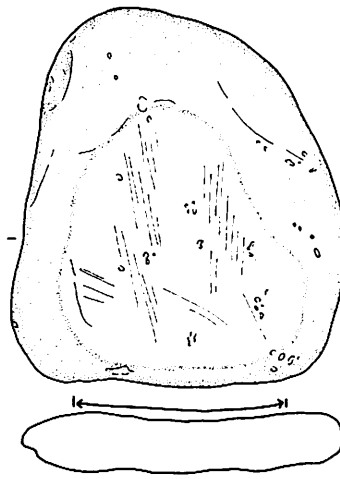
第46図 石器 (8)



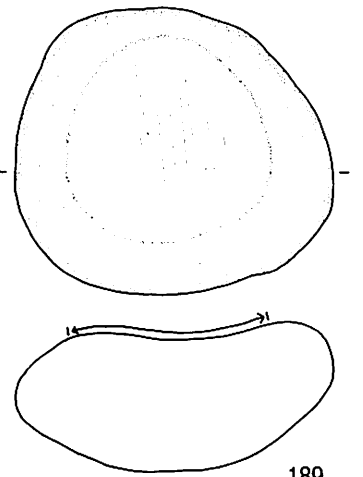
186



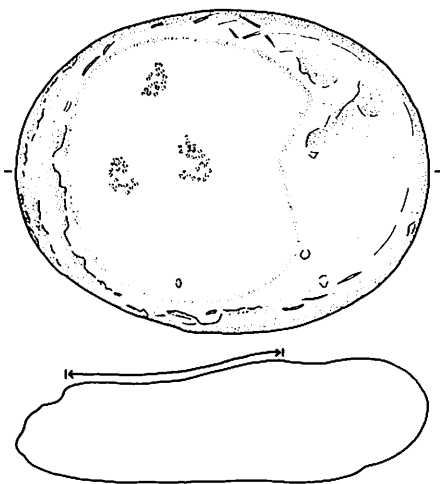
187



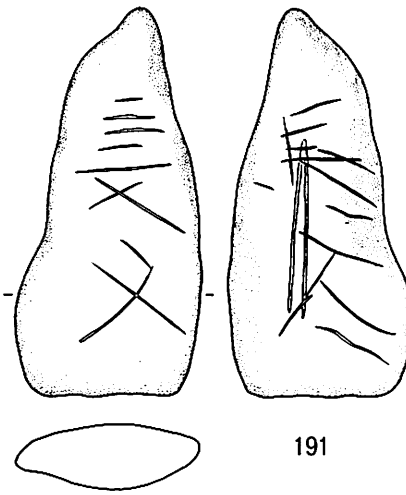
188



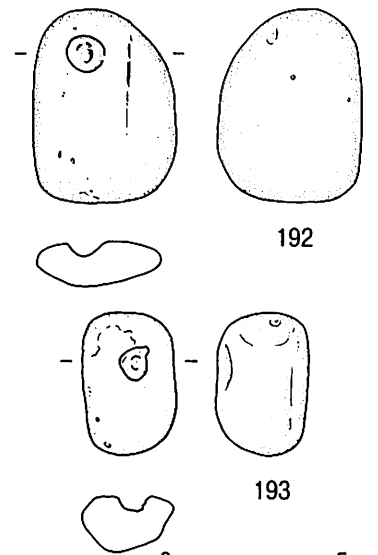
189



190



191

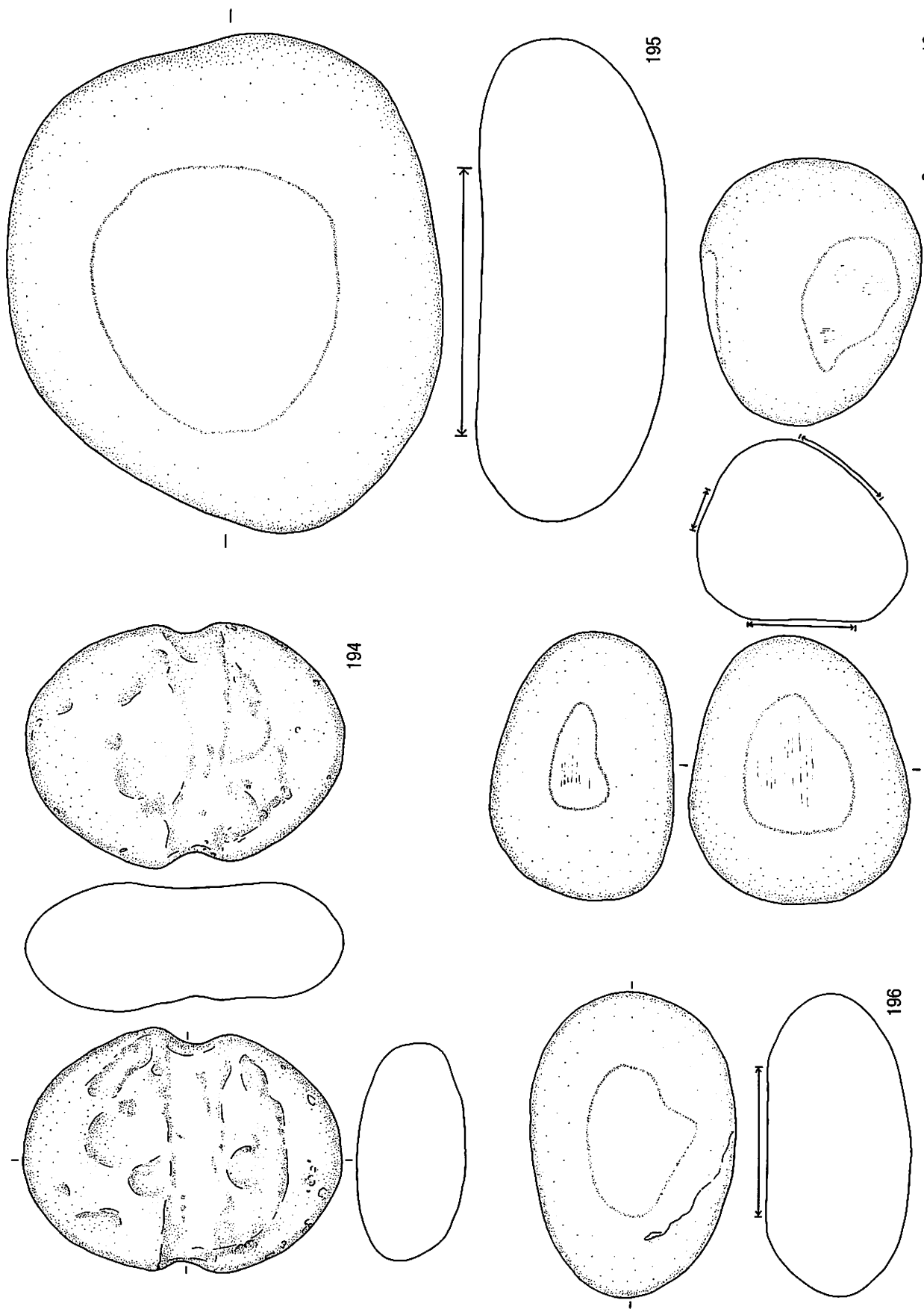


192

193

0 5 cm

第47图 石器(9)



第48图 石器 (10)

表Ⅱ-3 掲載石器一覽表(1)

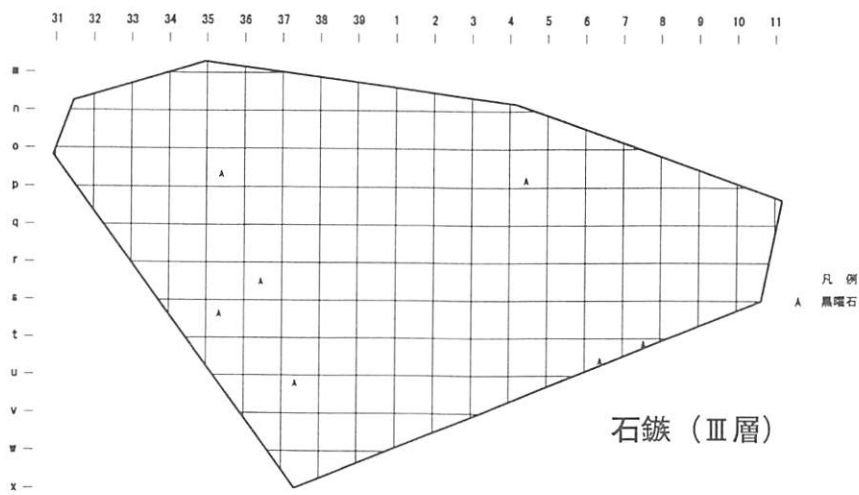
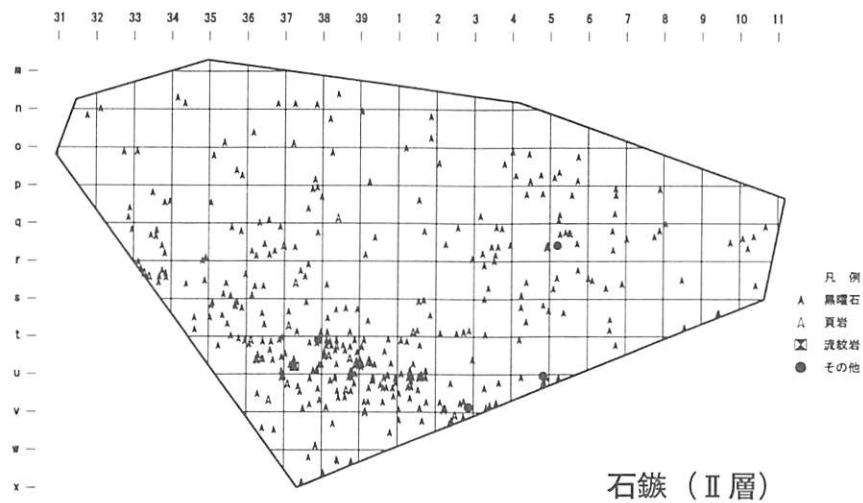
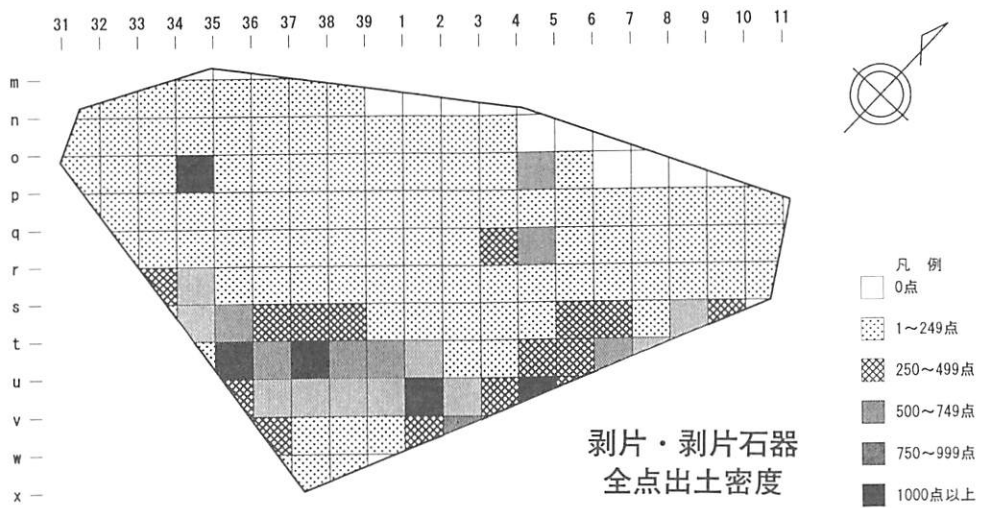
図版No	出土地点	層位	遺物No	分類	計測値				石質	備考
					長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重さ(g)		
第39図-1	t39b	II	153	石 鏃	1.5	0.65	0.3	0.2	黒曜石	三角形平基
第39図-2	v1b	I	1	石 鏃	1.8	1.5	0.3	0.6	黒曜石	三角形平基
第39図-3	u36c	II	8	石 鏃	2.1	1.6	0.4	0.9	頁岩	三角形平基
第39図-4	r6b	II	11	石 鏃	2.0	1.5	0.4	0.7	黒曜石	三角形平基
第39図-5	m37c	II	20	石 鏃	(2.2)	(1.7)	0.5	(1.0)	黒曜石	三角形平基
第39図-6	t35d	II	5	石 鏃	2.4	(1.5)	0.4	(0.8)	黒曜石	三角形平基
第39図-7	u39a	II	59	石 鏃	2.7	1.5	0.5	1.0	黒曜石	三角形平基
第39図-8	r33a	II	16	石 鏃	3.1	2.2	0.6	3.1	頁岩	三角形平基
第39図-9	u38b	II	20	石 鏃	3.0	2.1	0.5	2.4	黒曜石	三角形平基
第39図-10	t38c	II	3	石 鏃	2.1	1.4	0.3	0.5	黒曜石	三角形凹基
第39図-11	u38a	II	40	石 鏃	2.9	2.2	0.5	2.1	黒曜石	三角形凹基
第39図-12	s35a	II	453	石 鏃	3.0	2.0	0.5	2.0	黒曜石	三角形凹基
第39図-13	s9b	II	11	石 鏃	2.8	1.6	0.4	1.1	黒曜石	三角形凹基
第39図-14	s35c	II	910	石 鏃	3.7	2.6	0.8	(4.3)	黒曜石	三角形凹基
第39図-15	t38a	II		石 鏃	2.7	1.8	0.4	0.8	黒曜石	三角形凹基
第39図-16	s4d	II	6	石 鏃	3.0	1.9	0.7	2.1	黒曜石	三角形凹基
第39図-17	u38d	II	5	石 鏃	2.5	1.7	0.4	0.7	黒曜石	三角形凹基
第39図-18	t35d	II	50	石 鏃	2.8	2.1	0.4	1.2	黒曜石	三角形凹基
第39図-19	v1a	II	23	石 鏃	3.1	1.7	0.4	1.0	黒曜石	三角形凹基
第39図-20	t37a	II	76	石 鏃	2.9	1.5	0.5	1.4	黒曜石	三角形凹基
第39図-21	n37b	II	1	石 鏃	2.7	1.5	0.4	0.8	黒曜石	三角形凹基
第39図-22	q10b	II	9	石 鏃	2.7	1.5	0.4	0.8	黒曜石	三角形凹基
第39図-23	p32d	I	5	石 鏃	2.6	1.5	0.4	0.9	黒曜石	三角形凹基
第39図-24	t37b	II	24	石 鏃	3.3	2.2	0.7	3.6	流紋岩	三角形凹基
第39図-25	t36c	II		石 鏃	3.7	2.5	0.7	3.3	黒曜石	三角形凹基
第39図-26	q36c	II	13	石 鏃	3.2	1.9	0.6	1.8	頁岩	三角形凹基
第39図-27	t36c	II	12	石 鏃	3.4	(1.6)	0.5	(1.1)	黒曜石	三角形凹基
第39図-28	q5d	II	81	石 鏃	4.7	2.4	0.6	4.4	黒曜石	三角形凹基
第39図-29	m34b	II	4	石 鏃	2.5	1.4	0.3	0.8	黒曜石	三角形凹基
第39図-30	q32d	II	28	石 鏃	4.1	1.8	0.6	2.3	黒曜石	三角形凹基
第39図-31	r6b	II	34	石 鏃	3.9	1.1	0.4	1.4	黒曜石	三角形凹基
第39図-32	t38a	II	77	石 鏃	2.8	1.7	0.4	1.5	頁岩	無茎凹基
第39図-33	s1d	II	17	石 鏃	3.2	1.7	0.5	1.7	黒曜石	無茎凹基
第39図-34	o38a	II	7	石 鏃	4.5	1.8	0.5	1.6	黒曜石	無茎凹基
第39図-35	u4d	II	115	石 鏃	(3.2)	1.4	0.5	(2.1)	凝灰岩	無茎凹基
第39図-36	r10b	II	2	石 鏃	2.4	1.0	0.3	0.6	黒曜石	柳葉形
第39図-37	s35d	II	719	石 鏃	3.0	0.9	0.4	0.6	黒曜石	柳葉形
第39図-38	q33d	II	125	石 鏃	(4.7)	1.6	0.5	(2.4)	黒曜石	柳葉形
第39図-39	u4d	II	7	石 鏃	4.5	1.4	0.3	1.3	黒曜石	菱形
第39図-40	r36a	III	224	石 鏃	4.2	1.9	0.5	2.5	黒曜石	五角形
第39図-41	t37d	II		石 鏃	3.1	1.2	0.3	0.7	安山岩	五角形
第39図-42	m34b	II	7	石 鏃	2.5	1.6	0.4	0.9	黒曜石	有茎凸基
第39図-43	s1d	II	3	石 鏃	2.7	1.7	0.5	1.1	黒曜石	有茎凸基
第39図-44	s34d	II	195	石 鏃	3.2	1.5	0.5	1.3	黒曜石	有茎凸基
第39図-45	t2c	II	30	石 鏃	3.6	1.7	0.4	1.3	黒曜石	有茎凸基
第39図-46	q10d	II	4	石 鏃	3.9	1.5	0.5	1.8	黒曜石	有茎凸基
第39図-47	r8a	II	2	石 鏃	3.2	1.6	0.3	0.9	黒曜石	有茎凸基
第39図-48	q35d	II	6	石 鏃	(2.7)	1.3	0.3	(0.9)	黒曜石	有茎凸基
第39図-49	s4d	II	52	石 鏃	3.1	1.5	0.4	1.1	黒曜石	有茎凸基
第39図-50	p37d	II	1	石 鏃	(4.2)	1.9	0.7	(3.8)	黒曜石	有茎凸基
第40図-51	u38b	II	19	石 槍	5.0	2.6	0.4	3.6	黒曜石	無茎凹基 石器接合1
第40図-52	t3a	II	21	石 槍	5.7	2.7	0.8	7.7	黒曜石	菱形
第40図-53	t38a	II	78	石 槍	6.0	3.1	0.6	7.6	黒曜石	有茎凸基
第40図-54	t39a	II	249	石 槍	6.1	2.7	0.7	6.2	黒曜石	有茎凸基
第40図-55	o32c	II	10	石 槍	10.3	3.9	1.1	33.2	頁岩	
第40図-56	s36b	II	341	石 槍	7.7	2.8	1.9	23.6	安山岩	
第40図-57	n36			石 槍	9.6	2.3	0.9	(16.0)	頁岩	柳葉形 トレンチ
第40図-58	v2d	II	22	石 槍	5.9	1.7	1.2	8.8	黒曜石	
第40図-59	t7d	II	16	石 槍	6.2	2.2	0.8	6.6	黒曜石	有茎凸基
第40図-60	r33a	II	149	石 槍	7.9	3.4	0.9	14.8	頁岩	有茎凸基
第40図-61	r36d	I	1	石 槍	7.0	4.1	1.2	26.2	黒曜石	
第40図-62	q4c	II	201	石 錐	3.4	2.2	0.5	2.6	頁岩	
第40図-63	s38b	II	49	石 錐	6.0	3.2	0.9	14.8	流紋岩	
第40図-64	t36a	II		石 錐	5.0	1.8	1.1	7.5	玉髓	
第40図-65	r38a	II	3	石 錐	(3.3)	1.5	0.8	(3.3)	頁岩	
第40図-66	o37d	II	5	石 錐	3.8	1.5	0.8	3.5	頁岩	

表Ⅱ-3 掲載石器一覧表(2)

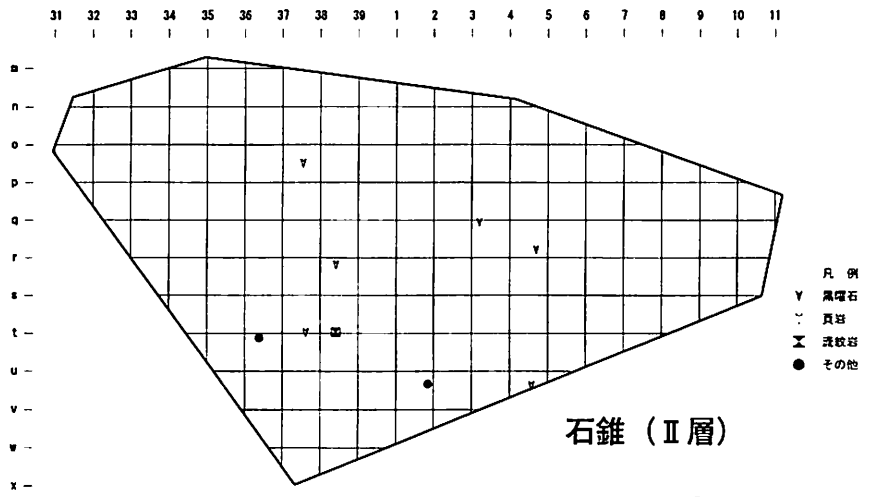
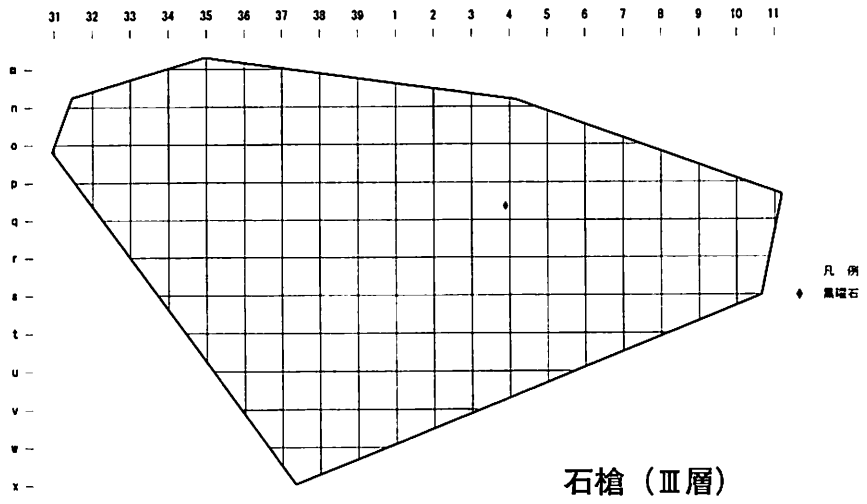
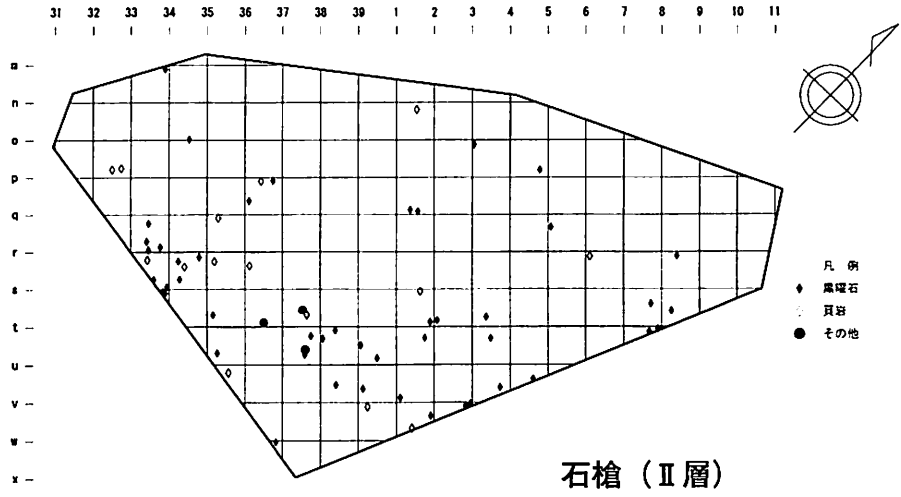
図版No	出土地点	層位	遺物No	分類	計測値				石質	備考
					長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重さ(g)		
第40図-67	s37c	Ⅱ	15	石錐	(2.0)	0.9	0.4	(0.8)	頁岩	
第40図-68	p7b	Ⅱ	1	つまみ付ナイフ	7.4	3.5	0.6	12.0	頁岩	
第40図-69	q36b	Ⅱ	55	つまみ付ナイフ	7.7	3.5	0.9	20.0	珪化岩	
第40図-70	r34c	Ⅱ	327	つまみ付ナイフ	7.6	3.5	0.8	19.0	珪化岩	
第40図-71	s34c	Ⅱ	366	つまみ付ナイフ	(7.2)	2.4	0.8	(11.4)	頁岩	
第40図-72	t35a	Ⅱ	49	つまみ付ナイフ	4.9	2.2	1.1	9.4	頁岩	
第40図-73	t39c	Ⅱ	137	つまみ付ナイフ	4.3	2.3	0.5	4.4	頁岩	
第40図-74	q34c	Ⅰ	1	つまみ付ナイフ	5.8	2.3	1.0	10.0	頁岩	
第41図-75	d 3 d	Ⅱ	147	つまみ付ナイフ	4.5	2.2	0.5	3.6	頁岩	
第41図-76	q4a	Ⅱ	224	つまみ付ナイフ	4.8	1.9	0.9	6.6	頁岩	
第41図-77	u36d	Ⅱ	16	つまみ付ナイフ	5.9	2.0	0.9	9.1	頁岩	
第41図-78	t36d	Ⅱ	44	つまみ付ナイフ	8.0	3.8	1.0	26.2	頁岩	
第41図-79	t3c	Ⅱ	23	つまみ付ナイフ	6.4	3.1	0.9	12.6	頁岩	
第41図-80	t4a	Ⅱ	11	つまみ付ナイフ	6.8	2.6	0.6	12.4	流紋岩	
第41図-81	s4b	Ⅱ	20	つまみ付ナイフ	6.5	3.0	0.9	12.4	頁岩	
第41図-82	t39a	Ⅱ	171	つまみ付ナイフ	6.7	2.2	0.8	9.6	チャート	
第41図-83	q3c	Ⅱ	64	つまみ付ナイフ	5.6	2.1	0.9	10.4	頁岩	
第41図-84	o2d	Ⅱ	2	つまみ付ナイフ	5.8	2.5	0.6	8.0	黒曜石	
第41図-85	q5b	Ⅱ	33	つまみ付ナイフ	5.6	2.4	0.7	7.2	頁岩	
第41図-86	v2a	Ⅱ	61	つまみ付ナイフ	(5.8)	2.8	0.6	(7.9)	頁岩	
第41図-87	u37d	Ⅱ	13	つまみ付ナイフ	4.4	2.5	0.8	8.6	黒曜石	
第41図-88	u38a	Ⅱ	4	つまみ付ナイフ	6.5	3.1	1.3	12.4	黒曜石	
第41図-89	u39b	Ⅱ		つまみ付ナイフ	(4.5)	2.9	0.6	(5.2)	流紋岩	
第41図-90	u39d	Ⅱ	62	つまみ付ナイフ	3.5	4.3	0.6	6.7	頁岩	
第41図-91	q4c	Ⅱ	225	スクレイパー	4.3	2.9	1.2	10.0	黒曜石	
第41図-92	t37c	Ⅰ		スクレイパー	5.5	2.7	1.6	15.6	頁岩	
第41図-93	t39b	Ⅱ		スクレイパー	6.3	3.1	1.2	21.2	黒曜石	
第41図-94	p35d	Ⅱ	1	スクレイパー	5.5	2.6	0.9	11.2	黒曜石	
第41図-95	s3b	Ⅱ	21	スクレイパー	5.8	2.1	1.2	11.4	安山岩	
第41図-96	u38d	Ⅱ		スクレイパー	5.5	2.1	0.7	5.6	流紋岩	
第41図-97	s1d	Ⅱ	16	スクレイパー	8.0	7.2	0.9	52.0	頁岩	
第42図-98	o36c	Ⅱ	11	スクレイパー	2.9	4.6	1.2	10.4	頁岩	
第42図-99	u38a	Ⅱ	3	スクレイパー	4.2	2.6	1.0	9.1	珪化岩	
第42図-100	t3c	Ⅱ	37	スクレイパー	5.4	3.1	1.3	12.8	黒曜石	
第42図-101	u4a	Ⅱ	75	スクレイパー	4.8	3.4	1.1	9.5	黒曜石	
第42図-102	uld	Ⅱ		スクレイパー	6.3	4.0	1.0	16.4	頁岩	
第42図-103	t7c	Ⅱ		スクレイパー	5.2	2.8	0.8	8.9	黒曜石	
第42図-104	v36a	Ⅱ	7	スクレイパー	5.4	5.4	1.2	17.2	黒曜石	
第42図-105	t36d	Ⅱ	9	スクレイパー	4.7	2.6	0.7	9.5	チャート	
第42図-106	n1a	Ⅱ	10	スクレイパー	5.6	2.9	0.9	12.4	頁岩	
第42図-107	p38b	Ⅱ	10	スクレイパー	6.8	2.1	0.5	9.2	頁岩	
第42図-108	t38c	Ⅱ		スクレイパー	4.7	3.1	0.9	11.0	チャート	
第42図-109	q4d	Ⅱ	170	スクレイパー	3.6	4.8	1.7	24.8	黒曜石	
第42図-110	t38c	Ⅱ		スクレイパー	5.1	2.6	1.4	15.0	黒曜石	
第42図-111	s36d	Ⅱ		スクレイパー	4.2	3.0	1.7	16.6	黒曜石	
第42図-112	r34b	Ⅱ		スクレイパー	3.8	3.1	0.7	6.0	黒曜石	
第42図-113	s35a	Ⅱ	596	スクレイパー	3.9	5.1	1.1	14.4	黒曜石	
第42図-114	r34d	Ⅱ		スクレイパー	4.1	3.8	1.8	26.4	黒曜石	
第42図-115	t36d	Ⅱ	93	スクレイパー	3.5	3.5	1.7	18.6	黒曜石	
第42図-116	r38b	Ⅱ	5	スクレイパー	4.7	5.1	1.5	32.6	黒曜石	
第42図-117	t2c	Ⅱ		両面調整石器	3.9	2.9	1.2	11.6	黒曜石	
第42図-118	t35d	Ⅱ	33	両面調整石器	12.6	7.3	2.5	174.0	安山岩	
第43図-119	t36a	Ⅱ	102	両面調整石器	4.5	2.9	1.3	12.0	黒曜石	
第43図-120	t38d	Ⅱ		両面調整石器	6.0	3.7	1.3	28.6	黒曜石	
第43図-121	t4b	Ⅱ		両面調整石器	5.4	3.0	2.1	23.0	黒曜石	
第43図-122	u3c	Ⅱ		両面調整石器	4.3	3.1	1.5	14.3	黒曜石	
第43図-123	u36d	Ⅱ		両面調整石器	4.5	2.5	1.8	11.2	黒曜石	
第43図-124	t38d	Ⅱ		Rフレイク	4.9	2.3	0.6	4.8	頁岩	
第43図-125	n38d	Ⅱ		Rフレイク	3.6	1.8	0.6	2.8	黒曜石	
第43図-126	u4a	Ⅱ		Rフレイク	6.2	2.4	0.7	7.8	黒曜石	
第43図-127	u2c	Ⅱ	157	Rフレイク	6.0	3.0	0.9	12.2	頁岩	
第43図-128	t38b	Ⅱ		Rフレイク	4.7	2.3	0.5	2.9	黒曜石	
第43図-129	w38b	Ⅱ	17	Rフレイク	3.3	2.6	0.5	4.3	流紋岩	
第43図-130	s4b	Ⅱ	30	Rフレイク	5.1	2.1	0.7	4.9	黒曜石	
第43図-131	t36a	Ⅱ		Rフレイク	2.9	2.1	0.6	2.3	黒曜石	
第43図-132	n38b	Ⅱ		Rフレイク	3.4	2.7	0.9	4.9	頁岩	

表Ⅱ-3 掲載石器一覧表(3)

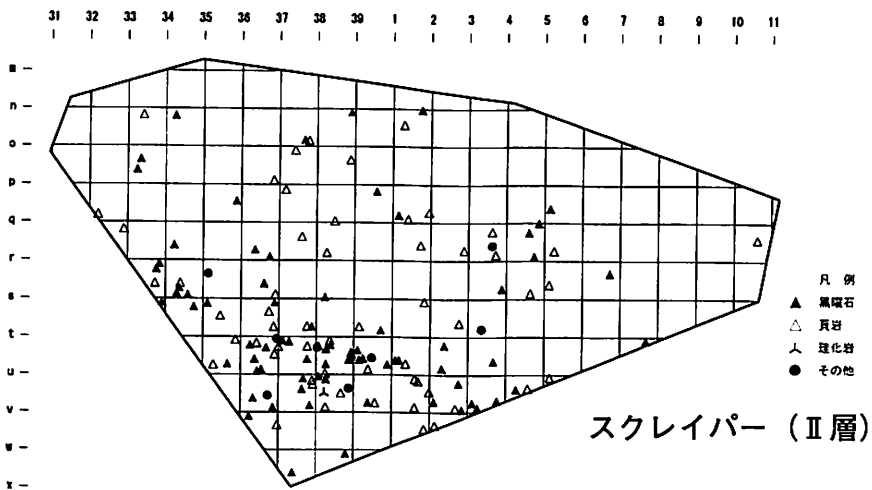
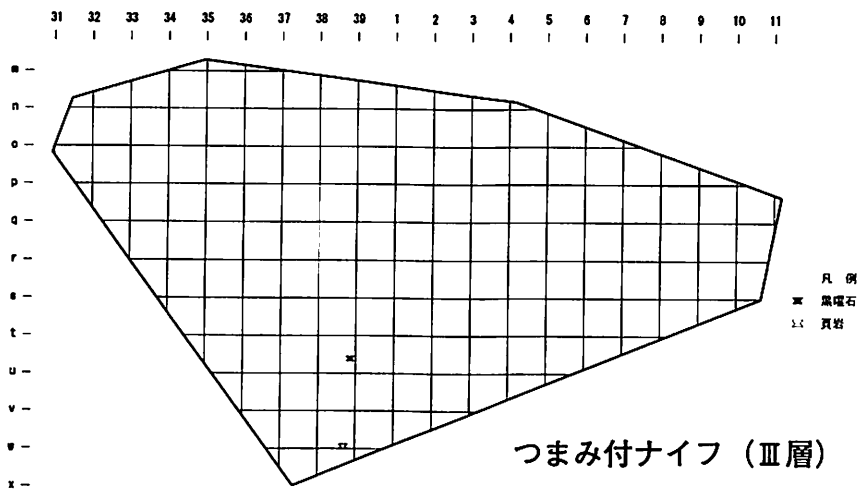
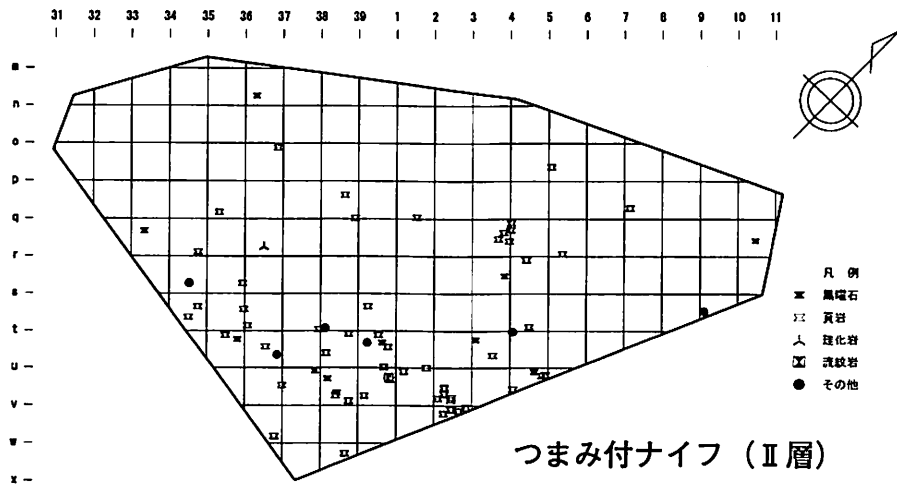
図版No	出土地点	層位	遺物No	分類	計測値				石質	備考
					長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重さ(g)		
第43図-133	q2c	Ⅱ	2	Rフレイク	3.4	3.2	0.5	2.9	黒曜石	
第43図-134	u39a	Ⅱ	110	Rフレイク	3.3	2.3	0.7	3.3	黒曜石	
第43図-135	t38b	Ⅱ		Rフレイク	3.7	2.3	0.5	2.8	黒曜石	
第43図-136	o4d	Ⅱ		Rフレイク	2.9	3.3	0.8	5.9	黒曜石	
第43図-137	r1b	Ⅱ	2	Rフレイク	2.9	2.2	0.6	2.2	黒曜石	
第43図-138	u38a	Ⅱ	57	Rフレイク	3.1	4.3	0.7	6.1	黒曜石	
第43図-139	t5a	Ⅱ	16	Rフレイク	2.0	3.4	0.7	2.5	黒曜石	
第43図-140	u39c	Ⅱ		Rフレイク	2.8	1.9	0.4	2.3	黒曜石	
第43図-141	r9d	Ⅱ		Rフレイク	2.7	1.3	0.4	1.6	黒曜石	
第43図-142	s9d	Ⅱ		Rフレイク	2.7	1.9	0.7	3.3	黒曜石	
第43図-143	t39a	Ⅱ		Rフレイク	2.5	2.6	0.6	4.2	黒曜石	
第43図-144	r2a	Ⅱ		石核	4.4	5.8	4.1	94.5	頁岩	
第43図-145	t39b	Ⅱ		石核	4.1	7.0	3.5	100	黒曜石	
第44図-146	s36c	Ⅱ		石斧	(9.1)	3.7	2.6	(126.0)	緑色片岩	
第44図-147	u36c	Ⅱ	6	石斧	(9.0)	4.9	1.9	(149.0)	緑色泥岩	
第44図-148	p36d	Ⅱ	5	石斧	(8.5)	4.5	2.0	(100.0)	緑色泥岩	
第44図-149	n31d	Ⅱ	10	石斧	(7.8)	3.3	1.0	(42.8)	緑色泥岩	
第44図-150	u3d	Ⅱ	22	石斧	(7.1)	4.6	2.5	(110.0)	片岩	
第44図-151	v37a	Ⅱ	6	石斧	(9.8)	(3.5)	3.0	(187.0)	緑色泥岩	
第44図-152	t36a	Ⅱ	43	石のみ	(4.3)	1.6	1.4	(12.4)	変蛇紋岩	
第44図-153	t4d	Ⅱ	44	擦切り残片	11.2	2.7	2.6	114.0	蛇紋岩	
第44図-154	v2b	Ⅱ		擦切り残片	5.0	4.4	1.8	8.8	ロジン岩	
第44図-155	q33a	Ⅱ	140	擦切り残片	(6.6)	(1.4)	(1.3)	(11.6)	蛇紋岩	
第44図-156	r38d	Ⅱ		石錘	7.5	5.8	2.3	110.0	安山岩	
第44図-157	t39a	Ⅱ	354	石錘	5.1	4.4	1.2	32.2	流紋岩	
第44図-158	表採			石錘	11.2	8.8	2.5	290.0	安山岩	
第44図-159	s35a	Ⅱ		砥石	9.2	8.2	4.1	235.0	砂岩	
第44図-160	u36a	Ⅱ		砥石	(5.8)	5.2	5.1	(135.0)	砂岩	
第44図-161	t36a	Ⅱ		砥石	(10.1)	(10.0)	(1.1)	(118.0)	粘板岩	石器接合2
第44図-162	r35c	Ⅱ		砥石	14.5	8.5	5.5	498.0	砂岩	
第45図-163	q3a	Ⅱ		たたき石	14.8	8.1	5.5	933.0	チャート	
第45図-164	q3d	Ⅱ		たたき石	11.9	7.3	5.6	640.0	チャート	
第45図-165	q3d	Ⅱ		たたき石	11.9	8.6	6.0	817.0	チャート	被熱あり
第45図-166	q3d	Ⅱ		たたき石	12.8	5.7	4.7	433.0	チャート	
第45図-167	t4c	Ⅱ	46	たたき石	10.9	7.6	5.3	590.0	チャート	
第45図-168	t39c	Ⅱ		たたき石	16.0	6.2	2.5	273.0	流紋岩	
第45図-169	v1d	Ⅱ		たたき石	8.7	5.6	3.3	225.0	チャート	
第45図-170	q3d	Ⅱ		たたき石	13.4	4.3	3.5	248.0	流紋岩	
第45図-171	q3d	Ⅱ		たたき石	12.1	9.3	4.6	682.0	チャート	
第45図-172	q3d	Ⅱ		たたき石	10.3	7.6	3.6	370.0	チャート	
第45図-173	s35a	Ⅱ		たたき石	12.9	6.5	4.0	500.0	安山岩	
第45図-174	r33d	Ⅱ		くほみ石	12.2	4.8	3.3	177.0	流紋岩	
第45図-175	r35a	Ⅱ		くほみ石	16.0	7.3	3.5	382.0	流紋岩	石器接合3
第46図-176	v1c	Ⅱ		石鏃	9.7	6.0	2.5	175.0	流紋岩	被熱あり
第46図-177	s35d	Ⅱ		すり石	14.2	7.4	4.9	650.0	安山岩	
第46図-178	s36b	Ⅱ		すり石	(12.7)	8.5	8.0	(872.0)	安山岩	
第46図-179	s34d	Ⅱ		すり石	14.2	6.2	5.6	595.0	安山岩	
第46図-180	s35d	Ⅱ		すり石	11.3	8.2	4.0	550.0	安山岩	
第46図-181	s35d	Ⅱ		すり石	12.6	7.7	6.2	560.0	流紋岩	
第46図-182	t38c	Ⅱ		すり石	12.6	8.6	5.1	787.0	安山岩	
第46図-183	t39b	Ⅱ		すり石	11.6	7.5	3.8	450.0	安山岩	
第46図-184	s35a	Ⅱ	355	すり石	(6.6)	(5.4)	7.4	(296.0)	安山岩	
第46図-185	s35c	Ⅱ		すり石	8.0	5.9	2.0	135.0	流紋岩	
第47図-186	s35b	Ⅱ		台石	15.8	16.1	7.6	2735.0	安山岩	
第47図-187	q32d	Ⅱ		石皿	21.5	15.1	5.1	1662.0	流紋岩	
第47図-188	s35a	Ⅱ		石皿	15.2	13.4	2.4	525.0	流紋岩	
第47図-189	s38c	Ⅱ		石皿	12.8	11.5	6.0	1240.0	安山岩	
第47図-190	m36c	Ⅱ		石皿	16.5	13.0	4.9	1410.0	安山岩	
第47図-191	s5b	Ⅱ		石製品	15.6	7.3	2.6	407.0	安山岩	
第47図-192	r35d	Ⅱ	353	自然礫	5.1	3.8	1.2	33.0	流紋岩	S=1/2
第47図-193	r35d	Ⅱ	354	自然礫	3.8	2.5	1.5	21.0	蛇紋岩	S=1/2
第48図-194	r4d	Ⅱ	47	石錘	22.5	17.5	9.0	4000.0	安山岩	S=1/4
第48図-195	q5b			石皿	35.2	30.6	13.4	20800.0	安山岩	S=1/4 トレンチ出土
第48図-196	s36c	Ⅱ		石皿	21.6	14.5	10.6	4200.0	安山岩	S=1/4
第48図-197	s35a	Ⅱ		石皿	19.0	15.6	12.7	5300.0	安山岩	S=1/4



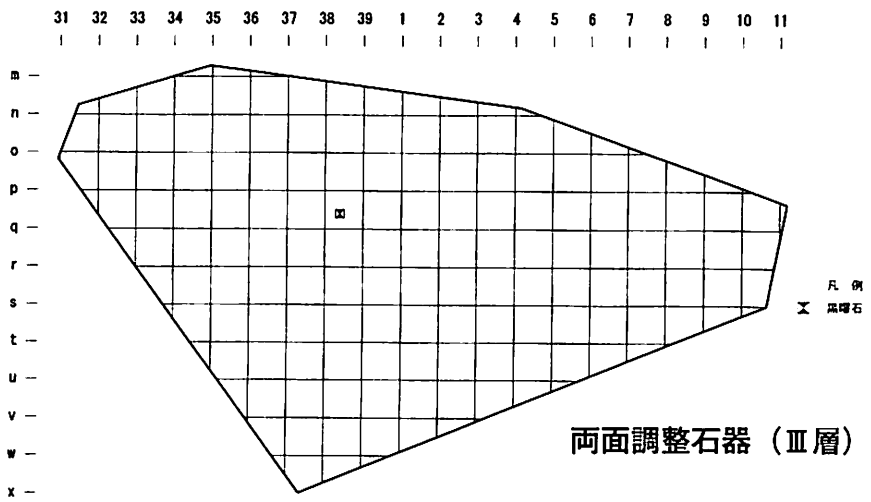
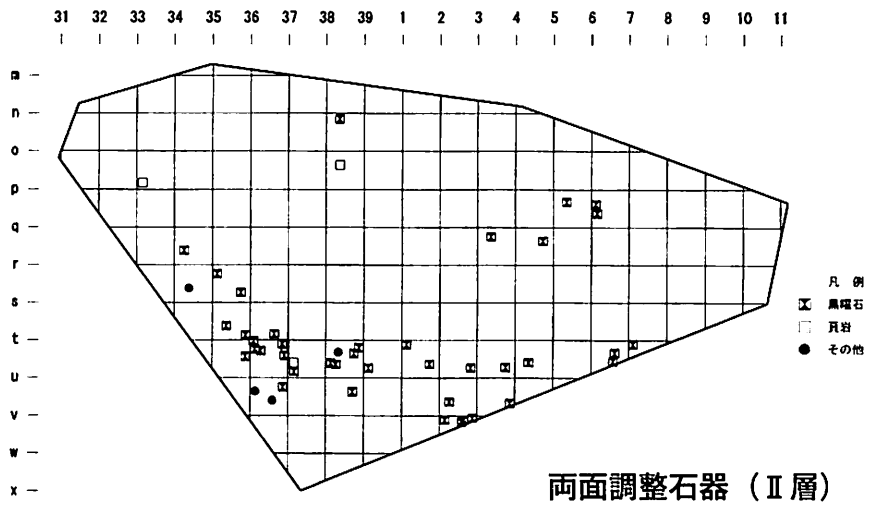
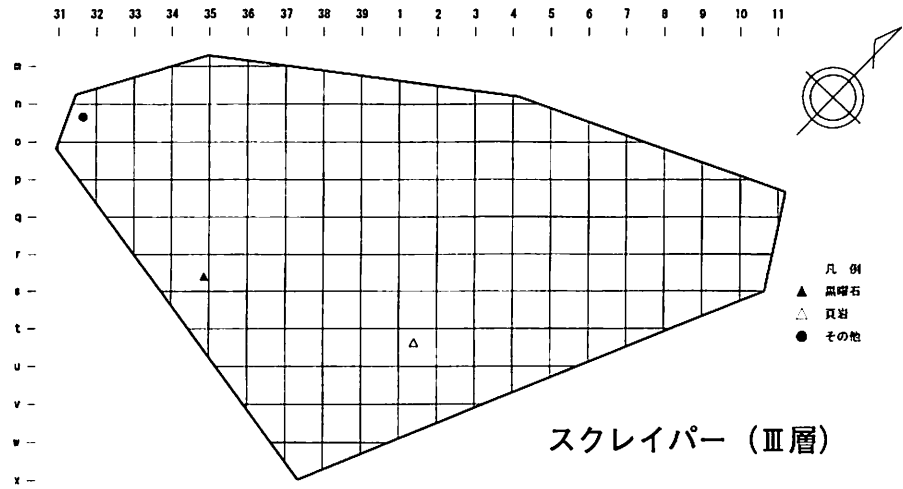
第49図 剥片石器・礫石器分布図 (1)



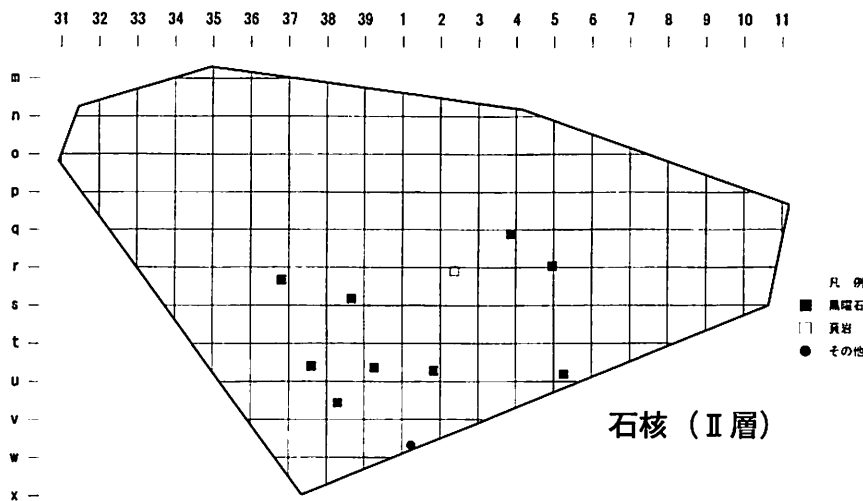
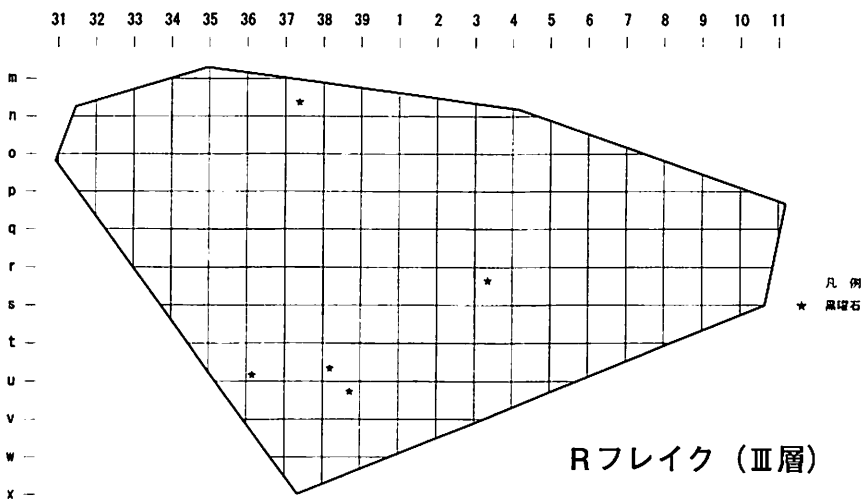
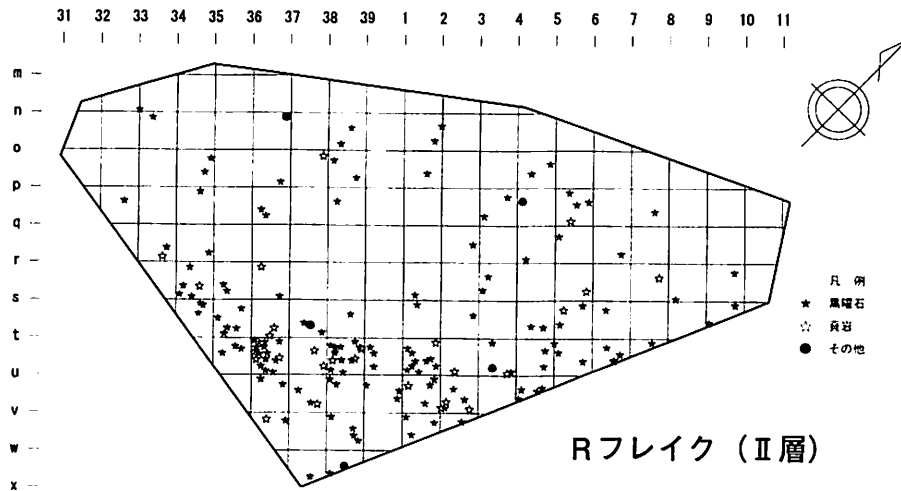
第50図 剥片石器・礫石器分布図 (2)



第51図 剥片石器・礫石器分布図 (3)

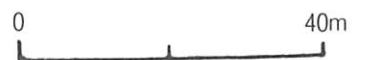
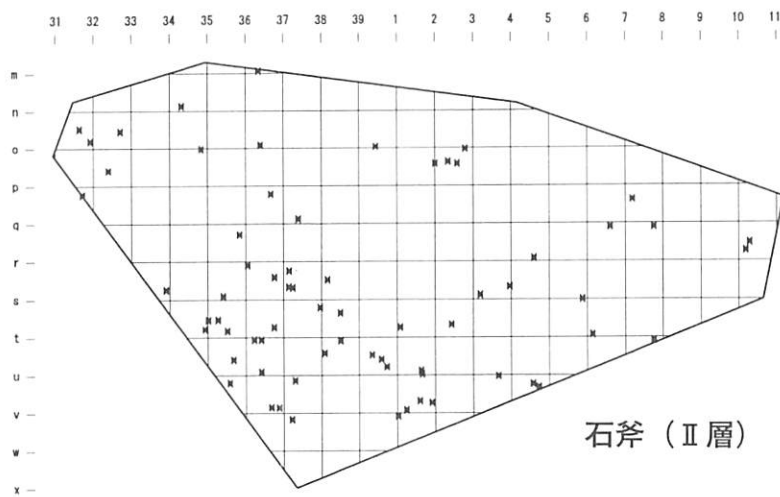
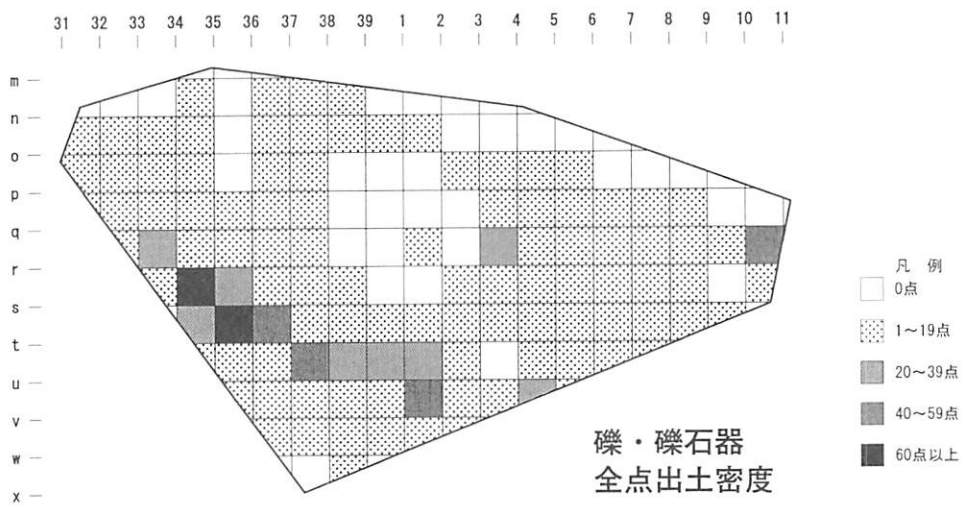
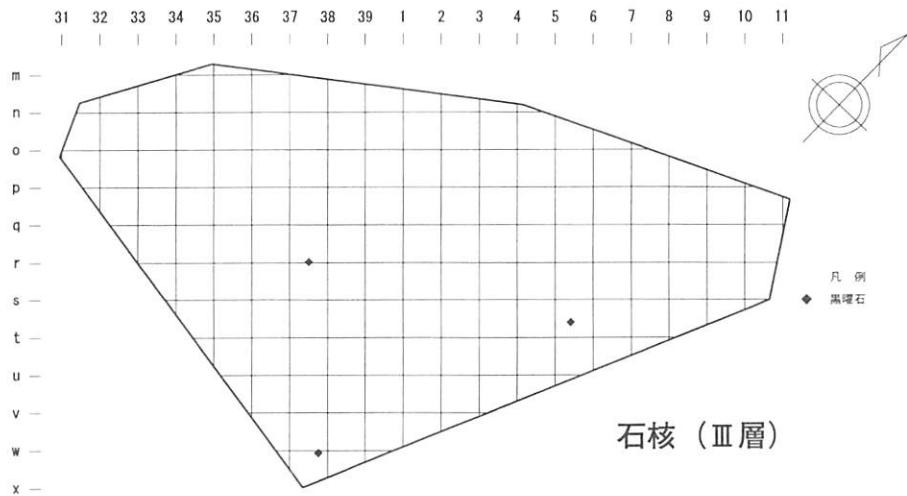


第52図 剥片石器・礫石器分布図 (4)

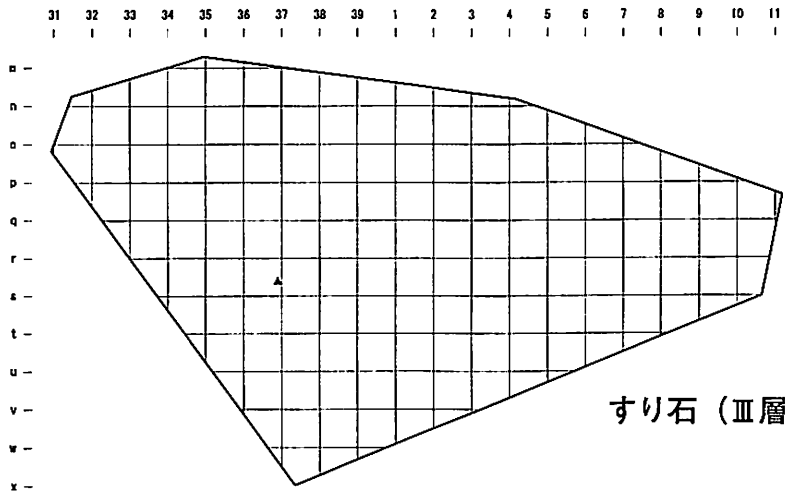
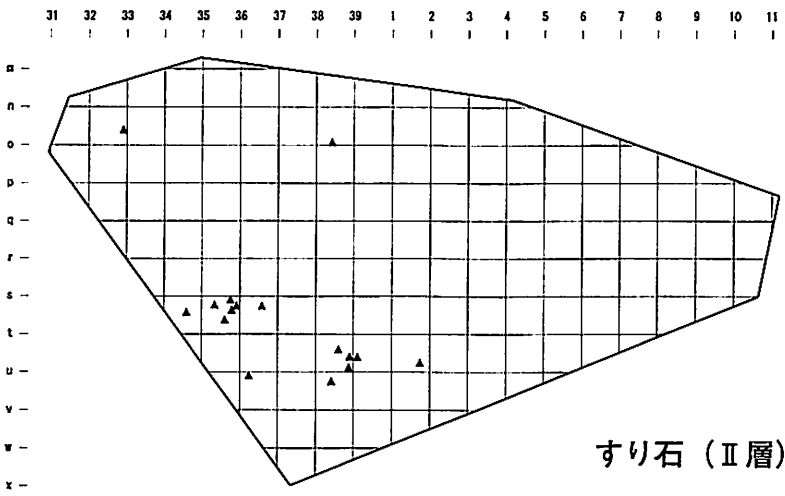
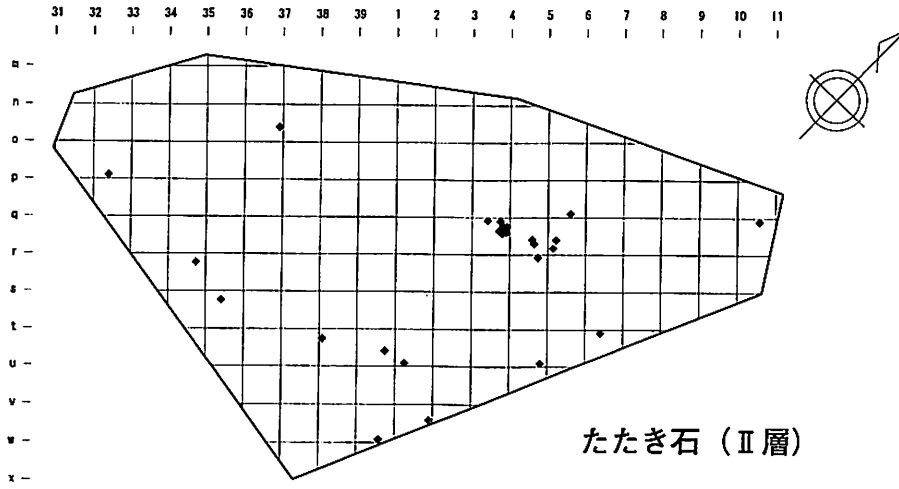


0 40m

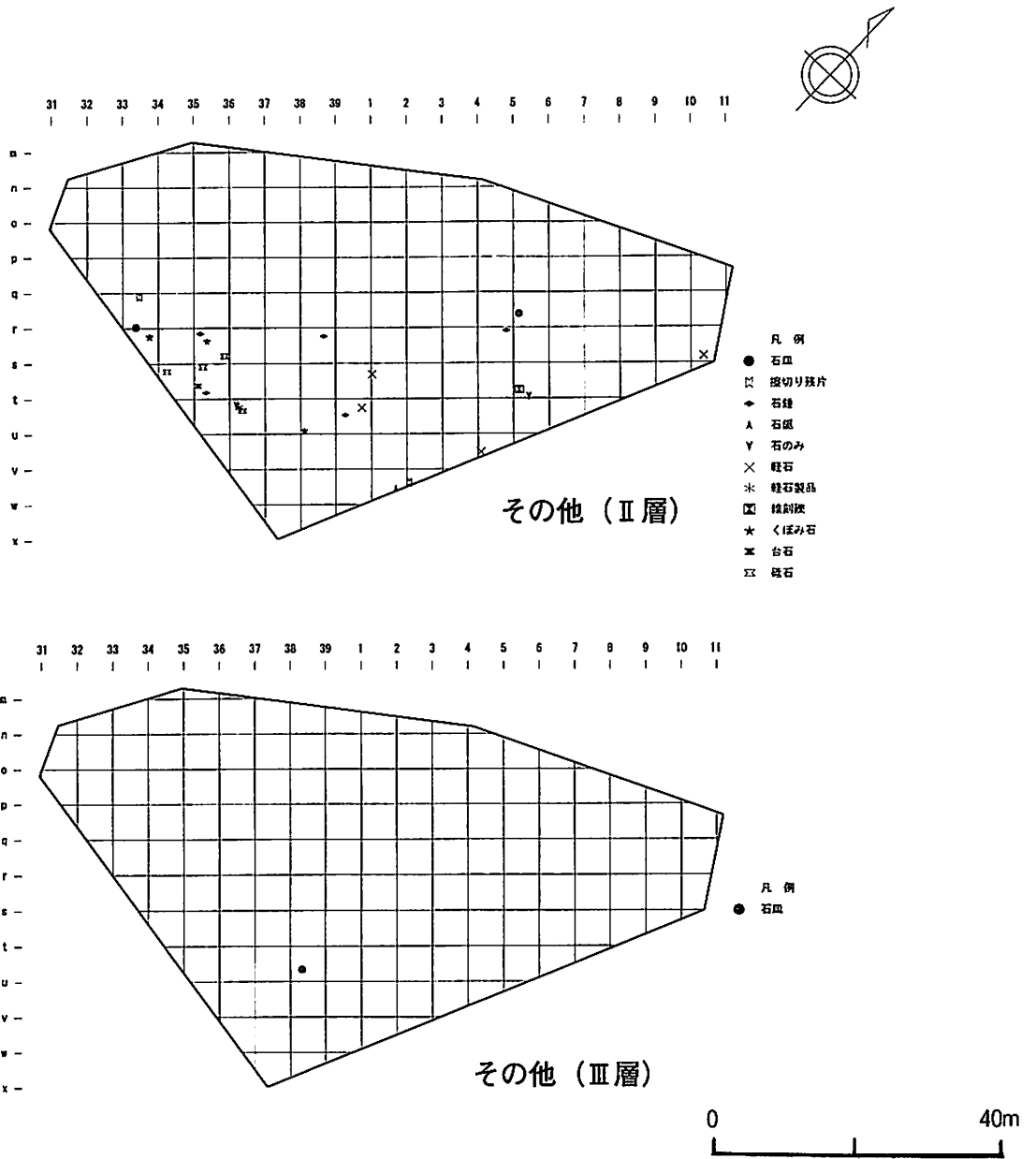
第53図 剥片石器・礫石器分布図 (5)



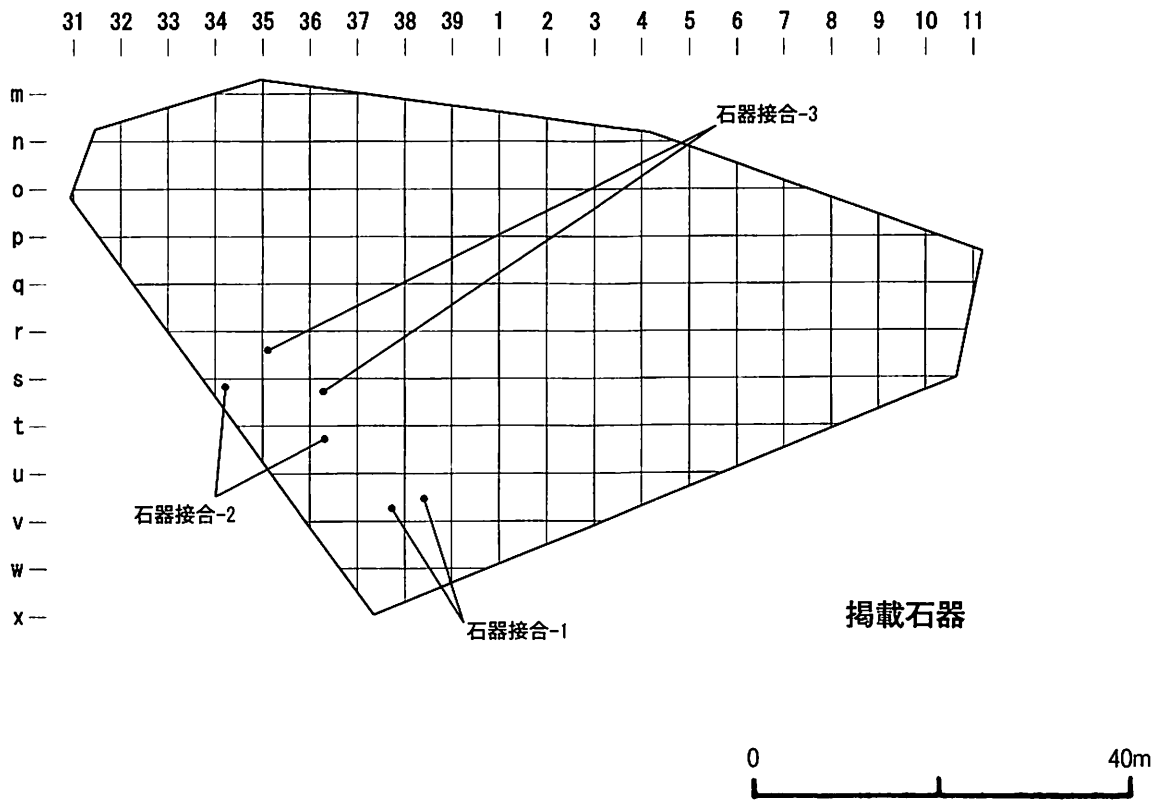
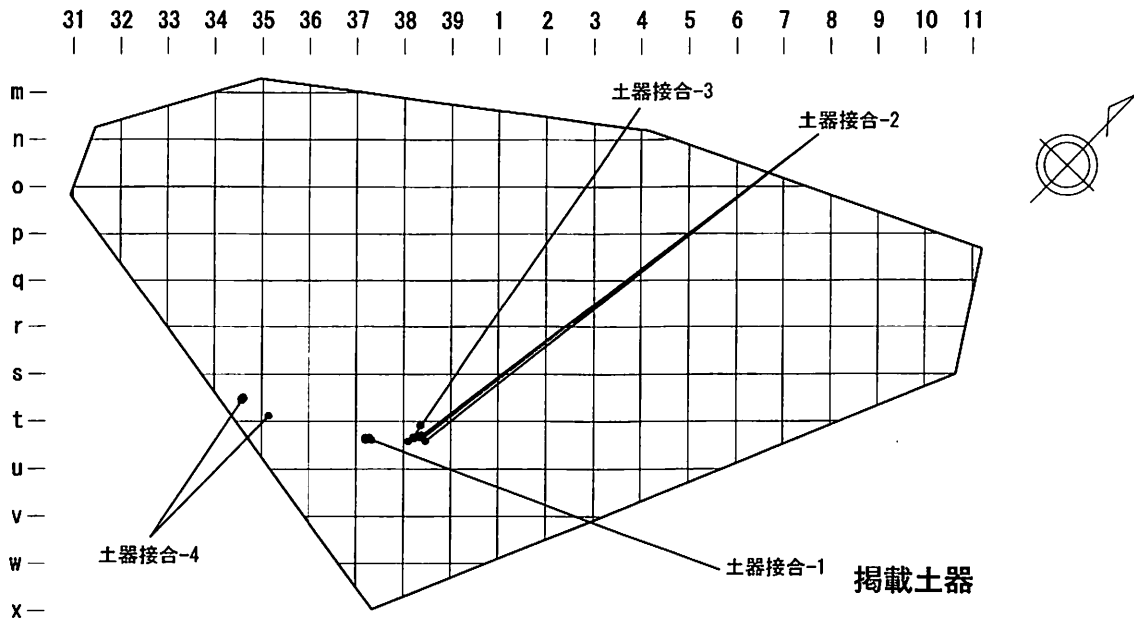
第54图 剥片石器・礫石器分布图 (6)



第55図 剥片石器・礫石器分布図 (7)



第56図 剥片石器・礫石器分布図 (8)



第57図 接合相関図

表Ⅱ-4 出土遺物一覽表

	土 器						石 器																		合 計						
	I 群	II 群	III 群	V 群	VI 群	石 鏃	石 槍	石 錐	つまみ付ナイフ	スクレイパー	両面調整石器	Rフレイク	石 核	原 石	剥 片	石 斧	石 のみ	たたき石	すり石	石 錘	石 鋸	砥 石	石 皿	磔 片		擦 切 り 残 片	線 刻 礫	く ぼ み 石	台 石		
HP-1	36	279	3			5			1	1	3	3			852			3													1202
HP-2	3	34	5									1			49			20	1						2					115	
HP-3	603					1						2			47					1										671	
TP-1															1	1									2					4	
磔集中1																		20							3					23	
磔集中2		6										1						11				1		5						24	
一括土器		221																												221	
FC-3															758															758	
FC-4															1093															1093	
FC-5															1109															1109	
I 層	14		10			8	1		3	5	3	7	3		931	3		2						11	1				1002		
II 層	6472	1324	1452	9	2	369	65	9	71	142	49	178	11	3	35189	72	2	25	16	5	1	4	12	592	218	3	1	3	1	46300	
III 層	122	7	31			7	1		2	3	1	5	1		986				1			1		11	5				1184		
表 採	76	6	35	1		11			2	2	2	3			1046				3	1				53	9				1250		
その他	13	1	10			1				1		1																		27	
合 計	7339	1878	1546	10	2	402	67	9	79	154	58	200	16	3	42061	76	2	81	21	7	1	4	14	712	233	3	1	3	1	54983	

表Ⅱ-5 出土土器比率

I 群	II 群	III 群	V 群	VI 群	合計
7,339点	1,878点	1,546点	10点	2点	10,775点
68.11%	17.43%	14.35%	0.09%	0.02%	100.00%

表Ⅱ-6 出土石器比率

石 鏃	石槍又はナイフ	石 錐	つまみ付ナイフ	スクレイパー	両面調整石器	Rフレイク	石 核	原 石	剥 片
402点	67点	9点	79点	154点	58点	200点	16点	3点	42,061点
0.909%	0.152%	0.020%	0.179%	0.348%	0.131%	0.452%	0.036%	0.007%	95.143%

石 斧	石のみ	たたき石	すり石	石 錘	石 鋸	砥 石	石 皿	磔	磔 片
76点	2点	81点	21点	7点	1点	4点	14点	712点	233点
0.172%	0.005%	0.183%	0.048%	0.016%	0.002%	0.009%	0.032%	1.611%	0.527%

擦切り残片	線刻礫	くぼみ石	台 石	合 計
3点	1点	3点	1点	44,208点
0.007%	0.002%	0.007%	0.002%	100.000%

第三章 登町 13 遺跡

1. 概要

登町13遺跡は標高6m前後を測る登川沖積低地上、登町4遺跡が所在する丘陵の南西側突端の断崖下縁辺に広がる低地に位置する。西側に登川、北側および東側に農業用の用水路が走り、元來水はけが悪く、農業用地として活用される以前はヨシ等が茂る湿地を形成していた。現状ではスゲやエノコログサ、セイヨウタンポポ等の雑草が繁茂している。かつては湿地を形成し水田として利用されていたが、暗渠排水等により土地改良を行い、畑作やブドウ畑として使われていた。現在は休耕地となっており、雑草の繁茂が著しい。調査区の平面形は北東～南西方向に50mの長軸を持つ長方形を呈し、面積は1,600㎡を測る。遺物の出土状況としては、河川の氾濫の影響を受け遺物が本来の位置から移動しており、調査区北東半分に各遺物が寄っている傾向が看取され、特に北側のA7グリッド周辺に集中し、6ラインから南西側半分については、遺物は皆無である。また、土器については水流や土砂に揉まれ、脆弱な上に縁辺や表面は著しく摩耗し文様は不明瞭である。その胎土や器厚等から縄文時代晩期のものと思われるが判然としない。

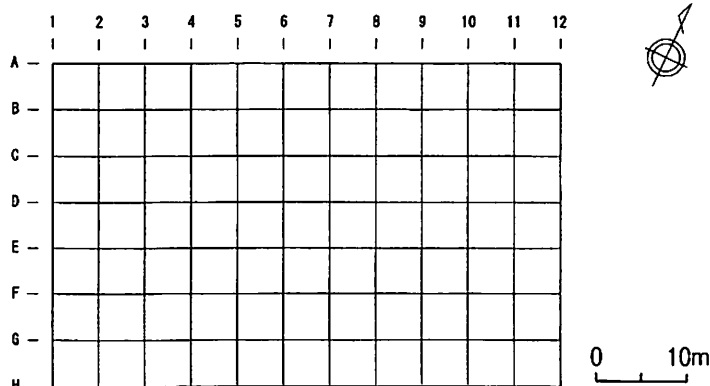
グリッドについては登町4遺跡とは別に設定し、高速自動車道（延伸部分）のセンターライン上の基準点855+00（X座標-90718.848 Y座標46641.656）と854+00（X座標-90764.369 Y座標46552.629）の2点を結んだ直線を基準として、基準点855+00が南東隅のライン交点となるように直交するグリッドライン（北西-南東方向）を設定した。各グリッドラインには北西-南東方向にアルファベットA～H、南西-北東方向に算用数字1～12を付し、各グリッドの規格は5×5mとし、呼称は北西隅のライン交点で表示した（第58図）。

遺物包含層上の表土・耕作土層の除去については、暗渠排水管が調査区内に縦横に埋設され、現在もその機能が失われると周辺の畑や住宅に影響が出かねないことから重機の使用は避け、主にスコップを使用し、部分的に移植ゴテ・手鍬等を使用し人力にて掘削した。掘削により発生した廃土については、調査区南西側へ運び、NEXCO東日本北海道支社および施工業者である中山組の協力により重機での整地を行い土砂の流出を防いだ。また、調査区内は水はけが悪いため降雨後は雨水が溜まり、その後の作業に支障をきたすため水中ポンプを使用し排水を行った。

事務所・物置・休憩所として使用する仮設ハウスについては、調査区南側に隣接するよう設置し、屋外に熱中症対策のため、農業用の日除けネットを使用し仮設の休憩場所を設け、適宜水分を補給しながら休憩をとった。また調査区までの進入路が現在進行中の高速道路工事にて使用している工事車両通行用の仮設道路のみのため、

電気・水道ともに引くことは難しく、電気については小型の発電機にて、水道については登町4遺跡と同様にワゴン車にて運搬し使用した。作業従事者の通勤についても、登町4遺跡と同様に送迎バスを運行し、仮設道路進入時には優先的に通行できるようNEXCO東日本北海道支社に便宜を図って頂いた。

（小川）



第58図 グリッド配置図

2. 基本層序

土層の堆積状態の確認については、東-西方向（第60・61図、a-b）、北-南方向（第62・63図、c-d、e-f）、の3ヶ所で観察した。a-bラインのA1、A6、A11の3ヶ所を表土面から約150cmまで掘削し確認を行った。土層は大きく3つに分けて上から順にI~III層とし、さらにII層を11層（a-k）に細分した。遺物が出土した層位はII a層、II b層、II c層、II f層である。

水はけが悪く、暗渠が張り巡らされており以前畑として利用された痕跡が看取される。試掘調査時のトレンチ溝が縦横に走る。層序は場所により異なるが、基本的に以下のように分類・整理される。

I層：表土・耕作土。調査区全域に亘って見られる。暗褐色土。層厚は5~20cm。

II a層：黒褐色~暗褐色シルト。調査区東側~南東側に見られる。層厚は5~30cm。剥片が出土。

II b層：灰褐色シルト、灰黄褐色シルト。層厚は5~50cm。一部上面に褐色シルトの溜りが見られる。

石鏃・両面調整石器・剥片・砥石破片が出土している。

II c層：灰黄褐色砂質シルト~にぶい黄褐色砂質シルト。層厚は5~40cm。調査区全域に亘って見られ、一部で細粒砂の比率が上がる。斑状に褐色の混じりが見られる。スクレイパー、Rフレイク、陶磁器、剥片が出土している。

II d層：にぶい黄褐色~黄褐色砂。層厚は10~40cm。調査区北西側にのみ見られる。II c層と比較して粗い砂である。一部斑状に褐色砂が混じる。

II e層：緑灰色砂質シルト。深さ70cm以下にて見られる。

II f層：鈍い黄褐色砂~褐色砂。層厚は10~50cm。φ1mm~2mmの粗粒砂と砂鉄を含む。V群の土器片、石鏃、剥片等が出土している。

II g層：にぶい黄褐色砂質~灰黄褐色砂質シルト。層厚は10~40cm。一部で細粒砂の比率が上がる。

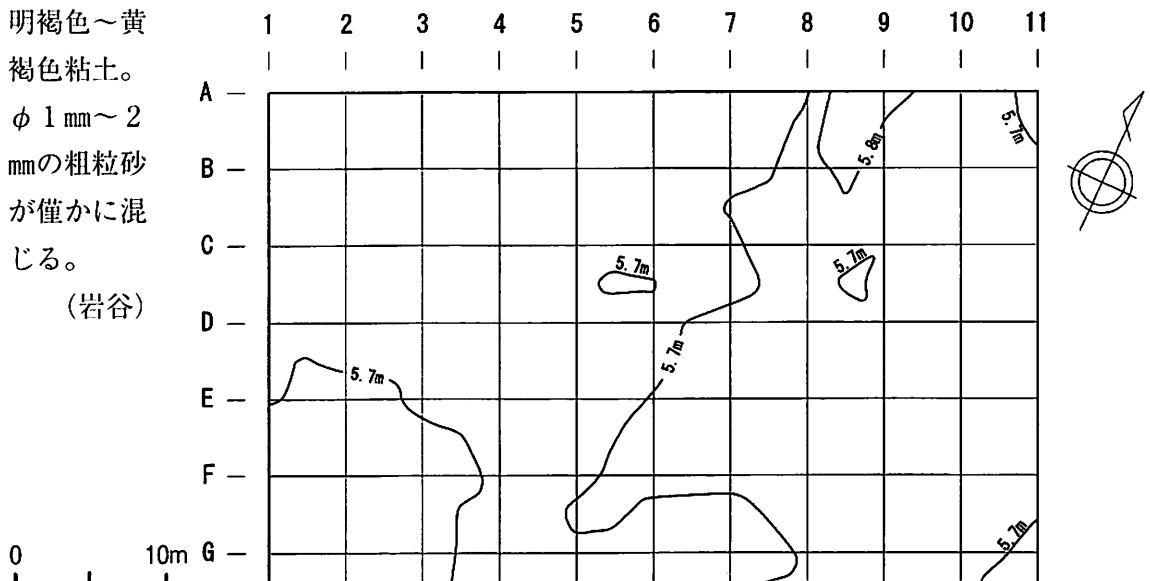
II h層：褐色砂~明褐色砂。層厚は10~20cm。北側にのみ見られ、主にII f層の下部に薄く堆積する。φ1mm~2mmの粗粒砂や、斑状に褐色が混じる。

II i層：褐色~明褐色砂質シルト、層厚は10~30cm。砂鉄を含む。調査中平面では北西側に水が溜まり渦を巻いたような褐色の模様を確認できた。

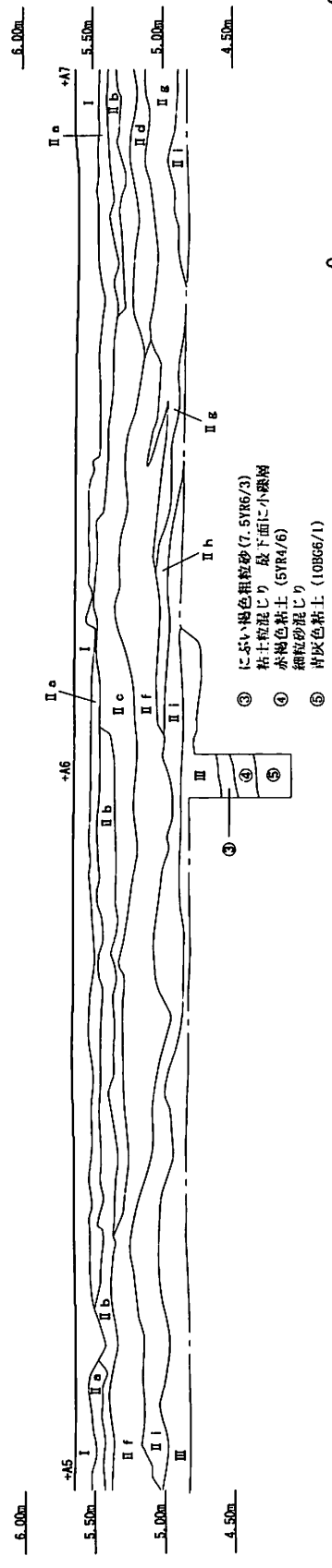
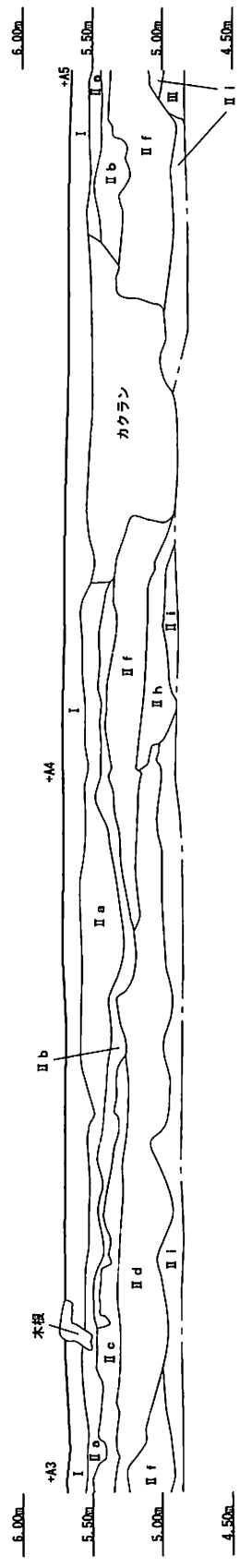
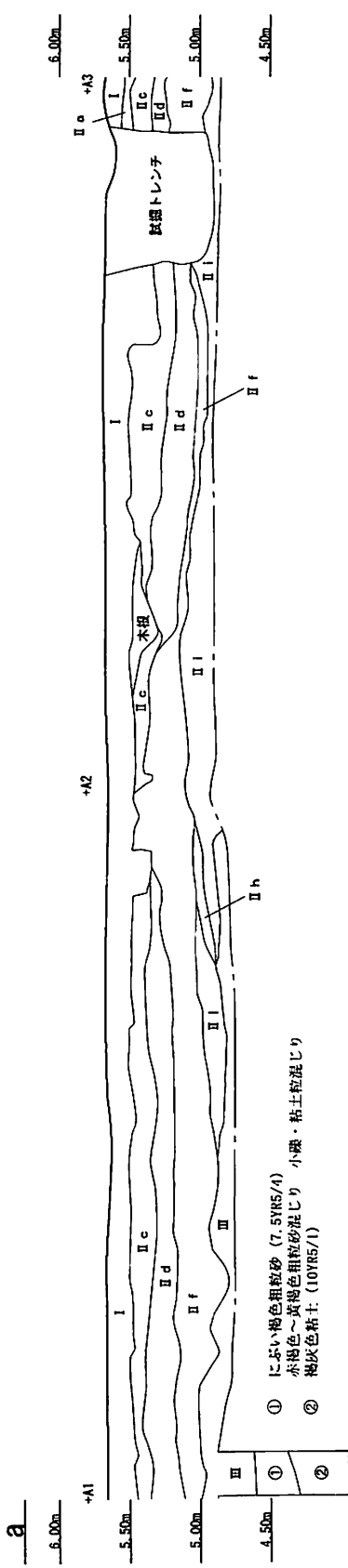
II j層：黒褐色~暗褐色土、層厚は20~30cm。南側にのみ見られる。樹皮や枝等が混じる。河川の氾濫による堆積物と推測する。

II k層：黒褐色シルト。層厚は10~40cm。南側のみに見られる。樹皮や根、草木等が混じる。

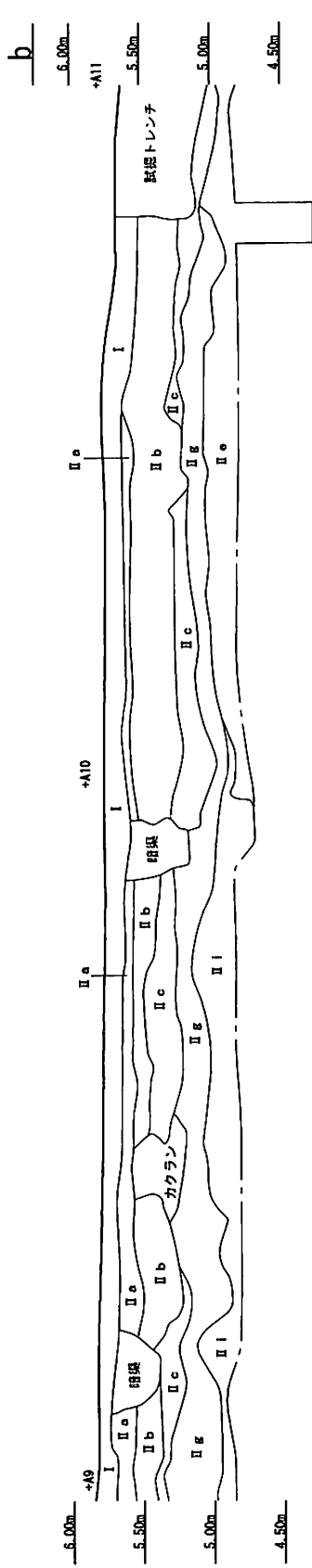
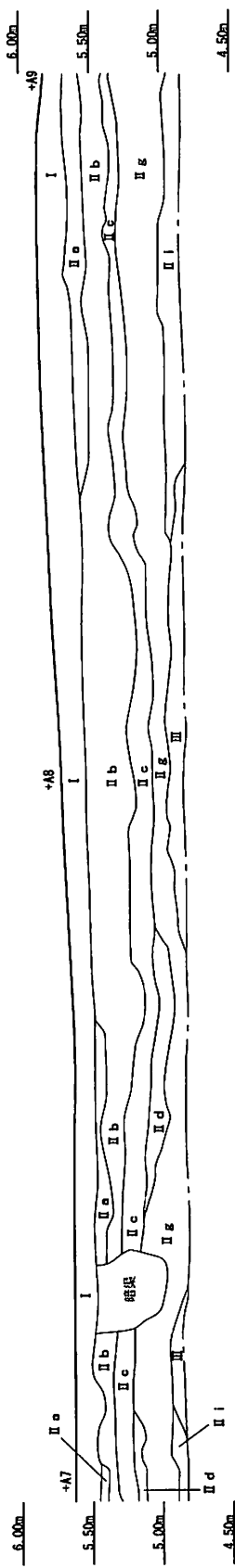
III層：明褐色~黄褐色粘土。
φ1mm~2mmの粗粒砂が僅かに混じる。
(岩谷)



第59図 調査前地形図

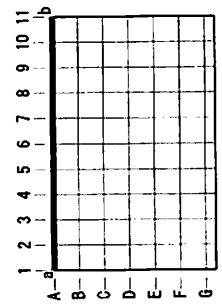


第60図 土層断面図 (1)

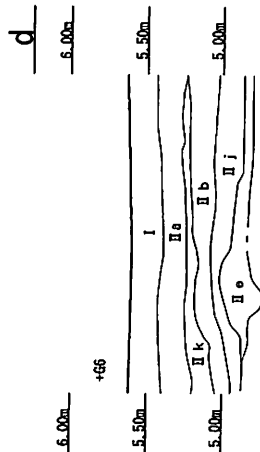
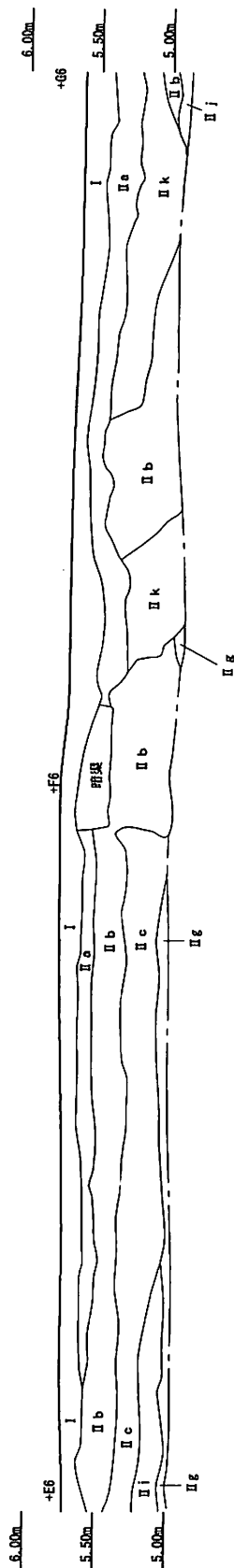
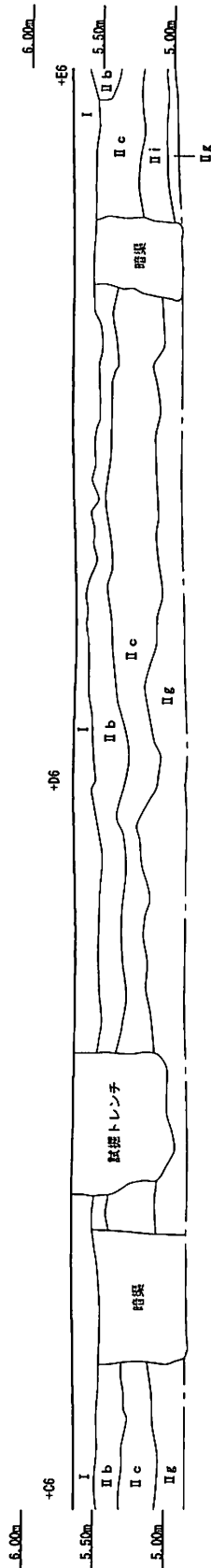
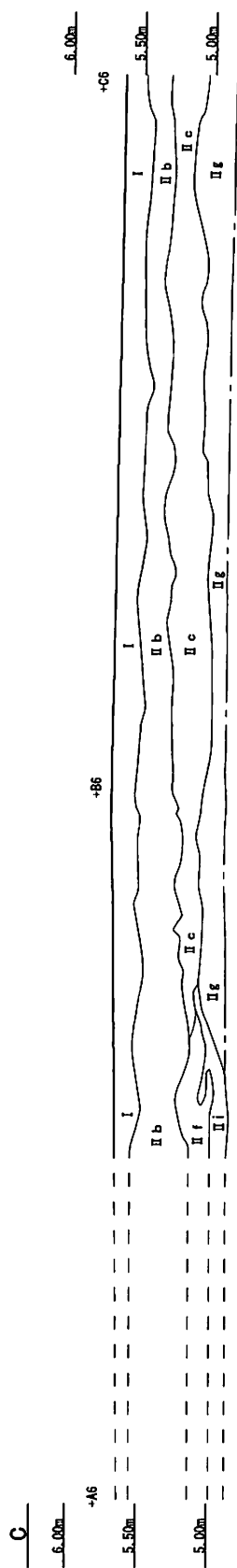


土層断面図a-b

- I 層 暗褐色土 (10YR3/3) 粘性ややあり しまりあり
- II a 層 黒褐色～暗褐色シルト (10YR2/3～10YR3/4) 粘性あり しまりあり
- II b 層 灰褐色シルト (7.5YR4/2) 粘性あり しまりあり
- II c 層 灰黄褐色～灰黄褐色砂質シルト (10YR4/2～10YR5/4) 粘性なし しまりなし 褐色砂が斑状に混じる
- II d 層 灰黄褐色～黄褐色 (10YR5/3～10YR5/6) 粘性なし しまりなし 褐色砂が斑状に混じる
- II e 層 粘性ややあり しまりなし 褐色砂が斑状に混じる
- II f 層 緑灰色砂質シルト (10G5/1) 粘性あり しまりなし
- II g 層 灰黄褐色 (10YR5/3) 粘性ややあり しまりなし
- II h 層 灰黄褐色 (10YR5/4) 粘性ややあり しまりなし
- II i 層 褐色～明褐色砂 (7.5YR4/6～7.5YR5/8) 粘性ややあり しまりなし
- III 層 褐色～明褐色砂質シルト (7.5YR4/6～7.5YR5/8) 粘性ややあり しまりあり 砂鉄を含む
- IV 層 明褐色～黄褐色粘土 (7.5YR5/8～10YR5/8) 粘性あり しまりあり

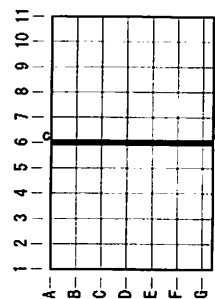


第61図 土層断面図 (2)

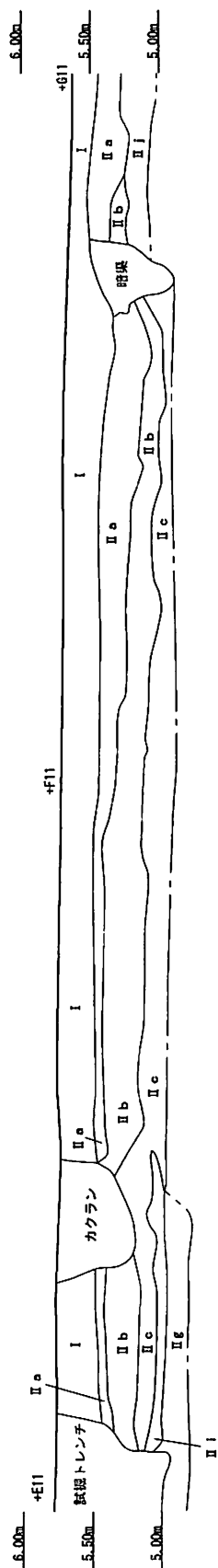
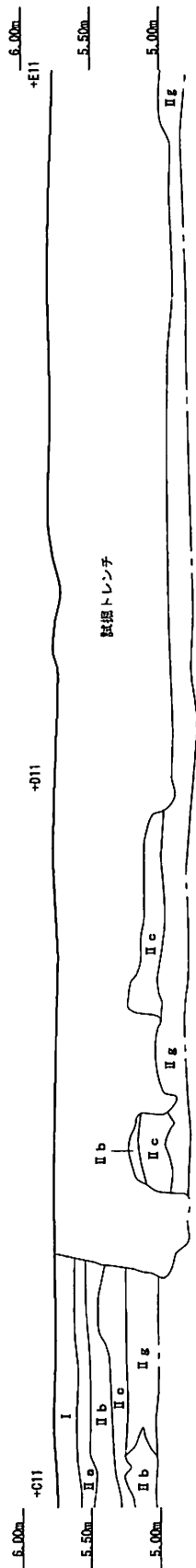
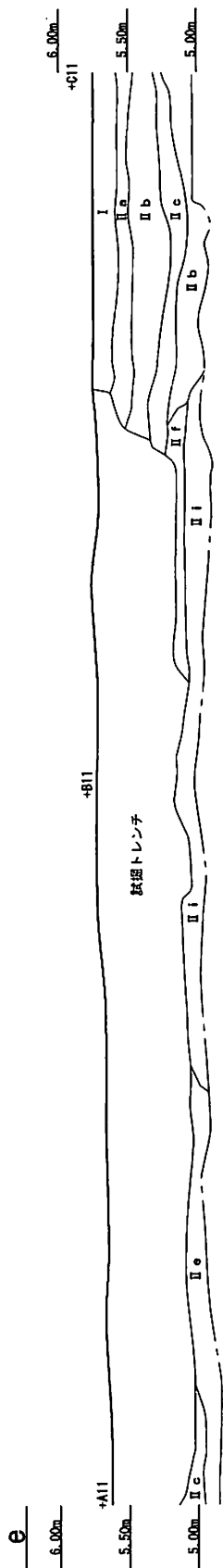


土層断面図e-d

- I層 暗褐色土(10YR3/3)
粘性ややあり しまりあり
- II a層 黒褐色シルト(10YR2/2)
粘性あり しまりあり
- II b層 灰褐色～灰黄褐色シルト(7.5YR4/2～10YR4/2)
粘性あり しまりあり
- II c層 緑灰色砂質シルト(10GY5/1)
粘性あり しまりなし
- II d層 緑灰色砂質シルト(10GY5/1)
粘性あり しまりあり
- II e層 黄褐色～灰黄褐色シルト(10YR4/4～10YR5/2)
粘性あり しまりなし
- II f層 褐色～灰黄褐色シルト(10YR4/4～10YR5/2)
粘性あり しまりなし
- II g層 褐色砂質シルト(7.5YR4/6)
粘性あり しまりなし
- II h層 黒褐色土(10YR2/3)
粘性なし しまりなし
- II i層 黒褐色シルト(10YR2/3)
粘性あり しまりややあり
- II j層 褐色砂が斑状に混じる、砂鉄を含む
細粒砂混じり
- II k層 褐色砂が斑状に混じる、砂鉄を含む
木の根、枝等が多く混じる
- II l層 褐色砂が斑状に混じる
樹皮、草木等が斑状に混じる

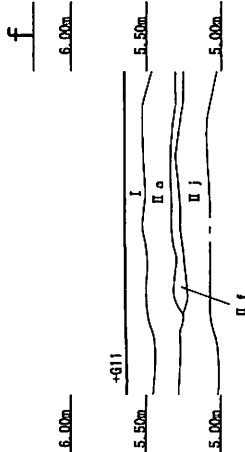
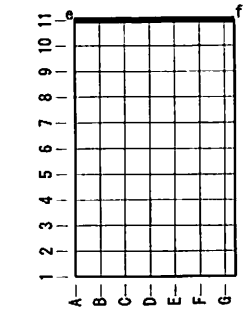


第62図 土層断面図 (3)



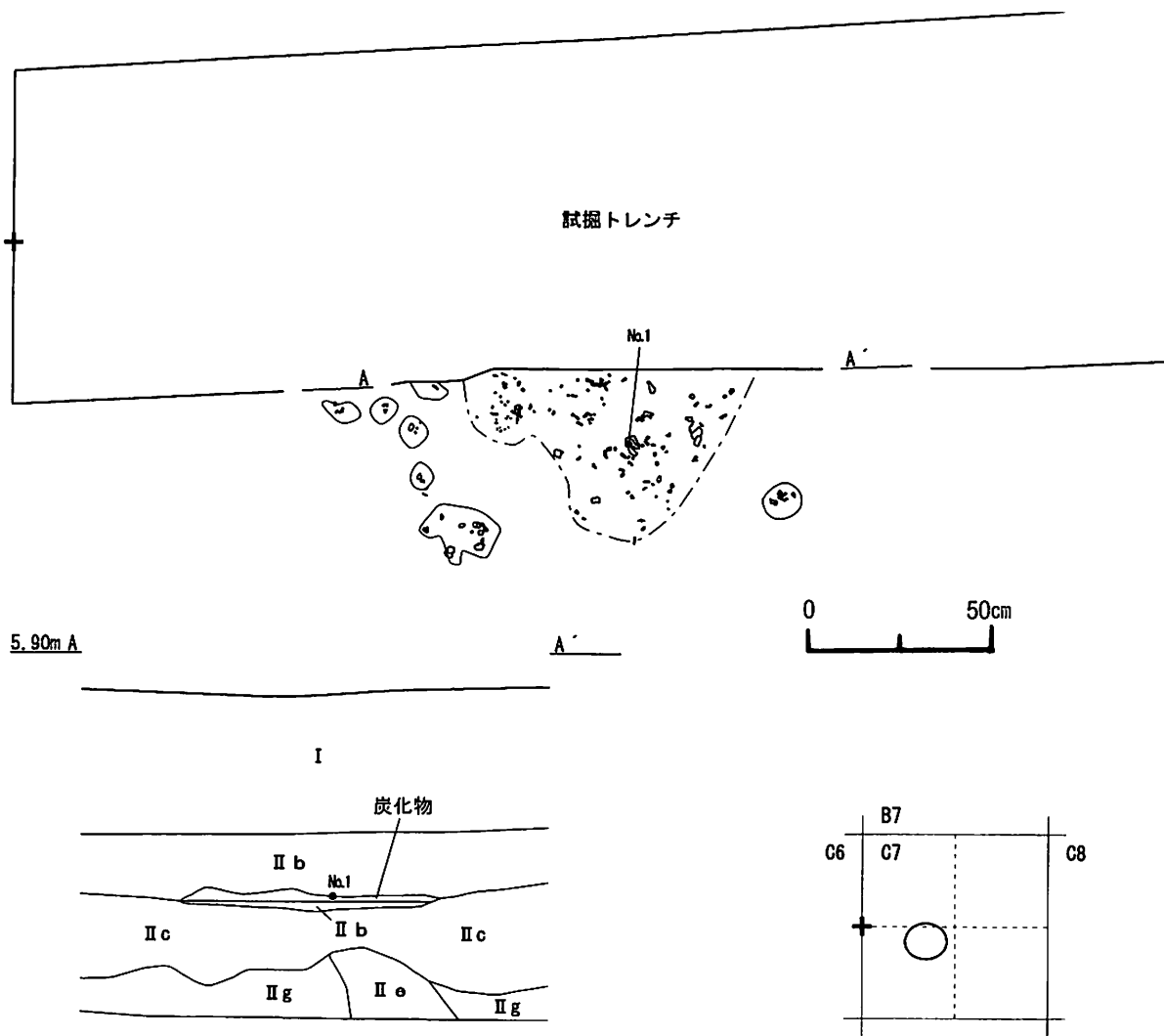
土層断面図e-f

- I層 暗褐色土(10YR3/3)
- II a層 暗褐色シルト(10YR2/2)
- II b層 暗褐色～灰黄褐色シルト(10YR3/4)
- II c層 粘質あり 粘質あり
- II d層 粘質あり 粘質あり
- II e層 粘質あり 粘質あり
- II f層 粘質あり 粘質あり
- II g層 粘質あり 粘質あり
- II h層 粘質あり 粘質あり
- II i層 粘質あり 粘質あり
- II j層 粘質あり 粘質あり
- II k層 粘質あり 粘質あり
- II l層 粘質あり 粘質あり
- II m層 粘質あり 粘質あり
- II n層 粘質あり 粘質あり
- II o層 粘質あり 粘質あり
- II p層 粘質あり 粘質あり
- II q層 粘質あり 粘質あり
- II r層 粘質あり 粘質あり
- II s層 粘質あり 粘質あり
- II t層 粘質あり 粘質あり
- II u層 粘質あり 粘質あり
- II v層 粘質あり 粘質あり
- II w層 粘質あり 粘質あり
- II x層 粘質あり 粘質あり
- II y層 粘質あり 粘質あり
- II z層 粘質あり 粘質あり



第63図 土層断面図(4)

3. 炭化物範囲



第64図 炭化物範囲

炭化物範囲

試掘調査時にトレンチ断面に見られたもので、長軸0.8m、短軸0.5m、厚さ5cmの範囲にまとまって出土しており、点在するものも含めると現状で長軸約1.3m、短軸約0.5mを測る。北西側は試掘トレンチにより切られている。炭化物範囲の上面からは大きさ1cm～5cm程の塊が、数点確認されたが、下面から出土した炭化物の大半は、ほぼ土と一体化して形状がつかめなかった。炭化物を詳細に観察すると、木目が見られたため樹木であると思われる。周囲の土が被熱したような痕跡は見られない。

時期を決定する遺物を伴わなかったため、上面の炭化物（第64図中のNo.1）を年代測定サンプル試料として古環境研究所に分析を委託した。詳細については第V章にて記載する。

(岩谷)

4. 出土遺物

土器 (第65図-1~15)

土器の出土総数は18点ですべて表面が磨滅しており、文様の判別が困難である。

1は縦走る縄文が確認できるが摩耗の激しいもので白色の砂粒を多く含む。内面はナデ調整されている。2は細い沈線が3条浅く横走するもので器壁が薄い。白色の砂粒を含む。3は節の大きめなLR斜縄文が施されている。4・5はLR縄文が施されており白色の砂粒を含む。5の縄文は縦走している。6~9は摩耗が激しく文様は不明。7は底部の可能性はある。10は器表面が剥離している。11は口縁付近のくびれ部分と思われるが摩耗が激しく文様は不明。12・13は摩耗が激しく文様は不明。14は口縁部で波状を呈すると思われる。口唇部断面形は丸形で器面は無文で緻密な作りである。11~14は白色の砂粒を含む。15は底径約8.7cmの上げ底の底部で大きく外側に開いて立ち上がる。1~3はV群c類、15はVI群a類に属するものと思われる。4~14は判然としない。(花田)

石器

剥片・剥片石器の出土総数は26点で、そのうち石鏃が2点、スクレイパー1点、両面調整石器1点、Rフレイク3点、剥片が19点である。剥片の石質は黒曜石製が多く、他に頁岩製、メノウ製がある。

石鏃 (第65図-16・17)

16は三角形凹基。腹面には原石面が残る。17はやや小形の三角形凹基。わずかに基部中央が凹む。16・17共に黒曜石製である。

スクレイパー (第65図-No.18)

18はサイドスクレイパー。側縁下部に連続した刃部を加工。腹面中央に両側から若干の抉り加工がされている。頁岩製。

両面調整石器 (第65図-19)

19は一部欠損している。両面共丁寧に加工されており端部は鋸歯状になる。右側側面にやや内湾している。石槍の基部あるいはつまみ付ナイフ刃部の可能性がある。黒曜石製。

Rフレイク (第65図-20・21・29)

20は周縁に二次加工がされている。やや抉り加工がある。21はつまみ部分を作り出そうとした加工が見られる。29は片側縁上部と中央に加工がある。20・29は頁岩製。21はメノウ製。

剥片 (第65図-22~28)

22・23は頁岩、他は黒曜石。 (岩谷)

その他

いずれも近・現代のものとする。

砥石破片 (第65図-30~32)

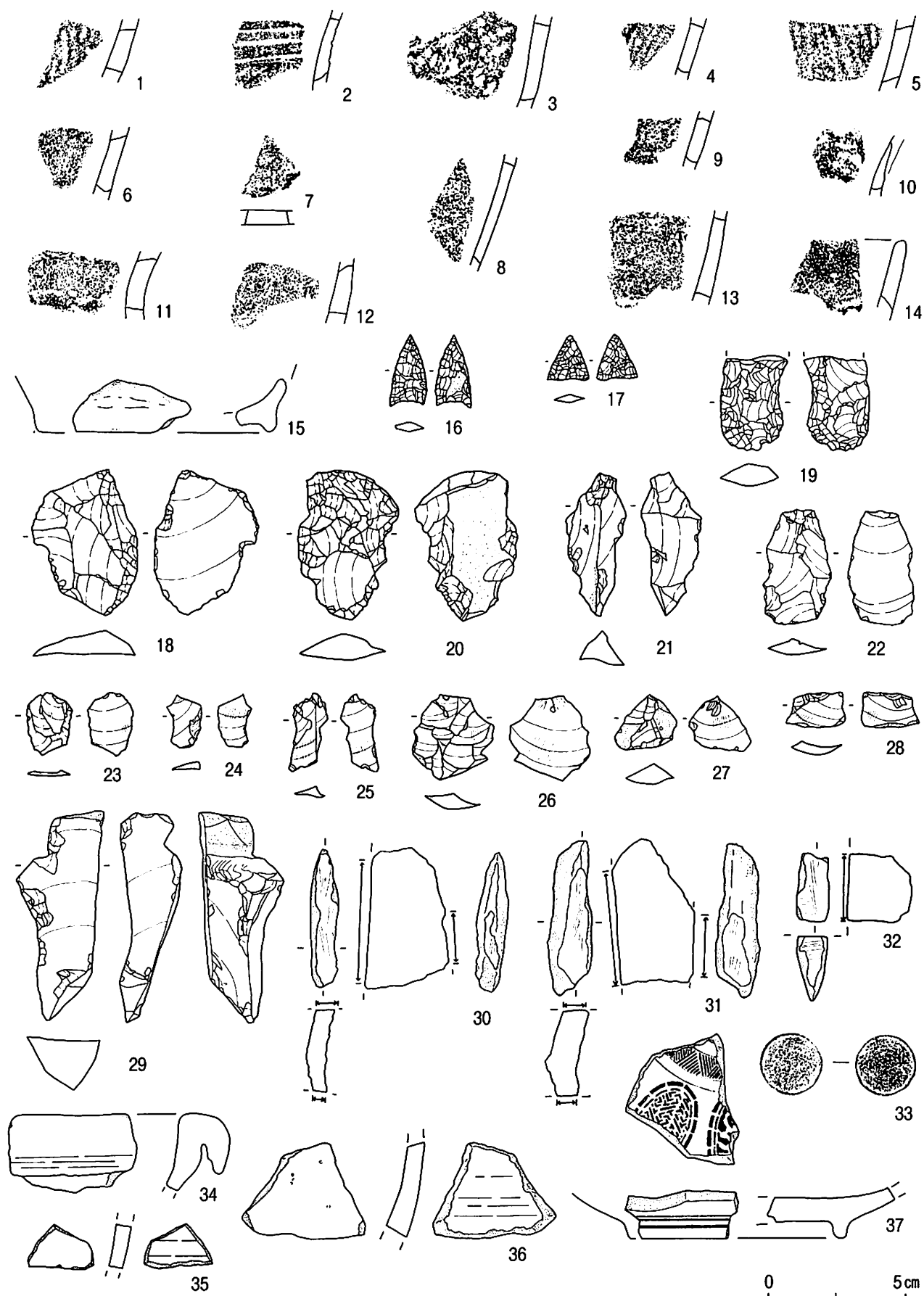
30・31は共に両側面の長軸方向に向けて擦った痕跡がある。32は上面部と正面部に痕跡があり、上面部は長軸方向に縦と横の方向に擦った痕跡が、正面部には横の方向に線状の調整が確認できる。30~32の石質は不明。

銅貨 (第65図-33)

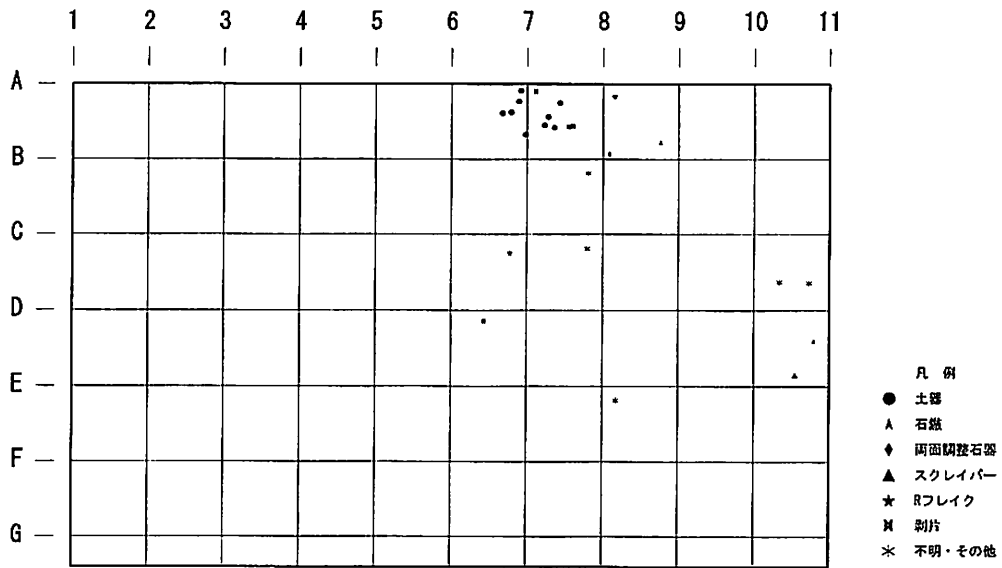
33は半銭銅貨。全体が緑青している。鑄造年は「昭和十三年」と思われる。

陶磁器 (第65図-34~37)

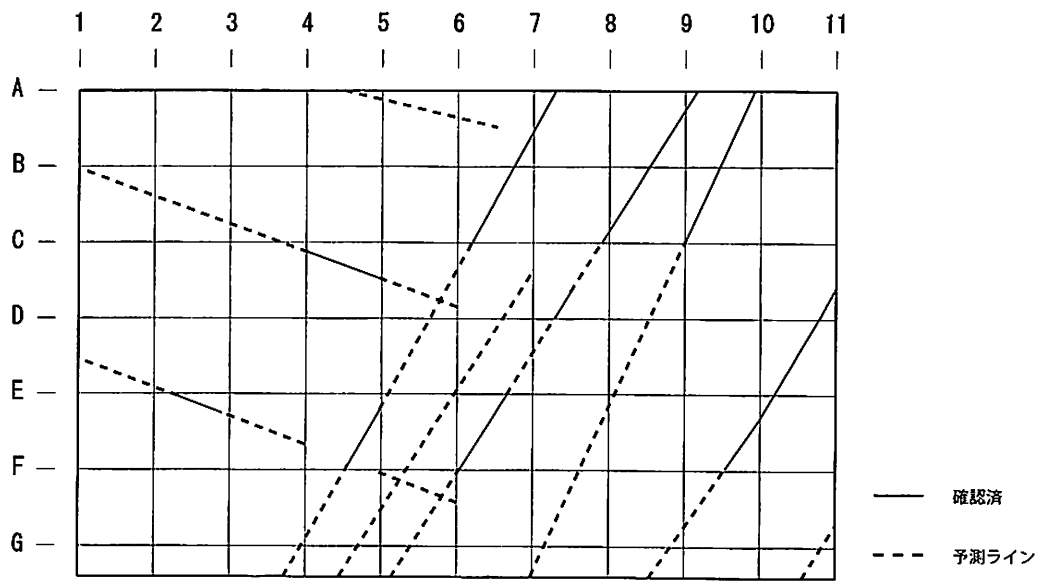
34~36は陶器で、34は鉢の口縁。35・36は徳利の胴部。37は磁器で、三平皿の底部で蛇の目高台であり、染付けの印判がある。 (飯浜)



第65図 出土遺物



第66図 全出土遺物分布図



第67図 暗渠配置図



表Ⅲ-1 掲載遺物一覧表

図版No.	出土地点	層位	遺物No.	分類	計測値				石質	備考
					長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重さ(g)		
第65図-1	C6d試掘			土器 V群c類						
第65図-2	A7b	II f	12	土器 V群c類						
第65図-3	A6d	II f	4	土器 V群c類						
第65図-4	C6c試掘			土器 分類不明						
第65図-5	C6c試掘			土器 分類不明						
第65図-6	A7a	II f	9	土器 分類不明						
第65図-7	A6d	II f	2	土器 分類不明						
第65図-8	A6c	II f	1	土器 分類不明						
第65図-9	A7b	II f	3	土器 分類不明						
第65図-10	A7a	II f	10	土器 分類不明						
第65図-11	C6c試掘			土器 分類不明						
第65図-12	C6c試掘			土器 分類不明						
第65図-13	A6d	II f	3	土器 分類不明						
第65図-14	C6c試掘			土器 分類不明						
第65図-15	A6d	I		土器 VI群a類						
第65図-16	A8c	II f	2	石 鏃	2.7	1.3	0.4	0.9	黒曜石	三角形凹基
第65図-17	D10d	II b	2	石 鏃	1.7	1.5	0.3	0.5	黒曜石	三角形凹基
第65図-18	D10c	II c	1	スクレイパー	5.3	3.9	0.9	13.8	頁岩	
第65図-19	A8b	II b	1	両面調整石器	(3.5)	2.4	0.8	(6.8)	黒曜石	
第65図-20	A8a	I		Rフレイク	5.5	3.7	1.0	22.0	頁岩	
第65図-21	C6d	II c	1	Rフレイク	5.3	2.25	1.3	8.0	メノウ	
第65図-22	C6d試掘跡			剥片	4.2	2.5	0.6	4.4	頁岩	
第65図-23	C6c試掘跡			剥片	2.3	1.7	0.3	0.7	頁岩	
第65図-24	A7c	II f	2	剥片	1.9	1.3	0.3	0.7	黒曜石	
第65図-25	A7b	II f	6	剥片	2.9	1.3	0.5	1.0	黒曜石	
第65図-26	D6a	II a	1	剥片	3.1	3.0	0.6	3.5	黒曜石	
第65図-27	表採			剥片	2.0	2.3	0.8	2.0	黒曜石	
第65図-28	A7a	II c	1	剥片	1.3	2.2	0.5	1.0	黒曜石	
第65図-29	表採			Rフレイク	7.6	3.2	2.0	28.0	頁岩	
第65図-30	C10b	II b	1	砥石破片	(5.2)	(3.1)	(0.9)	(19.8)	不明	
第65図-31	C10c	II b	3	砥石破片	(5.7)	(3.2)	(1.6)	(34.8)	不明	
第65図-32	表採			砥石破片	(2.5)	(2.4)	(1.3)	(8.5)	不明	
第65図-33	表採			半銭銅貨						
第65図-34	G6dトレンチ			陶器片						
第65図-35	B7d	II c		陶器片						
第65図-36	C7d	I		陶器片						
第65図-37	E8a	I		磁器片						

表Ⅲ-2 出土遺物一覧表

	土器			石器				その他			合計	
	V群	VI群	不明	石鏃	スクレイパー	両面調整石器	Rフレイク	剥片	砥石	陶磁器		半銭銅貨
I層		1					1	1		2		5
II a層								1				1
II b層				1		1		2	2			6
II c層					1		1	3		1		6
II f層	2		9	1				4				16
表採							1	2	1		1	5
その他	1		5					6		1		13
合計	3	1	14	2	1	1	3	19	3	4	1	52

表Ⅲ-3 出土土器比率

V群	VI群	不明	合計
3点	1点	14点	18点
16.667%	5.556%	77.778%	100.000%

表Ⅲ-4 出土石器比率

石鏃	スクレイパー	両面調整石器	Rフレイク	剥片	合計
2点	1点	1点	3点	19点	26点
7.692%	3.846%	3.846%	11.538%	73.077%	100.000%

第Ⅳ章 ま と め

平成26年度の登町4遺跡・登町13遺跡の発掘調査の結果は以下のようにまとめられる。

1. 登町4遺跡の時期としては、縄文時代早期、前期、中期にかけての遺物が出土したほか、僅かながら縄文時代晩期、続縄文時代の遺物が出土したが、出土土器の主体となるのは縄文時代早期後半の中茶路式に相当するものである。
2. 登町4遺跡において、北東側丘頂部寄りの平坦部に竪穴状建物跡3基が検出され、他にTピット1基、礫集中2基、剥片集中3ヶ所、一括土器1ヶ所が検出された。
3. 登町4遺跡を特徴づける遺物として、自然礫に多数の線を刻んだ「線刻礫」が出土した。
4. 登町13遺跡については、出土遺物が52点と極端に少なく、河川の氾濫の影響を受け遺物が移動しており、純粋な遺物包含層と言い難く、時期は判然としない。

1については、80頁の表Ⅱ-5を参照頂きたい。Ⅰ群とした早期が全体の約68%、次いでⅡ群とした前期が約17%、Ⅲ群とした中期が約14%、その他はそれぞれ0.1%以下とごく少量であった。Ⅰ群の圧倒的な比率は前年度（平成25）調査と同様の傾向であり、平成25年度調査区と今年度調査区の間位置する次年度調査予定区についても同様と見込まれる。

これらの出土土器については、これまでの2年間の調査に比して、ある程度復原可能で器形の判別が付く個体が数える程度とはいえ、複数見られたことは収穫であった。また、調査区南側を走る沢地に黒色土層が厚く堆積し、遺物も他の部分より濃密に分布しており、北東側丘頂寄り平坦部に竪穴状建物跡が検出したことも併せて、地すべり等の影響を受け、遺物が平坦部からより低い方向へ土砂ごと移動していることが再確認された。石器については、小型の剥片石器は欠損し器種判別が困難なものも勿論あるなか、完形に近いものも多く見られる。それに比して、石斧はその大半が刃部や基部を欠損したものや、大きく割れて接合されたものや破片であり、かなり酷使された状況が看取される。また、石鋸や石斧製作時に発生する擦切り残片もいくつか出土しており、3基の剥片集中と併せ、本遺跡において石器製作が行われていたのは間違いない。

平成24年度調査において旧石器時代に属する可能性がある細石刃様剥片が出土し、前年度に引き続いて今年度調査での関連遺物の出土が期待されたが、注意深く調査を進めたものの、同様の剥片やその製作に関わる石核等の出土は見られず、いまだ確証を得るには至っていない。

2については、前年度までの調査では遺物の出土状況等から、遺構の存在の可能性は低いと思われる。遺跡の性格も判然としないままであったが、竪穴状建物跡を始めとする遺構や遺物の確認によって少し前進を見た。3基の竪穴状建物跡は直径4.5m前後と小規模で柱穴様小ピット等の付属ピットが各々検出されたが、焼土や炉跡は確認できず、遺物の出土量もさほど多くないこと等から、定住的というよりは、季節的な仮小屋といったものと思われる。

また、1基のみ検出されたTピットについては、急峻な崖の近くであったため、安全を確保しつつ広範囲に亘りその周囲に同様の遺構が無いか、確認作業を行ったが検出されなかった。北西側の断崖については、南西側の断崖のように後世に掘削されたものではないが、風化や自然崩落に伴い少なくともTピットが構築された当時の原地形からは変貌し、崩落等によって失われた部分と同様の遺構があったものと思われる。

加えて、竪穴状建物跡（HP-2）の覆土を掘り込んで小規模なピットを構築し、その中に礫や

礫石器を多数埋納した礫集中が2基隣接して検出された。そのうちの1基は同質の石（チャート）を選択してたたき石ばかりを配置したもので、雑多に廃棄したというよりは、何か明確な意図があったと思われる。HP-2の確認のためのトレンチ調査を行ったところ検出され、双方のプランの一部を失ってしまい、2基の新旧関係は不明である。また前年度に続き、剥片集中が確認され複数の接合資料が得られた。

3については、長さ15.6 cm×幅7.3 cm×厚さ2.6 cmを測る整形痕が一切見られない二等辺三角形状を呈する自然礫を使用し、その両面に細く鋭い刻線によって、連続する平行線やそれに直行する線が表現され、あたかも国指定史跡「フゴッベ洞窟」に描かれた「舟」と呼ばれるものと類似するようにも見える部分もある。また「×」印状の文様が礫の長軸方向に2つ連続して表現しているような部分も見られる。確認される刻線は礫の短軸方向に向くものが多い。周辺からはⅡ群b類（縄文時代前期）～Ⅲ群（縄文時代中期）の土器の出土が見られ、前述した通り遺物が丘頂寄り平坦部から土砂とともに滑り落ち移動していることを考えると断定しかねるが、概ねこれらの土器と並行する時期のものかと思われる。

4については、土層の堆積状況は河川の流れや淀みによって複雑に入り組み、粘性の強く乾燥すると固化する土質が顕著なうえ、暗渠排水管に注意しながら人力で掘削を進める困難な作業となった。労力と時間はかかるが、出土遺物も僅かで、遺跡の性格は不明である。

登町4遺跡の発掘調査は今年度で3年目を終える。今年度調査において竪穴状建物跡が検出された平坦部が次年度調査予定区に延びていることから、同様の遺構の検出が期待され、今年度の調査成果を無駄にしないよう最後の調査となる次年度調査へ臨む所存である。（小川）

（参考文献）

- 益富壽之助 1955『原色岩石図鑑』
峰山 巖 1963「木村台地」『北海道の文化』特集号
久保武夫 1966「余市海岸の砂丘」『余市高校研究紀要』
余市町郷土史編集委員会 1968『余市農業発達史』
大場利夫・重松和男 1977「北海道後志支庁余市町西崎山遺跡4区調査報告」『北海道考古学』第13号
江別市教育委員会 1982『萩ヶ丘遺跡』江別市文化財調査報告書XV
財北海道埋蔵文化財センター 1982『白老町虎杖浜3遺跡』北埋調報11
登郷土誌作成委員会 1986『登郷土誌』
大沼忠春 1989「北筒式土器」『縄文土器大観1』小学館
三宅徹也 1989「円筒下層式土器様式」『縄文土器大観』第1巻
三宅徹也 1989「円筒上層式土器様式」『縄文土器大観』第1巻
財北海道埋蔵文化財センター 1990『余市町フゴッベ貝塚』北埋調報72
財北海道埋蔵文化財センター 1990『栄町5遺跡』北埋調報66
財北海道埋蔵文化財センター 1990『登町2遺跡・登町3遺跡』北埋調報67
財北海道埋蔵文化財センター 1994『高岡1遺跡』北埋調報88
財北海道埋蔵文化財センター 1994『美沢川流域の遺跡群XⅦ』北埋調報89
財北海道埋蔵文化財センター 1995『滝里遺跡群V』北埋調報94
木下亀城・小川留太郎 1995『岩石鉱物』保育社
豊 遙秋・青木正博 1996『鉱物・岩石』保育社
財北海道埋蔵文化財センター 1996『石倉貝塚』北埋調報109
財北海道埋蔵文化財センター 1996『キウス5遺跡』北埋調報116
財北海道埋蔵文化財センター 1997『美々・美沢』
青野友哉他 1998「登町11遺跡工事立会調査報告」『余市水産博物館研究報告』第1号
余市町教育委員会 1998『余市町登川右岸遺跡』
財北海道埋蔵文化財センター 1999『キウス4遺跡』北埋調報134
田才雅彦他 1999「西崎山ストーンサークルの調査について」『余市水産博物館研究報告』第2号
熊谷仁志 2001「北海道の縄文土器」『新北海道の古代1旧石器・縄文文化』北海道新聞社
財北海道埋蔵文化財センター 2001「白老町虎杖浜2遺跡」北埋調報158
財北海道埋蔵文化財センター 2001『西崎山ストーンサークル』重要遺跡確認調査報告書 第1集
財北海道埋蔵文化財センター 2002「白老町虎杖浜2遺跡」北埋調報172
財北海道埋蔵文化財センター 2004『遺跡が語る北海道の歴史-財北海道埋蔵文化財センター25周年記念誌-』
フゴッベ洞窟保存調査委員会編 2004『国指定史跡フゴッベ洞窟保存調査事業報告書』

第V章 附 編

1. 余市町登町4・13遺跡出土黒曜石の産地推定

株式会社古環境研究所

1. はじめに

余市町登町に所在する登町4遺跡・登町13遺跡より出土した黒曜石製石器について、エネルギー分散型蛍光X線分析装置による元素分析を行い、産地を推定した。

2. 試料と方法

分析対象は、黒曜石製石器4点である(表1)。石器は、いずれも石鏃で、3点が登町4遺跡、1点が登町13遺跡より出土したものである。

試料は、測定前にメラミンフォーム製スポンジを用いて、測定面表面の洗浄を行った。

分析装置は、エスアイアイ・ナノテクノロジー株式会社製のエネルギー分散型蛍光X線分析計SEA1200VXを使用した。装置の仕様は、X線管ターゲットはロジウム(Rh)、X線検出器はSDD検出器である。測定条件は、測定時間100sec、照射径8mm、電圧50kV、電流1000μA、試料室内雰囲気は真空に設定し、一次フィルタにPb測定用を用いた。

黒曜石の産地推定には、蛍光X線分析によるX線強度を用いた黒曜石産地推定法である判別図法を用いた(望月, 1999など)。

本方法では、まず各試料を蛍光X線分析装置で測定し、その測定結果のうち、カリウム(K)、マンガン(Mn)、鉄(Fe)、ルビジウム(Rb)、ストロンチウム(Sr)、イットリウム(Y)、ジルコニウム(Zr)の合計7元素のX線強度(cps: count per second)について以下に示す指標値を計算する。

- 1) Rb分率 = $Rb\text{強度} \times 100 / (Rb\text{強度} + Sr\text{強度} + Y\text{強度} + Zr\text{強度})$
- 2) Sr分率 = $Sr\text{強度} \times 100 / (Rb\text{強度} + Sr\text{強度} + Y\text{強度} + Zr\text{強度})$
- 3) $Mn\text{強度} \times 100 / Fe\text{強度}$
- 4) $\log(Fe\text{強度} / K\text{強度})$

そして、これらの指標値を用いた2つの判別図(判別図(1): 横軸Rb分率-縦軸Mn強度×100/

表1 分析対象

分析No.	遺跡名	グリッド	層位	遺物No.	器種
1	登町4遺跡	S9b	II層	11	石鏃
2		m37c		20	
3		t37a		76	
4	登町13遺跡	D10d	IIb層	2	

表2 北日本黒曜石産地の判別群

都道府県	エリア	判別群名	原石採取地	
北海道	白滝	白滝1	赤石山山頂(43)、八号沢露頭(15)	
		白滝2	7の沢川支流(2)、1K露頭(10)、十勝石沢露頭直下河床(11)、アジサイの滝露頭(10)	
	赤井川	赤井川	曲川・土木川(24)	
		上土幌	上土幌	
	置戸	置戸山	置戸山(5)	
		所山	所山(5)	
		豊浦	豊泉(10)	
		旭川	近文台(8)、雨紛台(2)	
		名寄	忠烈布川(19)	
		秩父別	秩父別1 秩父別2 秩父別3	中山(66)
	遠軽	遠軽	社名淵川河床(2)	
		生田原	生田原	
		留辺蘂	留辺蘂1 留辺蘂2	ケシヨマップ川河床(9)
釧路	釧路	釧路市菅スキー場(9)、阿寒川右岸(2)、阿寒川左岸(6)		
	木造	出来島		
	深浦	八森山		
	青森	青森		
秋田	男鹿	金ヶ崎 脇本	金ヶ崎温泉(10) 脇本海岸(4)	
	岩手	北上折居1	北上折居2 北上折居3	水沢区折居(9)、真城(33)
		山形	羽黒	月山荘前(24)、大越沢(10)
湯ノ倉			湯ノ倉(40)	
宮城	根岸	根岸(40)		
	仙台	秋保1 秋保2	上蔵(18)	
	塩竈	塩竈	塩竈(10)	
新潟	新発田	板山	板山牧場(10)	
	新津	金津	金津(7)	
栃木	高原山	甘湯沢	甘湯沢(22)	
	七尋沢	七尋沢	七尋沢(3)、宮川(3)、枝持沢(3)	

Fe強度の判別図、判別図(2)：横軸 Sr 分率 - 縦軸 $\log(\text{Fe 強度} / \text{K 強度})$ の判別図) を作製し、各地の原石データと遺跡出土遺物のデータを照合して、産地を推定する。この方法は、できる限り蛍光X線のエネルギー差が小さい元素同士を組み合わせることで指標値を算出するため、形状、厚み等の影響を比較的受けにくく、原則として非破壊分析が望ましい考古遺物の測定に対して非常に有効な方法であるといえる。なお、厚みについては、かなり薄くても測定可能であるが、それでも0.5mm以下では影響を免れないといわれる(望月, 1999)。極端に薄い試料の場合、K強度が相対的に強くなるため、 $\log(\text{Fe 強度} / \text{K 強度})$ の値が減少する。また、風化試料の場合でも、 $\log(\text{Fe 強度} / \text{K 強度})$ の値が減少する(望月, 1999)。そのため、試料の測定面にはなるべく奇麗で平坦な面を選んだ。

原石試料は、採取原石を割って新鮮な面を露出させた上で、産地推定対象試料と同様の条件で測定した。表2に判別群一覧とそれぞれの原石の採取地点および点数を、図1に各原石の採取地の分布図を示す。

3. 分析結果

表3に石器の測定値および算出した指標値を、図2と図3に黒曜石原石の判別図に石器の指標値をプロットした図を示す。図は視覚的にわかりやすくするため、各判別群を楕円で取り囲んである。分析の結果、登町4遺跡のうち、分析No.1が白滝2群(白滝エリア)、分析No.2が白滝1群(白滝エリア)、分析No.3が豊浦群(豊浦エリア)、登町13遺跡の分析No.4が赤井川群(赤井川エリア)の範囲にプロットされた。表3に、判別図法により推定された判別群名とエリア名を示す。

表3 測定値および産地推定結果

分析No.	遺跡	K強度(cps)	Mn強度(cps)	Fe強度(cps)	Rb強度(cps)	Sr強度(cps)	Y強度(cps)	Zr強度(cps)	Rb分率	$\frac{\text{Mn} \times 100}{\text{Fe}}$	Sr分率	$\log \frac{\text{Fe}}{\text{K}}$	判別群	エリア	分析No.
1	登町4	280.9	91.1	1825.8	905.1	104.5	425.0	558.7	45.41	4.99	5.24	0.81	白滝2	白滝	1
2		300.9	89.8	2058.2	853.1	223.4	406.9	674.1	39.54	4.36	10.36	0.84	白滝1	白滝	2
3	登町13	244.9	107.3	2128.1	486.4	579.4	311.5	937.5	21.01	5.04	25.03	0.94	豊浦	豊浦	3
4		287.7	103.2	1846.3	720.2	329.9	348.2	728.1	33.87	5.59	15.52	0.81	赤井川	赤井川	4

4. まとめ

登町4遺跡・登町13遺跡で出土した黒曜石製石器について、蛍光X線分析による産地推定を行った結果、登町4遺跡の2点が白滝エリア産、1点が豊浦エリア産、登町13遺跡の1点が赤井川エリア産と推定された。

引用文献

望月明彦(1999) 上和田城山遺跡出土の黒曜石産地推定. 大和市教育委員会編「埋蔵文化財の保管と活用のための基礎的整理報告書 2-上和田城山遺跡篇一」: 172-179, 大和市教育委員会.

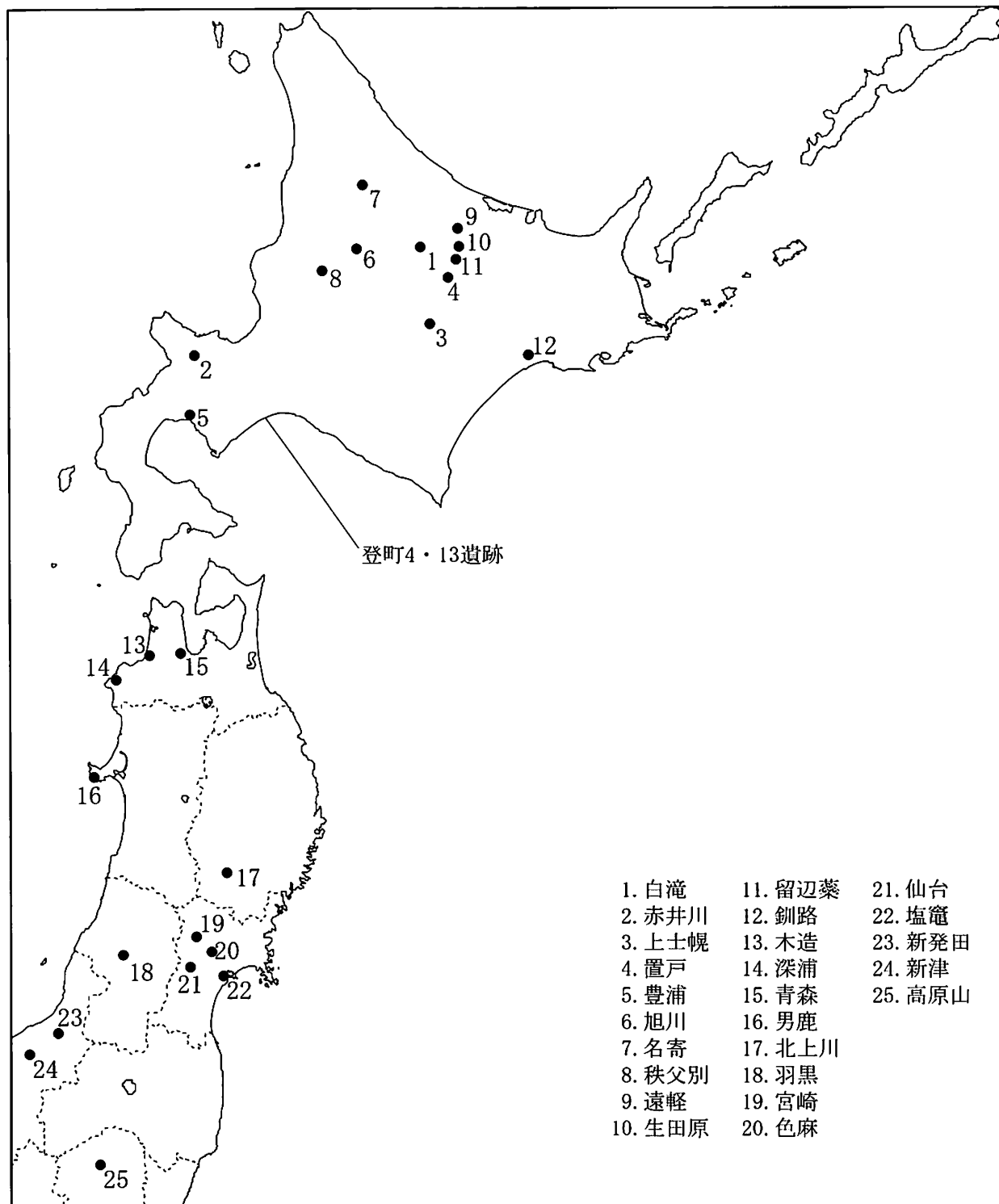


図1 北日本の黒曜石原石採取地の分布図

2-(1). 余市町登町13遺跡出土炭化物の放射性炭素年代測定

株式会社古環境研究所

1. はじめに

放射性炭素年代測定は、光合成や食物摂取などにより生物体内に取り込まれた放射性炭素 (^{14}C) の濃度が、放射性崩壊により時間とともに減少することを利用した年代測定法である。樹木や種実などの植物遺体、骨、貝殻、土壌、土器付着炭化物などが測定対象となり、約6万年前までの年代測定が可能である。

ここでは、登町13遺跡の遺構構築年代を明らかにする目的で、加速器質量分析法による放射性炭素年代測定を行った。

2. 試料と方法

測定試料は、C7bグリッドのII b層から出土した炭化材1点である。測定試料の情報、調製データは表2のとおりである。試料は調製後、加速器質量分析計（パレオ・ラボ、コンパクトAMS：NEC製 1.5SDH）で測定した。得られた ^{14}C 濃度について同位体分別効果の補正を行った後、 ^{14}C 年代、暦年代を算出した。

表1 測定試料及び処理

試料名	試料の詳細	種類	前処理・調整	測定法
No. 1	C7bグリッド II b層	炭化材	超音波洗浄, 酸-アルカリ-酸洗浄	AMS

※AMS (Accelerator Mass Spectrometry) は加速器質量分析法

3. 測定結果

表2に、同位体分別効果の補正に用いる炭素同位体比 ($\delta^{13}\text{C}$)、同位体分別効果の補正を行って暦年較正に用いた年代値、慣用に従って年代値、誤差を丸めて表示した ^{14}C 年代、 ^{14}C 年代を暦年代に較正した年代範囲を示す。また、図1には暦年較正結果を示す。暦年較正に用いた年代値は年代値、誤差を丸めていない値であり、今後暦年較正曲線が更新された際にこの年代値を用いて暦年較正を行うために記載した。

表2 測定結果

試料名	測定No. (PED-)	$\delta^{13}\text{C}$ (‰)	暦年較正用年代 (年BP)	^{14}C 年代 (年BP)	暦年代 (西暦)	
					1 σ (68.2% 確率)	2 σ (95.4% 確率)
No. 1	28424	-26.46 \pm 0.13	2399 \pm 20	2400 \pm 20	BC486-BC407 (68.2%)	BC537-BC402 (95.4%)

^{14}C 年代はAD1950年を基点にして何年前かを示した年代である。 ^{14}C 年代 (年BP) の算出には、 ^{14}C の半減期としてLibbyの半減期5568年を使用した。また、付記した ^{14}C 年代誤差 ($\pm 1\sigma$) は、測定の統計誤差、標準偏差等に基づいて算出され、試料の ^{14}C 年代がその ^{14}C 年代誤差内に入る確率が68.2%であることを示すものである。なお、暦年較正の詳細は以下の通りである。

暦年較正とは、大気中の ^{14}C 濃度が一定で半減期が5568年として算出された ^{14}C 年代に対し、過去の宇宙線強度や地球磁場の変動による大気中の ^{14}C 濃度の変動、及び半減期の違い (^{14}C の半減期 5730 ± 40 年) を較正して、より実際の年代値に近いものを算出することである。

^{14}C 年代の暦年較正にはOxCal4.2 (較正曲線データ: IntCal13) を使用した。なお、1 σ 暦年代

範囲は、OxCalの確率法を使用して算出された¹⁴C年代誤差に相当する68.2%信頼限界の暦年代範囲であり、同様に2σ暦年代範囲は95.4%信頼限界の暦年代範囲である。カッコ内の百分率の値は、その範囲内に暦年代が入る確率を意味する。グラフ中の縦軸上の曲線は¹⁴C年代の確率分布を示し、二重曲線は暦年較正曲線を示す。

4. 所見

登町13遺跡の遺構構築年代を明らかにする目的で、加速器質量分析法（AMS法）により放射性炭素年代測定を行った。その結果、C7bグリッドⅡb層で出土した炭化材は、2400±20年BP（2σの暦年代でBC537～BC402年）の年代値であった。

参考文献

Bronk Ramsey, C. (2001) Development of the Radiocarbon Program OxCal. Radiocarbon, 43, p.355-363.

中村俊夫（2000）放射性炭素年代測定法の基礎. 日本先史時代の¹⁴C年代編集委員会編「日本先史時代の¹⁴C年代」, p.3-20, 日本第四紀学会.

Reimer, P.J., Bard, E., Bayliss, A., Beck, J.W., Blackwell, P.G., Bronk Ramsey, C., Buck, C.E., Cheng, H., Edwards, R.L., Friedrich, M., Grootes, P.M., Guilderson, T.P., Hafliadason, H., Hajdas, I., Hatte, C., Heaton, T.J., Hoffmann, D.L., Hogg, A.G., Hughen, K.A., Kaiser, K.F., Kromer, B., Manning, S.W., Niu, M., Reimer, R.W., Richards, D.A., Scott, E.M., Southon, J.R., Staff, R.A., Turney, C.S.M., and van der Plicht, J.(2013) IntCal13 and Marine13 Radiocarbon Age Calibration Curves 0-50,000 Years cal BP. Radiocarbon, 55(4), 1869-1887.

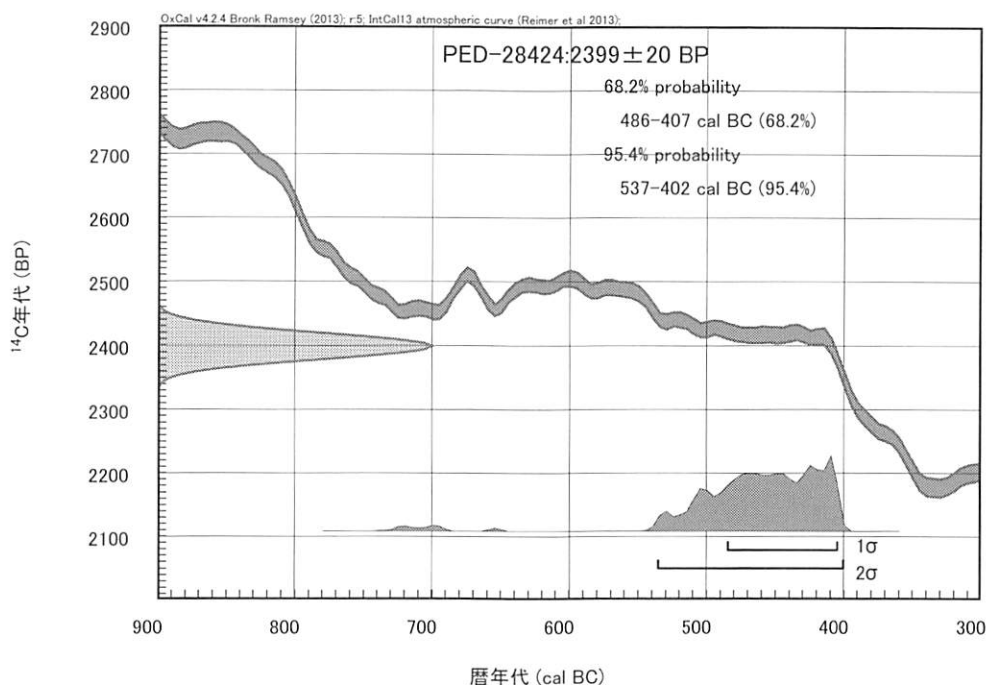


図1 暦年較正結果

2-(2). 余市町登町13遺跡出土炭化物の樹種同定

株式会社古環境研究所

1. はじめに

木材は、セルロースを骨格とする木部細胞の集合体であり、解剖学的形質から、概ね属レベルの同定が可能である。木材は、花粉などの微化石と比較して移動性が少ないことから、比較的近隣の森林植生の推定が可能であるが、木製品では樹種による利用状況や流通を探る手がかりにもなる。

本報告では、北海道余市町の登町13遺跡より出土した炭化材に対して、木材解剖学的手法を用いて樹種同定を行った。なお、同一試料を用いて放射性炭素年代測定も実施した（放射性炭素年代測定の項参照）。

2. 試料と方法

試料は、C7bグリッドのⅡb層から出土した炭化材1点である。なお、放射性炭素年代測定の結果、紀元前537～402年頃の暦年代を示した。

樹種同定の方法は、次のとおりである。まず試料を乾燥させ、材の横断面（木口）、接線断面（板目）、放射断面（柎目）について、カミソリと手で割断面を作製し、整形して試料台にカーボンテープで固定した。その後、イオンスパッタにて金蒸着を施し、走査型電子顕微鏡（日本電子（株）製 JSM-5900LV）にて検鏡および写真撮影を行った。

3. 結果

同定の結果、試料は広葉樹であった。

以下に、同定根拠となった特徴を記し、図版に走査型電子顕微鏡写真を示す。

広葉樹 図版 1

道管が徐々に減じて、疎らに散在するが、2年輪をまたぐ試料が得られず、環孔材か散孔材かは確認できなかった。道管は単穿孔を有する。放射組織は同性で、1～3列となる。環孔材か散孔材かが確認できなかったため、広葉樹までの同定とした。

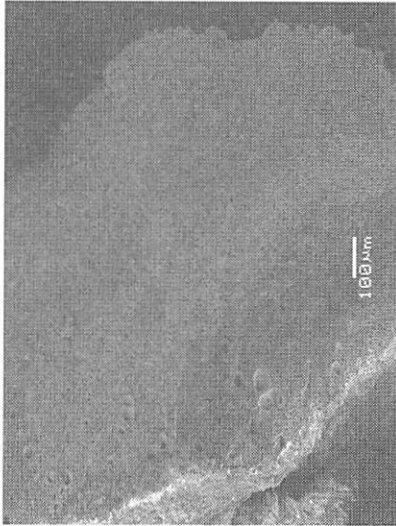
4. 所見

登町13遺跡で出土した炭化材は、広葉樹であった。当時、遺跡周辺に生育していた広葉樹が炭化したものである可能性が推定される。

参考文献

佐伯浩・原田浩（1985）広葉樹材の細胞。木材の構造，文永堂出版，p.49-100.

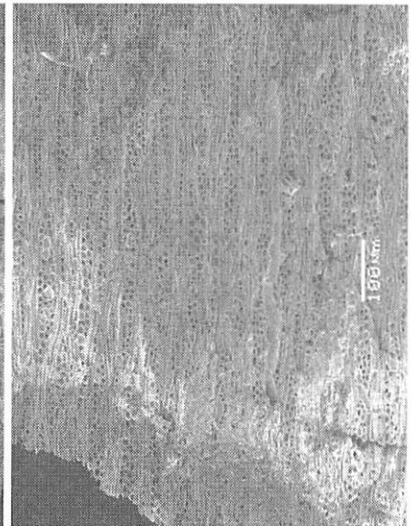
登町13遺跡の炭化材



横断面



放射断面

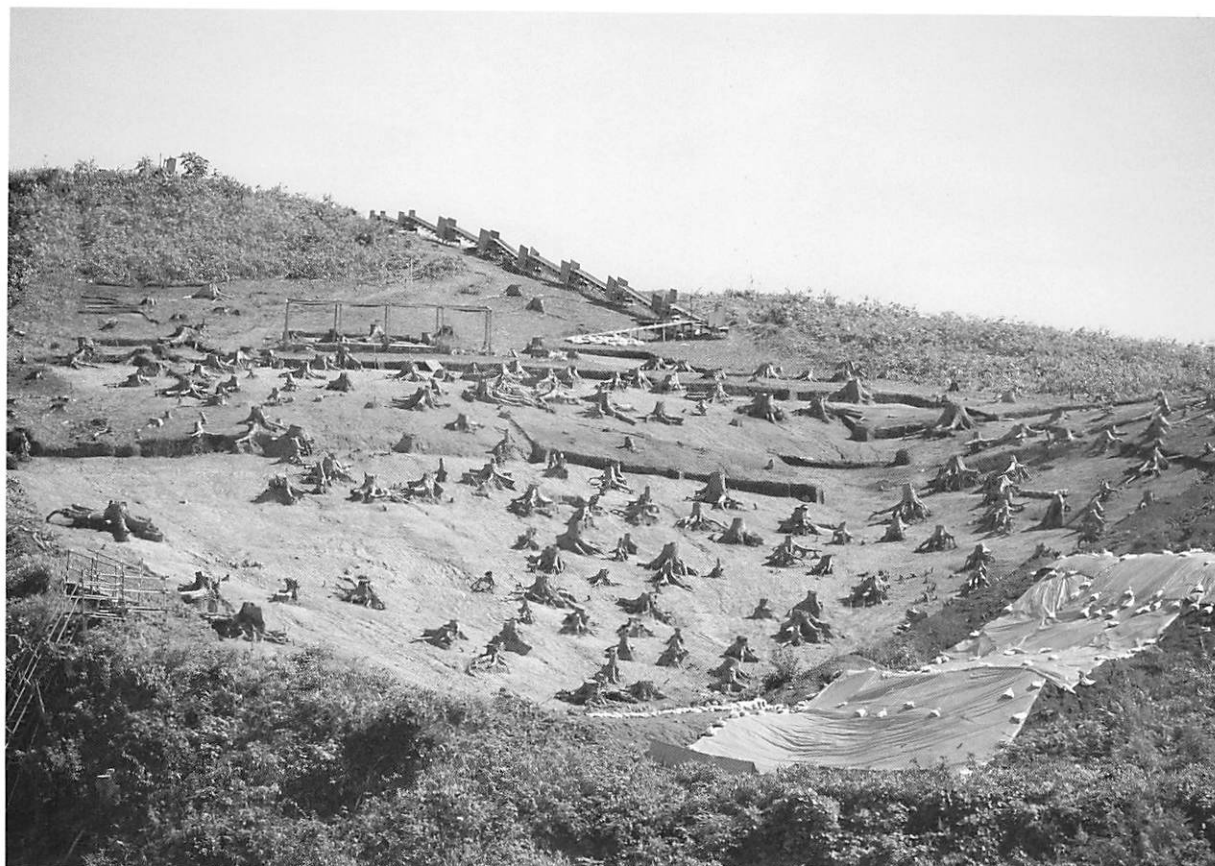


接線断面

C7b グリッド IIb層 広葉樹

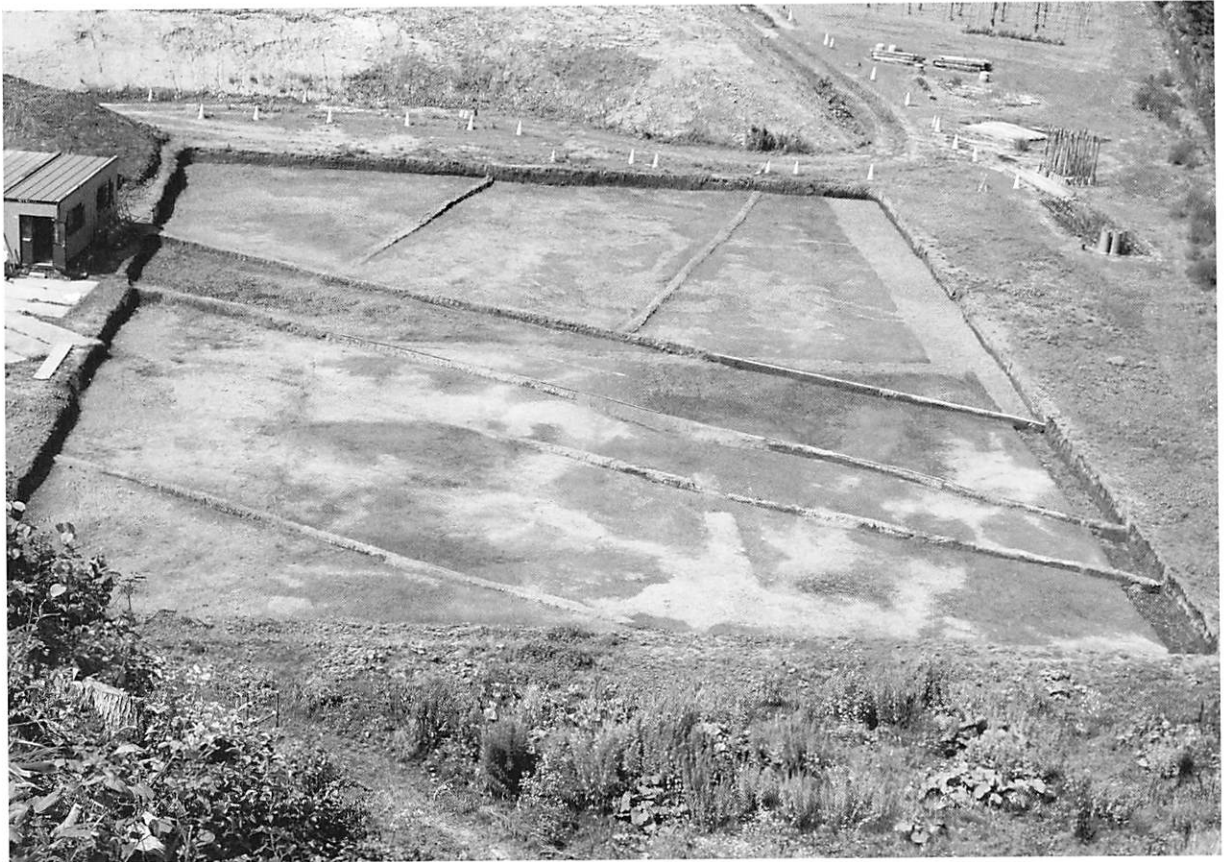


登町4遺跡調査完了風景 39～10ライン 高位部（南から）



登町4遺跡調査完了風景 31～39ライン 低位部（南西から）

写真1 発掘調査区風景



登町13遺跡調査完了風景（東から）



登町13遺跡 作業風景

写真2 発掘調査区及び作業風景

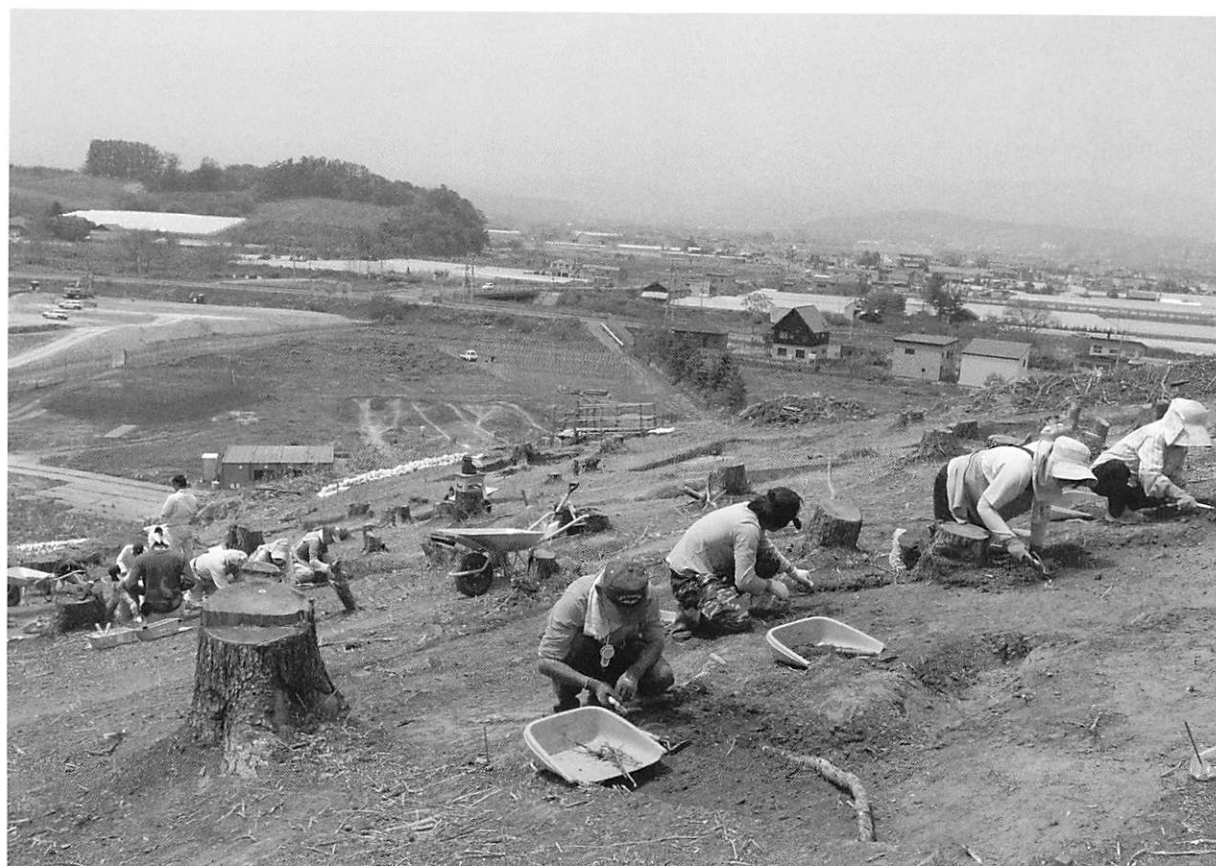


写真3 発掘作業風景



写真4 発掘作業風景



HP-1 完掘 (南から)



LP-1 断面 (南から)



LP-1 完掘 (上から)



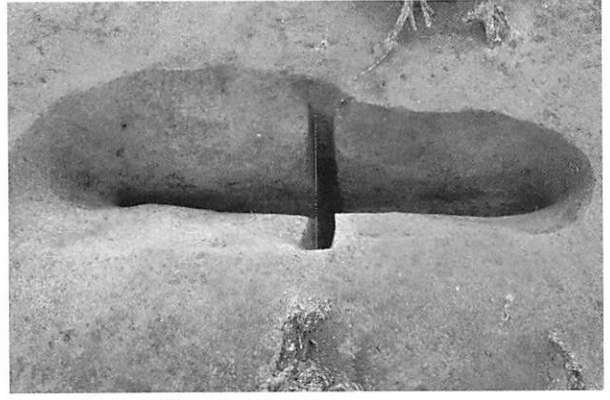
HP-2 完掘 (南から)



HP-3 完掘 (南東から)



TP-1 断面 (南西から)



TP-1 完掘 (西から)



礫集中1 検出 (上から)



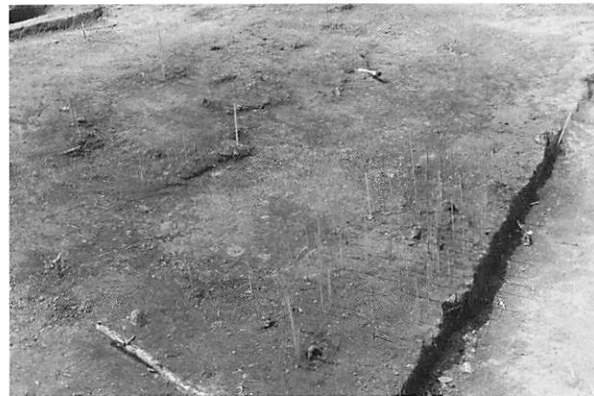
礫集中2 検出 (上から)



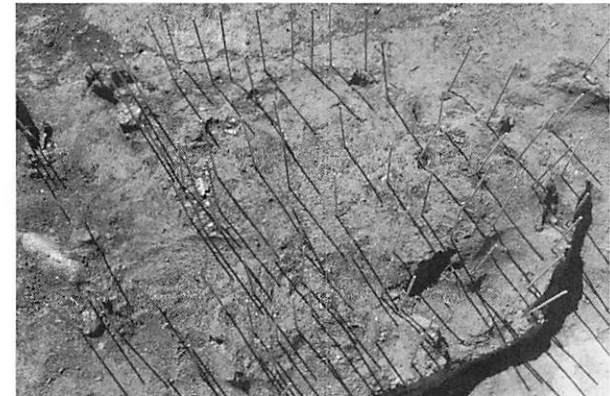
一括土器1 検出1 (上から)



一括土器1 検出2 (上から)



FC-4 検出1 (東から)



FC-4 検出2 (東から)

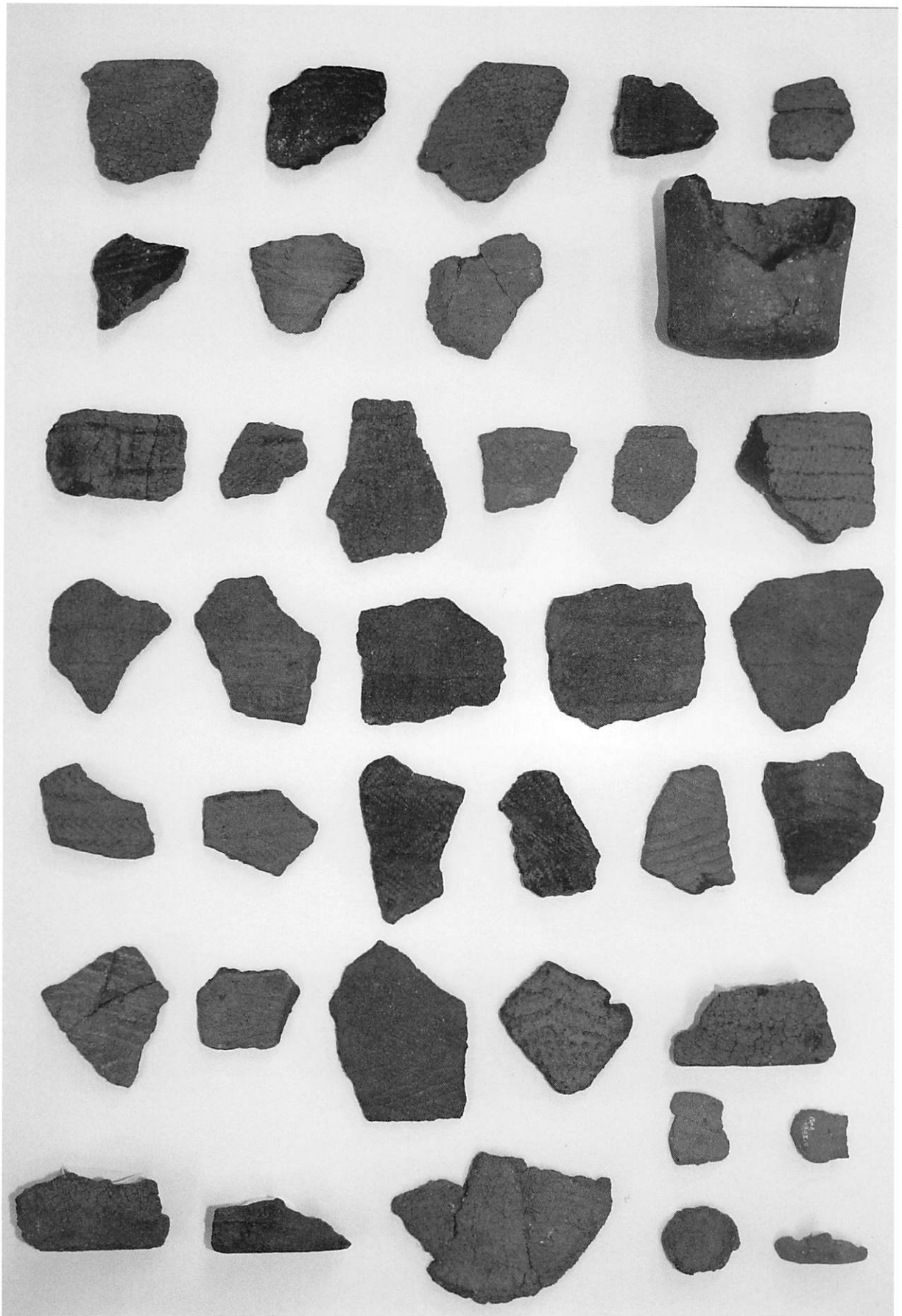


写真7 出土土器 (1)

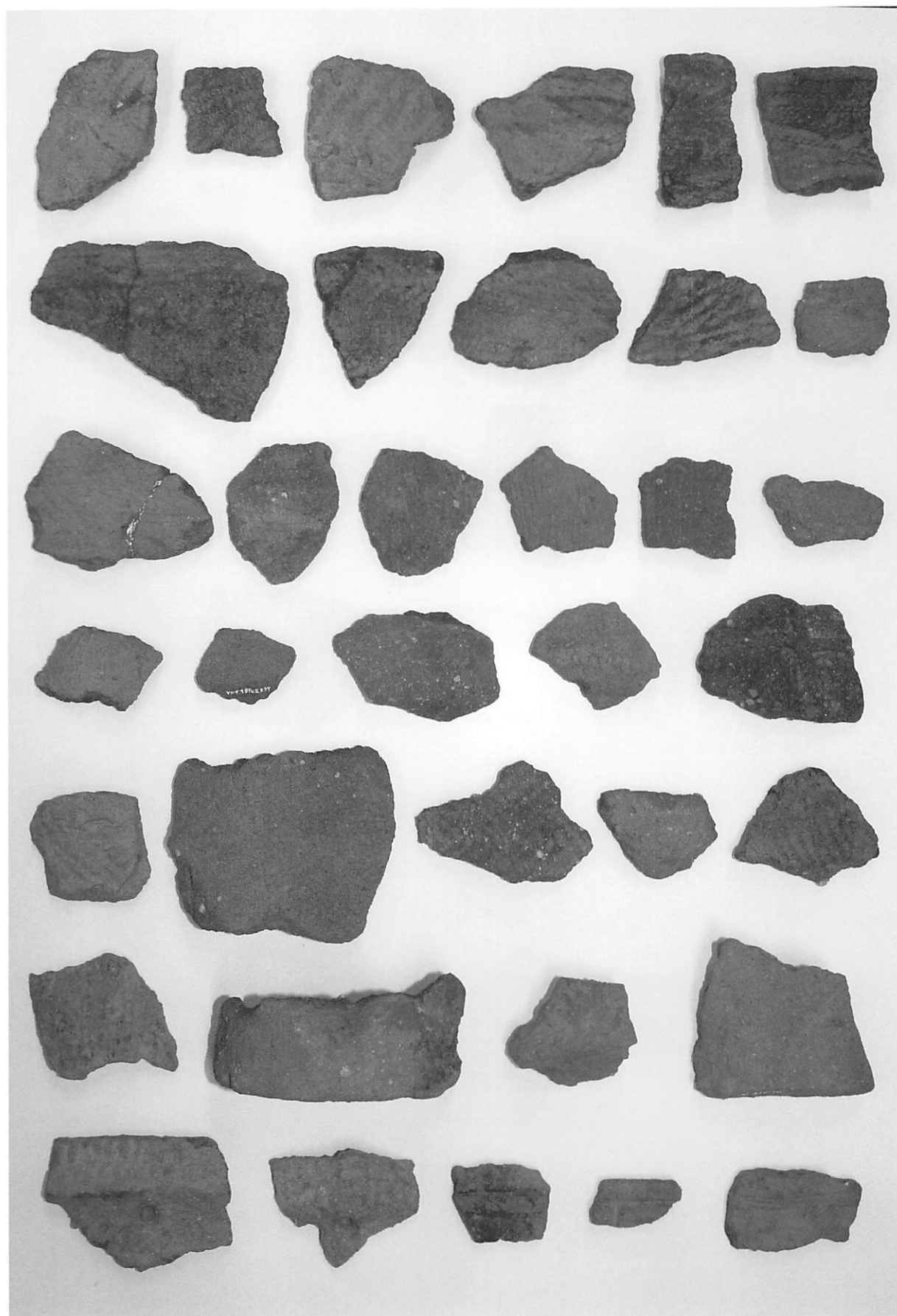


写真8 出土土器(2)

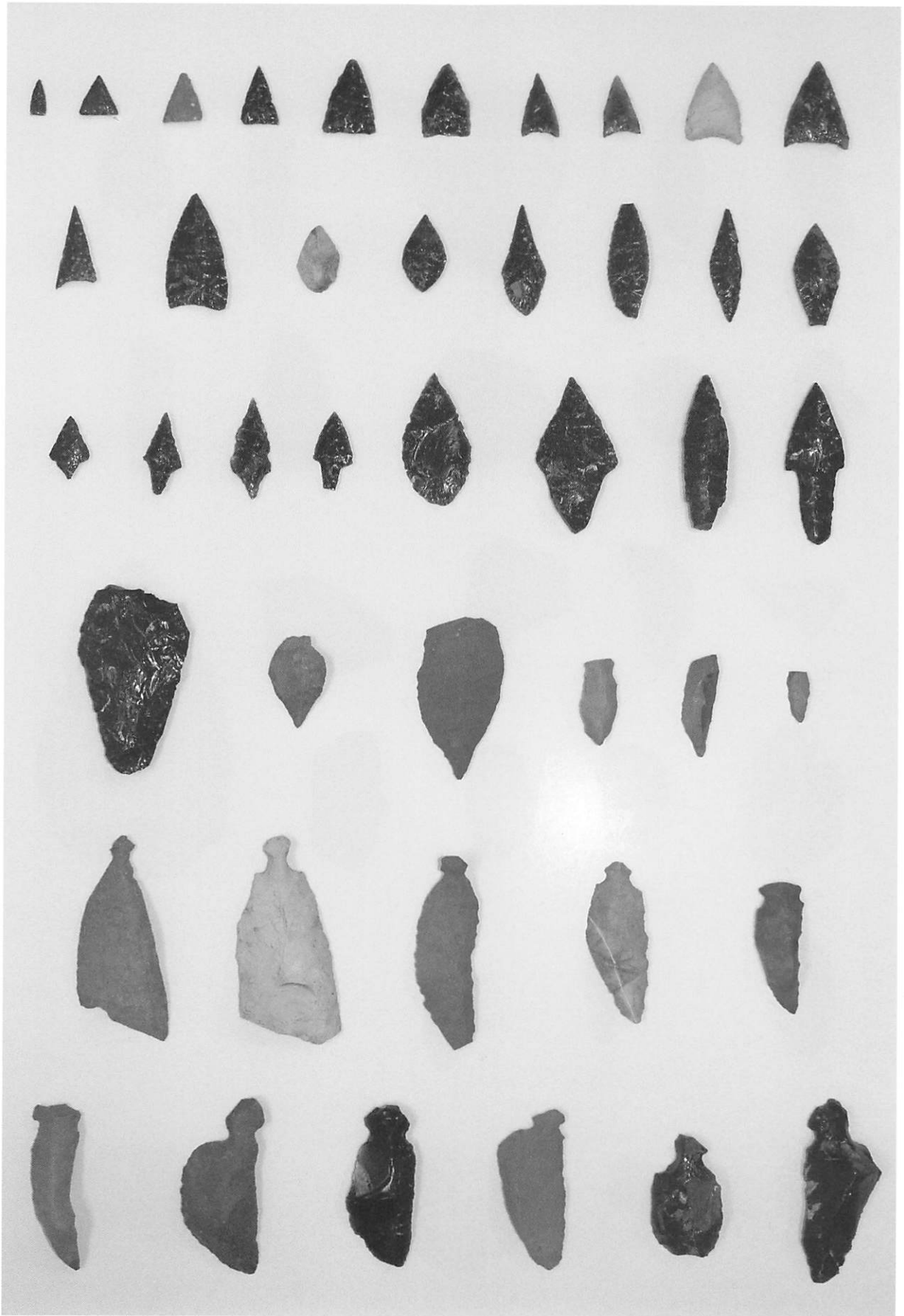


写真9 出土石器(1)



写真10 出土石器 (2)



写真11 出土石器 (3)



写真12 登町4遺跡・登町13遺跡出土遺物

報 告 書 抄 録

ふりがな	のぼりちょう4いせき・のぼりちょう13いせき (2014年度)							
書 名	登町4遺跡・登町13遺跡 (2014年度)							
副 書 名	北海道横断自動車道黒松内釧路線(余市～小樽間)建設工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書							
編 著 者 名	花田直彦・小川康和・乾 芳宏							
編 集 機 関	余市町教育委員会							
所 在 地	〒046-0015 北海道余市郡余市町朝日町26番地 TEL 0135-21-2111							
発行年月日	2015年2月28日							
ふりがな 所有遺跡名	ふりがな 所在地	コ ー ド		世界測地系		調査期間	調査 面積 ㎡	調査 原因
		市町村	遺跡番号	北緯 ° ' "	東経 ° ' "			
のぼりちょう いせき 登町4遺跡	ほっかいどう 北海道 よいちぐん 余市郡	01408	D-19-27	43° 11' 49"	140° 49' 31"	2014.5.7) 2014.10.31	3,410㎡	道路 建設
のぼりちょう いせき 登町13遺跡	よいちちょう 余市町 のぼりちょう 登町	01408	D-19-64	43° 10' 49"	140° 49' 28"	2014.5.7) 2014.7.31		
所収遺跡名	種 別	主な時代		主な遺構		主な遺物		特記事項
登町4遺跡	その他	縄文時代早期 中期		縦穴状建物跡 3軒 Tピット 1基 剥片集中 3ヶ所		土器片 10,775点 剥片石器・剥片 43,049点 礫石器・礫 1,159点		縄文時代前期 後半～中期の 遺物と思われ る線刻礫が出 土。
登町13遺跡	その他	縄文時代晚期		なし		土器片 18点 剥片石器・剥片 26点 その他 8点		

登町4遺跡・登町13遺跡

(2014年度)

北海道横断自動車道黒松内釧路線(余市～小樽間)建設工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書

発行日 平成27年2月28日

編集・発行 余市町教育委員会

〒046-0015

北海道余市郡余市町朝日町26番地

印刷・製本 株式会社 おおはし

北海道余市郡余市町大川町14丁目14番地
